
仮面の英雄の聖杯探求記？

カナリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面の英雄の聖杯探求記？

【Nコード】

N4988W

【作者名】

カナリヤ

【あらすじ】

第四次聖杯戦争に、どういう訳か召喚されないはずのモノが召喚された。それは物語りを歪めていく。注意 作者の完結済みの前作「強欲な力+ を持っていく」のアーローニーロが召喚される話です。

はじめに

これは、「強欲な力+」を持つていく」の主人公のアーロニーロが Fate/Zero の第四次聖杯戦争にキャスターで参戦させた話になります。なので、「強欲な力+」を持つていく」を読んでからでないと思いません。BLEACHのまんまのアーロニーロではありません。それでも良いと言うのなら、読んで下さい。

前情報

聖杯

あらゆる願いを叶えるとされているモノ

聖杯戦争

聖杯を降臨させる為の儀式。7人のマスターと7体のサーヴァントによって行われる戦争でもある。聖堂教会が監督役をしており、神祕の秘匿をしなければ排除に掛かる事も……
聖杯に選ばれたマスターには令呪と言う己のサーヴァントへの3回限りの絶対命令権が与えられる。コレ無くしては、サーヴァントを従わせるのは不可能であるとされている。

人物紹介

キャスター

仮面の英雄。アローニーク・アルエリ。なんの因果か、聖杯戦争に呼び出された。聖杯に託す願いは無いが、戦いを楽しむために聖杯戦争に参戦した。

雨生 龍之助

キャスターのマスター。偶然にもキャスターを召喚して聖杯戦争に参加した純粹無垢な快樂殺人者。聖杯戦争はとてつもなく刺激的な遊び程度の認識。

セイバー

騎士王。見た目は少女だが、騎士王の称号に相応しい正々堂々とした戦いを好み、王として戦いに臨む。そして、祖国を救う為の願いを聖杯に託すために聖杯戦争に参戦した。

衛宮 切嗣

セイバーのマスター。アインツベルンに雇われた“魔術師殺し”。魔術師の背中を取る事を得意とし、多くの魔術師を狩ってきた実績を持つ。救済の願いを聖杯に託すために聖杯戦争に参戦した。

アイリスフィール・フォン・アインツベルン

切嗣の妻。アインツベルン家が錬成した人造人間ホームクルスであり、聖杯の担い手。

久宇 ひさう 舞弥 まいや

切嗣の助手。切嗣により殺しの技術を叩き込まれている。低級の使い魔の使役に才を持っており、使い魔による諜報を行う。

ランサー

二槍を使う武人。魔貌と言う女性に対する魅力の呪いを持っている。生前に果たせなかった事を成す為に聖杯戦争に参戦した。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト

ランサーのマスター。時計塔所属のエリート魔術師で、講師も務めている。

ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ

ケイネスの許嫁。変則契約により、ランサーに魔力提供している。

ライダー

征服王。他のサーヴァントを臣下にできないかと企てている。己の野望の第一歩を聖杯に託す為に聖杯戦争に参戦する。

ウェイバー・ベルベット

ライダーのマスター。時計塔所属の見習い魔術師。聖杯を勝ち取るために聖杯戦争に参戦する。

アーチャー

英雄王。英雄の原点とも言える存在。聖杯に託す願いは無いが、この世のモノは全てが自分のモノであるとして、聖杯を盗もうとする盗人を粛清する為に聖杯戦争に参戦する。

遠坂 とあさか 時臣 ときおみ

アーチャーのマスター。最も魔術師を体現する男。魔術師の悲願たる根源への到達の為に聖杯戦争に参戦する。

アサシン

百の貌のハサン。分裂能力を持っており、それを利用してほとんどのマスターとサーヴァントに最初に脱落したと思わせた。切嗣とその茶番を知らないキャスターには警戒されている。

言峰 ことみね 綺礼 きれい

アサシンのマスター。アサシンによる諜報で時臣のバックアップをしている。異端を狩る聖堂教会の代行者であり、高い戦闘力を持っている。切嗣を自分の同類として付け狙っている。

バーサーカー

正体不明の狂気の英霊。常に黒い霧を身に纏っているために、正確な姿を確認できない。凶化しているために理性は無いが、その技巧は狂化しても失われてはいない。

間桐 まどう
雁夜 かりや

バーサーカーのマスター。蟲による改造でのにわか仕立ての魔術師。魔力消費は命を削るも同義であり、最も脆い存在。聖杯を持ち帰れば、愛する人の子供を救えるために聖杯戦争に参戦した。

戦争開始

雨生うりゅう 龍之助りゅうのすけはどこにでも居る普通の一般人とは言える人間では無いが、彼なりの娯楽を持ち合わせた狂人であった。ソレの犠牲になった人間は多く、その数だけ人間の死と生を理解して、愛して止まなかった。

だが、彼の娯楽にも飽きやマンネリ化などの事はあり、彼はそれに困り、原点に立ち返った。

何が問題かと言うと、そもそも殺人趣味が悪かったのか、彼が魔術回路を持っていたのが悪かったのか、原点に返った際に見つけた胡散臭い本通りの儀式をしたのが悪かったのだろうか。

偶然に偶然が重なり、まさに奇跡と言える確率で、表の人間殺人鬼であったが 龍之助は聖杯戦争にマスターとして巻き込まれたのだから。

ソレが幸か不幸か聞かれれば、こう答えたであろう。

「やっぱりこの世に勝る娯楽なんてありやしないんだ！！今の俺は最高にHAPPYだ！！」

新たに見つけた、神が仕込んだおもしろおかしい事を迷わずに楽しんでらう。

「サーヴァント、キャスター。召喚に応じ、今此処に現界した」

その場に居た“人間”には、何が起きたのか少しも理解が出来なかった。

龍之助にとってはこの地です最後の儀式殺人で、右手の甲に痛みがあったと思つたら、自分が描いた魔法陣から何かが現れたのだ。なにか起こればおもしろい。と、考えはしたがコレは完全に予想外のことであった。

「なんだ？呼ばれたから来たというのに。まさか間違いで呼び出したか？」

「え、えくと。あんたは悪魔なんですか？」

質問した後で、これは無いな。と、龍之助は思ったが言ってしまったのは仕方が無い。

「……本当に間違いで呼び出されたのか。質問には答えよう。悪魔と聞かれれば、違うと言わざるおえないな」

「へ？じゃあ、旦那は何なんだ？」

自分はてつきり悪魔かソレに準ずるなにかを召喚してしまった。と、思っていた龍之助にとっては当然の疑問であった。

「口で言うのは面倒だから、能力で直に伝えるぞ」

「能力？」

疑問に思えたのは一瞬で、すぐに頭に直に伝えられる情報に混乱してしまう。

だが、そんなものはすぐに収まり、状況を理解する。

「あ〜つまり、魔術師って奴らの殺し合いに巻き込まれたって訳ね」
「怖じけついたか？」

「まさか！こんな面白そうな事に参加出来て最高さ！！」

こうして別世界で『仮面の英雄』と呼ばれた存在と、快樂殺人者のコンビが結成された。
現界するはずの無い英霊が、物語を狂わせる。

まずキャスターがした事は自分のマスターが安全に隠れられる拠点の確保である。

目的は簡単に達成できた。問題があるとすれば、自分のマスターが引き籠ってくれるかどうかであった。龍之助はアウトドアな快樂殺人者である。それ故に、獲物を探しに行くときは事前に教えてもらい、なるべく行動を共にする事にした。

わざわざ、街の中央で無駄に魔力による爆発を起こして、聖杯戦争に参加してる者の目が集中している内に、霊脈のある寺に侵入して住人に暗示をかけ、認識障害で解らないようにした。
もしかしたら、セイバーのサーヴァントの対魔力なら効果がないかもしれないので、気は抜けないのだが……

次にする事は、敵の把握である。

一番危惧するのは、アサシンによるマスター暗殺である。

偶然が重なれば、令呪を保持したマスターと巡り合え再契約も可能だが、そんな低い可能性に賭けるほどキャスターは楽観的では無い。

他にも供給される魔力は少ないが、今のマスターならどのような事をしようが止めないだろうが、もしも今のマスターを失い、運良く他のマスターと再契約できたとしても思う通りに行動できないか

もしれない。それに、自分のクラスも問題である。誰が、好き好んで最弱のキャスターを使役しようというのだ。クラススキルのおかげで、寺を簡単に自分の砦に出来たが……

しかし、例外は常に存在する。三騎士には勝てないだろうが、ライダーかアサシンになら、十分勝てる見込みはある。

それに、アーロニーロは永遠に進化し続ける存在だ。今は、勝てなくとも霊脈から引き上げる魔力を貯めていけば、勝てる状態になるであろう。

それから程無くして、第四次聖杯戦争に召喚されたサーヴァントが、互いに引き寄せ合うかのように集結したのだった。

キャスターがサーヴァントの存在に気付いたのは街を散策している時だった。そのサーヴァントは気配を発しながら街を歩き回っているのだ。空は茜色に染まっており、もうすぐ日が落ちる頃合いという要因で考えれば敵サーヴァントを誘っているであろう。

騎士として不意打ちなどをせず、戦いを誘っている所から考えるに敵のクラスはセイバー、ライダー、ランサーのどれかであろう。

此処で取る選択肢は決まっている、誰かがアレと戦うのを待てばいい。自分が勝てないかもしれない相手に戦いを挑むなんて馬鹿な真似は絶対にしない。

それと、例え一騎討ちになったとしても、絶対に漁夫の利を狙って行動はしない。それを狙うのが自分だけとは限らない、おそらくずっと街を練り歩いてたと思えるから監視をしているのが必ずいるはずである。

なら、取るべき行動は1つただ傍観するだけ。戦ってかなり消耗していない限りは、ただ観察してあわよくば拠点を探り出せれば上々だろう。

キャスターが待っていると、挑発にのる　　キャスターからすれば　　馬鹿が現れた。ただ勝ち残る事を考えれば、最初から戦うのは得策ではない。

自分の真名を秘匿しながら戦うのであれば、そもそもなるべく戦わな
いか、完全に1対1の状況で戦って討ち取るのが理想的だ。だが、
ああも挑発して誘っている相手に挑むのは真名をばらしに行くよ
うなものだ。

誘いに乗らずにただ見るのが普通だ。サーヴァントが余程強くな
らない限りは……

「凄いな……」

英雄として名を上げ、世界に認められて英霊として神格化された
存在同士の戦いは、人智を超えた現象を引き起こす。ただ強く踏み
しめただけで地面を舗装しているコンクリートを粉碎し、一撃で戦
場選ばれた倉庫街に置いてあった金属製のコンテナを破壊してな
お且つ吹き飛ばす。

不可視の剣を使うセイバーと、2つの槍を操るランサーの衝突が
それを引き起こしているのだ。キャスターも生前なら普通にできた
事だが、マスターから魔力供給が少ないのと、座に縛り付けられて
為に能力が低下しており、魔力を使って強化しなければ厳しいもの
がある。

「楽しめそうだな」

それは悲観することではなく、むしろ喜ぶ事実である。勝負の結果
はキャスターにとっては二の次で、どれ程楽しめるかが求めるモノ

だ。勿論、勝てるに越した事はないし、不用心に敵と戦おうとは考えない。あくまでルールに則りながら聖杯戦争を楽しむのだ。

セイバーとランサーの戦いは互角であり、どちらも決め手に欠けていた。決め手ならサーヴァントなら持っているが、まだどちらもそれを攻撃に使っていない。いや、使っていないが、ランサーのマスターが痺れを切らしたか、使えば勝ると踏んで宝具の開帳を許した。

宝具の多くはそれ自体が強力な武器である事が多く、使い手の象徴であり、使い手の後世に語り継がれる逸話の具現である。そして、それがセイバーに牙を剥いた。

「なるほど、紅が断魔で黄が治癒が不可能か……随分と厄介なモノをもっているなランサーも。セイバーも黄金の剣に不可視にするなにかも十分厄介だな」

ランサーの宝具によりセイバーの不可視であった剣はその姿を曝し、さらに奇策により左腕に治癒不能の傷を負った。完全に戦況がランサーに傾きつつある。相性を考えるのならこのままなら聖杯戦争を勝ち残るのには望ましい結果になるだろう。勝ち残るだけなら

……

轟音と共に稲妻の上を走る逞しい雄牛に引かれて古風の戦車チャリオットが対峙していたセイバーとランサーの丁度中間に新たなサーヴァントが降り立つ。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

なにを言ってるんだ、あいつは？おそらく見ている人物全員が似通った事を思い、現れたサーヴァントの行動を疑問に思っただろう。

襲撃ならわざわざ2体のサーヴァントの目の前に出ずに、乗って来た戦車でどちらかを轢いたであろうし、尋常な勝負をしたいのならセイバーが傷付いたこのタイミングで戦場に出てこないだろう。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争の場においてはライダーのクラスを得て現界した」

堂々と名乗るのは王と納得できる名乗りだが、聖杯戦争では愚行でしかない。真名を知られるのは、手の内を知られると同義なのはライダーも知らない訳では無いだろう。だが、名乗りをあげたのは知られても不利にならないのか、弱点を突かれてもそれを乗り越える自信の表れか……それとも、ただ単純に馬鹿なのか。判断に困ったのが、その場にいたライダー以外の心境であっただろう。

「何を　　考えてやりますかこの馬ッ鹿はあああ!!」

ライダーのマスターたるウェイバー・ベルベットは馬鹿だと判断し、すぐさま自身のサーヴァントに抗議の声を上げるが、ライダーの右手中指の行動　　つまりはデコピンで黙らせられた。どちらの立場が上かを簡単に解る光景であったが、通常はマスターの方が上の立場になる。

サーヴァントは死後であっても叶えたい望みがあるから、聖杯戦争で英霊となつているのに人に使役されているのだ。マスター無しで現世に留まる事すらできず、聖杯に辿り着けず、下手に機嫌を損なえば勝ち残ったとしても3回限りの絶対命令権である令呪によって自害させられる可能性もある。

実力的にはいくらサーヴァントが上でも、マスターが上に立てるのはそういう要因があつてのモノで、逆に言えばそれらの要因を失くせば簡単にマスターは上に立てなくなるのだ。尤も、そんなモノをまったく気にしないライダーのようなサーヴァントも存在するか

ら、マスターが絶対上に立てる訳ではない。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交えるより先に、まず問うておくことがある。

うぬら各々が聖杯に何を期するかは知らぬ。だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるかどうか」

ライダーは問いかけた。真意がハッキリと判らない問いであったが、セイバーは持ち前の直感でその問いに不穏なモノを感じて問いかける。

「貴様 何が言いたい？」

「うむ、噛み砕いて言うのだな。

ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？ さすれば余は貴様らを朋友^{とも}として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である」

ライダーが真名を平然とばらしたとき以上に、全員が絶句した。

平たく言うなら、自分の部下になって聖杯を自分に譲れるな事を提案としたのだ。征服王イスカンダルは知名度や伝記を鑑みれば破格の英霊と言えるが、それでもこの提案は突拍子すぎた。

「先に名乗った心意気には、まあ感服せんでもないが……その提案は承諾しかねる」

苦笑しながらランサーは答えるが目は笑っておらず、セイバーとの勝負に水を差された事とライダーの提案により侮蔑の念すら感じられる。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「……そもそも、そんな戯言を述べ立てるために、貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたというのか？」

「別段聖杯なんて欲してないから、最後まで残っていればくれてやってもいいが、従属は俺の性に合わん」

戦争開始（後書き）

更新速度は前作より遅くなると思います

戦争開始2

突如追加された声にその場の全員に緊張が奔る。この場所は戦闘が始まる前にランサーのマスターによって、人払いの結界などが張られたことにより魔術師かサーヴァントしか進入してこないはずである。つまり、戦場に新たに別のサーヴァントが入った事を意味する。声は魔術などで細工などされて無かったから、声を出したの人物を容易に見えた。

その姿は一言で言うなら白であった。一部を除いて全てを白で統一された服を着ていて、なお且つ模様などない縦長で穴が8つ開いてる仮面を着けていた。つまり、キャスターが姿を自ら表した。

「あゝ聖杯を譲ってくれるのは嬉しいが、できれば朋友にもなつてくれると更に嬉しいんだがな？」

新たなサーヴァントの出現になんら驚く事無く答える。流石は征服王と言ったところだが、キャスターはそんな事をまったく意に介さずに話す。

「悪いが、お前がどのような野望を語ろうと俺には興味の無い事だ。人の身で語る野望としては世界征服は正に夢だろう。だから、俺には興味が無い」

「夢と断じられようとも、余にとっては違える事の無い目標。同じ夢を分かち合おうとは思わんのか？あー……」

「キャスターのクラスで現界した、仮面の英雄アローニーク・アルエルだ」

サラツと、当然のように真名を名乗ったのでライダー以外は再び驚愕する。それと、キャスターが自分の拠点に籠らずに戦場に出て来ている事もあって驚愕も一層大きくなる。良くも悪くも魔術に特化しているキャスターは、搦め手を使わずに他のクラスに勝てるとは考えにくいのだ。それがこの場にいる状態が。

「ふむ、キャスターか。夢を見ようと思わんのか？」

「夢に興味はない。現実が一番面白いからな」

断言されたライダーは困ったようにセイバー、ランサー、キャスターを順に見て口を開く。

「……待遇は要相談だが？」

「くどい！」

「一時的に雇われるなら、考えなくもない」

どれもがライダーが望む答えではないので、若干肩を落とす。

「重ねて言うなら 私もまた1人の王としてブリテン国を預かる身だ。いかなる大王といえども、臣下に降りるわけにはいかぬ」

「ほう？ブリテンの王とな？」

平時なら、戯言と笑い飛ばせる内容だが今は異常が普通にとつて変われる聖杯戦争中である事と、騎士王と名高いアーサー王ならセイバーのクラスで召喚されても何らおかしくない。

「こりゃ驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは」

ただ、それが可憐な少女（見た目だけ、なお且つ死んだ年齢を考えると……）だというのは驚きであり、ライダーはそれを隠そうともしない。

「その小娘の一太刀を浴びてみるか？ 征服王」

セイバーは声を声を低くし、ライダーに鋭い眼光を向けながらすくにも斬りかかれる様に構える。ライダーにその気は無くとも、小娘の単語はセイバーには侮辱と取れる。女である前に騎士であり、王であった彼女にとってはそれが当然で、自分が選んだ道だ。ランサーによって治癒が不可能な傷を受けた左手に握力が無くとも、セイバーの闘気は微塵も衰えておらず、ライダーに向けられているのは「斬つて捨てるぞ」と言わんばかりだ。

「こりゃーキヤスター以外は完全に交渉決裂かあ。勿体ないなあ。残念だなあ」

「ら、い、だあああ……」

ライダーのデコピンで黙らされたウェイバーは、会話に支障が無い程度には痛みが退いたので恨み事を言うように、しかし未だに完全に退かない痛みのせいで情けなくしゃべりだす。

「どうすんだよお。征服とか何とか言いながら、けつきよく総スカンじゃないかよお……オマエ本気で他のサーヴァントを手下にできると思ってたのか？」

ウェイバーの疑問は真つ当な疑問だろう。叶えたい願いがあるか

ら聖杯戦争に参加しているのだ。伝説に残るような人物が、いきなり従えと言つて従うなんてまずはありえない。それこそ、令呪のよ
うな縛りや共通の目的でも無い限りは……

「いや、まあ、“ものは試し”と言つてはいいか」

「“ものは試し”で真名バラしたンかい!？」

あまりの無計画さと戦略の要であるはずのモノを捨て石の如き扱
いに、正当な怒りをぶつけるべくライダーをポカポカと言う感じで
殴るが、ウェイバーが非力な事とライダーとの体格差によつてまる
で子供が大人に駄々をこねているかの様な光景を作り出す。

『そうか、よりもよつて貴様が』

底冷えするような、どこから響いて来ているか解らない怨嗟の声
が静かに響き渡る。

声の主はランサーのマスター。ランサーに宝具の開帳を許してか
ら一言もじゃべらなかつたまるで、なにか縁があるかのような口振
りしゃべり出す。

『いったい何を血迷つて私の聖遺物を盗み出したのかと思つてみれ
ば、よりもよつて、君みずからが聖杯戦争に参加する腹だつ
たとはねえ。ウェイバー・ベルベット君』

聖遺物を盗み出した。その時点でウェイバーは嫌な気がし、名前
を呼ばれた時には確信した。声の主が時計塔の講師のケイネス・エ
ルメロイ・アーチボルトだと。ライダーを召喚する際に使用したイ
スカンダルの聖遺物であるマントはケイネスが用意した物だが、手
違いによつてウェイバーが受け取つてそのまま盗んだ物だ。

『残念だ。実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は、凡才なりに平庸で平和な人生を手に入れられたはずだったにねえ』

『致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味　その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

敵視した事はあっても、敵視された事などなかった。ケイネスがウェイバーに向けた殺意は、ウェイバーにとって致命的だった。声だけというのに、見えもしない相手に恐怖し、身を震わせる。魔術師が殺意を胸に懐くのが、ここまで決定的な“死の宣告”であったとはこれまで知らなかった。

そんな恐怖に支配されていたウェイバーは、自分の肩を優しく力強く包み込むものに驚いた。自分に何度もデコピンあてた手が、今度はどういふ訳か肩に置かれているのだ。

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな。だとしたら片腹痛いのう。余のマスターたるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

『……………』

今度はランサーのマスターは怒りが漏れ出す。それを向けられるライダーはどこ吹く風と、笑って声を張り上げる。

「おいこら！他にもおるだろうが。闇に紛れて覗き見をしておる連

中は！」

セイバーも、ランサーも、これには怪訝な顔をした。

「 どういうことだ？ライダー」

「セイバー、それにランサーよ。うぬらの真つ向切つての競い合い、まことに見事であった。あれほどに清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余とキャスターだけとはあるまい」

闇に紛れている連中の1人、いや、2人に心当たりのあるセイバーのマスターを演じているアイリスフィール・フォン・アインツベルンは内心肝を冷やしたが、続いてライダーの言い放った言葉でサーヴァントにしか興味の無いと取れたので、ひとまず安堵の念を抱く。

少なくとも今は、夫であり、セイバーの真のマスターである衛宮えみや切嗣きりつぐとその助手の久宇舞弥ひらく まいやを闇の中からあぶり出そうとはしないとただでさえセイバーは左手の傷で全力を出せないのに、守るべき存在が3人に増えたら負担が大きくなると言う話では無くなり、またアインツベルンが早期に聖杯戦争から退場する事になる。

尤も、切嗣ならサーヴァントを奪う位はしようとするだろうが……彼にはそこまでしても叶えたい願いがあるのだから。

「情けない。情けないのう！冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せつけた気概に、何も感じるところがないと抜かすか？誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するなら、魔術師キャスターの英霊以下の腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなあ。んん！？」

キャスターを馬鹿にしているように聞こえるが、ライダーとして

は褒めている。魔術師の英霊なら、自分の工房に引き込んだりするような搦め手が定石だとマスターであるウェイバーから聞いている。だというのに、剣戟に惹かれて出てきたのだ。

「聖杯に招かれし英霊は、今！ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮辱を免れぬものと知れ！」

ライダーの大熱弁は全マスターと全サーヴァントの耳に入った。マスターはライダーの横に1人、闇に紛れて潜んでいる3人、結果外から戦況を見ている3人。ほとんどが、ライダーの大熱弁を冷やかに聞き、2人ほどはこれは拙いと思った。対するサーヴァントはライダーを含めた5体はただ聞き流し、1体は大熱弁とすら理解できる理性は無く、最後の1体は挑発と解かっけていても、それを見過ごすような器で無かった。

戦争開始2（後書き）

これで書いてあったのを全部吐きだしましたので、次は遅くなると思います。

戦争開始3（前書き）

感想 にかさま様

ありがとうございます！

戦争開始3

黄金の輝きと共に、残る2体の内の1体のサーヴァントが姿を現す。黄金の鎧を身に纏い、なお且つ挑発を受けて出てきたのを鑑みれば、クラスはアーチャーとおのずと判る。弓を扱ふ英霊と考えれば、キャスター同様に容易に姿を現すモノではないが、昨夜の戦いを知っているキャスター以外は驚愕する。アサシンをいとも簡単に葬り去ったその実力を。

「我^{オレ}を差し置いて“王”を称する不埒者が、一夜内に二匹も涌くとはな」

アーチャーとしてか、それとも他のサーヴァントと同じ地に足をつけるのが嫌ってか、1体だけ街頭のポールの頂上に出現した黄金の英霊は不愉快そうに自分以外を見下しながら言う。

「難癖つけられたところでなあ……イスカンダルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

冷酷にして無慈悲な声で、確信している事柄をハッキリと言い。他の王を名乗るセイバーとライダーを同時に敵に回すなどとまったく意に介していないのだろう。不遜のレベルではなく、自身が決める事がそのまま世の心理としているような、一歩間違えば狂人とさして変わらぬ目で見られるが、その風格はライダーと比べても霞むまず、アーチャーの方が格上とさえ思える。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？貴様も王たる者ならば、まさかおのれの威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？雑種風情が、王たるこの我に向けて？」

問いを投げるそのものを不敬と取ったのか、あるいは問いを「おまえは本当に王なのか？」とでも受け取ったのかどうかは解らないが、ライダーの問いはアーチャーにとっては許すにあるまじき行為だったのだろう、不愉快さを更に強めて言う。

「我が拜謁の榮に浴してなお、この面貌を知らぬと申すなら、こんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

アーチャーの背後の空間が揺らめき、まるで水面から出てくるかのように空間を波立たせて2つのアーチャーの武器が出てくる。どちらも装飾のなされて煌びやかな印象と共に、宝具としか考えられない魔力を放っている。その刃先はライダーに向けられ、今すぐにも撃ち出しかねない。

そのアーチャーの攻撃態勢を見て、誰にも見られない位置から憎悪の念を燃やして、自身の命を魔力に変える魔術師、間桐雁夜が嗤う。アレは間違いなく遠坂時臣とよさかときのおみのサーヴァントであろう。アレを潰せば時臣は聖杯戦争から脱落し、きつと屈辱に塗れた顔をするに違いないと。だから、己がサーヴァントに1つの命令を下す。

「殺すんだバーサーカー！あのアーチャーを殺し潰せッ！！」

その命令を受け、バーサーカーは5体のサーヴァントがいる戦場へと赴く。マスターと同じく、憎悪の念を燃やしつつ。

いきなりの魔力の奔流に驚いたのは全員だろう。アーチャーの攻撃が炸裂した訳でもなく、先んじてライダーが戦車で突撃をかました訳でもないのだから。

全員の視点がその魔力の奔流の出所に集中する。次第に形の無かった魔力はある一つの形に成る。誰もが驚いたが、誰もが可能性として考えた事の1つだろう。残る最後のクラスであるバーサーカーの登場に。その姿は“負の波動”を放ち、一分の隙間もなく甲冑に覆われていた。しかし、同じサーヴァントであるセイバーの白銀の鎧や、アーチャーの黄金の鎧のような煌びやかさまったく無く、底の見えない穴のようにただ黒い鎧だ。

英霊なら、語り継がれる華々しい戦果や何かしらの活躍がある。それに当てはまらない英霊もいるが、それはアサシンやキャスターのようなクラスに呼ばれる事が多い。だが、鎧を着込んでいるという事は、騎士のような戦場での逸話を持つような者であろう。だとこのうのに、ここまでの差はなんなのだろうか？唯一直に見える、爛々と燃える双眸の不気味な輝きは狂化の影響として見ても、怨霊のよくな不気味さは……それが狂化の影響だけなのか、元々のモノか、あるいはその両方かは真名が解らなければ判断ができないのだが。

“輝き”の要素を持っていないのは気にかかる場所である。出揃っている1体以外の他のサーヴァントを見ても、それぞれの備え持つ“華”がある。キャスターだけは、バーサーカーのように“輝き”の要素は皆無なのだが……。それでも、キャスターですら持っている“輝き”を持っていないのは異常なのだ。

「……なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ」

理性の無いバーサーカーでは、会話すら出来ないのだ。交渉などできようはずがないし、バーサーカーは他のサーヴァント全員に殺気しか向けていない。

「で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？あれは」

マスターであるなら、サーヴァントのステータスを“観れる”特殊能力が聖杯より授けられる。その事を承知しているから、敵に成り得るバーサーカーがどれほどかをライダーは聞く。

「……判らない。まるきつり判らない」

「何だあ？貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と“観える”ものなんだろう、ええ？」

通常であるなら、それはありえない事だ。現に、ウェイバーはバーサーカー以外のサーヴァントの能力値をすでに透視して把握した。

「見えないんだよ！あの黒いヤツ、間違いなくサーヴァントなのに……ステータスも何も全然見えない！」

それは、ほとんどのマスターの狼狽でもあった。闇に潜んでいたり、なにかを通してバーサーカーを見ているマスター達はそのステータスは一切窺い知る事が出来なかった。なぜ観えないのか？疑問に思いつつもしつかりとバーサーカーの姿を確認しようとして気付く。黒い甲冑と燃える双眸しかハッキリと確認できない。もっと正確に言うのなら、黒い甲冑としか確認できないのだ。特徴と言える特徴が確認できず、細部がハッキリと見えないが為に没個性なモノとして認識してしまう。それだけなら、まだ姿と真名を隠されているだけで済むが、隠蔽の効果は姿だけでなく観れるはずのステータ

すまで及んでいる。それが何らかの呪いなのか、宝具の効果かは判らないがバーサーカーの能力である事は確かだろう。

「どうやら、アレもまた厄介な敵みたいね……」

アイリスフィールの呟きに、セイバーは頷いた。

「それだけではない。5人を相手に睨み合いとなつては、もう迂闊には動けません」

バトルロワイヤルの常道なら、一番劣勢な者を総掛りで潰すのが最も堅実だ。サーヴァントのクラスでの常識の強さで言うのなら、キャスターが劣勢と考えるの自然だろう。

しかし、セイバーの直感は違つたと訴える。アレはどのサーヴァントにも早々には引けを取らない程の強さは持っている。なら、どのサーヴァントが一番劣勢かと言えば、セイバーだろう。マスターを後ろに控えさせ、ランサーによって治癒不可能な傷を左手に付けられた状態だ。手傷を負っているのはセイバーだけであり、キャスター、アーチャー、バーサーカーの三者は消耗なんてしておらず、自分のマスターの心配をせずに戦える。ランサーは消耗しているが、どこかに隠れているだろうマスターの心配はしなくて済む。ライダーは戦車にマスターを乗せているからマスターを守る必要性があるが、常に隣にいるのだからマスターを守る事はセイバーよりも格段に楽だろう。例え劣勢だとしても、そう簡単に討ち取られるつもりはセイバーには無いが、他のサーヴァントとマスターもそう考えるとは限らない。

動けばそれは隙になる。それを解っているから、誰もが他のサーヴァントの動向を観察し、自分がどう動くかの算段をつけているのだ。その過程で、どうしてこの場に姿を現したのかが気に掛かる存在が2体居る。キャスターとバーサーカーだ。どちらも何の突拍子

も無しにこの場に姿を現した。そもそもキャスターはなぜ、ライダーのセイバーとランサーへの提案を答えるかたちで姿を現したのか？^{キャスター}最弱のクラスで召喚された英霊がなんの備えもなく戦場に出てくるものなのだろうか？疑問の尽きない存在だが、バーサーカーも同等に疑問がある。一番最後に姿を現した理由が誰にも見当がつかない。真つ当に戦略を組み立てるのなら、敵のサーヴァントが潰し合うのを傍観してサーヴァントが1体だけが残る状況か、どのサーヴァントも疲弊した状況になるのを待ってから投入すれば、漁夫の利を得られる可能性が高いはずなのに、混沌とした戦場になぜバーサーカー投入したのがか。

目的の不明さから、自然とキャスターとバーサーカーが注視される。だが、ただ1人だけはその真紅の双眸で、ただ純然なる怒気と殺意を秘めて眼下のバーサーカーを見下ろしている。

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが……」

バーサーカーは初めから、アーチャーしか見ていなかった。見られる事は有り触れた事なのだから、見ているのが普通であれば、アーチャーは特に気にも止めない。だが、今回アーチャーを見ているのは、アーチャーから言わせれば、卑しく下賤なサーヴァントだ。それが自分を値踏みするように視線を浴びせられるのは侮辱に他ならない。

「せめて散りざままで我を興じさせよ。雑種」

アーチャーの号令によりライダーに狙いをつけていた宝具の刃先は向きを変え、バーサーカーに向けて放たれる。

戦争開始4（前書き）

感想 コクイ様、かにかま様
ありがとうございます！

戦争開始4

無造作な宝具の射出。アサシンを簡単に葬り去った実績で、ある程度の威力は誰もが予想していたが、ソレは路面を吹き飛ばし、アスファルトを粉塵にして巻き上げて破壊力を示す。その破壊力はサーヴァントなら再現可能だが、それが無造作に宝具を射出してだと話が変わってくる。宝具はサーヴァントなら持っているが、それは虎の子の一撃として使ったり、常時使用型として戦闘を有利に進める為に使う。普通は、捨てるかのように宝具そのものを射出するよ
うな使い方はしない。

「……ッ！」

誰もが息を呑んで驚いた。粉塵の中に五体満足のバーサーカーの影が現れ、一陣の風が粉塵を払い除けてアーチャーの攻撃の結果を全員の目に晒させる。

アーチャーによって射出された宝具の1つはバーサーカーから僅かにそれた位置にクレーターを作りだした。これには、誰もが納得した。バーサーカーと言えど、避けるくらいは普通にすから避けたのなら十分あり得る事だ。だが、射出されたもう1つの宝具の結果は誰もが目を疑った。それが、バーサーカーの手に握られているという結果に。

バーサーカーがした事は口に出せば単純だった。飛んで来た宝具を掴み取り、後に続いてきた宝具を掴んだ宝具で打ち払った。たったそれだけだが、それが他のサーヴァントに可能かと言えば、不可能に近い。能力の問題もあるが、いくら無造作に射出されたとして強力な力を持つ宝具を掴もうなどまず思い付かず、思い付いても実行しようとはしない。考える為の理性がないバーサーカーだからこそ、実行したのだろう。他にも、要因があるのだが。

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

当然の疑問だろう。理性が無いのに、バーサーカーの行動は荒々しい獣のモノで無く、洗礼された技術による動きと見て取れる。

「狂化して理性を無くしているにしては、えらく芸達者な奴よのお」

「あんなのが……バーサーカー……？」

「理性が無いゆえの行動なのに、その行動は技術が際立っているか……体に染み付くほどの武練を積んでいる。と、いったところか？」

「バーサーカーに相応しくない英霊が呼ばれたという事でしょうか？」

「そうね。本来なら、弱い英霊を狂化で能力値を強化させて使うのがバーサーカーのサーヴァント。だけど、アレは狂化無しでも他のサーヴァントに引けを取らないって私でも解るわ」

宝具は英霊にとっては半身に近く、使い手の英霊以外は原則は満足に使えない。だが、バーサーカーはまるで使い慣れた自身の宝具かのように十全に使いこなして、間髪容れずに迫った追撃を鮮やかに打ち払って見せたのだ。その手腕に驚きつつも、口には出さないが 敵であろうと 称賛しているのがほとんどであった。

だが、宝具を取られたアーチャーは驚愕も称賛も心に片隅に押し遣られて、ただ一つの感情に凍えていた。

「その汚らしい手で、我が宝物にふれるとは……そこまで死に急ぐか、狗ッ！」

怒り一色に感情を染め上げ、先程向けたバーサーカーへの怒気と殺意は更に上がる。それを目に見える形として、16挺の宝具が展開させられた。どれもが装飾がされいて美しく磨き上げられている。そして、その全てがバーサーカーに狙いを付けている。先程射出された宝具は剣と槍だったが、今度は剣と槍だけでなく、斧、槌、矛といった武器の形状には統一性がなく、中には分類が判らない形状の武器までもある。その一つ一つがアーチャー自身の宝具だとすれば、昨夜アサシンを葬り去ったのを含めれば現状では19もの宝具を持つ有り得ない英霊となる。

「そんな、馬鹿な……」

英霊の宝具は1つとは限らない。だが、19の宝具も持つのは常識に照らし合わせれば多すぎる。多くても、4つくらいが限度だ。だが、宝具の捨て石のような扱いを考えると、アーチャーはまだまだ射出する宝具を持っていると考えられる。

「その小癩な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるか　　さあ、見せてみよ！」

後光のようにアーチャーの背中に展開していた宝具の群は、号令一つでバーサーカーを射るべく殺到する。

宝具の風を切って進む音は轟音となつて響き、宝具が輝きながら突き進む様は流星や打ち上げ花火のように見える。見惚れるような輝き持っているが、それが攻撃である事は変わらない。雨のように降り注ぐ宝具の群によって、倉庫街の街路はまばたきをしきる前に無残な瓦礫ばかりの広場のようになった。

だが、まだ終わっていない。アーチャーの宝具の射出は途切れる事なくいまだに宝具の雨を降らし続けている。バーサーカーが倒れ

ていないからだ。

バーサーカーは最初にしたように、飛来した宝具を今度は空いている左手で掴み取って、後続の宝具を掴み取った宝具でこのごとく打ち払っているのだ。本来ならバーサーカーの立っている位置も爆撃に晒されたように瓦礫に吞まれたのだろうか、バーサーカーの迎撃でそこだけが相も変わらず原型を留めている。

「　　どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとの相性は最悪だな」

目の前の常軌を脱したサーヴァント同士の戦いにセイバーとランサーは言葉を失って見ているだけだが、ライダーとキャスターは冷静に分析し、ライダーにいたっては1人呟いた。

「黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああ節操なく投げまくっているのは深みに嵌る一方だろうに。融通の利かぬ奴よのお」

誰が予想したのだろうか？アーチャーが16もの宝具を展開した時点で、誰もがそれでバーサーカーが貫かれたりして聖杯戦争から退場すると思っていた。だが、結果は違った。バーサーカーは最初に凌いだように、16の宝具全てを凌いだ。それによって付近は流れ弾となった宝具によって更地同然されたが、そんな事は神秘の秘匿さえしているなら気に掛ける事では無い。

アーチャーの宝具の射出が途切れた事で、場を静寂が支配する。その静寂の中でバーサーカーだけに視線が集中される。

狂気の英霊がこのまま攻勢に出ないはずが無い。そんな確信にも似た感情で全員がバーサーカーの動向に集中した。

バーサーカーは握っている宝具を掲げ上げ　　予備動作無しで街灯のポールの上のアーチャーめがけて投げ放った。握っている時

は腕の延長かのように感じたが、元々中てる意図があつたかは謎だがバーサーカーの手を離れた宝具の軌道は雑に感じられた。アーチャーの足場になっていた街灯をバターのよう寸断して三等分にさせて倒壊させた。だが、そこに既にアーチャーは居ない。街灯が寸断されるより先に身を翻しており、街灯が倒壊するのよりやや遅れて地に足を付けた。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ」

宝具を取られ、続けて自分の攻撃を完璧に凌ぎ切り、あまつさえ自分を同じ大地に立たさせられた。その全てが眼前のサーヴァント1体によつてだ。しかも、狂気に吞まれた下賤な雑種によつて行われたのだ。アーチャーにとっては、度重なる不敬によつて憤怒は自制が効かない段階に達した。

「その不敬は万死に値する。その雑種よ、もはや肉片ひとつも残さぬぞ！」

怒りによつて紅蓮の炎のように真紅の双眸を燃え上がらせ、再び攻撃態勢に移る。展開された宝具　総勢32。予想を嘲笑うかのようにアーチャーは軽々と先程の倍の宝具を出現させた。怒りで我を失っているようだが、アーチャーが限界ギリギリまで出しているようには見えない。16もの宝具を打ち払ったバーサーカーにも驚愕したが、その倍の宝具を展開せしめたアーチャーへの方が驚愕の度合いが大きい。

アーチャーの力の底はどれ程に深いのだろうか？誰にも予測できる域でないとしか解らなかつた。

『……ギルガメッシュは本気です。さらに『^{ゲート・オブ・バビロン}王の財宝』を解き放つ
気でいます』

アーチャーのマスターである遠坂時臣は、戦場となっている倉庫
街から遠く離れた深山町の高台に建つ自分の家 通称 遠坂邸

の地下室で戦場をアサシン、ことみね言峰綺礼、遠坂家の宝石魔術を
応用した“通信装置”を通して不自由無く把握していた。今なら、
例えそういう手段が無くても、アーチャーが何をしてくさそうとして
いるかは、アーチャーに吸い上げられる魔力で嫌でも解るのだが……

……
備えは、態勢は万全なはずだった。綺礼とアサシンは実によく
やってくれており、御蔭で戦況を知るのには苦労していない。問題は
満を持して呼び出した英雄王ギルガメッシュが、高い単独行動を
得られるクラスであるアーチャーで召喚された事だった。サーヴァ
ントであるのにマスターの意思をまったく尊重しないのは、王の中
の王であるギルガメッシュだから仕方なしと思ひ、仕える家臣と
してスタンスを取るのも、たとえ写し身であろうとも高貴なること
を尊ぶ時臣の信条からのモノだ。

サーヴァント同士の戦いについてはギルガメッシュに基本は一任
している。マスターとして、時にはギルガメッシュの自由にさせず
に何かしら方法で強制するしかないとも考えていた。それが、こん
なにも早く再び必要に駆られるとは思ってもみなかった事だ。前回
は分裂したアサシンの1体と戦わせる時は説得で済んだ。それ
でも、それなりの時間が掛かった。が、今はその手段は使えな
い。連絡手段が無いというのもあるが、今はマスターである時臣の
言葉に耳を貸そうとすらしないだろう。単独行動のスキルを持って
いなければ魔力供給を切れば嫌でも戦闘を中断させられるが、クラ
スキルで持っているために無意味に終わる上にギルガメッシュと

の関係に亀裂や溝を作りかねない。なら、最終手段しか残っていない。令呪による強制だ。しかし、時臣は目的の為には3回の内2回しか使用する事ができない。その貴重な2回の内の1回を此処で使わざるおえないとは……代々伝わる遠坂の家訓である、どんな時でも余裕を持つて優雅たれに反するだろうが、此処は決断しなければならなかった。

『マスター
導師よ、ご決断を』

綺礼に催促されずとも、時臣はもう決断している。今はまだギルガメッシュの本気を曝す時期ではない、アサシンでの情報の収集に徹する雌伏の時なのだ。早い段階で曝してしまえば、下手をすれば複数のマスターが結託してギルガメッシュに挑みかねない。そうなれば、いくらギルガメッシュでも危険かもしれないと自分に言い聞かせて令呪によって命令を発する。

今まさに攻撃をしようとしていたアーチャーがピタリと動きを止め、忌々しそうに視線をバーサーカーから外して東南を見据える。

「貴様ごときの諫言で、王たる私の怒りを鎮めると？大きく出たな、時臣……」

吐き捨てるように言い、すぐさま展開していた無数の宝具何処にもなくしまう。

「……命拾いをしたな、狂犬」

殺意の炎は双眸から消え失せてはいるが、その表情は不服だと語

っている。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我と見える^{まみ}るのは真の英雄のみで良い」

最後に言いたい事だけ言い、実体化を解いてすぐにアーチャーは姿を完全に消す。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な^{タチ}質ではなかったようだな」

予想外のあっけない終わり方に呆れたようにライダーは嘯くが、誰もがそれに頷こうとするほど呑気に構えてはいない。いまだに、アーチャーを撤退にさせるほどの実力を持つバーサーカーが立ちただかっているのだから。

戦争開始4（後書き）

ぶっちゃけると、アローロニーロがほとんど関われない最初の方は原作様の劣化コピーですよね。

戦争開始5（前書き）

感想 竜華零様

ありがとうございます！

戦争開始5

サーヴァントは現界しているだけで魔力を消費し、指一本動かすのにも魔力を消費するような存在だ。それが全身を使う戦闘をすればただ立っている状態と比べれば数倍の魔力を消費し、消費した分をマスターの魔術回路から吸い上げる。吸い上げる量はサーヴァントが決める事が出来るので、マスターが未熟な場合はサーヴァントによって吸い上げる量を調節する事もある。その逆の、マスターの方からも魔力供給を断ち切る方法がある。

だが、雁夜にはそれに思い当たったり、実行する理由や余裕など微塵も無かった。間桐雁夜は蟲による改造 刻印虫を体に埋め込む事 によって魔術師になっている。刻印虫は疑似魔術回路となっており、雁夜自身の魔術回路と共に魔力を生成している。ただ、刻印虫は雁夜を蝕んで魔力を生成する。

「ぐ……が、ぐあ……ッ!!」

蝕まれる痛みは生成される魔力量に比例されるので、サーヴァントが霊体化でもしていて消費を抑えていれば時折おきる動悸や眩暈で済むが、サーヴァントたるバーサーカーは全力を出していないとはいえ、消費する魔力量は他のサーヴァントより数段勝ることもあり、並外れている。

「があああッ……」

その為に刻印虫は活発に雁夜を蝕んで魔力を供給する。内側から喰われる激痛が全身を襲い、いったいどこが痛いのが解らなく程である。魔力消費によって体が蝕られる雁夜は、まさに身を削って戦っているのだ。

その痛みが和らいだ瞬間には思考能力はほぼ無く、落ち着くまで少し時間が必要であった。

「……………はぁ……………はぁ……………」

荒い呼吸しながら痛みを鎮め、戦場に居る使い魔の視覚を借りて戦況を見る。残っているサーヴァントはバーサーカーを除いて4体。痛みで戦場を見ている余裕が無かった雁夜は何があったかは解らなかったが、これだけは解った。アーチャーが退いたと。

戦況を判断するマスターが居るのだ、分が悪いと悟ればサーヴァントを退かせるだろう。

「……………ふふ、ははは……………」

雁夜からすれば自分の勝ちだ。聖杯戦争のルールに照らし合わせれば無駄な戦いだ。それも、敵に手の内を晒した失敗作のような代物だ。

だとしても、アーチャーを撤退させたのは雁夜の中では大きな意味を持つ。自分でもやれる。苦痛にさえ耐え切れれば聖杯を取れると……………

今回はそれだけ良しとし、帰ろうとする。当面はアーチャーだけが雁夜の狙いであり、そのアーチャーが退いた今はわざわざ戦う意味も、全てのサーヴァントを自分で倒す必要も無いのだからこの戦場にもう興味は無い。

だが、バーサーカーは違った。次なる標的をセイバーに見定めて突進を開始した。

「やめろ……………戻れ！戻ってこいバーサーカー！」

言葉を発し、念話で単純な命令を出す。バーサーカーはそれが聞

こえないのか、無視しているかは解らないが、そのままセイバーに突進を続ける。

「バーサーカーアツ！やめろオ！！」

再開された刻印虫の活動によつて激痛が全身を奔り始めた事で絶叫に近かったが、それでもバーサーカーには届く事は無かった。雁夜は痛みによつて暗闇でのた打ち回る事を余儀なくされた。

「~~~~~ツ！」

突然バーサーカーに狙われたセイバーは初撃は危なげなく防御した。いきなりの事だが、あらかじめ予測していた事もあり挑みかかられたのは驚くに値しなかった。しかし、バーサーカーが握っている武器を見て驚愕した。ソレは、ただの鉄柱だったからだ。付け加えるなら、バーサーカーによつて切り倒されて2メートル余りの長さになった物だ。有り得ない事だ。ただの鉄柱がセイバーの剣によつて斬れなかったという事実が。

その鉄柱を槍のように両手で構えて、連続で突きを繰り返す。それは型にはまった槍の基本的な単純な攻撃だ、それならセイバーは幾度と打ち合つた事のある手法になる。単純ゆえに、使い手の力が大きく反映される。バーサーカーの圧力は凄まじく、得物が鉄柱だというのを微塵も感じさせない。

それが、一番おかしいのだが。臂力が凄まじいのはアーチャーに射出された宝具を掴み取つたからまだ予想の範囲内。だが、鉄柱が己の宝具の剣とまともに打ち合えるのには、セイバーは納得できなかった。セイバーの剣は並ぶ物の無い程の宝剣の中の宝剣だ。決して、鉄柱ごときを斬れないなまくらではない。やすやすとは斬れな

い物も存在するが、それは宝具くらいのモノだ。

「なん……だと？」

歯をくいしばりながら耐えるセイバーは目を疑った。

バーサーカーが握っている鉄柱が、鎧のように黒く染まっている。葉脈のような黒い筋が幾重にも鉄柱に絡み付き、今もゆっくりと広がりがながら侵蝕している。ソレの出所はバーサーカーの両手だった。黒い籠手に掴まれたその場所から広がっていた。

「貴様は……まさか!？」

セイバーは理解する。バーサーカーの宝具の正体を。

見守るランサー、ライダー、キャスターも同じ結論に辿り着く。

「……そういうことか。あの黒いのが？んだものは、なんであれヤツの宝具になるわけか」

「恐ろしい宝具だな。下手をすればアーチャーのように自分の宝具で傷を付けられるか……面白い」

「……………」

ライダーは感心すように言い。キャスターは品定めするかのよう
に観察し。ランサーはただ黙ってセイバーとバーサーカーの戦いを
見ている。その目線の先でセイバーはバーサーカーに圧されている。
豪快な槍捌きでもって圧されている。最良と言われるセイバーが防
戦一方となっているのには、ランサーには心当たりがあり過ぎる。
奇策を持ってして『必滅の黄薔薇』^{ゲイ・ボウ}によって負わせた治癒不可能な
左手の傷。そのせいで、セイバーは全力を出させずに圧されてい

る。本来なら、自身が得るべきアドバンテージでもってバーサーカーはセイバーを下そうとしている。

(俺は……)

セイバーのマスターである衛宮切嗣は静かに思考する。このままだとセイバーはバーサーカーに負けてしまう。だが、サーヴァント同士の戦いに割って入るうとも無駄だ。実力においてサーヴァントと人間の間にはまず越えられない壁が存在する。だからマスターが戦うのなら、同じ人間であるマスターに限定される。しかし……

「……舞弥、そつちからバーサーカーのマスターは視認できるか？」

『いいえ。見当たりません』

そのマスターが見つからない。ランサーのマスターなら、切嗣の位置からなら見える場所に居るのを熱感知スコープで確認している。おそらくは直接に指示が出せる場所には居ないのだろう。優秀な魔術師なら、ランサーのマスターのように幻術などで惑わすだけで十分と考える。だが、姿の見えないバーサーカーのマスターは身を隠す事を優先しているようだ。尤も、自分のサーヴァントがバーサーカーであるのなら、細かい指示を聞き入れる理性など望めないのだから当然の選択だとも取れる。

「まずいな……」

状況は最悪だ。例えセイバーがバーサーカーに勝っても、まだ無傷のサーヴァントが3体も居るのだ。このままではセイバーは討ち

取られる。解つていても、できる事が無い。

スコープをセイバーからずらし、デリッククレーンの上を見る。そこには髑髏の仮面を付けたアサシンが居座っている。下手な行動は未だに気付かれていない自分の存在を露呈させる事になる。

「……くそっ」

考える事しかできず、切嗣は静観するしかなかった。

荒々しくもその技の冴えて正確。獣でありながら達人の域の槍捌き。セイバーには解る。元は名立たる使い手だったのだらうと、同時にこれ程の腕を持ちながらなぜバーサーカーのクラスで召喚されたのかは解らないが……

「貴様は……一体!？」

答えが返つてこず、代わりにバーサーカーは鉄柱の槍を大きく振りかぶる。次は大技になると予備動作を見ての判断と、直感で解る。だが、それに先んじて攻撃は繰り出せない。ガードをするが、それすら突破して潰されるだらう。

ゴウツ!と勢いよく風を切る音と共に振り下ろされる。

「悪ふざけはその程度にしておいてもらおうか。バーサーカー」

しかし、セイバーに見えたのは振り下ろされる槍ではなくランサーの背中だった。見れば、バーサーカーの槍は半場で切り落とされている。アーチャーの宝具がバーサーカーの宝具と相性が悪かったように、バーサーカーの宝具はランサーの宝具である魔力を断ち切

「破魔の紅薔薇」との相性が悪かった結果だ。バーサーカーの魔力を帯びることで宝具化していた鉄柱が、魔力を断ち切られたから元の鉄柱に戻っただけだ。

「そのセイバーには、この俺と先約があつてな。……これ以上つまらん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙ってはおらんぞ?」

「ランサー……」

死闘の最中でも、セイバーには感極まるモノがそこにはあつた。騎士道。彼女が生涯を通して貫き通し、己の誇りとしているモノだ。ランサーはソレに忠実であつたのだ。

『何をしているランサー? セイバーを倒すなら、今こそが好機である』

しかし、騎士道に理解を示さないマスターにとっては、自身のサーヴァントの行動は不可解なモノでしかない。

「セイバーは! 必ずやこのディルムツド・オディナが誇りに懸けて討ち果たします!」

隠れているマスターに向かって声高に宣言する。

「お望みなら、そんな狂犬めも先に仕留め御覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ! この私とセイバーとの決着だけは尋常に……」

既に出揃っているサーヴァントの顔ぶれを見て、ランサーは己が騎士道の誇りに賭けて戦える好敵手はセイバーしか居ないと見定めた。だから、セイバーとはサーヴァントとしてではなく、騎士とし

て尋常に戦って討ち果たしたいのだ。

『ならぬ』

そんなランサーの嘆願を切り捨て、マスターは命令を下す。

『ランサー、バーサーカーを掩護してセイバーを殺せ。令呪をもつて命ずる』

ランサーの心中を知ってか知らずか、非情にもサーヴァントとして戦いを強制された。

ランサーはすぐさま槍を反転させ、二槍をセイバーに向かって振る。セイバーは直感で咄嗟に跳び退いてソレを回避する。

「ランサー……っ！」

呼び掛けようとして、セイバーは言葉に詰まる。令呪によって己が持つ誇りをねじ曲げられたのだ。そんなランサーの表情が通常のものであるはずが無い。戦いに必要の無い顔だけはランサーの心中を表して、怒りと屈辱でその魔貌を歪めている。そんなランサーに言葉を掛けられる訳が無い。

もし、セイバーがランサーにできる事があるとするならば、それは此処では決着を付けさせない事だ。だが、それは絶望的だ。バーサーカーの猛攻を凌ぐだけでも今のセイバーは限界だったのだ。そこにランサーが加われれば勝ち目は万が一にも、無い。

「……セイバー……済まッ！」

ランサーの苦しげな呟きは途中で遮られた。

「流石は最速のクラスだ。今で首を刈るつもりだったんだがな」

何を思ったのか、ここにきてキャスターがランサーへと2本の刀で斬り掛かったのだ。

戦争開始5（後書き）

やっと変えていける。

戦争開始6（前書き）

感想 コクイ様

ありがとうございます！

戦争開始6

「キャスター……なぜ？」

解らなかった。なぜキャスターが対魔力持ちのランサーに挑み掛かったのか。

「セイバー。お前の敵はバーサーカーだ」

そう言うと、キャスターはランサーをセイバーから引き離すように立ち回り始める。なぜ助太刀してくれるのかは解らないが、セイバーはキャスターに感謝し、バーサーカーと向きあう。

短長2つの槍と、脇差しと平均的な長さの日本刀がぶつかって火花を散らす。初撃はキャスターからだだったが、すぐにランサーが攻勢に出る。しかし、襲うほんのコンマ一秒前で『必滅の黄薔薇』に日本刀を、『破魔の紅薔薇』には脇差しを槍と自分の間に挟み込んで逸らす。

「どうした？俺は最弱のクラスのキャスターだぞ？」

今呪で命令されたサーヴァントに自由意思など存在せず、ただ命令通りに動くしかない。だが、条件によっては命令に無い動きをさせる事も可能である。キャスターはそこを突いてランサーの動きを誘導する。

『ランサー、キャスターなど手早く処分してすぐにセイバーを殺せ

！」

令呪による命令でセイバーを殺す行動はランサーのサーヴァントは既に決定している。だが、キャスターがその障害になる為にやむなくキャスターを排除しようとするが、このごとく攻撃を潰されて攻め切れない。セイバーを殺す為にキャスターを無視して動こうとすれば、すぐさまキャスターは攻勢に出てランサーのその首を刈ろうとする。いたちごっこになっているが、令呪によって強制されているランサーはともかくキャスターは退こうとはしない。隙あらば、本気でランサーの首を刈ろうとする。

だというのに、ランサーの表情は苦悶のモノではなくなっている。口にこそ出さないが、安堵している。少なくともキャスターが自分を抑えている間はセイバーに不本意な槍を向ける事は出来ないから

「坊主、キャスターとランサーのステータス差はどうなっておるんだ？」

「筋力と俊敏はキャスターが劣ってる。なのに……なんでランサーが白兵戦ですぐに倒せないんだ……？」

キャスターの俊敏はC+なのに対してランサーはA+。速さはどうやっても覆らない差があるというのに、キャスターはランサーの繰り出す攻撃全てを逸らして凌いでいる。

「よく見てみる。そうすればおのずと解る」

ライダーにそう言われてウェイバーは目を凝らしてキャスターとランサーの戦いを見るが、人間の動体視力ではおいそれと追える速さではないので結局なにが起きているかは解らない。

「ライダー。僕の目では追い切れないんだが……」

「ん？ああ、すまん。状況の説明をするとだな、速さはランサーの方が上なんだが、キャスターのヤツはランサーがより先に動いてランサーの攻撃を逸らしておる。おそらくキャスターのヤツはランサーの動きを予測して動いておるのだろう。それを、キャスターがやっているのは意外だがな」

キャスターがやっているのはランサーの足止め。少なくともライダーにはそう見えた。

「ああ、欲しいなあ。セイバーもランサーもキャスターも」

「ライダー？」

ウェイバーはライダーの突然の言葉に不穏なモノを感じ取った。思い返せば、ライダーは欲望のままに行動してきた。そのライダーがいきなり欲しいと言いだしたのだから、何かしらやらかす前兆ではないのだろうか？そう考えた時には 長い目で見れば、征服王イスカンダルをサーヴァントにした時点だが 遅かった。

「坊主、しっかりと掴まっておれよ！」

ライダーはウェイバーが何をするか問う前に、戦車の手綱を握り直して神牛に駆けると命令を下してしまう。

「アアアア
A A A A L a L a L a L a L a L a i e ! !」

雄牛が駆け出すと共に稲妻は轟音と目が眩む閃光を撒き散らす。その閃光は、昼夜が逆転したのではないかと思える程に破壊し尽く

された倉庫街をほんの数秒だけ照らし出す。それが目指すのはセイバーだけに気を取られているバーサーカーの背中。

ライダーの戦車を引く2頭の神牛は、まず4本の前肢でバーサーカーを大地に踏み倒し、続く4本の後肢で容赦なく蹂躪する。牛と侮る事なかれ、例え牛だとしても稲妻を踏み締めて空を駆けることのできる神牛であり、紛れも無いライダーの対軍宝具である『エルディアス神威の車輪ホイール』の一部である。その一蹴りでも、宝具による一撃には変わらぬ、それを合計8回も受けたバーサーカーのダメージは致命的だっただろう。ライダーの戦車が駆け抜けた後には、立ち上がる事も出来ずに倒れ伏したままのバーサーカーが転がっている。

「ほう？なかなかどうして、根性のあるヤツ」

ゆつくりと、弱々しく痙攣しながらであるが立ち上がらるうと上半身をまず起こそうとしているバーサーカーを見てライダーは笑う。トドメとなる車輪による蹂躪だけは、なんとか体を捻って戦車の軌道上から転がり出て回避していたのはライダーは気付いていた。だが、敢えてライダーは追撃をしない。ライダーはどの様な相手だろうと、真正面から蹂躪して征服するつもりなのだ。バーサーカーを攻撃したのは、今はセイバーへの攻撃を中断させるためにすぎない。今、此処で倒すつもりは毛頭無い。尤も、もしも本気で無い疾走でバーサーカーがやられようとも気にしない。所詮はその程度であつたという話になるだけだ。

流石に戦闘続行は不可能と悟つたのか、動きを止めて実体化を解いて霞となって消える。消えるその瞬間まで、バーサーカーは憎悪と狂気に染まつた双眸でセイバーだけを見つめていた。

「と、まあこんな具合に、黒いにはご退場願ったわけだが」

ライダーはまだ戦っているキャスターとランサーを見ながら言う。

「ランサーのマスターよ。どこから覗き見しておるのか知らんが、下衆な手口で騎士の戦いを穢すでない……などと説教くれても通じんか。キャスターのようでない魔術師なんぞが相手では」

少なくとも、キャスターは騎士の戦いは何たるかは解っているようには見えた。でなければ、あんなタイミングでランサーに挑み掛からないだろう。

「ランサーを退かせよ。なおこれ以上そいつに恥をかかすというのなら、余はセイバーに加勢する。3人がかりで貴様のサーヴァントを潰しにかかる。もしも、セイバーかキャスターが退くと決めたお主等になおも挑む掛かるようなら、余が責任もって足止めもするが、どうする？」

『撤退しろランサー。今宵は、ここまでだ』

あまり間をおかずに撤退をランサーのマスターは命令する。それによって自由になった体でランサーは槍の刃先を下げる。

「感謝する。キャスターに征服王」

「フン……」

「なあに、戦場の華が愛でるタチでな」

礼を言われたキャスターは、もう此処には用は無いと言わんばかりすぐに実体化を解いて姿を消す。

「なんだ、せわしないヤツだな」

キャスターが消えた辺りを見ながらライダーが呟く。ランサーは苦笑しながらキャスターが消えた辺りとライダーに視線だけで謝意を伝え、続けてセイバーにも頷く。

言葉を交わさずとも互いに解る。決着は、尋常な勝負をそれを確認したランサーは実体化を解いて去る。

「……結局、お前とキャスターは何しに出てきたのだ？征服王」

「さてな。そういうことはあまり深く考えんのだ。キャスターについては、機会があったら本人に聞くしかないなあ。まあ、あやつは簡単に退場するような玉ではないようだから、機会はきつとあるであらう」

セイバーもキャスターへの評価は同じだ。ランサーを一時的でも抑え込んだ手腕は、キャスターとしては破格な能力だろう。白兵戦もある程度できるなら、早々に退場するような事はないだろう。

「ではな。次に会った時にランサーとの因縁を清算した後なら、存分に戦おうぞ！」

そう言い、ライダーはマスターが気絶しているのに気付かずに戦車を走らせて空へと駆け上がる。

サーヴァント同士の戦いはひとまずは幕を下ろした。その幕の裏で、暗躍を始める者達が居ようと、気付ける者は極少数だった。

幕裏の行動（前書き）

感想 結愛羅様

ありがとうございます！

幕裏の行動

キャスターことアローロニーロは最初から、あるモノを手に入れる為に動いていた。しかし、セイバーとランサーの戦いを見て戦いたくなくなってしまい、自分に戦力調査と言いついて聞かせて、ランサーと白兵戦をした。その結果は上々。令呪によって制限されたランサーは後は宝具を使えば打ち取れると確信した。真名解放をして討ち取り、ランサーを喰らおうと思った矢先に、ライダーによって戦いは中断されたが微塵も諦めていなかった。

ランサーとそのマスターはキャスターにとても都合が良かった。ライダーのマスターであるウェイバー・ベルベットを教え子と呼んだ。つまり、誰かに教えるくらいにはキャスターが持ちえない魔術の知識は持っているのだろう。しかも、マスターであるから令呪もその身に宿している。魔術の知識と令呪、さらに自分以上のステータスを持っているが倒せるサーヴァントを持っている。全てを喰えば、一気に自分に有利になる上に全力のセイバーと戦えるようになる。この上なく魅力的に思えた。だから、先に戦場を離れてランサーのマスターを尾行した。

そうして着いた場所は、冬木ハイアットホテル。

冬木ハイアットホテル。冬木市における最高級の設備とサーヴィスを誇るホテルであり、魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが最上階である地上32階を貸し切りにして拠点兼工房にした場所である。ホテル側は贅を凝らした正に最高級なモノを提供していると思つて疑われないが、生まれもつての正真正銘の貴族であるケイネスにとっては、張りぼてかメッキとしか感じ取れなかった。ただ金にモノを言わせて買い揃えられた調度品の数々は醜悪にすら見え

た。そんなモノより、今はもつと気に入くないモノが目の前に存在するのだが……………

「何たる失態だ、ランサー！貴様の槍はキャスターにすら届かなかったではないか！」

令呪によって下されたのとは別の行動故に、ランサーは全力を出せてなかったのだが、キャスターに槍を届かせられなかったのは明白な事実としてランサーは己がマスターの叱責を甘んじて受けている。

「そもそも貴様は戦いを愉しんでいたな。セイバーの時も、キャスターの時も！」

セイバーの時は純粋な競い合いを愉しんでいた。しかし、キャスターの時は違う。令呪によって動かさせられていたのだ。そこにランサーの意思は存在できずに、命令をこなす機械としてなっていたのだ。それでも、ランサー個人としてはそのような自分を足止めたキャスターの手腕に驚愕し、称賛の言葉を送りたいほどだ。しかし、それは言い訳にしかすぎないとも解っている。ケイネスをマスターとしての聖杯戦争に勝利すると誓ったのだ。

「……………申し訳ありません。主よ」

ならば、これはして当然の主への謝罪であり、達成できなかった事を改めて誓って主に報いるのだ。

「いずれ必ずや、あのセイバーとキャスターの首級しゑいはお約束いたします。どうか、いましばらくのご猶予を」

「改めて誓われるまでもない！それは当然の成果であろう！」

しかし、ケイネスは当然と言う。

「貴様は私と契約した！このケイネス・エルメロイに聖杯をもたらずと！それは即ち、残る6人のサーヴァント全てを斬り伏せることと同義だ。この戦いの大前提だ！」

それを今更……たかだかキャスターごときにも必勝を誓うだと？それが価値ある約定だとも抜かすか？いったい何を履き違えている？」

騎士と魔術師の価値観の違いが、大きく2人の間に横たわっていた。

「履き違えているのは貴方ではなくて？ロード・エルメロイ」

ランサーでもケイネスでもない声、女性の声が割って入る。

「ランサーは良くやったわ。間違いは貴方の状況判断でなくて？」

「ソラウ、何を言うんだ……」

声の主はソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ。時計塔の科の1つである降霊科ユリフィスの長でありケイネスの恩師でもあるソフィアリ学部長の息女。そしてケイネスの栄光を完成させる運命の女神 即ち、ケイネスの許嫁だ。しかし、それだけでケイネスがランサーへの対応とうつて変ってへりくだっている訳ではない。無論、頭でも許嫁としても恩師の息女としても無碍な扱いができないと解っているが、根本的なモノはもつと単純かつ複雑なモノだ。ケイネスはソラウに1人の男として恋い焦がれた身の上だ。

「ねえケイネス。私に言わせてもらえればね、あの場ではランサーの提言通り、バーサーカーを標的にするべきだったのよ。いったんセイバーと共闘させてでも」

ソラウはケイネスと違って家ごとに受け継がれる魔術刻印を持っていないが、名門たるアーチボルト家に引けを取らないソフィアリ家の一員として魔術の教育を受けた身だ。倉庫街の一戦も使い魔を通じて逐一把握していた。

「もちろん、そうした場合でもあのアローロニーロと名乗ったキャスターが手を出してきたかもしれないわ。でも、例え手を出してきたとして今呪に縛られていないランサーだったら、足止めされずにすぐにキャスターを討ち取れたでしょう？」

ソラウが微笑みながら聞き、ランサーはそれに対して黙って頷く。何気ない事のはずだが、それはケイネスを苛立たせる。彼女は自分にあんな風に微笑んだ事はあっただろうか？無かった。

「……君はセイバーの脅威を知らない」

やり場のない苛立ちや憤りを噛み殺してケイネスは言う。ソラウの言う事にも一理あるのは解っている。だが、ソラウは司令塔ではない。ケイネスは聖杯戦争を自分の判断で戦い抜き、聖杯をこの手に納めようと考えている。

「私はマスターの透視力で、あのセイバーの能力を把握できた。あれはとりわけ強力なサーヴァントだ。総合力ではデイルムッドを凌いで余りある。あの場で、倒せる好機を逃すわけにはいかなかった！」

ランサーの宝具の『破魔の紅薔薇』と『必滅の黄薔薇』2つあるが、2つとも戦闘を有利に進める能力が宝具に宿っているタイプだ。真名解放で、一発逆転を狙えないが故に総合力で劣る相手には苦戦を強いられる。だからケイネスは、見れたステータスが一番高いセイバーをなるべく早い段階で脱落させたかった。それに、セイバーは騎士王と名高いアーサー王と云うではないか。それならばセイバーが使っていた剣は、最も有名な聖剣であるエクスカリバーに他ならないはず。宝具はあちらの方が格上であり、エクスカリバーがどのような力を持っていようとも、それが並みの宝具以上とは簡単に想像ができる。

「セイバーの方が能力が上……それなら危険視するのは解るわ。それなら、どうして貴方はセイバーのマスターを放っておいたの？ 貴方にはあの女に無いアドバンテージがあったのに……」

「それは……そうだが……」

「マキリが完成させた本来の契約システムに、さらに独自のアレンジを加えてのけた貴方は、たしかに天才だわ。さすが降霊科随一の神童と謳われただけのことはあるわよ」

天才とは誇張ではなく、事実である。これまでケイネスは常に周りの魔術師より一步も二歩も前を歩いて来た。周りがそんな彼に期待し、その期待に難なく応えてきた。そんなケイネスが用意した秘策はサーヴァントとマスターの、本来なら単一しかない因果線を2つに分割して配分する変則契約。これによって、ケイネスは自分が背負うはずだったサーヴァントを現界させる魔力の負担をソラウに支払わせている。サーヴァントのマスターでありながら魔力を存分に使えるのはケイネスただ1人であり、魔力と秘術がモノをいう魔

術師同士の戦いで全力を出せるのも、ケイネス1人という事になる。

「でもねケイネス。貴方は魔術師として一流でも、戦士としては二流よ。せつかくの下準備を、戦略的にまったく活かしていないじゃない」

「いや、私は……」

反論しようとしたケイネスの言葉を遮るように突如、防災ベルがけたたましく鳴り響く。

「……なに？何事？」

ソラウは当惑を隠さず眩きを漏らす。すぐに部屋に備え付け電話がベルを鳴らしはじめる。ランプの点灯はフロントからの着信を表している。

ケイネスは受話器を取り上げて係員からの連絡に耳を傾ける。話を聞き終える頃には、魔術師としてのケイネスの顔が出てきていた。

「下の階で火事だそうだ。すぐに避難しろと言ってきた。小火程度ほやのものだそうだが、どうやら火元は何力所かに分散しているらしい。まあ間違いなく放火だな」

「放火ですって？よりもよって今夜？」

倉庫街でサーヴァントが一堂に会したそのすぐ後でのこの騒ぎ。

ケイネスは苦も無く答えに行き着く。

「フン、偶然なわけがあるまいさ。人払いの計らいだよ。敵とて魔術師。有象無象どもがひしめく建物で勝負を仕掛ける気にはならん

だろうからな」

「じゃあ　襲撃？」

「おそらくは。先の倉庫街でまだ暴れ足りないという輩が、押し掛けてきたのだろう。面白い。不本意だったのはこちらも同じだ。そうだろう？ランサー」

「はい。確かに」

ランサーは迷いなく頷く。

こつも事を急いで行動する相手の心当たりはただ一組、セイバーとそのマスター以外にはないだろう。こつも早く来るのは予想外であったが、正々堂々と戦える舞台ならランサーには何も不満はない。

「ランサー、下の階に降りて迎え撃て。ただし無下に追い払ったりするなよ」

「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めば宜しいのですね？」

「そうだ。お客人にはケイネス・エルメロイの魔術工房をじっくりと堪能してもらおうではないか」

自分の主の返事を確認するとランサーは霊体化して下の階に直接降りる。

(人の気配がない?)

人の泊まっていない部屋は複数存在するだろう。しかし、まったく居ない訳ではない。どの階にも泊まっている人間が居るべきなのだが、31階には誰もおらず、既に避難が完了しているようであった。

(早すぎる)

防災ベルが鳴って避難勧告がされたのはついさっきなのだ。幾ら何でもこの早さはありえないモノだ。そのまま30階にランサーは降り、人影を発見する。だが、それはランサーが求める人物ではなかった。それでも、実体化して臨戦態勢に入る。

「お前が客人とはな。てつきりセイバーだとばかり思っていたぞ、キヤスター」

「当てが外れて残念か？まあ、それでも戦ってもらうがな」

幕裏の行動2（前書き）

感想 にかさま様、イースト様、教授様
ありがとうございます！

幕裏の行動2

「安心して戦える準備はしてある。29階と28階に泊まっていた客にも先に避難してもらったからな」

廊下にどこかの部屋の椅子を持ち出して座っていたキャスターが立ちあがりながら言い、一振りの刀を鞘から抜く。

「随分と用意が良いな。罾も用意してあったりするの？」

「まさか、対魔力持ちに生半可な魔力を使った罾を用意しても魔力の無駄だ。なら、その分を戦闘に回した方がずっといい」

「本当にらしくないキャスターだ。その奇妙な剣もそうだが、倉庫街で見た手腕は魔術師のモノではあるまい」

キャスターのクラスは魔術師、もしくは魔術に縁のある品を持っていたという伝承なり逸話がなければ得られないクラス。純粹な魔術師なら、白兵戦は苦手な傾向がある。だがキャスターは速さでは及ばずとも、ランサーの動きを読んで足止めをした。

「まあ、魔術師では無いな」

真名は明かすのに、顔は明かさない実に不思議なキャスターはあつけからんと言う。隠す必要も意味も無いと平然と言う。

「それでは始めようか。水天逆巻け、『掬花』」

「なに………?」

刀を指で回すようにしながらの真名解放。刀が棒状に伸びたかと思えば、すぐに刀は別の形になっていた。3叉に別れた穂先に、柄と槍頭の接続部には青い毛による装飾がなされ、石突きは巻貝を鋭くしたような形状になっていて刺突が可能とみられる2メートル程の槍。槍兵の英霊ランサーに対して槍で挑む魔術師の英霊キャスター。そんな可笑しい戦いが始まる。

「俺の槍は邪道に近いぞ……心しろ」

まずはキャスターが掬花を振るう。弧を描いてランサーを襲うが、ランサーはそれを下がって苦も無く避ける。掬花はただランサーの眼前を通りすぎただけに留まる。

(奇妙な剣から形を変えただけなのか?)

目の前の槍は奇妙な剣から形を変えた槍。宝具であるなら、それだけで留まらないのではなかとランサーは疑う。形を変えるのは十分凄いが、それだけが宝具の能力だと少々微妙過ぎる。自身の宝具と比べても、明らかにランクの劣るように感じられる。それに、形を変えられるのなら戦いの途中で変えて意表を突くのが最も良い使い方ではないのだろうか?

疑問に思いつつも、連続で繰り出される攻撃を避ける。石突きによる突き、続けて槍を回転させて槍頭での打ち上げ攻撃。ランサーは一連の動きを見てキャスターが邪道に近いと言った訳に納得する。槍の基本動作は突きであり、槍自体を回転させての連続攻撃は槍術よりも棒術に近い使い方になる。無論、それが邪道かと問われれば違うと言わざるおえない。あくまで基本動作が突きであって、薙ぐような動作や、片手首を主軸として槍を回転させる見た事の無いキャスターの我流の扱い方も1つの使い方過ぎない。邪道と言うな

ら、ランサーの方も邪道に分類されてもおかしくはない。二刀流ならぬ二槍流は類を見ない扱い方になる。

(見た事の無い型だが、対応できない訳ではない)

『必滅の黄薔薇』で『掬花』を受け止め、『破魔の紅薔薇』で一撃を防がれて無防備になっているキャスターを穿つつもりで突き出そうとしたが、途中で自分に迫るナニカに気付いて横に振るう。斬ったモノは水、否、勢いのついた波濤であった。波濤はそのままランサーに襲い掛かる。

ランサーは波濤の一撃を咄嗟に『破魔の紅薔薇』でさらに斬りつけるが、それで削れた波濤はほんの一部消し去るに止まり、そのまま一撃をくらって壁に叩き付けられる。

魔力の流れを断ち切れる『破魔の紅薔薇』だが、弱点が存在する。魔力が絶えず流れて続けているモノなら触れた場所より先は魔力が供給されずに消えるが、魔力が1つの形を成している場合は触れた部分は消せるが、それ以外には影響は無い。『掬花』の波濤はまさにそれに類するタイプだった。

「ツチ、流石に波濤だけでは行動不能にまでは追い込めんか」

キャスターは舌打ちし、己の武器を回転させながら構える。ランサーの耐久はCで低い部類だが、波濤がそのままでギリギリ行動不能にできる威力だったので、2度も斬られて威力を削られた波濤では倒すには至らなかった。それでも、ダメージはダメージだ。動きを鈍らせ、攻撃を届かせられるようにする礎にするだけだ。

「クツ……」

不意打ち同然の攻撃を受け、無視できないダメージを受けたラン

サーだが負ける気はまったくない。ただ、次をどう動かさずぐに考える。マスターであるケイネスは32階に追い込めと言っていたが、ケイネスが用意した魔術がサーヴァント相手にどれ程の効果を発揮できるか不明であり、ランサーとしては自分の力だけでキヤスターを討ち取りたい。しかし、32階に行けばケイネスの治療魔術で受けたダメージを帳消しするくらいの掩護は簡単に受けられるだろう。仮に32階に追い込もうしても、キヤスターが素直に32階に移動するかも疑問である。それに、キヤスターは魔術師ではないと明言しているが、それでも魔術に関する事がどれ程できるかは依然として不明なのだ。下手に招き入れれば瞬間に破壊される危険性もある。そう理由付けして、ランサーは追い込まずにこの階で倒すと決める。

ランサーが動き、それに合わせてキヤスターも動く。『破魔の紅薔薇』を突き出し、『掬花』を打ち据えるが波濤は健在で追従している。それを確認すると、ランサーはすぐに下がる。

「厄介だな。『破魔の紅薔薇』で槍に触れても、波濤に影響は無しとは……」

苦笑するしかない。『破魔の紅薔薇』は波濤の触れた部分は消せるが、それだけでは普通に斬ったのと大差無い結果だ。『必滅の黄薔薇』は相手を傷付けて効果を発揮するのだから今は意味が無い。

「仕方あるまい。最も速い方法でやらせてもらおう」

ランサーは『必滅の黄薔薇』を邪魔にならないように廊下の隅に投げ、『破魔の紅薔薇』を両手でしっかりと握る。その意図を汲み取ったキヤスターも『掬花』を回転させるのをやめて、両手でしっかりと握る。

「速さで圧倒させてもらおう」

宣言し、ランサーは自身の放てる最速の突きを繰り出す。それも連続で。キャスターもそれに対抗するが、徐々に押され始める。最速はランサーのサーヴァントと決まっている。それが繰り出す突きも最速であり、最も次の攻撃への時間が短い攻撃が突きでもある。最短時間で連続で繰り出される突きは心眼（真）：Aを持っているキャスターは読めてはいるが、体が反応しきれていない状態であった。しかし、無計画で突きの競い合いに乗った訳ではない。

ランサーはこのままいけば取れると確信し、キャスターも後一枚手札を切れば取れると確信した。同時に勝ちを確信した瞬間に、同時に異常な揺れによって台無しされた。

「！？ッ」

幸運：Eは ランサーとキャスターの両名 伊達ではないようだ。

爆破解体^{デモリッション}

主に大規模な高層建築の解体に使われる高等発破技術である。ランサーとキャスターが同時に感じた異常な揺れの正体は、それによる崩落させる為の小さい爆発とそれによって起きる連鎖的な落下によるものだった。勿論、ケイネスが仕掛けた自爆用の用意でも、キャスターの仕掛けたモノでもない。

衛宮切嗣。古今東西の破壊工作に精通している彼が仕掛けたものだ。冬木ハイアットホテルは彼が事前に調べ上げられており、残っている爆破の為の作業は爆発物を仕掛けて安全な場所から電話をかけて爆破させるだけだった。本当だったら、爆破させる前や仕掛けている途中で標的であるケイネス以外はホテルの外に出す為に騒ぎ

を起こす予定であったが、それはキャスターによって行われていた。それによって予定よりやや早く全ての作業を終えたのだ。

「舞弥、そっちは？」

「最後まで32階に動きはありませんでした。標的はビルの外には脱出していません」

携帯電話から聞こえる報告に満足そうに切嗣は頷く。舞弥は冬木ハイアットホテルの斜向かいの建造中の高層ビルの上階に陣取ってケイネス達を監視していた。もしも、ケイネス達が屋上などに避難した場合は撃ち抜く為の用意をして。

準備は万全であり、たった1人を殺す為だけにビル1つを使う手段は悪辣とすら思えるが、これが「魔術師殺し」の殺り方である。尤も、犠牲者が2人だけなのは少ない方である。時として切嗣は生き残れない、もしくは生き残ってはいけない人物の為に周りにいた人達もろとも殺した事さえある。今回はケイネス達以外が脱出してから決行し、人間としては良い選択をした。だが、「魔術師殺し」としての切嗣はそれは“甘さ”だと断じて即刻捨てるべきモノだと訴える。事実、9年前の衛宮切嗣より劣っている。そのままで聖杯戦争を勝ち残れないと思い、どうにかして冷酷さと判断力を取り戻さねばならない。

撤退の指示を出すべく携帯電話に耳をつけると、聞こえたのは刃を鳴らす金属質の音だった。それが意味するのはただ一つ、舞弥が誰かと戦っているという事だ。

すぐに切嗣は警戒度を引き上げる。敵が1人とは限らず、見えないう敵は切嗣の天敵に当たり、後ろから忍び寄られるのは誰であつても致命的だ。だが、すぐに舞弥の心配をする。アレは今の切嗣に必要不可欠な補助装置であり、少なくとも昔と同じに成るまでは失う訳にはいかないからだ。戦っている場所はおそらく監視の為の位置、

もしくはその付近とすぐに目星を付けて自分に何ができるか思考する。だが、出来る事は少ない。銃での掩護は出来ず、切嗣の使える魔術に今居る場所から掩護できるような魔術は存在しない。掩護すべき対象は地上から150メートルも上に居るから、おのずと選択肢は限られる。逃げる為の掩護さえ出来れば良いのだ、唯一使えると判断した発煙筒を掴んで狙いを付ける。

「固有時Time 制御alter 二倍double 速accel!」

流石に素の状態を手投げ式の発煙筒を届かせようとは考えずに魔術を行使する。しかし、使うのは身体強化とは違う。切嗣が衛宮に伝わる時間制御の魔術を戦闘用に改造したモノで、今回は自分の中の時間を2倍に早めた。素の状態での2倍のスピードで投げられた発煙筒は弧を描きながら舞弥が居るのであるう近くに落ちたはずだ。確認のしようが無いが、切嗣は次の行動に移る。移動用の車が置いてある場所まで移動し、すぐにでも発車できるようにしておくだけなのですぐに済んだが、舞弥が来るまでがもどかしかった。

掩護は意味を成さずに、舞弥は敵に殺されたのではないのか？もしくは、まだ戦っているのではないか？そんな考えが頭の中をグルグルと渦巻いていたが、後部座席のドアを開ける音とすぐに閉まる音を聞き、バックミラーで舞弥と確認してからすぐに車を出す。

切嗣が安堵の息を漏らすのは、拠点であるアインツベルンの城に戻ってからだった。

幕裏の行動2（後書き）

宝具解説

『掬花』 ランク：B 対人宝具 レンジ2～4

波濤を生み出し、それを操ることができる槍。波濤は対魔力の影響を受けない。

役者の手廻し（前書き）

感想 教授様、かにかま様
ありがとうございます！

質問で答え忘れがあったので此処に書きます。
前作で出たアローロニーロが作ったモノは一部を除いて出さない予定
です。だから崩玉や斬魄刀の贋作は出ません。

役者の手廻し

神秘の宿らない攻撃はどれ程の破壊力を持っていても、サーヴァントを傷付ける事は不可能である。瓦礫の雨だろうと、ミサイルの雨だろうとサーヴァントにとっては普通の雨と変わりない。キャスターとランサーはまったくの無傷で冬木ハイアットホテルの崩落を過ごせた。ランサーは崩落の開始と同時に目の前のキャスターを捨て置いてすぐにケイネスの元に移動し、キャスターはもう神秘の秘匿をしながらの戦闘は不可能と判断して拠点に戻った。

「旦那あ！すげえ、すげえcoolだったぜ！サーヴァント同士の戦い、それにビルの倒壊シーンを中からなんて、映画なんて目じゃなかった！！」

隠蔽された拠点である柳桐寺の一室でマスターである龍之介は熱烈にキャスターを歓迎した。彼はキャスターの用意した使い魔で水晶玉を通してキャスターを見ていた。だが、キャスターは掩護など期待していない。魔術師として申し訳ない程度の素質しか持っていないマスターに、自分の技を教えて使わせようとせず、望むのは安全な拠点で待機し続けて現界の為の楔としての役割と魔力供給さえしてもらえればそれで十分と思っていた。使い魔とそれを操作する水晶玉を渡したのは、なるべく外に出さない為である。少なくとも玩具を渡しておけば、勝手に拠点から出ないだろうと予想したからの選択だ。

「でもよお、やっぱり直に見てみたいんだけど……ダメ？」

「ダメだ。自分の身すら守れないお前を戦場に立たせる訳にはいかない」

龍之介はキャスターからすれば弱く、戦場では真つ先に殺される存在と捉えた。一方的な殺ししか経験のない龍之介は危機感に乏しく、使えない。困に思えば使えるが、ホテルでの戦いでピルを平気で崩落させるような敵がいるのなら、裏をかかれて殺される可能性の方が大きいために出来ない。

「それより、^{おそ}晚いからもう寝たらどうだ？」

キャスターは吸い上げる魔力量を多くし、マスターへの負担を大きくする。

「ああ……なんか急に疲れたみたいだし、今日はもう寝るか。旦那、明日も面白いモノは見れるか？」

「明日次第だな」

魔力に関する知識をまったく持たない龍之介はいきなり襲ってきた虚脱感を疲労によるものと判断してすぐに眠りにつく。完全に寝入ったのを確認してからキャスターは霊体化して消費を抑えながら静かに佇む。今現在できるのは魔力を蓄えるだけだ。

ほぼ同時刻。冬木ハイアットホテルで舞弥を襲撃した綺礼は時臣に報告していた。報告の内容はホテル内で行われたランサーVSキャスターの戦いについてであり、自分の行動は全て伏せた報告なのだ。

「真名解放まではアサシンは聞けませんでしたが、キャスターの宝

具の形状と能力は手に入れました。キャスターが倉庫街で使った刀を三叉槍に変化させるに留まらず、波濤を生み出して操っていました」

『三叉槍トライデントに波濤？もしかやキャスターは海神ポセイドンに縁のある英霊か？しかし……アーロニーロ・アルルエリと言う名の魔術師に心当たりはないのだが……綺礼、君は心当たりはあるかね？』

「いえ、私ありません」

綺礼は通信装置のむこうの時臣の顔を子細に想像できた。なにしろキャスターはまるで取って付けたような英霊に思えたからだ。武器として使う刀は日本の者と連想させるが、キャスターの服と仮面はどうも鼻屑目で見ても日本の物には見えない。そこに追加の情報で、海神ポセイドンを連想させる宝具を使ったのだ。しかも、刀を変化させてその宝具にしたのだ。元々が槍で、キャスターによる隠蔽として刀にしていたとも考えられるが、どの様な魔術か宝具を使えば槍を刀に出来るかが想像ができない。

「……導師、アサシンから追加の残念な報告です。キャスターを見失ったそうです」

『見失った？気配遮断を持つアサシンに気付いて、撒くような行動をしたのかね？』

「いえ、おそらくキャスターは使い魔で監視をしてなかったら組目だったので、アサシンの退場茶番を知らなかったのでしょう。それと、キャスターは忽然と消えたそうです。さながら転移したかのようだと」

「転移？それは魔術ではなく、魔法の域になるが……」

魔術によって引き起こされる現象は科学技術などの他の方法を用いても再現できるものを差すのに対して、魔法とは時代の技術レベルにおいて、どれほどの費用や労力を注ぎ込んでも達成不可能なものを実現する神秘を差す。

「魔法使いの可能性もある、ということでしょう」

「キャスターのクラスに相応しい英霊になるわけだが……ますます解らない。まあ、宝具による現象や、アサシンの気配遮断に類する力を持っている可能性もゼロではないが」

時臣は最初はキャスターをたまたま空いていた席に入り込んだ英霊か、キャスターのクラスを偽称しているイレギュラークラスと考えていた。しかし、魔法とおぼしい事を行ったのなら本当にキャスターである可能性が高くなった。

「綺礼、とりあえずはキャスターが拠点に選えんぞうびそうな円蔵山にある柳桐寺に続く階段にアサシンを一体配置し、他のサーヴァントよりキャスターのアサシンの配分を多くして拠点と魔法使いかを探らせしてくれ。もしも、魔法使いなら、真っ先にギルガメッシュで潰す必要があるかもしれない」

同じ魔術師だから、より警戒する。魔法使いであり、転移を扱えるのなら正確に居場所を知られたら、その時点で負けが確定するのを時臣は恐れた。同じ魔術師だから、もしかしたら一時的には拮抗しえるかもしれないが、そんな事はほんの一瞬になると解っている。しかも、キャスターはランサーと白兵戦で一時的とはいえ、拮抗できる程の使い手でもある。自由奔放な自分のサーヴァントを常に侍

らすことが不可能故に、後手に周るのは非常に危険だ。一回だけなら、令呪によつて襲われてもすぐにアーチャーを呼び出す事ができるが、キャスターが素直にそのまま挑むとは考えにくい為に、無駄使いに成り得ると考える。

『あと、アサシン2体を私に回してくれ。最悪の場合は、この遠坂邸を放棄して適当な場所に身を隠す』

「わかりました。キャスターの調査を最優先事項として対処します」

ただ当然のように厳格に綺礼は答え、実行の為にアサシン達に命令を出す。使命には誠実かつ厳格にこなすのが綺礼であり、生真面目な性格と聖職に就いている意識からだ。

『 時に綺礼、聞けば君は冬木教会の敷地を出て行動を起こしたそうだが？』

己の行動について問われるのは必須と解っていた綺礼はすぐに返答する。

「申し訳ありません。危険は承知の上でしたが、小うるさい間諜に目をつけられたため、処置するためにやむを得ず……」

『 間諜？教会にいる君に対してか？』

責める時臣の声音が厳しさを増す。当初の計画では、アサシンの1体を消費して敗退者と対外的になった綺礼は聖杯戦争が終わるまでは冬木教会から出ないはずだったのだ。しかし、綺礼が衛宮切嗣の存在を知ってからは、時臣の計画は二の次になっている事を綺礼以外は知りもしない。綺礼の最優先の目標は衛宮切嗣という人間を

識しることである。

「ご心配なく。曲者の口は封じました。抜かりはありません」

先の言葉はアサシンに任せられないから、「やむを得ず」は嘘ではなかったが、今度の言葉は完全な嘘が混じった。時臣が心配する必要は無いだろうが、曲者の口は封じれておらず、綺礼の目的としても襲撃は失敗に終わったのだ。

『なぜサーヴァントを使わなかった？』

「それには及ばない琐事と判断しまして」

『……たしかに君ほどの手練てだれの代行者ともなれば、己の手練を頼みとするのも解るがね。今のこの局面においては、いささか軽率すぎたのではないか？』

「はい。今後は慎みます」

今度は完全なる嘘。切嗣と巡り会ったためならば、綺礼は幾度となく戦場であろうとキャスターが設えた工房だろうと躊躇い無く出向く腹積もりであった。しかし、時臣はそのような事を綺礼がするなど疑わずに注意だけで済みます。

綺礼の内面を知る人間は近くにはいない。自分の内面を知れる人物は切嗣に他ならないと綺礼は確信していた。

英雄王と神父（前書き）

感想　ヴラドゥツェペシュ様、かにかま様、コクイ様
ありがとうございます！

今回はいつもよりちょっと短い

英雄王と神父

「アーチャー？」

冬木教会の1階に存在する綺礼の私室にはどうゆう経緯かアーチャーが居座っている。しかもキャビネットのワインを無断でグラスに注いで飲んでいる始末だ。

「数こそ少ないが、時臣の酒蔵よりも逸品が揃っている。けしからん弟子もいたものだ」

「……」

おそらく、世辞でもなんでもない本心からの感想だろう。感想を聞く限りでは、遠坂邸の酒蔵も同じ被害を被ったのだろうが、そんな事は綺礼からすればどうでもいい。気になるのは、なぜアーチャーが自分の部屋に居るかだ。単独行動のスキルによって好き勝手に出歩いているのは時臣から聞き及んでいたが、それが冬木教会に足を運ぶなど予想だにしなかった。

「一体、何の用だ？」

「退屈を持て余している者が、我の他にもいる様子だったのでな」

「退屈？」

ソレは、綺礼のこれまでで最も無縁な自身の状態であった。何時でも求道や任務などで自分を動かしかつ続けてきた綺礼は退屈とは何かをよく解っていないのだった。するべきことがない状態。それが綺

礼の思う退屈だ。それならアーチャーが言う退屈に半分は当て嵌まる。

「どうなのだ綺礼とやら？お前も、あの時臣めに奉仕するばかりで心満たされているわけではないのだろう？」

「……今さら契約が不服になったのか？ギルガメッシュ」

心満たされたことなど、綺礼には無かった。だが、そんな心の内を目の前のアーチャーの吐露するようなまねはせずに問いに問いで返す。

「我を招いたのは時臣だし、この身の現界を保っているのも時臣の供物によるものだ。そして何よりも奴は臣下の礼を取っている。まあ、応えてやらんわけにもいくまい」

唯我独尊を地でいくアーチャーといえど、恩には恩で報いる。ただ、あくまで王として臣下の頼みを聞いてやっているだけに近い。彼の中では招くのも供物も時臣だけが出来るわけではないので、時臣が臣下であるが割合が半分以上なのだが。

「だが正直、あそこまで退屈な男とは思わなんだ。まったくもって面白味の欠片もない」

「……とてもサーヴァントのものとは思えん言い種だな、まったく。そんなにも退屈か？時臣師の差配は」

「ああまったく退屈だ。万能の願望機を以てして『根源の渦』に至る、だと？つくづくつまらん企てがあったものだな」

他人の悲願だろうと、それがナニ力をもたらさなければ意味すら無い。そういう面で言えば、綺礼も理解はある。

「『根源』への渴望は魔術師だけの固有のものだ。あれは、部外者がとやかく言えるものではない」

「そういうお前も部外者だそうだな、綺礼。しかも聞くところによれば、本来は魔術師とも対立する立場にあるそうではないか」

本来なら、代行者として綺礼は聖杯戦争に参加していただろうが、綺礼の父である璃正が時臣と親交によって時臣に弟子入りして魔術師もどきのように参加しているが、彼が聖堂教会・第八秘蹟会の代行者であるのには変わらない。

「……『根源』へと至る道程とは、いわば世界の“外側”への逸脱だ。それによって“内側”であるこの世界に何がもたらされるわけでもない。だから、“内側”の視野しか持たない教会われわれにとって、魔術師たちの探究はまったく意味のない、つまらない企てとしか理解できない」

奇しくも、『根源』への探究については聖堂教会もアーチャーと同じ意見である。

「もし冬木の聖杯が『根源』を求めただけに特化した装置であったなら、いくら魔術師どもが血眼になろうとも聖堂教会は放任していただろう。ところが不幸にも聖杯は“万能”であった。世界の“内側”をも変革しうる可能性を無限に秘めている。まさに極めつけの異端であり、我らの信仰を脅かすものだ。

だからこそ聖堂教会は遠坂を選んだ。放置できないほど危険な異

端であればこそ、それを“無意味でつまらない”用途に使い潰してくれるなら、我々にとっては望ましい結末だからな。もつとも私の父には、それとは別な私情もある様子だが」

「では時臣以外のマスターどもは、時臣とはまた違った動機で聖杯を求めているわけか？」

「時臣師は魔術師の典型であると同時に最右翼だ。今日日、あれほど純粹に魔術師の本道を貫いている人間はそうはいない。他の連中が求めているのは総じて浮き世の名利であろうよ。威信、欲望、権力……すべて世界の“内側”だけに完結する願望だ」

「結構ではないか。どれも我が愛でるものばかりだぞ」

「おまえこそは俗物の頂点に君臨する王だな。ギルガメッシュ」

アーチャーはその評価に不敵に笑うだけであった。

「そういうお前はどんなのだ？綺礼、聖杯に何を望む？」

「私は　　私には……べつだん望むところなど、ない」

時臣は遠坂に2人分の令呪を与える為に聖杯が綺礼を選んだと言ったが、聖杯は望みを持つ者にしか令呪を授けてこなかった。しかし、どちらにしても綺礼は疑問に思っていた。聖杯が御三家の遠坂だけに肩入れするのであるのか？仮に肩入れしているとしても、自分以外の適任な者に授けられたではないのか？では、自分は望みを持っているのか？

「それはあるまい。聖杯は、それを手にするに足る者のみを招き寄

せるのではなかったか？」

「そのはずだ。が……私にも解らない。成就すべき理想も、遂げべき悲願もない私が、なぜこの戦いに選ばれたのか」

「それが迷うほどの難題か？理想もなく、悲願もない。ならば愉悦を望めばいいだけではないか」

なぜそれすらも解らん？そう失笑しながらアーチャーは言う。

「馬鹿な！」

だが、

「神に仕えるこの私に、よりもよって愉悦など　そんな罪深い墮落に手を染めるというのか？」

それが触れてはならない禁忌として否定する。

「罪深い？墮落だと？なぜ愉悦と罪とが結びつく？」

「それは……」

返答に困る綺礼をよそに、アーチャーは意地の悪そうな笑みを深めていた。

「……なるほど悪行で得た愉悦は罪かもしれん。綺礼、私の娯楽に付き合え」

「娯楽……だと……？」

綺礼はアーチャーを睨みつけたが、アーチャーはそれを受け流して続ける。

「ああ、そうだ。なに、片手間でできることだ。敵の調査がお前の役目であったであろう？その調査の内容に、聖杯戦争に参加した動機を加えるだけだ。そして我に語り聞かせる」

「なぜ私がそんなことを……」

アーチャーは突然指を綺礼に突き付け、綺礼の言葉を途切れさせてから言葉を続ける。

「これを機会に、自分の外側に目を向けるがいい。私の庭が、貴様一人を満足させられぬわけがないからな」

ハッキリと断言したアーチャーはグラスに残っていたワインを飲み干すと、悠然とドアの前に立ち。

「では、気長に待っているぞ」

最後にそう言って出て行った。

「自分の、外側………」

ただ、そう一言溢し、綺礼は飲み散らかされた酒瓶を心此处にあらずといった様子で片付け始めた。

仮面（前書き）

感想 にかさま様
ありがとうございます！

仮面

アインツベルンの拠点は、人里離れた山中を東西に縫う国道沿いにある鬱蒼と生い茂る森林地帯のど真ん中の城である。広大な原生林を丸ごと結界として外界から隔離されはその場所は、今回の戦争のアインツベルンの者たちに 攻め込まれない限りは 安心して寝食のできる場所を提供していた。例え攻め込まれようとも結界によって探知と魔術的攻撃は可能であるので、迎撃か逃走の準備を整えるくらいの余裕を作り出せるモノだ。

だが、安心、安全であろうとも、それで重苦しい空気ができない理由にはならない。重苦しい空気に慣れていないアイリスフィールにとっては、十分に気疲れする理由になった。

「 疲れてきたかい？アイリ」

「 いいの、何でもないわ。先を続けて」

あくまで疲れは精神的なモノだけであり、夫を心配させないために微笑を浮かべて先を促す。

「 地脈の中心となるのは2カ所。ひとつはセカンドマスターである遠坂の邸宅。もうひとつは言わずと知れた円蔵山だ。この辺り一体の霊脈はすべてこの山に集まることになる。詳細はアハト翁おうから聞いての通りなわけだが」

先に城に着いていて休んでいたアイリスフィールに合わせて、朝食後に行われている戦略を練るための会議であるが、非常に重い空気が場を支配している。アイリスフィール、セイバー、切嗣、舞弥の全員がは誰が原因でこうなっているのかは解っているが、誰もそ

の事には触れない。

別に切嗣がケイネスを仕留め損なったから、セイバーの左腕の傷が治らずに劣勢に立っているから場の空気が重いわけではない。切嗣によるケイネス襲撃が場の空気を重くしている要因の一つだが、もつと根本的な“相性”と“思想”によるモノだろう。

「円蔵山には頂上の柳洞寺を基点として強力な結界が張られている。そのせいでサーヴァントのような自然霊以外の存在は参道からしか進入できない。……ここが一番キャスターが拠点になっている可能性が非常に高い。セイバーを使う上では留意しておいてくれ」

セイバーは切嗣のサーヴァントなのにセイバーに注意するように言わず、代行マスターであるアイリスフィールに言う。切嗣は、セイバーに一瞥すらしないのだ。その行為事態はインツベルンの本拠地の城兆してもあったが、今は明確な悪意や敵意のようにハッキリとしたモノになっていた。

これも、場の空気を重くしている要因だ。

「さらに、この2カ所には劣るが、やはり地脈の集中する要地があると2つ新都にある。南の丘にある冬木教会と、都市区域の東にある新興住宅地がそれだ。よって、聖杯の降霊を行えるだけの霊格を備えたポイントは、冬木市内に都合4ヶ所あることになる」

「戦いの後半、サーヴァントの数が絞り込まれてきたら、このいずれかを拠点として制圧しておかなくてはいけないわけね？」

「そういうことだ。地勢についてはこんなところだが、何か質問は？」

「セイバー、何か不明な点はある？」

「これっていつて特には。十分な説明でした」

微笑みながらのその言葉には皮肉の意図は無かっただろうが、切嗣に態度を考えるとアイリスフィールには皮肉に思えてしかたがなかった。

「で、今後の方針だけど……切嗣、ランサー狙いで良いのよね？」

「ああ、それで構わない。だけど、今日は様子見に徹して城から出ないでくれ。アイリ、この森の結界の術式はもう把握できたかい？」

「ええ、大丈夫。結界の綻びも見当たらないし、警鐘も走査もちやんと機能するわ」

「それじゃあ解散としよう。舞弥は街に戻って情報収集に当たってくれ。異変があったら逐一報告を」

「わかりました」

会議はつつがなく終了し、舞弥はすぐに席を立って街に、切嗣は地理の説明に使った地図などを纏めてから会議の場として使っていたサロンから出ていく。

「はあ……」

切嗣が出ていって少ししてからアイリスフィールはため息をつく。誇り高き小さな騎士王と、手段を選ばぬ魔術師殺しの相性は最悪をも通り越して災厄に近かった。どちらにも一定の理解があるから板挟みになって心労を積み重なってしまう。

「アイリスフィール、私はそんなにも頼りないでしょうか？」

おそらく、セイバーは切嗣のやったビルごと敵マスターを葬るやり方に不満があったのであろう。戦いにおいては、騎士として相互に信頼してたランサーと横やりを入れられる形で付けられた決着に納得できないのであろう。

しかし、戦略上は早期にランサーを退場させる必要があったのもセイバーは解っている。それでも、セイバーは騎士として決着を付けたかったのだ。

「いいえ、私はあなたより頼りになる英霊はいないと思うわ」

「……マスターも、そう思っていたらいいのですが」

「セイバー、頼りにならないければ私をあなたに任せるなんてまねは切嗣はしないわ。切嗣はあなたを頼りにしているわよ」

ただし、囿として。その言葉は完全に飲み込まなければならなかった。

切嗣はセイバーによってサーヴァントを倒されるのをそこまで期待はしておらず、セイバーを獲物を惹き付ける餌としての役割さえしてくれば、マスターを自分もしくは舞弥の手で殺せれば良いのだ。まだ、犠牲になったマスターは1人だが、これから増えていくはずなのだ。

「ありがとうございます、アイリスフィール。貴方の御蔭で、私は剣を振るえる。私の剣の重さは誇りの重さですから」

何時か、裏切らなければならぬ自分に信を置いてくれるサーヴ

アントに微笑みを向けてから、アイリスフィールは席を立って夫の元に向かう。何処に居るかは判らないが、行く場所は限られているから見つけるのは容易だった。

声を掛けよとしたが、戸惑ってしまふ。会議で見せた「魔術師殺し」の冷たく仮面のように無表情で無慈悲な眼差しに相對してしまふことに。アイリスフィールが初めて切嗣とあつた時もそうであったが、一緒に過ごす9年の間に削げ落ちていた感情が嘘のように人間らしく、夫として接してくれた。だが、今はそれが嘘だったかのように9年前と同じになつて、いや、戻っている。それは聖杯の守り手としてのホームンクルスとして心強いとして喜ぶべきなのだろうが、アイリスフィール個人としては嫌だった。

「……切嗣」

意を決して呼び掛け、振り返つた切嗣を見てアイリスフィールは絶句した。

「魔術師殺し」であつた姿が仮面だとしたら、今の、泣きだしそうな程に怯えている顔が今の心境すがおなのだろう。そんな顔を見てしまひ、聞こうと思つていた事 予定では使わないはずだった城をなぜ使うのかなど を聞くに聞けなかった。

「もし僕が……もし僕が今ここで、なにもかもほうり投げて逃げ出すと決めたら アイリ、君は一緒にきてくれるかい？」

「イリヤは……城にいるあの子は、どうするの？」

「戻つて、連れ戻す。邪魔する奴は殺す」

弱々しく掠れた声であつたが、断固として言い放つ。だが、その言葉に自信など微塵も感じられなかった。それでも、本気であつた。

「それから先は　　僕は、僕の全てを僕らのためだけに費やす。君と、イリヤを護るためだけに、この命のすべてを」

「……」

アイリスフィールは、切嗣がそのような叶えられないような事をいう程に追い詰められているのを初めて知った。

9年前の衛宮切嗣、否、「魔術師殺し」は自分の命以外の全てを失っていたような存在だった。喪う恐怖が無く、痛みを感じる心も無いから冷徹な機械のように殺してこれた。だが、今はその強みが無くなり、ただ臆病な男にまでなってしまった。その原因は、妻であるアイリスフィールと、娘であるイリヤスフィールだ。元々、「魔術師殺し」は敵を葬る事に特化していた。護るべき存在がいなければ、それでも良かったであろうが、切嗣は得てしまった。護りたい存在を。

「怖いんだ……奴が　　言峰綺礼が、僕を狙っている。舞弥から聞いた。奴は僕を釣る餌としてケイネスを張っていた。行動を読まれていた……」

僕は、負けるかもしれない。君を犠牲にして戦うのに、イリヤを残したままなのに、僕は……いちばん危険な奴が、もう僕に狙いを定めている。決して遭いたくなかったアイツが！

……それに、昨夜僕は致命的なミスを犯した。使い魔でも使つてランサーとキャスターの戦いの決着が着くの見届けて、ランサーが勝ったら爆破すれば良かったのに、途中で爆破してしまった」

もしかしたら、サーヴァント2体を一夜の内に退場させられたかもしれないのに、無意識な焦りで切嗣はタイミングを間違えた。あの時は、完全な不意打ちにする為にと、もしかしたらキャスターの

マスターも居るかもしれないというゼロに近い可能性で爆破した。しかし、思い返せば、勝利した瞬間でも不意打ちとしても十分であり、例えばキャスターが勝ったとしてもケイネスを殺すのには勝敗が決した後でも効果はさして変わらないはずだった。

たった一回の失敗だが、それが切嗣に重く押し掛かっていた。キャスターが普通の魔術師ならある程度は行動を予測できるだろうから、そこまで重くはならなかったかもしれないが、キャスターは普通ではない。

動きの読めない相手に切嗣は弱い。罨を張り巡らせ、効果的に手を追い詰め、最後に必殺の一撃を叩き込む。狩りの大筋はこんなモノであり、暗殺者である切嗣は真正面からのぶつかり合いを避けて、一方的に狩れる状況を作り出していままでやってきた。

「切嗣、あなた1人を戦わせはしない。私が守る。セイバーが守る。それに……舞弥さんも、いる」

「魔術師殺し」に必要なのは自分では無い。そう解ったとしても、切嗣である今は彼を癒したい一心で、アイリスフィールは優しく切嗣を抱擁し続けた。

ズボン（前書き）

感想 キヨウ様、かにかさま様
ありがとうございます！

ズボン

「先に断つとくが、ボクはオマエのために街まで出向いて特大ズボンを買ってくるなんてことは絶対にしないからな！」

「なんだとう!？」

ウェイバーの言葉によつて、ライダーは実体化したまま街を歩くことが出来なくなり、悲痛な声をもらす。

セイバーが現代風の格好をして普通に街を歩いていたので、自分も街を歩くためにライダーが通販で勝手に半袖プリントシャツ

胸には世界地図をからめたタイトルロゴで『アドミラブル大戦略?』とすつてあるゲームの関連商品 を買ったのだが、ズボンも必要不可欠とウェイバーに指摘されたのでズボンの調達を頼もうとしたが、頼むより先にウェイバーに断られたのだ。

「坊主、きさま余の霸道に異を唱えると申すか？」

ズボン1つで何を言っているんだと思うが、ライダーはいたつて真面目である。今のままでは霸道どころか、普通の道すら大手を振つて歩けないのだから。

「霸道とオマエのズボンとは、一切合財!金輪際!まったくもつて関係ない!外を遊び歩く算段なんぞする前に、敵のサーヴァントの1人なりとも討ち取ってみろ!」

しかし、ウェイバーは声を荒げてズボンと霸道は関係ないと断言する。

「……成る程、あい判った。とりあえず敵の首級を挙げさえすれば、そのときは余にズボンを通かすと、そう誓うわけだな」

ウェイバーの言葉にライダーは「相違はないな？」としつかり確認する。

「……オマエ、そんなにもそのTシャツで外を歩きたいのか？」

「騎士王の奴めがやっておったのだ。余も王として遅れを取るわけにはいかん。 なにより、この服の柄は気に入った。覇者の装束に相応しい」

胸を張ってライダーはそう答えるが、ゲーム関連のTシャツだけに付けて仁王立ちの見た目オツサンは、ナニカのギャグもしくはドッキリのようにふざけているようにしか見えなかった。その光景を見る事を許された、ただ1人だけのウェイバーは「なんでこんなのが英雄なんだ……」と思っていた。

まったく関係のないことだが、ライダーは他の王2人より完全に遅れていた。

「ところで、もし敵のサーヴァントを朋友にできても討ち取ったと扱っていいか？」

「は………?」

ウェイバーはその言葉を理解するのに数秒要した。なにせ他のサーヴァントとは全員と巡り会ったが、総スカンだったのだ。それなのに、目の前のライダーは諦めていないのだ。

「ふむ、まずはキャスターが妥当か? あやつだけは脈ありだった

しの」

「……オマエ、キャスターが何処に拠点を構えているか判っているのか？」

理解して、とりあえず出てきたのがその言葉だった。

「なにを言っておる？あやつはサーヴァントと言えども、坊主と同じ魔術師なんだから魔術師が拠点として好む場所は判るであろう。そういう場所を虱潰しに捜してしていけば、その内出会えるであろう」

「成程。確かにキャスターなら、霊脈のある場所に拠点を構えようとするのが自然だから場所は限られ……って、オマエはよりにもよってキャスターの工房崩しをやりやがるつもりかあああ！」

納得、後にウェイバーは激昂した。魔術師の設える工房は入るのは容易なのだが、出るのは困難とされる。サーヴァントなら魔術師の仕掛けた罠などを突破するのは簡単だろう。だがしかし、相手が魔術師でも同じサーヴァントなら話は違ってくる。キャスターは英霊まで上り詰めた魔術師なのだから、現存する魔術師のトップクラスはあると考えた方が良く、敵を拠点に誘い込んで倒すのは魔術師の定石の1つである。それを狙って突撃をかまそうとするのは馬鹿だけである。悲しい事に、ウェイバーからすればライダーは馬鹿であった。

尤も、キャスターは拠点であることの隠蔽に力を注いでいるから、キャスターが居ない限りはそこを拠点と判断するのは難しく、特に恐ろしい仕掛けは無かったりする。

「なんでキャスターなんだよ！工房を襲うのに、なんで1番危険な

キャスターの拠点に狙いを定めるんだよお」

「あやつが脈ありという理由もあるが、セイバーとランサーは決着をつけるまで手を出さんと決めておる。アーチャーの奴は戦う気が無いようだから無駄。バーサーカーの奴は昨夜の戦闘で余が大打撃を与えたから、今日は休んでいて出てこないであろう。ほれ、キャスターしか残っておらんではないか」

ライダーの消去法では、キャスターしか残らなかったのだ。ちなみに、ウェイバーがどのような抗議を上げようとも、ライダーは今日はキャスター以外を狙う気はない。彼の中では、それ以外は都合がつかない。

「却下だ！却下！オマエの対魔力じゃキャスター相手じゃ無いも同然なんだぞ、判ってるのか！？」

「余の『神威の車輪』なら、問題無く駆け抜けてどの様な場所であろうと走破できる！その威力は昨夜坊主も見たであろう？まあ、それで駄目なら奥の手を使わざるおえんだらうがお」

自身の宝具への絶対の信頼を感じ取れた。その言葉を聞き、少しだけ考えを変えてやってみようかと思つた。そもそも、キャスターの常識に照らし合わせると、あのキャスターは普通とは違うというものもあるが。

「……昼間から仕掛けるなんてしないで。仕掛けるなら夜だからな」
ぶつきらぼつに言うてから、自分の荷物の中から冬木の地図と持ってきた霊脈に関する本を取り出す。

「何をするつもりだ？」

「何って、キャスターが拠点を選びそうな場所の選定だよ。ボクみたいな外来のマスターなら場所選びに制限がかかるし、家とかが無い場所は候補から外したりするから時間が掛かるから話し掛けるなよ」

そう釘をさしてから、ウェイバーは作業に取り掛かる。

「むう……」

開始数分でライダーは困ってしまった。やる事が無いのだ。まさか、ウェイバーが頑張っている横でせんべいをかじりながらDVDや雑誌を見るのは気が引けてできない。かと言って、なにもしないのはライダーの性に合わない。部屋から出ることはウェイバーに固く禁じられているから外に出れない。荷物（Tシャツ）の受け取りの為にそれを破ったのは特に気にしていないが……。そもそも、外を実体化して歩きたいからズボンが欲しいのだ。

「むむむむむ……」

ここはどうすべきか、「おい」マスターが頑張っている横で静かに雑誌を「…おい」読んだほうが有意義ではないか？「……おい」まだ途中のDVDがあるが、音が出るから邪魔になっってしまう。ライダーはそんな事を考えていた。

「聞！こ！え！な！い！の！か！、ライダー！」

「むおおうー！」

突然の耳に直接怒鳴られたライダーは跳び上がるように驚く。

「なんだ、突然……邪魔をするなど言っていたではないか」

「邪魔してる。オマエ思いつきり邪魔してるから。後ろからずっと「むむむむ」とか聞こえたら気が散る！今日はせんべいをかじらないで、雑誌でも読んで静かにしてろ！」

「むう……」

言いたい事を言ったウェイバーは自分の作業に戻る。もう少しで、令呪を使いそうになったのはウェイバーだけの秘密だ。

こうして、ライダーは1日の大半を静かに雑誌を読んで過ごすことになった。

夜になり、ウェイバーは無駄に長く感じる階段を登っていた。

「なんで、こんなに長いんだよ……」

柳桐寺に続く階段はウェイバーは辟易していた。頂上が見えない位に長く、しかもあまり変わり映えしない風景も相まって、嫌な気分させられている。山の中にある寺では、さして珍しくも無い事なのだが。

「坊主、聖杯に背を伸ばすついでに、体も丈夫にしてもらったらどうだ？そうすれば、余のマスターに相應しい相貌になれるかもしれない」

「……オマエ、マスターにナニを期待してるんだよ……」

いつもであれば、「その願いはオマエが勝手に決めた願いだろ！」とか言い返すのだが、今のウェイバーにはそこまで余力は無かったりする。身体強化の魔術で、やるうと思えば体力の消耗を抑えられたが、魔力をなるべくライダーに回す為に今は温存しているのだ。

「ふむ、着いたようだな」

「やっとか……」

皆が寝静まった建物とは、総じて不気味な雰囲気をかもし出す。柳桐寺も例に漏れずに不気味な雰囲気をかもし出していた。

「どうした？行かんのか？」

山門から平然と入ろうとしたライダーは掴まれて足を止める。

「まで、ここが1番可能性が高いんだ。サーヴァントみたいなのは山門以外から入れないように結界があるし、霊脈もある。不用意に入るなんてしない方が良い」

「と、言われてもなあ。『神威の車輪』を出すにはここではちと手狭だしなあ。『神威の車輪』に乗って入ろうとすると山門を傷付けてしまうかもしれんぞ？」

「オマエはサーヴァントの気配がないか探っていればいいよ。ボクはここから何か判らないか調べてみるから」

しかし、結果は芳しくなかった。ウェイバーは何も感知できず、

ライダーも山門付近からサーヴァントの気配を察知できなかった。意を決して、山門より内側に入ったが何も起きず、サーヴァントとマスターを思わせるような仕掛けは何もなかった。一応柳桐寺の周りをグルッと回ったが、結果は同じであった。

「ハズレ、か。ここが1番可能性が高かったんだけど……」

「そう上手く行くモンでは無いだろう。で、次はどこだ？」

ため息をつくとうエイバーは次の場所を示す。次からは『神威の車輪』での移動になったのでうエイバーは楽ができたが、1つだけ朝方から気になっていた。ライダーの言っていた奥の手がなんのかを……

ズボン（後書き）

ライダー陣営以外さ、ギャグを挟み込めないよね。

原作様でもギャグシーン＝ライダー陣営が関わるみたいな感じだったし。

次はキャスター陣営の話。

行方不明(前書き)

感想 麻布十番様、EVILMIST様
ありがとうございます！

行方不明

龍之介が起きて、食事など済ましてやりたい事があると言った。

望みを叶えてやるのは簡単なものなら別に手間も問題もない。ただ、龍之介のやりたい事は自身の快樂を満たすだけの殺人であつた。快樂殺人者であるならなら不思議でない嫌悪する思考だが、キャスターの利になることでもある。魂を喰らわせてサーヴァントの魔力を補充する手段は褒められた手段ではないが、効果的ではあつた。

神秘の秘匿さえしていれば、監督役はそこまで厳しくは言わない。しかし、冬木の地を預かるセカンドオーダーであり、聖杯戦争の参加者である遠坂時臣はあまり良い顔をしない。人が犠牲になるのもそうだが、例え確実に人を消しても、行方不明として騒がれて世間の目が注目してしまつて聖杯戦争がやりにくくなつてしまう。そんなことは龍之介の知つた事ではないのだが。

路地裏、そこで龍之介は殺人を行つていた。不良などが好んで溜まり場や、誰かを痛めつけるのに使われるその場所で、1人の女性が男によつて首を絞められて呼吸困難にされている。キャスターを召喚する前なら、発見される危険を考えてまずやらなかつた方法だが、今はキャスターが居るので例え見つかるうと逃げ切れたりするので躊躇無く犯行に及んでいる。

女の顔は苦悶で醜く歪んでいるのに対し、龍之介はうつとりとその表情を眺めている。時折、きまぐれに手に込める力を緩める。その瞬間は女の表情は緩むが、恐怖に引き攣つている。繰り返して行われているので、恐怖はもう染みついていようである。最後は、動かなくなるまで首絞めて終わらせる。普通であれば、力を緩めた時に叫び声を上げる。しかし、それはキャスターによつて裏路地に連れ込まれたらすぐに喉を潰されて声を出せ無くされている。獲物の確保及びに連れ込むのはキャスターがしており、少しでも魔力の多いのを標的にしていた。

「たまんねえ。旦那見たか？こいつ死ぬ瞬間に最高の逝き顔になったのを」

興奮した面持ちですぐ傍に待機しているキャスターに聞くが、その姿いつもの姿とは違う。仮面を付けておらず、服は白いがフリフリの付いた変わった格好ではない。金髪を短めに切り揃えて優しい感じのする顔つきの30代位の姿である。しかし、顔に関して素顔ではなく幻影魔法で変えている。

「苦しみから解放された瞬間だ。楽になれたからそう見えたのだらう」

気の無い返事である。敵でもないのを殺すのはあまり好かないというのもあるが、見えない敵であるアサシン相手に常に気を張っているから龍之介への対応がずさんになっている。そんな事は全然気にせず、龍之介は死体となったそれを傷を付けないように地面に横たえる。

「旦那、よろしく頼むぜ」

「……」

無言でキャスターは左手の手袋を取る。手袋の下にあったのは手ではなく、10本の触手と口のような器官であった。横たえられた死体に近付き、左手の口のような器官で頭から蛇が獲物を食べるように丸飲みしてして、全てを飲み込む。それだけで、最早犠牲になった女性が死んだとする証拠は消えた。血の流れない殺しであれば、同じ方法で簡単に処分できる。

「旦那、次は俺が選んでいいか？」

「好きにしる。もう遅いからそいつで最後だからな」

昼間ごろから始めた龍之介の娯楽であったが、既に日は落ちていたので何時戦いが始まったもおかしくは無い状況である。本当なら夕方には安全なはずの拠点に押し込めたかったが、そんなことをすれば下手すれば戦場に出てきて殺されかねないので、我慢だけをさせるわけにもいかずに好きにさせていたのだ。

その言葉に気を良くした龍之介は、鼻歌交じりで獲物を捜し始めるのだった。

遠坂凜は遠坂時臣の娘であり、魔術師である。聖杯戦争という単語は知らなくとも、夜の冬木が今は危険地帯となっているのは知っていた。同時に、学校の友達がソレ関係で怪異に巻き込まれたとも確信してみたモノを感じた。学校で友達が休むのは日常でもある普通の事だ。しかし、心配してお見舞いの電話を掛けても、一切相手にされないのは異常であった。風邪なら寝込んでいる、くらいの返答はあつてしかるべきだが、その友達に関してまったく話をしてもらえないのだ。

故に、凜は責任感に苛まれた。警察などでは、今冬木市を騒がせている連続行方不明事件は解決できるモノではないと凜は解っていた。そして、見習いであるが魔術師である自分なら友達を助け出せるかもしれない。可能性だけなら、普通はあつてしかるべきだが現実それは有り得ない事であった。彼女の友達は既に餌食となっているからだ。それを知るよしの無い彼女は、あまりにも貧弱な装備で聖杯戦争中の仮宿から飛び出し、夜の冬木に出てきてしまった。その行為は、彼女からすれば勇気のある選択だったが、聖杯戦争を

しつかりと知っている者からすれば自殺行為以外のなにものでもなかった。

「……なにこれ？」

凜が頼りしていた装備の1つの魔力針　常により強い魔力を発している方向を示す物　が壊れてしまったかのようにグルグルと回転している。今迄その様な反応を見たのは初めてであり、それが何を示しているのかは凜にはハッキリとは判らなかった。不意に、魔力針が特定の方向を指したの凜はその方向を見てみるが、特に変わった物はなく、その方向には凜が知っている限りでは特に何も無いはずである。一瞬空で何かが光ったような気がしなくもないが、凜はそれを勘違いと決定付けて歩き始めた。

冬木市の人通りは極端に少なくなっている。理由として上げられるのは「冬木の悪魔」と週刊誌などで言われている猟奇的殺人事件に、それに続く連続行方不明事件、倉庫街と冬木ハイアットホテルのテロ事件。そんな物騒な事件が立て続けに起こったのだから住民の不安は非常に高いモノとなっており、全ての事件に警察は特別対策室を作っていた。当然夜間の外出の自粛の呼び掛けなども行われ、厳戒態勢でパトカーが見回りなどもしているが、余程の命知らずでなければ不穏な空気の流れる夜の冬木を歩く一般人はいなかった。そんな理由もあって、凜はあまり人に見られずに夜の冬木を歩けるのだが、それは彼女にとっては良くなかった。パトカーを避けるように移動するとどうしても暗い場所を通る必要があり、路地裏は通らないがパトカーから隠れる為に仕方なく入り込んだ時だった。

「おじよ〜ちゃん。こんな夜に1人でどうしたんだい？」

2人組の男に話掛けられたのは。片方は笑っており、もう片方は可哀想なモノを見るような目つきで凜を見据えていた。

「ヒッ！！」

よく解らないが、凜は思わず後ずさってしまった。状況を考えれば、子供が1人で歩いているのを見咎めて注意でもしにきたように思えるが、2人は凜が避けていた闇が特に濃い路地裏から出てきたので後ずさったのだ。その拍子に、魔力針を落としてしまい、その反応を見てしまった。さっきまでグルグルと回るばかりだった先端が可哀想なモノを見る目で見ている白い服の男をしっかりと指しているのに……

「その子に！手を出すなあああ！！！」

突然の怒声、それに続くかのように黒いナニカが凜を飛び越えて笑っている男に向かって飛び掛かるが、白い服の男が一瞬で服装を変えてそれを横から殴り付けて逸らさせ、手をこちらに向けた。凜が憶えているのそのままであった。

雁夜とキャスター（前書き）

感想 教授様、かにかま様
ありがとうございます！

雁夜とキャスター

バーサーカーのマスターである間桐雁夜が居合わせたのは、偶然と想いによるモノだった。自分のサーヴァントのバーサーカーは昨夜のライダーの攻撃でひどい状態であったが、もう戦闘ができるまでは回復しており、たとえ戦わなくても敵の情報を得る為に夜の冬木を徘徊していたのだ。使い魔である視蟲をも動員してコソコソと戦いを盗み見るつもりであった。そうしていた時であった。遠坂凜を見つけたのは。

はじめは疑問が絶えなかったが、愛する人の娘を危険な夜の冬木で放置できるわけもなく、雁夜は見つけた視蟲に後を追いつけさせつつ、凜を保護する為に現場に向かったのだ。

そこで、凜は襲われていた。初めは子供が夜出歩いているのを見咎めた大人だと思っただが、凜の怯えが声を掛けたのに向けられていたのと、バーサーカーの反応でどちらかがサーヴァントだと解ったから、迷わず雁夜はバーサーカーに笑っている男を襲わせたのだ。

「キャスター？そっちはマスターか？」

いきなり意識を失った凜を抱き止め、雁夜は2人を睨みつける。バーサーカーは対魔力を持っているが、それは気休め程度でほぼ全ての魔術を受けてしまうので、最弱のキャスターと言えども脅威になり得る。

「バーサーカー！キャスターを殺せ！」

自身の脆さと、凜をこのまま放置できないのと合わせて考えれば選択肢は初めからない。バーサーカーに殺すように命じてから虫の内側から喰われる痛みで覚束ない足取りで凜を抱えて逃げようとし

だが、その足に喰われるのと違う痛みが奔る。

「があっ!?!」

バランスを崩して雁夜は転ぶが、凜と体の位置を入れ替えて凜は怪我をしなように自分をクッション代わりにする。

「案外、中るもんなんだな」

ヘラヘラと笑いながら龍之介は呟く。痛みのは正体は龍之介の投げた折り畳み式のナイフであった。およそ素人が投げて中るような物ではないが、運悪く雁夜は足に中ってしまった。

まともに動けないと龍之介は解ると、ゆっくりと近付く。

「どちらも殺すなよ」

「え、どうしてだよ旦那。いいじゃんか……よ」

雁夜にも判った、マスターがサーヴァントに威圧されているのが威圧された龍之介は顔を青くして黙って頷いた。だが、雁夜にはそれを見続ける余裕は次第に無くなっていった。バーサーカーが要求する魔力量を供給する為に、刻印虫どもが活動を活発化させて全身に生きたまま喰われる痛みが酷くなったからだ。

「さてはて、バーサーカーと当たるのは運が良いんだか、悪いんだか……」

キャスターのサーヴァントとしての本分を發揮できる相手だが、

自分の陣地でなければキャストは全力を出せない。特別な攻撃用の魔法を仕掛けてあるわけではないが、いざとなれば魔力を霊脈から無理矢理吸い上げて自分を強化できるぐらいである。

「！！！」

バーサーカーは排水用のホースを引き抜いて宝具化し、さながら鞭のように使っている。鞭であれば相手に致命傷を与えにくいのが普通だが、バーサーカーの手に掛ければサーヴァントすら叩き殺すような凶器と化す。振るえば周りの建物や地面に無数の傷跡を深く深く刻みつけている。いくらランサーとでも一時的に拮抗できるキャストでも、宝具の鞭による台風さながらの暴風に突っ込んでは無事では済まない。かと言って、マスターから離れ過ぎると第三者によって殺されかねない為に下手に距離は取れない。

「ケントウ、カマエ、ヒト
百の影槍」

キャストの影が槍のように突き出てバーサーカーへと襲い掛かる。狭い路地裏では避けるのは不可能な密度で放たれたソレに対してバーサーカーは鞭を振るって迎撃する。余程高位のモノでなければ宝具化している物とバーサーカーの膂力を持ってすれば打ち払うのは簡単な事である。だが、キャストが同時に放った全てを打ち払うには至らなかった。

始めから打ち漏らし狙いで影槍をキャストは放ったのだ。それでも、実際に届いたのがたった5本だけなのには内心では肝を冷やしていたが。両足に1本ずつ、腹に2本、胸に1本突き刺さったが、バーサーカーはそれを刺さっている部分以外を空いている左手で碎いて猛然とキャストに跳びかかる。

だが、完全に空を切った。

「今の俺では真っ向勝負では勝てん。だから、動きを封じさせてもらう。縛道の六十一 六杖光牢。まだ必要か…縛道の六十三 鎖条鎖縛」

影と影を繋ぐ影のゲートを使ってバーサーカーの後ろに回り込んだキヤスターはバーサーカーの動きを六つの帯と鎖で封じる。

「効果は上々か……ん？」

六杖光牢に罅が入り始め、鎖条鎖縛も徐々にあるが綻び始めている。バーサーカーは臂力だけでキヤスターの放った縛道を破りつつあった。

「まったくもって恐ろしいな……」

もう少しすれば力づくでバーサーカーは縛道を破れたであろう。しかし、敵が自分の掛けた縛道を破りかけているのを黙って見ているようは間抜けな真似はキヤスターせず、惜しみなく宝具を解放する。

「『虚閃』」

至近距離から撃たれた魔力の激流とも言える虚閃はすべてバーサーカーに中るように注意して撃たれた。自分の縛道諸共撃つたので若干威力が落ち、縛道を吹き飛ばしてしまったが大した問題では無い。虚閃を受けたバーサーカーは倒れ、数回痙攣したかと思えば傷を癒す為に霊体化してしまふ。

「つまらんな。まあ、真っ向から挑んでいれば負けは確実だったがな」

わざわざサーヴァントを殺しも喰いもしなかったのには理由がある。喰うよりも使った方が良いからだ。バーサーカーは理性が無いから魔力供給してくれるマスターが消えさすれば、自然と契約してくれる可能性が非常に高い。令呪が必要ならマスターから全てを奪えばそれで済む話であり、倒れているバーサーカーのマスターに近づく。

「旦那。こいつ、死にかけているぜ」

「なに？」

観察してた龍之介は可笑しそうケラケラと笑っているが、キャスターは慌てて雁夜を守るように抱えていた凜を放させて、服の下を見て絶句した。目に見えるのは真新しい傷が体の到る所にあるだけだったが、キャスターは皮膚の下にナニカが巣食っているのを感じ取った。

「こいつ……何を飼って……いや、何に喰われている？調べるのにしても此処では危険だな……。急いで帰るぞ」

「この子供はどうするんだ？殺してもいい？」

「殺すな。そいつも連れて行く」

キャスターは雁夜を担ぎ、龍之介が凜を抱えて影の中に沈んで消えていった。

一部始終を見ていた者達が消えた場所に集まる。

「どっ、思っ？」

「消えた、それだけだ」

「綺礼様にはもう伝えたか？」

「伝えた。キャスターの拠点を探りつつ、遠坂時臣氏のご息女を捜せと……」

「ああも移動されては追い掛けて見つけるは不可能……地道に捜すしかないな……」

複数のアサシンの一時的な集会は必要な会話だけをして終了した。

雁夜とキャスター（後書き）

宝具説明

『虚閃』 ランク：A - 対軍宝具 レンジ2〜50
宝具と分別されているが、正確には宝具クラスの攻撃。威力、範囲共にある程度は使用者の融通が効く。魔力の塊のようなモノなので、対魔力によって軽減されてしまう。

雁夜とキャスター2 (前書き)

感想 コクイ様、ニコラス様
ありがとうございます！

雁夜とキャスター2

女性が笑っている。完璧な夫と、2人の子供に恵まれて幸せな家庭を持つていた。自分にとってはその女性の笑顔はどんなものより輝いており、自分で守りたい程だ。だけど、自分には笑顔にできないと諦めて、完璧な男に勝負すらずに負けた。それでいいと思えた。自分にできないと解っていたから選択で、自分は遠くからその女性の笑顔を見れるだけでも幸せだった。

しかし、その女性の幸せは長くは続かなかった。笑顔にすべき夫と、自分が嫌う妖怪の所為で子供の片方を取り上げられた。原因の一端は自分にもあった。もしも、自分が心底嫌う魔術の道を歩んでいたのなら、起きなかつた悲劇だった。

この戦いは贖罪の為の戦いだ。負けは赦されず、自分が取るべきなのは勝利と聖杯。憎悪と憤怒を胸に懐き、体には蟲を巢食わせ、戦う度に血で彩られてボロボロになろうとも勝利以外には価値は無し。ただ1人の女性のために1つしかないこの命すらも差し出したのだ。

「ハッ!!!」

雁夜はそこで夢から意識を引き上げて現実へと戻ってきた。

(たしか、俺は路地裏でキャスターと戦って……)

そこまで思い出し、体が正常なのに気付き、酷く狼狽した。

「な………なんで………?」

1年前に入れた異物である刻印虫が綺麗サツパリと体の中から消

え去り、体が意識を失う前よりは動かしやすくなっていた。それと
なぜか、バーサーカーとのパスは繋がったままなのに吸い上げられ
る魔力が極端に少なくなっている。慌てて令呪を確認するが、しっ
かりと1画も欠ける事無く残っている。

(刻印虫が居ないのは不味い！アレが居なければ魔力が足りなくて
バーサーカーを現界させる魔力量を生成できないのに！)

この状況の手掛かりは無いかと辺りを見渡せば、部屋の隅に人影
を確認した。

「バーサーカー？」

這い蹲る様に畳の床に縛り付けられていた。しかも、今は普段纏
っている黒い霧を纏っておらず、鎧は大きな穴が開いている。その
這い蹲っている場所には何やら記号などが書き込まれているが、雁
夜にはそれがどの様な効果をしているのかは解らなかった。ただ、
自分のサーヴァントが何者かによってそうなっているとだけは解っ
た。

他に何かないかと思えば、隣の布団に彼が守ろうとした凜が静
かに寝息を立てて眠っていた。

「凜ちゃん……良かった……」

安堵の息を漏らしたが、事態は一向に好転していない。

「目が覚めたようだな、間桐雁夜。それとも、バーサーカーのマス
ターと呼んだ方がいいか？」

「！」

フリフリの付いた白い服に仮面を付けているキャスターが雁夜の背後に立っていた。白い布で包まれたモノを担いでいたが、それはすぐに降ろした。

「お前が、原因か？」

「概ねそうだな。そっちの子供を殺しかけたは今の俺のマスターの意思だ。俺自体は殺そうとは今は思っていない。さて、とりあえずお前の記憶は見させてもらった。取引をしないか？」

「断れば殺すんだろ。何が欲しい」

キャスターは取引と言ったが、雁夜にとってはただの脅しだ。刻印虫をなくせば間桐雁夜は魔術師やマスター足りえず、例えバーサーカーをほんの数秒使役しただけで魔力の枯渇で死ぬ。隣で眠っている凜すら守れずに無意味に死ぬだけだ。それだけは絶対にできない。最終目標は今の間桐桜を救う事なのだからここで死ぬるわけは無いのだ。

「解っているようで嬉しいな。簡単な事だ。お前は引き続きバーサーカーを使役して俺を掩護しろ。バーサーカーが脱落したら俺のマスターになれ。その時には、令呪は奪わせてもらうがな」

「無理だ。刻印虫が居ない俺ではサーヴァントを現界させられない」

キャスターの自分のマスターになれと言つものには驚いたが、雁夜は冷静に不可能と言つ。

「刻印虫？ああ、あの出来損ないの虫か。あれよりもっと良いモノ

がある」

キャスターは自分のすぐ傍に置かれた物の白い布を取り払う。布の下にあったモノは人であった。そしてそれは、雁夜そのものであった。左半身が元の健康体であった時と一緒であったが、自分とまったく同じそれに雁夜は背筋が寒くなった。ホムンクルスは錬金術の範疇であり、始まりの御三家の一角のアインツベルンのお家芸と知っているが、目の前のモノはきつとその範疇と当たりを付けたが、自分がそこで眠っているのを見るのは気味が悪かった。

（なんだコレは……俺？だとしても、なんでこんなモノを用意できた？）

「詳しい説明は省くが、コレにお前の魂を移してお前の新しい体にする。疑似魔術回路をできるだけ組み込んだから、生成できる魔力量は今と比べモノにならほどに増える。バーサーカーに十分な魔力を供給でき、これはお前に馴染みやすいように出来ているはずだ。もしかしたら、拒絶反応がでるかもしれないが……」

それは現時点でのキャスターの魔術師として体の最高傑作であった。急造での一品ではあるものの、龍之介、雁夜、凜の魔術回路を解析し、刻印虫の疑似魔術回路を参考として作り上げたモノだ。身体能力も設計上は高めに作られており、頑丈である。ただ、キャスターの懸念は雁夜の魂がこの体に馴染むかであった。似た様な事は生前にもやったが、その時は時間をかけて適合させられたが今回はそうもいかないのだ。一応は作った体の一部に雁夜の元の体も使ったりして馴染みやすくしたが、それでも万全ではない。最悪の場合には拒絶反応で雁夜は死ぬ可能性もある。

「そんな事ができるのか？」

「できるから言っている」

「……さつき、取引と言ったな。俺がなにかを要求してもいいだな」

「勿論構わん。取引に応じるだけで、お前と子供は解放する」

「だったら、桜ちゃんを救うのに協力しろ。それと、時臣と戦える舞台を用意しろ」

「まあ、構わんだろ。それより、こいつはどうしたらいい？」

キャストが指差したのは凜。雁夜が協力するなら既に用済みであり、置いておく必要性はないのでどうするかが問題なのだ。

「遠坂邸は解るか？そこまで送ってやってくれ」

「わかった。マスター」

「……」

一礼するとキャストは凜を抱えて影の中へと消えていき、雁夜はそれを目を丸くしてそれを見送った。

「マスター、か……。あのマスターが相当気に入らないようだな。もしくは、願いが相反するものなのかもな」

雁夜はそう呟いてからキャストが何処まで信用できるかを考え始めた。少なくとも、今すぐには殺されるような事は無い。キャストはバーサーカーの力を欲しているから、わざわざ俺と取引をし

てまで獲得したのだらう。バーサーカーでないと倒せない相手として真つ先に上がるのはアーチャーだ。アーチャーを倒した後は、自分にバーサーカーと言う強力な力を持たせるのを嫌って令呪でバーサーカーを自害させる腹なのだらう。それに、キャスターの用意した体を使うのだから、キャスターの傀儡になるのだらう。既に間桐臓硯の傀儡同然になっていたのだからそれ自体はどうでも良い。問題は、キャスターが取引を守るかだ。真つ当な魔術師なら、契約を尊守させるべく制約ギアスでも掛けるのだらうが、自分にはそんな芸当は出来ない。キャスターならできるだらうが、体を変えた時点で手の平の上だ。守る気が無い、もしくはそんな事はするまでも無いと考えていればわざわざしないであらう。

(それでも、あの妖怪よりは信用できる。コレと同じようなのを用意させて、魂を移させれば桜ちゃんは綺麗な体に戻る。……心の方はどうしようもないけど)

雁夜とキャスター2（後書き）

おまけ

キャスターは困っていた。雁夜の記憶を覗いて遠坂邸の場所はなんとなく把握したのですぐに着いた。しかし、ここで問題が発生した。凜をどうやって渡すかである。まさか普通に入る訳にも、門前に子供をこんな11月の夜空に放置などできるはずもない。

「ダンボールに入れるか……？」

思い付いた瞬間は妙案に思えたが、すぐに却下した。可哀想である。それに、もしも自分の娘がそんな事をされたら怒り狂う。やった奴には苦しみながら死んでもらおうとするであろう。

「仕方が無い……」

キャスターはありつたけの毛布で凜を包み、門前に置いた。そして呼び鈴を鳴らし、遠坂邸に虚弾を放つてから逃げた。ピンポンダッシュ+攻撃。すぐに気付いてもらえ、なお且つすぐに保護されるようにしてもらうのにはこれしかない、その時は思っていた。

後日、警察に届ければ良かったとキャスターは思った。

困惑する魔術師（前書き）

感想 コージー様、かにかさま様
ありがとうございます！

困惑する魔術師

キャスターによる遠坂凜の誘拐。それはすぐに時臣の耳に入る事になった。しかし、時臣に出来たのは綺礼に指示を出すのと、複数の使い魔を飛ばして捜す事しか出来なかった。

『導師、目下キャスターを拠点共々捜索中ではありますが、どういたしましょうか？』

「綺礼、そのまま続けてくれ。私の方でも使い魔を使って捜査の足しにしている」

時臣の声はひどく焦っているように感じられる。魔術は基本は一子相伝の秘術であり、遠坂家の秘術そのものである遠坂の魔術刻印は凜に受け継がせる予定なのだ。次代の当主になるべき凜がよりもよって、快樂殺人者と死体を喰らうキャスターの手中にあるのだ。焦るなど言う方がおかしいであろう。

「綺礼、その、キャスターとそのマスターは間違いないのかね？死体を喰らう英霊と快樂殺人者と言うのは……」

『はい、間違いありません。街を探索していたアサシンがサーヴァントを発見し、それと一緒に行動している男がマスターで間違いありません。アサシン達はその男の右手の甲に令呪を確認しています。キャスターが獲物を選別し、マスターが快樂の為に殺し、その後の遺体と魂はキャスターが喰らう。それがキャスターとそのマスターが街でしていた事です。このところの連続行方不明事件の犯人はこの2人によるものでしょう。魔術は一切使っていませんので、神秘の秘匿に関しては問題はありません』

「……綺礼、君は今現在での凜が生きている可能性はどのくらいだと判断する……」

『…限りなくゼロに近いかと………』

綺礼と時臣の見解は同じだ。魔術師としての冷徹な思考もそう判断して、最悪死んでいるものとして遺体も手に入らないから諦めるべきと訴えるが、人として、父親としてはそう簡単には諦められない。妻である葵も、娘である凜も、娘であった桜も時臣は愛していた。桜を間桐に養子に出したのは古き盟約と、魔術師としての道を歩けるようにする為であった。自分より魔術の才能のある桜はその才能で同類を引き寄せてしまう。一般人と育てたとしても、それによって命を落としかねない程に危険であり、桜が必要としているのは魔術による加護。自分に授けられなければ他人に授けて貰うしかなく、間桐臓硯の申し出は時臣にとって天啓にも等しかった。桜がどのような扱いをされるかをまったく知らずに……

「ハア……」

漏らしたため息と共に思い出すのは妻の声であった。魔術師でなくとも、今の冬木の夜がどれ程危険かは知っていた。だから、30分捜して見つからなかった凜を捜すべく夫に助けを求めたのだ。電話口でも判る程に嗚咽を我慢しながら、状況を仔細に伝えたのだ。その時には既にキャスターに誘拐されたと知っていたが、なぜ凜が危険に跳び込んだか知った時には誇らしくさえ思った。同時に、もっと危険である事を徹底して教えておくべきであったと後悔した。

「綺礼、アーチャーが何処に居るかは判っているな」

『はい、問題ありません。アサシンを1体憑けてあります』

最悪の場合だったら、キャスターをアーチャーで潰すべきであろう。転移が出来るなら工房の防衛能力も大して役には立たない。それに、キャスターを断じて赦すわけにはいかない。冬木の地を預かるセカンドオーナーとしても父親としても。

アサシンと使い魔の捜査も虚しく時間だけが過ぎていった。途中でライダーとマスターが霊脈巡りなどしていたりする情報しか得られなかった。アサシン達の目とサーヴァントの感知能力を潜り抜けてキャスターの尻尾を掴むどころか、尻尾の先すら見つけられない始末であった。

もしかやキャスターは工房を冬木の外に置いているのでは？そんな突拍子もない考えが浮かんだ時であった。遠坂邸付近を巡回させていた使い魔が門前に人影を発見した。金髪を短めに切り揃えて、優しそうな感じのする顔つきのおよそ30代の男が毛布に包まった何かを抱えて立ち尽くしている。時間からして一般人ではない。

「キャスターか!？」

使い魔越しに見た男は綺礼からの報告にあったキャスターの街に居た時の格好と一致するものである。しかし、なぜそれが門前に居るかが解らなかった。攻めに来た？だったら発見される前に突入してくるであろう。下見に来た？その場合でもこつも堂々と門前に立つだろうか疑問だ。キャスターの行動は疑問しか出てこないもだった。

そんな疑問などお構い無しに、キャスターは毛布を影から取り出してさらに抱えているのを包んでから呼び鈴を鳴らし、時臣にはガントの様に思えるモノを一発撃ってから走って闇の中に消えていった。

「……なんだっただ……?」

凜を誘拐したのや、バーサーカーのマスターも誘拐した行動は不可解でしかかった。それに続く門前での行動。とりあえず使い魔を使って毛布の中を見た。

「凜!!」

中に居たのは娘であった。今すぐにも家の中に抱えて入れたいが、キャスターがわざわざ届けに来た意味を考えると迂闊に近寄れない。暗示をかけられていて、下手に近付けば殺されるかもしれない。また、凜自体にはなにもされていなくても、毛布になにかしら仕掛けがあるかもしれないのだ。謀殺はいかにもキャスターのクラスがやりそうな事だ。娘が手の届く場所に居るのに、下手な手出しが出来ないは親として辛いモノがあった。

「くっ……!!」

せめて家の中に入れられれば良いのだが、自分が近付かずに入れる方法はサーヴァントを使うしかないが、アーチャーは今居らず、アサシン2体なら居るが、アサシンがまだ存命だと遠坂邸を監視している全マスターに教えてしまう。アサシンは戦略を組み立てる為の情報収集をさせている為に、まだ露呈させる訳にもいかない。朝方になれば人が通るかもしれないが、それに頼るのには非常によりしくない。

「アサシン」

「何用で?」

「門の付近に何も居ないか調べて来てくれ。調べ終わったら玄関に来てくれ」

「はっ」

護衛として侍らしているアサシンの片方に何も居ないかを調べに行かせ、地下室を出て玄関へと歩く。時臣は見え透いた罠があると解っているのに、敢えてその罠に入り込むような真似をするつもりなのだ。

「何も居ませんでした」

「護衛を引き続き頼む」

「はっ」

どんな時でも余裕を持って優雅たれ。余裕などないこの行動はその家訓に反する行動であったが、家訓を守って後継者を危険に晒し続けるなど時臣は出来なかった。もしもキャスターがまともな魔術師なら、自分を殺すだけで終わらせるだろう。最悪の場合は親子揃って死ぬかもしれないが、その時はその時だ。むしろ、その時の為の桜である。例えば2人が死のうが間桐に桜が居るのなら、遠坂の血が流れる者が次の聖杯戦争で聖杯を勝ち取るであろう。

門を開き、毛布に包まれて愛娘を抱き上げて片手で門を閉じる。その後はゆっくりと歩いて家に入る。

「……………」

何も、起きなかった……。時臣は凜を調べたが、何もされた形跡は発見できなかった。間違いではないかと何度も調べたが、結果は

最初と変わらなかった。喜ぶべき事なのだろうが、時臣は納得できなかった。いくらなんでも、キャスターの行動は時臣には不可解すぎた。まさか一緒に誘拐された雁夜がキャスターと取引したなどとは夢にも思わなかっただろう。

「綺礼、凜の搜索はもういい。キャスターが送ってくれた」

とりあえず、時臣は弟子に凜の搜索の終了を教えた。ただ、やはりどこか声音は困惑したモノだったのは仕方が無いだろう。

困惑する魔術師（後書き）

衛宮切嗣 妻子持ち

言峰綺礼 子持ち。妻は他界している。

遠坂時臣 妻子持ち

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト 許嫁持ち。ただし恋仲ではない

雨生龍之介 女性を惹き付ける魅力がある

ウェイバー・ベルベット 19歳。成長の余地あり

間桐雁夜 独身。気になる相手は既に人妻……

なんかマスター達を思い返したら、3人は子持ちだと思いだした……
どうでも良いか

幸運値（前書き）

感想 コージー様、ミナライ様

ありがとうございます！

サブタイ、あまり気にしないでください

幸運値

(なぜこうなった……)

キャスターはそう思わざるを得なかった。

雁夜と新しい体は良く馴染んでおり、バーサーカーは無理矢理現界状態で魔力を霊脈から流し込まれるようした御蔭で傷はほとんど治っていて、鎧は先に完全な状態に戻った。しかし、雁夜の方は日常的な行動は問題無いが、急に高くなった身体能力に感覚が追いついていないので荒事に付いて行かせられないから計画は前に進められない。しかも、キャスターは雁夜に使える魔術を聞いたが、虫を使役する魔術しか使えないと聞いて頭を抱えた。今や魔力量の凄い人間だが、宝の持ち腐れに近い。サーヴァントを使役している間は魔力はそっちに使われるからまだ良いのかもしれないが。それでも、キャスターはアーチャーへの切り札を手にしたから経過は順調だ。だが、上手くいくことばかりでない。龍之介のご機嫌取りとしてまた昼間から街に出掛ける事になったからだ。

それ自体はまだよかった。そう、街中でアーチャーと鉢合わせになるまでは……

「なんだ、雑種？」

「いや……なんでもない」

「Good!! またスリーセブンだ！」

キャスターの疑問はなぜ3人でパチンコをやっているかだ。最初はアーチャーと顔を合わせた瞬間は戦闘になると思っていたが、流石に昼間から戦っては一部の場所を除いて神秘の秘匿は難しいので

サーヴァントとしての戦闘にはならなかった。適当にスルーしようとしたが、アーチャーに呼び止められたのだ。

「雑種、私の暇つぶしに付き合え」

逃げるという選択肢はキャスターにあったが、龍之介がアーチャーを生で見られた興奮でなぜか乗り気になってしまったので、仕方なく付き合っている。もしや夜まで引き留めるアーチャーの策略かと思ったが、その様なセコイ真似はしないだろうと考えた。そもそもアーチャーは、現界しているサーヴァントがある程度は間引かれるなるまでは戦わないような発言をした。それを今すぐ覆すような事はしないだろうと。基本サーヴァントは嘘を言わないが、それは純粹で善か中庸の英霊がサーヴァントになった場合であり、キャスターは必要があれば嘘を言う。どうでもいいが、アーチャーは幸運：Aでキャスターは幸運：Eである。さらに賭けごとになるとアーチャーは自前のスキルの黄金律（バランスではなく、どれ程お金に恵まれるかである）：Aで負け無しになる。結果

「運は貴様にまったく味方せんようだな！」

「……………近いうちに潰してやる」

「旦那、元気だせって」

アーチャーに惨敗するキャスターが出来上がった。

運勝負ではキャスターは絶対にアーチャーに勝てない。ましてや、スロットやポーカーの掛け勝負では勝ちようが無かった。

現在は適当なカフェに入って紅茶などを飲んで一息ついている。

「フン、魔術師風情が随分とでかい口を叩くな。貴様の場合は、ど

の雑種とも違うようだがな……」

品定めするようにアーチャーはキャスターをじっくりと爪先から頭まで見る。

「雑種、我が家臣にならんか？さすれば、聖杯の1つや2つは賜^{たま}わしてやってもいいぞ？」

「断る。聖杯なんて必要ない。それに、従属は性に合わん」

しばし沈黙が流れたと思えば、どちらからともなく笑いだす。その奇妙な光景に龍之介は呆然とした。なぜ笑いだしたのか？と……

「イスカンドルの真似か？英雄王よ」

「なに、新しい家臣を得るのもまた一興と思っただけだ。それに、貴様は転移が出来るのであろう？我が庭を見回るに使えるやもしれんなしな。そういえば、そいつの問いにもその様な返答をしていたならなぜ、この聖杯戦争に参加している？キャスターよ」

「別に望みが無い訳ではないが……楽しみたいと言う漠然とした望みしかない。とりあえず今は、戦いを楽しんでいるだけだ」

「その結果、聖杯を手に入れたらどうするつもりだ？」

「特に考えてはいない。何せ自分より強い奴が何人も居るのでな。まあ、勝てる方法はあるがな」

「では、もしも貴様が我が前に立ちはだかった時には、我に勝てる状態という訳か？」

「ああ、そうだ。敵と対峙する時は、必殺を確信した時だ。しかし、この前は邪魔が入ったせいでランサーを仕留められなかったがな」

「貴様はその程度ということだ。雑種」

一区切りついた所でまた、両者は沈黙する。共に相手を威圧しているが、向けられているのは当人達だけなので周りの人たちは2人の雰囲気が悪い程度にしか認識せず、少しだけ距離を置く。

「嘗めるなよ、英雄王。お前は確かに並ぶ者の居ない王だ。しかし、それだけで勝てると思っっているのなら、とんだ道化だ。雑種であるとなかろうと、サーヴァントとして召喚された者は等しく死んだ者だ。格の差はあろうと、同類なら殺せる」

「格の差を認識してなお、貴様は我に挑むというか？勝てん戦いであろうと挑む方が道化ではないか？キャスターよ。解っているのだらう、我と貴様の間にある大きく隔たる壁が」

「解っている。が、その壁を突き抜ける手札はある」

一触即発の空気に龍之介はむしろ可笑しそうに笑っている。生でサーヴァント同士の戦いがまた見えるかと期待しているのだ。周りの人たちはただならぬ雰囲気に関心しているのにも関わらず……だが、そんな空気はすぐに飛散した。

「出来るものなら、やってみるがいい。我は逃げも隠れもせずを受けて立とう。貴様が、その時まで勝ち残ればの話だがな」

「俺は手段を選ばんぞ？後悔するなよ、英雄王」

「それでは、気長に待つとしよう。時臣の采配ではいつたい何時になることやら……」

「明日だ」

「なに？」

「明日の午後10時に遠坂邸に襲撃をかける」

キャスターの発言に意表を突かれたアーチャーはしばしキャスターの顔を凝視する。対するキャスターは悠然とその視線を受け止めている。虚勢やハツタリではなく、本気であるのがアーチャーには判った。

本気と判った途端にアーチャーは声を上げて笑い、ひとしきり笑うと堂々と宣言する。

「許す。全力を賭してこの我に挑むがいい。そして、知るがよい我と貴様の差を」

「知るのはお前だ。どれほど解っていないかを」

さながらドラマのワンシーンの収録かと思う程の2人の言動に人だかりが出来ていたが、その人だかりをかき分けて前に進み出る大男と青年がいた。

「何をやっておるんだ？金ぴかにキャスターよ、こんな注目されるような事をしておって」

「ライダー！なに人混みかき分けて進んでいるんだよ！少しは……」

…」

呆れ顔のライダーに、口をパクパクと動かしてアーチャーを唾然と見つめているウェイバーは滑稽な組み合わせに見えた。ちなみにライダーは普通の格好である。通販で買ったTシャツにズボンを穿いている。ズボンはウェイバーが川の水に魔術の名残が残っていないか調べる為に水を汲ませに行かせる為に買い与えたのだ。本当は昨夜キャスターを捜したが総スカンだったために、どうにもライダーと一緒に居るのが気まづかったので少しでも離れるようにと買い与えのだが。しかし、ライダーが街に行くと言ったので、1人にするとなにを仕出かすか判らないので仕方なく一緒に街に繰り出したのだ。よもや、そこでアーチャーと　今は気付いていないが昨夜捜しまわった　キャスターと出くわすとは思っていないかった。

「なんだ、サーヴァント同士で気軽に茶飲み話でもやっておったのか？」

「少し、違うな」

「なに、私の暇つぶし付き合って貰ったから些細な礼だ」

ちなみに、アーチャー達が飲んでいた紅茶は最高級の物であったりし、支払いは全てアーチャー持ちだったりする。

飲んで話をしていた。ライダーはその光景である事を思い付いた。

「ものは相談なんだが、これからセイバーも交えて酒盛りでもせんか？」

この発言に、全員が呆気に取られたのは言うまでも無い。

アインツベルンの城への来客（前書き）

感想 横目非英様、教授様、かにかま様、コージー様、ニコラス様
ありがとうございます。

アインツベルンの城への来客

アインツベルンの森の城では、平穏な時間が流れていた。切嗣と舞弥が全力でランサーを捜索しているが、今はまだ発見できないでいる。マスターが生き残ったか、それともランサーが新しいマスターを得たのかは解らないが、それでも未だ脱落していないのはセイバーの傷が治らない事で証明している。

だが、幸いな事にランサーと戦う上で障害となるものは少なかった。アーチャーは戦う気が今は無いようで、ライダーは決着がつかずまで手を出さないと明言している。キャスターとバーサーカーは不明であるが、真つ当な戦略を考えればセイバーとランサーの一騎討ちに横槍を入れるような真似はしないであろう。尤も、両者共に行動原理が不明であるので油断はできないのだが。問題が一番あるのはアサシンであった。アサシンが存命であるのは切嗣と舞弥の目撃で既に判っているが、気配遮断で忍び寄りられるとどのサーヴァントでも発見はできない。結界があれば、余程アサシンの気配遮断のスキルが高く無い限りはある程度は侵入を防げる。

が、その結界が突然の轟音と共に破られた。いや、どちらかと言うと術式ごと破壊されたようであった。その結界と繋がっていたアリスフィールの魔術回路に強烈な負荷がかかった事による眩暈で倒れそうになったが、すぐ後を付いて歩いていたセイバーがすぐに手を貸して態勢を持ち直した。

「なんてこと……正面突破ってわけ？」

苦しげに呟く。こんな事が出来そうなサーヴァントは2体だけ、キャスターかライダーだ。だが、轟音として聞こえたのは雷鳴であったからライダーだろうと思われる。

「大丈夫ですか？アイリスフィール」

「ええ。ちょっと不意を討たれたただけ。まさか、ここまで無茶なお客様をもてなすとは思ってなかったから」

「出迎えます。貴女は私の傍を離れないように」

セイバーの言葉に頷き、アイリスフィールはセイバーと共に玄関ホールを取り囲むテラスへと足早に向かう。セイバーと共に居るのは敵と相對する事を意味するが、結界が十全に機能しなくなった今はアサシンが侵入してくる可能性が非常に高くなったのだ。アサシンを警戒する意味も合わせてセイバーのすぐ傍にいるのが最も安全なのだ。

「おおい、騎士王！わざわざ出向いてやったぞお。さっさと顔を出さぬか、あん？」

玄関ホールから聞こえてくるのは間違いなくライダーのモノであったが、戦いに来たにしては間延びして聞こえるので緊張感に欠けている。

それでも、襲撃してきたのだからセイバーはスーツの上から白銀の鎧を実体化させて迎え撃つ準備をする。

「……」

「いよお、セイバー。城を構えていると聞いて来てみたが、なかなか洒落た城ではないか。まあ、この国風ではないのが些か残念だがなあ」

セイバーは戦う気でいた。その気であったが故に、言葉に詰まっ

た。

「それと、徒歩では着難いとキャスター言われたのでな、庭木を余がちよいと伐採しておいたから有り難く思うがいい。かな〜り見晴らしがよくなってるぞ」

キャスターのセイバー陣営に対する悪意ある入れ知恵にアイリスフィールは頭痛がした。ライダーが庭木と言った木々は、招かざる客を迷わしたりする以外に結界を張るのにも利用していたりする。キャスターならそれに気付いていたのだろう。それを伐採する様に直接言ったかは判らないが、少なくともそうなる様に誘導したのだろう。自分が攻め入る時に少しでも障害が少なくなるようにと考えて……。そんな思惑があつたとライダーは知らずに善意でやったのだろう。

「ライダー、貴様は……」

なんと言つべきだろうか？ そうした思いでセイバーは呼び掛けはしたものの言葉が続かない。

「おいこら騎士王、今夜は当世風の格好はしとらんのか。何だ、のつけからその無粋な戦支度は？」

ライダーは『神威の車輪』に乗ってはいるものの、その格好はセイバーと違って本人の言う当世風であつた。尤も、11月と考えるとTシャツとズボンだけでは些か季節感の外れた格好ではあるのだが。

セイバーが言葉に詰まっている理由はそれだけでは無い。ライダーが小脇に抱えているモノの所為であつた。

樽。オーク製のワイン樽であつた。ライダーが市場で見つけて盗

ってきた一品である。

そして、ライダーの背中に隠れているのはウェイバーである。その表情は申し訳なさそうであり、彼の意向ではないと窺える。この後に行くであろう事にウェイバーはライダーに当世風の格好をすれば街を歩けると教えた事になるセイバー陣営を恨んでいたのは忘れて、同情していた。

「ライダー、貴様、何をしに来た？」

「見て解らんか？一献交わしに来たに決まっておろうが」

「……」

よもや、聖杯戦争中に敵陣に乗り込む暴挙に打って出てしに来たのが一献交わしに来たと普通なら思い付かない。ワイン樽を見た時はもしかして……と考えても、状況を考えれば真っ先に排除する可能性である。ライダーの破天荒ぶりは今に始まった事でないとしてもだ。

「アイリスフィール、どうしましょう？」

戦闘ならいざ知らず、酒盛りの誘いにどうすべきかセイバーはとりあえずアイリスフィールに指示を仰ぐ。酒盛りの為に場所を提供するのか、それとも力づくで追い返すにしてもセイバー1人の判断ではダメである。

「畏、とか……そういうタイプじゃないものね、彼。まさか本当に酒盛りがしたいだけ？」

あの男、やっぱりセイバーを懐柔したくて仕方ないのかしら？」

「いいえ、これは歴れきとした挑戦です」

「挑戦？」

一瞬、ライダーに毒されたのでは？と考えてしまったアイリスフィールは悪くないであろう。

「はい。……我も王、彼も王。それを弁えた上で酒を酌み交わすというのなら、それは剣に依らぬ“戦い”です」

「フフン、解っておるでないか。……しかし、今宵はちと違うな。王で無い者も呼んであるからな」

「なんだと？」

呼んでいる。他人の城なのにあたかも自分の城かのように気軽に他人、しかもサーヴァントと予測できる人物を呼ばれたのに更にアイリスフィールは頭痛がした気がした。呼ぶ方もどうかしていると思うが、呼ばれて来る方はもつとどうかしているのだろう。

「なんだ、我より先に行つてまだ準備も終わってないではないか」

「ライダー、御蔭で迷わずに来れた」

「へへ、こんな所にこんな城があったのか……coolだ！」

我が物顔の新たな来客にアイリスフィールは眉間に皺をよせてしまつた。

「セイバー、付き合つてあげなさい。アレ等は梃子でも動きそうに

ないから……」

「……なるべく早くお帰り願えるようにします」

アイリスフィールの心中を察して、セイバー静かに誓ったのだ
た。

宴

宴の場所として選ばれたのは玄関ホールであった。まさか敵であるライダーを筆頭に押し掛けてきた連中をこれ以上は城の中に踏み込ませないためと、暗に帰れという意思表示で選ばれたのだ。しかし、誰もそれを気にしている様子がない。それどころか、アーチャー主導で「王が参加する宴に相応しい場所に作り変える」と言っただけで、玄関ホールに調度品を置いてパーティー会場に作り変え始めた。実行したのはキャスターであったが、調度品は全てアーチャーが攻撃する時のように何処からともなく取り出した物だ。それによって玄関ホールは立派なパーティー会場に早変わりしてしまった。

（切嗣が帰って来たら、なんて説明しようかしら。納得、してくれるかしら……？）

ため息をついて、アイリスフィールは心の中だけで呟く。

突然のアクシデントなら、切嗣の予測の範疇であろうが、この様なアクシデントは切嗣の予測には無い事は解る。いや、切嗣だけでなく、誰にも予測できない出来事であったらどうが。

見れば準備は終わったのか、サーヴァント達は中央に置かれた樽と料理を取り囲んでいる。ちなみに、料理はキャスターが影から取り出した怪しげな品であるが、セイバーはその料理のおいしそうな香りと見た目で目線をチラチラと気にしている素振りをしている。

「いささか珍妙な形だが、これがこの国の由緒正しい酒器だそうだ」

そう言ってライダーは自慢げに柄杓を取り上げるが、酒器と言ったあたりでずかずかとキャスターが近寄り、自然な動作でライダーを小突く。

「てきとうな事を言うな。これは日本の酒器では無く、水などを汲み取る道具だ」

キャスターの指摘でライダーに白けた視線が集中する。

「ん？そうなのか？しかし……汲んでも入れる酒器がないのではなあ。キャスター、持っておらんか？」

指摘に笑って頭を掻き毟りながら誤魔化して聞くが、キャスターは持っていないと返答する。そこで進み出たのがアーチャーであった。

「まったく、自分から酒を酌み交わそうと嘯いておきながら、満足に酒器の1つも用意できんとは、格が知れるぞ？コレを使うがいい」

アーチャーが空間から取り出しのは宝石が散りばめられた黄金の杯であった。それを人数分用意してライダーにまとめて渡して、酒を汲めと促す。この際、キャスターが指摘しなければ汲むだけの道具で酒を飲んでいたことは指摘しないでおこう。

ライダーが全部の杯に汲んですぐに集まったサーヴァントの手に行きわたる。

「聖杯は、相応しき者の手に渡る定めにあるという。それを見定めるための儀式が、この冬木における闘争だというが　　なにも見極めをつけるだけならば、血を流すには及ばない。英霊同士、お互いの“格”に納得がいったなら、それで自と答えは出る。では、まず一杯といこうか」

ライダーの音頭に合わせて、全員が一息で飲み干す。体格差があ

つたにも関わらず全員が剛胆に呷って、杯を降ろしたのはほぼ同時であった。飲みっぷりでは互角と見て取ったライダーが次の言葉を紡ごうとしたが、アーチャーが先んじて発言した。

「何だこの安酒は？こんなもので本当に英雄の格が量れるとでも思ってたか？」

嫌悪感を露わにしてアーチャーはライダーを睨みつける。

「そうかあ？この土地の市場で仕入れたうちじゃあ、こいつはなかなかの逸品だぞ」

「そう思うのは、お前が本当の酒というものを知らぬからだ。雑種めが」

再びアーチャーは空間から物を取り出す。今度は先程出した杯と同様に宝石が散りばめられた黄金の瓶であった。どうやら、杯と瓶で一揃いの酒器であったようで同じような宝石の散りばめられた方である。

「見るがいい。そして思い知れ。これが『王の酒』というものだ」

「おお、これは重畳」

ライダーはアーチャーが出した瓶を受け取ると4つの杯に酌み分ける。

セイバーはアーチャーを警戒してか、すぐさまに『王の酒』を呷らないが、ライダーとキャスターは無警戒で口をつける。毒殺などはそもそもサーヴァントに毒が効くかは不明であるが

警戒していない。その様な方法を使っても勝ち残ろうとするような

者この場にはいない。それに、王の中の王と豪語するアーチャーがそんな姑息な手段を使うとは2人とも思っていない。

「むほオ、美味いつ!!」

「何……だと……?」

ライダーはその味に目を丸くして喝采し、キャスターも目を丸くしているが表情はありえないモノを見たかのような驚愕に染まっており、一口だけ飲んだ酒を凝視している。この2人をそこまで反応させる酒はいつたいどの様な味なのか気になったセイバーは喉に流し込む。その瞬間、言いようのない幸福感がセイバーの味覚を支配した。こんなに幸福感を感じてしまつて良いのだろうか?と後ろめたくなる程であつた。その酒は正に極上の美酒と言つのに値する逸品だつたのだ。ライダーが持つてきた酒を安酒と言ひ捨てたのも無理は無いと理解する。そもそも、比べる事すらおこがましいと思える位に格が違う。

「凄えなオイ!こりゃあ人間の手になる醸造ひつじゃあるまい。神代の代物じゃないのか?」

「調度品といい、酒といい、これ程の物をよく惜しげも無く提供できるものだな……」

2人の賛辞に気をよくしたのかアーチャーは微笑しながら、愉悦そうに杯を手に揺らしていた。

「当然であろう。酒も剣も、我が宝物庫には至高の財しか有り得ない。これで、格付けは決まつたようなものだろう」

「ふざけるな、アーチャー。酒蔵自慢で英霊の格が決まるなど聞いて呆れる。戯れ言は道化の役儀だ」

「まてまて、セイバーよ。言いたい事は余も解らんでもないが、持ち物に関して言えばアーチャーが優勢だ。ここは次に移ろうではないか」

苦笑しながらもライダーはセイバーに落ち着くように言い、アーチャーに向けて先を続ける。

「アーチャーよ、貴様の極上の酒はまさしく至宝の杯に注ぐに相応しい。が、あいにくと聖杯は酒器とは違う。

これは聖杯を掴む正当さを問うべき、言うなれば聖杯問答。まずは貴様がどれほどの大望を聖杯に託すのか、それを聞かせてもらわなければ始まらない。さてアーチャー、貴様は、ここにいる我ら3人をもろともに魅せるほどの大言が吐けるか？」

「仕切るな雑種。第一、聖杯を“奪い合う”という前提からして理を外しているのだぞ」

「ん？」

アーチャーの言葉に怪訝そうにライダーとセイバーが眉をひそめるのを見てアーチャーは呆れきったかのように嘆息する。

「そもそもにおいて、アレは我の所有物だ。世界の宝物はひとつ残らず、その起源を我が蔵に遡る。いささか時が経ちすぎて散逸したきらいはあるが、それら全ての所有権は今もなお我にあるのだ」

「じゃあ貴様、むかし聖杯を持ってたことがあるのか？どんなもん

か正体もしつていると?」

「知らぬ。雑種の尺度で測るでない。我の財の総量は、とうに我の認識を超えている。だがそれが『宝』であるという時点で、我が財であるのは明白だ。それを勝手に持ち去るうなど。盗人猛々しいにも程がある」

アーチャーの言い分に、今度はセイバーが呆れ果てる番だった。

「おまえの言は世迷い事とまったく変わらない。この聖杯戦争に、錯乱した英霊サーヴァントがいたとわな」

確かに　アーチャーが錯乱していると決定付けるには少し強引かもしれないが　普通ではありえない事を口走ったかのように思えて、セイバーの方に理があると考えられる。が、ライダーもキヤスターもセイバーではなく、アーチャーの言葉の方が理があると判断した。

「セイバー、お前のほうが錯乱しているかのようなぞ?」

俺達サーヴァントは奇跡の体現だ。なら、この世の全ての財を持つ奇跡に等しい宝具を持っていてもおかしくはない」

キヤスターの言葉に、アーチャーが反応した。

「やはり、貴様は他の雑種と違うようだな。キヤスター」

「お褒めに与り光栄だ。英雄王」

「だが、聡明さを隠さねば、我の家臣がよからぬ手段で貴様を消しかねんぞ?」

「では、俺は護衛に戻るとしようか」

キャスターはアーチャーに目礼をすると、そそくさと像に見惚れている龍之介のすぐ傍に控えた。龍之介の元に行く前にアイリスフイルとウェイバーに料理を勧めていたのは余談だろう。

宴2（前書き）

感想 竜華零様、コクイ様、白野 蒼衣様
ありがとうございます！

宴2

遠坂邸の地下室で今日も時臣は通信機の向こうの綺礼と会話していた。会話の内容は現在開かれている宴についてだ。ライダーが境界を壊してくれた御蔭で、アサシン達がアインツベルンの森と城にまで気配遮断を維持したままでの侵入に成功しており、宴の内容はこれまでと同じように全てが筒抜けであった。

サーヴァントによって宴が開かれているについては、最早驚愕には値しない琐事と半ば疲れた頭で時臣は考えていた。サーヴァントの奇行はすでにアーチャー、ライダー、キャスターによって少しは慣れてしまった。アーチャーは平気で出歩く、ライダーは聖杯戦争のルールを無視した言動、キャスターに至っては娘を誘拐したかと思えば、家に帰しにきた。更には、襲撃予告をアーチャーにするしまつであつたが、コレに関してはむしろ僥倖と捉えるべきだ。おそらくはその場の勢いではなく、前々　予想では倉庫街での戦いの時　から計画していた事であろうから、予告なしでも襲撃をしてきたであろう。ただ、キャスターが何を考えているのかがますます解らなくなったのだが。

「ところで、綺礼。ライダーとアーチャーの戦力差……君はどう考える？」

『ライダーに『神威の車輪』を上回る切り札があるのか否か。そこに尽きると思われますが』

「うむ……」

現状で英雄王ギルガメッシュに単騎で勝てる可能性を持っているのはライダーのみである。時臣個人としては、謎すぎるキャスター

も警戒しているが、それは明日までになる。それと、ギルガメッシュが襲撃を許したからには時臣がキャスターになんらかのアクションを取ると不興を買ってしまいかねない。バーサーカーのマスターも誘拐していたから、キャスターがバーサーカーを連れてくる事も予想しているが、それでもギルガメッシュには届かないと目している。なにもギルガメッシュの宝具は『王の財宝』だけではないのだから。尤も、できれば使ってはほしくないと思っているが……

「……この辺りでひとつ、仕掛けてみる手もあるかもな。綺礼」

『成る程。異存はありません』

既にアサシンはほぼ役割を終えている。キャスターに関しては街で一般人を襲っているくらいしか調べられなかったが、その他のサーヴァントはほとんど調べられた。キャスターの切り札がまだあるかも調べたいが、それはもうほとんど意味をなさないのであるうから捨て置けばいい。だが、必要な情報はまだ完璧ではない。最後に欲しいピースはライダーの更なる宝具の情報だ。その為なら、アサシンなど使い潰すのも有りだ。

『すべてのアサシンを現地に集結させるのに、少々時間がかかりますが……』

「構わない。号令を発したまえ。大博打であるが、幸いにも我々が失うものはない」

サーヴァントは結局のところ道具でしかない。それにこの師弟の共通認識であった。

時臣は報告を待つ間に明日の戦いの準備を始めた。戦うのが解っているのなら、それによる周りへの被害を最小限にするのがマスタ

一の勤めの1つであり、神秘の秘匿に繋がる重要な事だ。

「アーチボルト家9代当主、ケイネス・エルメロイがここに推参^{つかまつ}する！」

威風堂々と胸を張つてのケイネスのアインツベルン城への入城は、本人が堂々としていた分だけ滑稽さを演出することになった。

実はケイネスはライダー達より先にアインツベルンの森のすぐ傍まで来ていて、アインツベルンの城を攻め落とす為の下調べをしていたのだ。その時にライダーが結界を破壊したので、これは好都合とあわよくばセイバーとライダーを倒す為に乗り込んだのだが……タイミングが悪すぎた。

ケイネスは教え子であるウェイバーと、セイバーのマスターと思っているアリスフィールを倒すつもりで、ランサーはもしもライダーがセイバーと戦っているのなら、セイバーと協力してライダーを倒してからセイバーと戦うつもりであった。しかし、城で行われていたのは宴であり、2人が望むモノではなかった。

「ほれ、駆けつけ一杯」

ライダーは啞然としている2人に、とりあえず自分が使つてたのとキャスターがさつきまで使つていた黄金の杯に普通の酒を酌んで渡す。その杯を受け取ったものの、酒を飲むかは明らかに迷っている。敵にいきなり酒を勧められたのなら、当然の反応である。ランサーはセイバーに視線だけで助けを求めたが、セイバーは飲めという意味で何度も自分の空の杯を傾ける。意味を汲みとったランサーは杯を傾けて一息で飲み干す。

「うむ！英雄の名に相応しい飲みっぷりだ！。さて、ランサーにそのマスターよ、今は余達は聖杯問答なるものをやっておるわけだ。まあ、平たく言うとな、誰が聖杯を掴むに相応しい格を持つかを話しておったところだ」

笑いながら「ほれ、もう一杯」と言いながらライダーは先程からずっと離さず持っている王の酒をランサーの杯に酌む。

「それで今は聖杯に託す願いを言っているところだ。1人は、参加する気が無いようだがな」

1人とはキャスターの事だ。アーチャーに忠告されてからは樽と料理を囲むのをやめて龍之介の後ろに付いて歩いている。龍之介は像を見飽きてアイリスフィールやウェイバーに話掛けたが、無言であしらわれてしまったので暇そうにしている。

「あの雑種は託す願いなど無いらしいからな」

「なんだあ？キャスターとはその様な話をする間柄だったのか？」

「まさか。我が問い、キャスターが答えた。それだけだ。それより、次は誰が託す願いを述べるのだ？」

「では、余が言おうか。余の聖杯に託す願いは受肉だ」

「はあ！？」

ライダーの願いを聞いて一番意外そうな反応をしたのはマスターであるウェイバーであった。彼はライダーが爆撃機を欲しかったり、国の首相を強敵そつだと評価するなどして、世界征服を画策してる

節を何度も目にしており、それゆえにライダーが託す願いは世界征服とおもっていたのだ。

「おおお、オマエ！望みは世界征服だったんじゃ　ぎゃわぶつ
！！」

ライダーはデコピンでウェイバーを黙らせてから、続ける。

「馬鹿者。たかが杯なんぞに世界を獲らせてどうする？征服は己自身に託す夢。聖杯に託すのは、あくまでもそのための第一歩だ」

「雑種……よもやそのような瑣事のために、挑むのか？」

「あんな、いくら魔力で現界しているとはいえ、所詮我らはサーヴァント。先程キャスターが言った様に奇跡の体現だ。普通なら起り得ない存在だ。もしかしたら次の瞬間にでも消えてしまいかねないほどに、な……そこに更に奇跡を重ね掛けてでも、余は確立した生命からだが欲しいのだ」

「なんで……肉体に拘るんだよ？」

「それこそが『征服』の基点だからだ。身体ひとつの我がを張って、天と地に向かい合う。それが征服という“行い”の総て……そのように開始し、推し進め、成し遂げてこそその我の霸道なのだ。

だが今の余は、その“身体ひとつ”にすら事欠いておる。これでは、いかん。始めるべきモノも始められん。誰に憚ることのない、このイスクンダルただ独りだけの肉体がなければならん」

ライダーにとっては、聖杯戦争すらも踏み台にすぎないのだ。それこそ、人生での初戦かのような扱いだ。どのサーヴァントも今生

での最初で最後の大舞台として参加しているのに、ライダー1人だけはその先を見ているのだ。生前できなかった世界征服という大望を胸に抱えて。

「フツ、成る程な、自分で成さねば意味がないのだな。俺にも解るぞ、ライダー。だが、お前、いや、誰にも聖杯は渡せん。聖杯を手にするは、我が主であるケイネス殿ただ1人だ。

俺の願いはただ1つ、生前果たせなかった主への忠義を果たす事だ。ゆえに、聖杯に託す願いなどない」

澄んだ声で凜と言い放つたのはランサーであった。主君に忠義を尽くした人生を歩めなかつたからの望みだ。人生は騎士道に殉じた道であり、後悔も遺恨もない。だが、もしも次があつたのなら……
…そう考えた道を今歩んでいるのだつた。

4人のサーヴァントが 正確には3人で1人は直接言つて無いのだが 願いを言い、最後に残つたのはセイバーであった。そのセイバーは、自分の願いは誰よりも清廉であり、尊い願いであると確信していた。

「最後は私の番だな」

だから、セイバーは胸を張って堂々とその願いを言った。

「私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望機をもってして、ブリテンの滅びの運命を変える」

その言葉と同時に、空気が変わった。

宴3 (前書き)

感想 seri様

ありがとうございます！

宴3

全サーヴァントが周りの異様な気配に気付いた。セイバーの願いを聞いてライダーが何か言いたそうな顔をしたものの、そんな事より周りの気配に対処するのを優先した。

遅まきながら、マスター達もそれに気付いた。丁度、自分達が樽と料理を囲んでいるように、自分達に殺意を向けるモノが取り囲んでいるのに……。ソレの姿は暗闇であれば見れないような黒であり、一点だけ反対色の白であるが、そこは髑髏の仮面であった。つまり、最初に退場したとほとんどの者が思っていたアサシンであった。しかも、その数が尋常ではなかった。玄関ホールの壁に沿っているのと、テラスにいるアサシンの数は50は間違いなくおり、その姿は子供のように小さな者もいれば、女のような丸みを帯びた輪郭の者もいて、全てが別の個人のように見えた。

「チツ！雑種が……」

それを見たアーチャーが舌打ちをして呟く。このタイミングでここまで思い切ったアサシンの使い方は、時臣の指示とアーチャーには容易に想像できた。自分のマスターの指示でなければ、如何にも雑種が考えそうな事だと言って、一蹴するのだが、何か考えがあつてのことであろうと思ひ留まる。しかし、怒りは鎮めない。時臣は解っていない。アサシンに宴を壊されればそれは沽券に関わる行為だといのに。

席を設けたのライダー、場所を提供したのはセイバー、酒と席を相応しい物にする為に物を提供したのはアーチャー、料理を用意して雑務をこなしたのはキャスター。そんな英雄が各々が出せるモノで作られた宴を壊すのは、顔に泥を塗るに等しい行為となる。

「む……無茶苦茶だッ！」

1つのクラスにつきサーヴァントは1体と決まっている。その考えなら、1体以外はアサシンに扮した偽物になるが、同じサーヴァントは全員がサーヴァントであると感じ取った。アサシンが増殖しているのは怪異や異常でしかない。

「どういうことだよ!? 何でアサシンばかり、次から次へと……だいたい、どんなサーヴァントでも1つのクラスに1体ぶんしか枠はないはずだろ!？」

狼狽するウェイバーを見て、アサシン達は笑う。

「左様。我らは群にして個のサーヴァント。されど個にして群の影」

正にアサシン達を言い表す言葉であったが、その言葉の意味を真に理解した者はいなかった。

アサシンが誇る宝具『妄想幻像』サブハーニーヤは、生前に1つの肉体でありながら複数の人格たましいを持つていた事に由来する宝具であった。能力は己の霊体を細分化して、それぞれの人格にそれぞれ霊体を与えて複数のサーヴァントとして現界するものだ。しかも、人格ごとに特技を持っている。しかし、元々が1人である霊体を細分化するせいで、サーヴァントとしての身体能力は分裂した分だけ1人あたりの身体能力は低下する。それでも、アサシンとしてのクラスの恩恵は全員が隔てなく受けられるのを考えれば諜報に関して言えば、間違い無く最高のサーヴァントである。

しかし、いまアサシンがしている集団戦法は捨て身の特攻であった。聖杯戦争にアサシンが勝つのなら、この戦法は最終手段であり、本来なら大多数がサーヴァントの足止めをしている間に少数がマス

ターを暗殺するのだ。マスターの暗殺がアサシンの本領発揮ができる手段なのだから。しかし、綺礼の令呪による命令の所為でこの手段を取らざるおえないのだ。

「……ラ、ライダー、なあ、おい……」

アサシン達がこぞって自分に視線を合わせているのを感じ取ったのか、ウェイバーはライダーに縋り付くように話掛けるが、そのライダーは未だに酒を飲んでいる。臨戦態勢を取っていないのは彼だけであった。

「こらこら坊主。そう狼狽うろたえるでない。宴の客を遇する度量でも、格は問われるのだぞ」

「あれが客に見えるってのか!？」

少なくとも、ランサーとそのマスターのようにたまたま宴に乱入してしまった類にはウェイバーには見えなかった。例え客だとしても、イチャモンつけにきた客か、どこかの極道などの関わり合いになりたくない類いの客である。

「なあ皆の衆、いい加減、その剣呑な鬼気を放ちまくるのは控えてくれんか?見ての通り、連れが落ち着かなくて困る」

だが、ライダーはその様な客であれ、歓迎するかのような口振りである。

「器が広いな。征服王」

「当然だ。王の言葉は万民に向けて発するもの。わざわざ傾聴しに

来た者ならば、敵も味方もありはせぬ。それとキャスターよ、余はどの様な者であれ、同じ夢を懐いて付き従う者なら、いつでも家臣に加えるが？」

「お断りだ」

2度目の勧誘に失敗したライダーは、アサシンを見据えながら手元に残っていた唯一酒を酌める柄杓で酒を汲み取って、アサシン達に差し出すようにして掲げる。

「さあ、遠慮はいらぬ。共に語ろうという者はここに来て杯を取れ。この酒は貴様らの血と共にある」

それへの返答は言葉ではなく、行動によって示された。風を切る音が聞こえたかと思えば、柄杓は頭を落とされてワインをぶち撒ける。

「…… 余の言葉、聞き違えたとは言わさんぞ？」

始終静かであったライダーの声が、変質した。しかし、アサシン達はそんな事に気付きもせずにライダーをあざ笑うかのようにクスクスと笑っている。

「『この酒』は『貴様らの血』と言った筈　　そうか。敢えて地べたにブチ撒けたいというならば、是非もない……」

風が吹き込んだ。ただ風が吹き込んだだけなら、別に珍しくも無い日常的に起きる現象だ。しかし、窓も扉も閉じられている玄關ホールでは、起きえない現象であった。それに、風は11月の冷風ではなくて夏に吹くような熱風であり、カラッと乾いた風であり、砂

塵を伴った風であった。その風は、ライダーを中心として吹いていた。

「では、余以外の王に聞こうか。　　そも、王とは孤高なるや否や？」

渦巻く熱風の中心に立っているライダーは、いつの間にか英霊の本来の姿である戦支度に身を包んで。アーチャーとセイバーに問う。その問いにアーチャーはただ失笑するだけで無言の返事をし、セイバーは答えた。自分が歩んだ道を王道とするならば、間違えようのない解答であった。

「王ならば……孤高であるしかない」

「ダメだな！まったくもって解っておらん！そんな貴様らには、やはり余が今ここで、真の王たる者の姿を見せてやらねばなるまいてー！」

ライダーが、風が、とうとう現実を浸食し、あるべき場所へと塗り替えた。

「そ、そんな……ッ！」

ソレを理解し、驚愕の声を漏らしたのは3人の魔術師。

「固有結界　　ですって!？」

照りつける灼熱の太陽。晴れ渡る蒼穹の彼方、吹き荒れる砂塵に霞む地平線まで、視野を遮るものは何もない。

固有結界とは、最も魔法に近いと言われる魔術。自分の心象風景

での結界で現実を塗り潰し、自分の世界を作り上げる大禁呪。その力は精霊と一部の高位な魔術師のみが行使可能とされている。世界の延長である精霊以外が行使すれば、世界からの修正力で長時間の行使は不可能だが。

「そんな馬鹿な……心象風景の具現化だと……魔術師でもないのか!？」

「もちろん違う。余一人で出来ることではないさ」

誇らしげにライダーは言う。

「これはかつて、我が軍勢が駆け抜けた大地。余と苦楽を共にした勇者たちが、等しく心に焼き付けた景色だ」

世界の変転に際して、位置関係すらも変転させられていた。取り囲んでいた筈のアサシン達は遙か遠方にかためて配置され、ライダー以外のサーヴァント3人とマスター4人はその反対側に位置する場所に配置された。ライダーはその2つの集団のちょうど中間におり、たった1人でアサシン達に向き合っていた。

否、本当に1人だろうか？目を凝らせば、徐々にだが砂塵による影と思っていた物が実体と色を持ち始めたではないか。

「この世界、この景観をカタチにできるのは、これが我ら全員の心象であるからさ」

一騎、また一騎と姿を現したのは騎兵であった。人種も装備もまぢまちではあったが、共通することもあった。

「こいつら……一騎一騎がサーヴァントだ……」

そう、その全てが、聖杯という冬木の奇跡を持って7体までしか呼ばれるはずのサーヴァントである存在であった。

「見よ、我が無双の軍勢を！肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を超えて我が召喚に応じる永遠の朋友たち^{ほっゆう}。

彼らとの絆こそ我が至宝！我が王道！イスカンドルたる余が誇る最強宝具^{アイオニオクタイロイ}『王の軍勢』なり！！」

ランクEX対軍宝具。独立サーヴァントの連続召喚。まさに戦争に相応しい宝具であった。

なんと壮大で、なんと強大な力を持つ宝具であろうか。同じ夢を見て、同じ場所を指し、同じ王を掲げて世界を征服しかけた最強の軍勢が、ここに蘇ったのである。中には、志半ばで倒れた者も居たであろうが、夢と王に捧げた人生に悔いなどあるはずがなく。王が遠征をすると宣言すれば、英霊の座から自らの意思で駆けつける忠臣だけで編成された軍勢の士気は常に最高潮であった。

その軍勢の中から、乗り手の居ない馬がライダーに駆け寄る。

「久しいな、相棒」

ライダーは満面の笑みを浮かべながら、愛馬の首を抱きしめる。『彼女』は、後に神格まで与えられ崇拜された伝説の名馬ブケファラス。彼女もまた、王であり乗り手であるイスカンドルの招集に駆けつけた英霊の格を持つ存在である。

「王とはッ
誰よりも鮮烈に生き、諸人を魅せる姿を指す言葉
！」

ブケファラスの背に跨ったライダーが声高らかに謳い上げ、居並ぶ彼の英霊達は一斉に盾を打ち鳴らして応える。

「すべての勇者の羨望を束ね、その道標として立つ者こそが、王。故に――！」

圧倒的な自信と誇りを胸にライダーは宣言する。

「王は孤高にあらず。その偉志は、すべての臣民の総算たるが故に――！」

『然り！然り！然り！』

一糸乱れずに英霊達は王の言葉に是と返す。過去、現在、未来、どの時間でも、ここまで王と同じ夢に生き、忠義する軍勢は存在しないであろう。

英霊達は斉唱を終えると、皆一様に王の次の言葉を待つ。

「さて、では始めるかアサシンよ」

獰猛な笑みをしたライダーは、王の言葉を阻み、王の酒を拒んだ狼藉者に対して、後は行動するしかないと考えていた。

「蹂躪せよ――！」

起こすべく行動はその一言で十分であり、雄叫びを挙げる。

『アアアア
A A A L a L a L a L a L a L a i e ! ! !』

戦い。そう言える程のモノではなかった。能力で言えば、一対多

であったが故に、アサシンはあっさりと鏖型陣形やじょうにのまれて消えてしまった。

「ウオオオオオオオオオオッ！！」

勝ち鬨どきの聲が湧き起こる。王に捧げし勝利を誇り、王の威名を讃えながら英霊達は役目を終えて元居た場所へと還っていく。

それに伴って、固有結界も解除され、宴の会場であったアインツベルンの城の玄関ホールにアサシンを除いた全員が元の位置に戻った。

「幕切れは興醒めだったな」

ライダーをそう言うのと虚空を切り裂いて『神威の車輪』を取り出し、自身のマスターを乗せて去っていった。

「主催者が先に帰るな……。まあいいか」

キャスターが呟き、突然下を指差す。

「では、次に会う時は剣を交えようとするか」

キャスター、セイバー、アイリスフィール以外は、いつの間にか広がっていたキャスターの影に飲み込まれて消えた。

「……どういっつもりだ。キャスター」

「なに、今戦われてしまうと都合が悪い。だから、全員に強制的に帰ってもらった。まあ、ランサーとそのマスターが消えなければそれで良いんだがな」

笑いながらそう言い、キャスターは徐々に影に沈んで行きながら続ける。

「救うのは褒めた讃えられる事だろう。だが、人間は醜悪な面もある。俺は救った相手に殺されそうになった王女を見た事がある。騎士王、お前もそうなるかもな」

最後だけは、真剣な顔をして忠告とも脅しともいえない言葉を言っ
つてキャスターは完全に影の中へと消えた。

宴3（後書き）

おまけ 注意：シリアスぽかったのに、それが跡形もありません。

「ねえ、セイバー」

「（もぐもぐ）なんですか、アイリスフィール？（むしゃむしゃ）」

「いくらもつたないからって、キャスターが置いてった料理を食べるのは止めた方が良くと思うのだけれど……………」

そう、セイバーはキャスターが置いて行った料理の残り物を凄いい勢いで食べているのだ。

「アイリスフィール！確かに、キャスターが用意した時点で怪しさ満点の品々です。しかし、こんなに美味しい料理を私は捨てるなんてできません！」

もし、捨てると命じるつもりなら、切嗣に言って令呪でも使って下さい！私の時代では、戦争中にこんなに良い物を戦地では食べられなかった！！」

魂の叫びであった。

「……………（勧められて一口食べたのだけど、私にはあまり合わなかったのよね）」

間桐邸（前書き）

感想 教授様、ニコラス様
ありがとうございます！

間桐邸

「マスター、準備はいいか？」

「ああ、問題無い」

宴から一夜明け、キャスターと雁夜は間桐邸の門前に居た。時間にして午前5時ちょっと過ぎで、まだ出歩いている人はいない。

「間違っても、バーサーカーから離れるなよ」

「解っている。取引を忘れるなよ、キャスター」

「勿論。個人的にも、気に入らんからな。ただの自己満足だがな……」

そう言つと、キャスターは間桐邸に張つてある結界に触れ、破壊した。

「脆いな。まあ、楽な方がいいか」

「急ぐぞ、臍硯が何をしでかすか判らないからな」

雁夜はバーサーカーを実体化させるとズカズカと間桐邸の敷居に踏み込んで行く。バーサーカーとキャスターもそれに続くのだが、キャスターはバーサーカーに何の変哲もないナイフを渡す。狭い室内で使いやすい武器としての選択である。

間桐邸に踏み入ったが、誰も応戦するべく出てくる気配がまったくない。間桐邸に居る人物は3人だけであり、その内の1人は雁夜

が救おうとしている桜であるので間桐の戦力外である。残る二人は臓硯と雁夜の兄である鶴野だけである。尤も、間桐邸の地下にはおびただしい数の蟲がひしめき合っており、それを使役すれば雁夜だけなら、雁夜よりも魔術師の才能のない鶴野でも簡単に殺せるのだが。

だが、雁夜はサーヴァント2人を従え、しかも身体能力も魔力量も増大させている。負ける要素はゼロではないが、勝ち目は十分すぎる程にある。恐れずに雁夜は桜が居るであろう地下室を目指す。

「カツカツカツ。どんな乱暴な客かと思ったら、雁夜ではないか？」

皺の深い小柄な老人が、その行く手を阻むべく立ち塞がる。間桐臓硯だ。桜を現在苦しめている元凶であり、雁夜が最も憎む相手である。時臣とは違って、魔術を識ったその時から憎しみ通している長い長い間の憎しみの対象。

「お前を殺して桜ちゃんを助ける！バーサーカー！」

その貧弱な体躯にバーサーカーはナイフで斬り掛かり、臓硯を両断する。しかし、臓硯の体は斬られると同時に体の輪郭を崩して蟲となった。

「いきなり斬りかかるとは、教育がまだ手優しいモノじゃったようじゃな」

カラカラと笑いながら、先程とは別の場所に姿を現す。

「妖怪が……！」

ソレを見て雁夜は憎々しげに吐き捨てる。いくら強力なサーヴァ

ントを2体従えていても、届かなければ意味は無い。おそらく臓硯の本体は安全な場所で見ているのだろう。

「しかし……いったいどの様な魔術を使って、雁夜をここまでの魔術師に仕立てたのだ？少し前まで死に損ないのような状態であったというのに」

臓硯は興味深そうに言うと、雁夜をじっくりとそれこそ嘗め回すかのように見る。雁夜の状態はそれこそ奇跡でも起きない限りは、今の状態はありえないのだ。改造を施した臓硯だからこそ解る。まず、雁夜が苦痛無しでバーサーカーに魔力供給し続けるのが不可能なのだ。元々の魔術回路が生成する魔力では足りず、刻印虫の疑似魔術回路の補助を得て初めて十分な供給が可能になるのだ。他にも、頭は白髪のままではあるが、急激な改造の悪影響で悪くしていた左半身は完全に健康な状態になっている。

「体を丸ごと変えた」

キャスターのその一言で、臓硯は目を限界まで開けて雁夜を見る。

「ほうほうほう。ダメになったら、新しいのに代える。人は似たような事を考えるモノじゃな」

ニタアと張りつけたような笑みを浮かべて、今度はキャスターを見る。

「お前と一緒にするな。あくまで治療の手段にすぎない」

そう吐き捨てる、今度はキャスターが臓硯に斬りかかる。

「カカカ！無駄じゃ無駄」

嘲笑い、斬られると同時にまた形を崩そうとしたが、振り下ろされる槍に対してはそれこそ無駄であった。振り下ろされた『掬花』の真価の発揮は、追従する波濤による一撃にある。波濤は対象を圧碎、両断する。槍の一撃だけであったのなら、蟲はバラけるだけで難を逃れたであろう。しかし、波濤の追撃によって蟲は潰された。

「おお、怖い怖い。相性が悪いのう。目的は桜であろう？しかし、アレは大事な間桐の血を繋げるモノ。そう易々とは渡せんもの。こんな事をしている暇があったら、敵のサーヴァントを倒したらどうじゃ？雁夜よ。桜は今も苦しんでおるぞ……カカカ！」

更に姿を現して蟲を潰されのを避けるためか、臓硯は今度は声だけ響かせる。

「他にも目的はある。失せろ、蟲が」

「わしは雁夜に話掛けておるんじゃが？部外者は黙っててほしいのう」

「今は欲しいモノを手に入れたら、特に何もせずに帰ってやる。気が変わらないうちに、その不快な声を出すのはやめる。一匹残らず潰すぞ！」

「まったく、話しの解らん英霊じゃな。まあよい。雁夜、必ずや聖杯を掴むのだぞ、キャスターの裏を搔いてでもな」

最後に一際不快な笑い声を上げると、臓硯の声はそれっきり聞こえなくなつた。だが、ねつとりと纏わり付くような視線はまだ続い

ており、監視されているのは明白であった。

「……地下室、いや、蟲蔵はこっちにある」

そう言うと雁夜は隠されている扉を開いて、蟲がひしめき合っている場所に足を踏み入れた。

蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲。階段の下の床一面は、一カ所以外はすべて蟲に埋め尽くされ、一人の女の子　つまり桜が　蟲に犯されている。目から光は消え、まるで死んでいるかのように桜は蟲に身を委ね、ずっと天井を見ている。その視線は、体が動くのに合わせて動いているので、意識せず、漠然と前を見ているだけだった。

「桜ちゃん！」

「おじ……さん……？」

真っ暗であった桜の目に僅かに理性の光が灯るが、依然として深い絶望しか瞳は写していない。

「おじさんが、今日教育して下さるのですか？」

「違う！助けに来たんだ！」

反射的に雁夜は叫び、蟲を踏んだりするのを厭わず桜を助ける為に進もうとするが、キャスターに腕を掴まれて止まる。

「何をする、キャスター！助けるのは取引の内容だ！」

「よく見ろ、首に虫が一匹陣取っている」

キャストが指差した先の、細くて白い桜の首筋に、一匹だけ他の虫とは見た目からして違う虫が陣取っていた。それは雁夜も知っている虫であった。『翅刃虫^{しんちゅう}』肉食虫であり、猛牛の骨であろうと容易く噛み砕く顎をもつ驚異の虫であった。使う機会が無かったが、雁夜は一時その虫を視蟲と共に蟲使いとして臓硯から託された魔術師としての武器であった。

その虫の顎は、桜の頸動脈をしっかりと捉えている。それが意味するのは、警告。「桜を助けたいのなら、聖杯を持って来い」そんな幻聴が、雁夜には聞こえた。

「下手に近付けば、虫に頸動脈を噛み切られて失血死。子供では数分と持たずに死ぬな」

「脅しだけのはずだ……。易々と桜ちゃんを殺さないはず」

「願望だな。本気で、もう要らないと考えているかもしれんぞ？」

「そんなはずはない！臓硯は桜ちゃんに優秀な間桐の子を産ませよ
うと……」

「優秀な間桐なら、俺の目の前に居るが？」

「え……？臓硯が、そんな事を……」

雁夜の体はキャストが作った物だが、間桐の血は間違いなく流れている代物である。そうでなければ、雁夜の魂は体に馴染まなかつたであろう。間桐臓硯は、それを見抜いていた。

本家の血が流れる男で、優秀な魔術師の家系の女に子を産ませるのは間桐がずっとやってきた事だ。本音とすれば、それを続けた方

が間桐の血は色濃く残り易い。わざわざ遠坂の者を改造して産ませるよりもずっと良い。そして、優秀な本家の血を引く男と、改造し掛けの娘では、男の方に天秤が傾く。つまり、桜を目の前で殺し、同時に雁夜の心も殺して、雁夜の体だけを手に入れるのも選択肢にあるのだ。最悪、生殖能力さえ残っていれば良いのだ。

目に見える警告さえあれば、雁夜の方から退くであろうと予想し、実際に雁夜は退こうとしていた。しかし、そんなム力つく結果は、キヤスターが意地でもさせなかった。

やるべき事が解ったキヤスターは、迷いもせずに行動に移した。まず、雁夜を気絶させ、拠点へと転移させた。次に、桜のすぐそばに降りるように跳び降りた。キヤスターが跳ぶと同時に、翅刃虫が桜の頸動脈を噛み切つて、血が勢いよく噴き出したがキヤスターは動じずに翅刃虫を引き剥がしてから、影からある薬を取り出して注射した。効果はすぐに現れた。勢いよく噴き出た血はすぐに止まった。

キヤスターが使った薬は『補肉剤』。脳以外なら、再生させることのできる薬である。

「中にも、居るな」

体の内側に居る異物を感じ取り、キヤスターはそれを直接手で引きずり出した。一匹、また一匹と虫を引きずり出し、合間に補肉剤での治療を挟み、ついには全ての虫をキヤスターは取り出した。頸動脈を噛み切られた時の出血で気絶していた桜を転移させてから、次の行動を始める。

「間桐臓硯、取引をしないか？」

魔術師殺しの考察(前書き)

感想 コージー様、コクイ様、カナメ・カノリ様
ありがとうございます！

魔術師殺しの考察

衛宮切嗣は新都駅の安ホテルで1人で情報の整理をしていた。自分、使い魔、舞弥が手に入れた情報を冬木市全域の白地図にまとめて記入していた。

聖杯戦争は、昨晚やっとサーヴァントの1体が脱落し、本格的に動き出したのだ。これまで以上に気を引き締めなければならない。ただ、アサシンが脱落する経緯は切嗣には完全に理解できる事ではなかった。ライダー、アーチャー、キャスター、ランサーがインツベルンの城に集結して酒盛りしたなど、前例のない出来事であった。その状況であったなら、乱戦になってもう1体ほど脱落してもおかしくはなかったが、キャスターによって最後は強制解散にさせられたと聞き及んでいた。

キャスターによる強制解散。それが一番不可解であった。日本刀を主に使っているのに、名乗っているのは日本名ではない。最弱と言われるクラスに居ながら、ランサーを抑える程の武艺を身に付けている。英霊でありながら、輝きがほとんど見られない。アーロニーク・アルルエリという名の魔術師は、文献を漁っても見つからなかった。今回も合わせて、3度もセイバーを助けるような行動をした。転移を使える。

キャスターの情報はどれも不可解なモノであり、いったい何処の英霊かさえも予測のできない相手であった。真名が解らない相手はアーチャーとバーサーカーもそうであったが、キャスターはこの2体とも違う感じがした。

まず、切嗣の経験則からいわせれば、魔術師は明確な目的意識を持っており、それが強烈である程に捧げる力は尋常ではなくなり、結果を作り出す。例外もいたが、それは極めて少ない例であった。聖杯戦争に参加している魔術師なら、目先の目的は聖杯であろう。しかし、勝つ為にセイバーを助ける要因がまったくない。サーヴァ

ント同士での相性を考えて、自分に有利な展開に持っていこうとするなら、セイバーが一番邪魔になる。

ライダーを倒させる為にアーチャーを助け、アーチャーを倒させる為にバーサーカーを助け、バーサーカーを倒させる為にランサーを助ける。これならばまだ幾分か理解できる。少なくとも、上手く行けば倒せるであろうサーヴァントだけと戦えば良いのだ。

セイバーを助ける可能性があるのは、戦略を度外視して、私情を持ち込んだ場合しか考えられない。魔術師として戦いに臨む心構えでは、それは三流のすることだ。しかし、生前にアーサー王に縁のある英霊だったら？王と崇めるセイバーを前にして助けてしまう可能性もある。だが、セイバーはキャスターに心当たりがまったく無いと、アイリフィールはセイバー本人から聞いたらしい。あそこまで特徴的な格好がサーヴァントとしての戦支度なら、本当に該当する者がいないのであろう。尤も、狂信者の可能性は無くもないが……

キャスターはどの英霊よりも難敵になると切嗣は予想していた。謎が多いのもそうだが、本領を發揮されればクラスでは有利なはずのセイバーでも倒される危険がある。それに、聖杯戦争はサーヴァントを倒すだけが勝ち方では無い。

転移ができるのなら、サーヴァントを別の場所に転移させるだけで一緒に行動しているマスターを狩れる。令呪を使えば、回数制限があるもののサーヴァントを転移させる事は可能であるが、キャスターは3回以上転移を使える可能性が非常に高いので、令呪の無駄使いになる可能性が高い。

他にも、マスターが未熟な魔術師というのも大きい。昨晚開かれた宴に出てきたキャスターのマスターと思しき人物は、アイリスフィールの見立てではたまたま聖杯戦争に参加した一般人であった。つまり、魔術師として格の上の者とキャスターが契約すれば、キャスターはステータスの上昇も十分に有り得る。しかも、かつては魔術師として成功を収めた人物が一般人の使い魔としての扱いに不満

を持つ可能性が高く、宴の最後にランサーのマスターを気遣う発言をしていた。ランサーのマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは天才と言われる魔術師。ソレを知っているかはどうかは知らないが、マスター候補の可能性が高い。だが、ケイネスと契約されれば魔術師殺しとしては狩り易くなる。前情報と数少ない観察による情報で、ケイネスは典型的な魔術師と解っている。もしも、ケイネスと契約するような事があれば、元々狙う予定であったマスターに引き金を引くだけだ。キャスターの動向は要注意として考えを締めくくる。

人間でも、気に掛かる存在はいる。言峰綺礼、アサシンの元マスター。

聖杯戦争においては、サーヴァントを失ったマスターはほぼ無力と考えてもいいが、綺礼だけは例え令呪を全て失おうと油断できないと切嗣は考えていた。たった一度だけだが、冬木ハイアットホテルの向かいの建築物での襲撃は自分を狙ったものだったのだ。その時点で自分が狙われる要因が無かったはず、なのである。切嗣の常套手段は“相手の裏を搔く”に終始するのに、その表も裏も解らないのだ。それでは、魔術師殺しとして十全の力を発揮できない。

現時点では、殺す必要性はないが、サーヴァントだけが生き残った場合　現状で一番考えられるのは、自分の狩りよつての結果

が出てくると話が変わってくる。サーヴァントを失えば、御三家でなければ一度は令呪を失うが、聖杯による再分配によって再びマスターになれる事もある。極稀に、新しいマスターが生まれる事があるが、サーヴァントだけを失ったマスターが居れば、そちらに優先的に分配されるであろう。

そこまで考え切嗣は、困惑した。なぜその様な事を解っているのに、今はマスターでも無いような人物を警戒している？と……。キヤスターに関する思考は有益だと思えたが、綺礼に関する思考は無駄にしか感じられなかった。思った以上に自分は疲労しており、思考にムラが出てきたと思ひ。切嗣は70時間もしていない睡眠を取

る事にした。

「ここが……ふうん。また随分と不思議な建物ねえ」

それが日本家屋を見てのアイリスフィールの第一の感想であった。しかし、生まれてこのかた城以外の建築物に寝泊まりしたことのないと思えば、仕方がないだろう。尤も、アイリスフィールが見たのは今どき珍しい純和風で木造平屋の造りの家なのだが。

「お2人には、今日からここを活動の拠点としていただきます」

案内をした舞弥は事務的にいうと、家の広さの分だけ多くなっている鍵束を差し出す。

「あ、それはセイバーが預かっておいて」

「解りました。アイリスフィール」

セイバーひっかかるモノを感じたが、特に言及せずに鍵束を受け取る。どれも近代的だが、ひとつだけは妙に古めかしく感じる鍵があった。

「マイヤ、この鍵は何でしょうか。他のものとは随分違います」

「庭にある土蔵のものです。古いですが、立て付けに不安がないのは確認済みです」

その土蔵の周り、そして屋敷全体の状況を思い返したのか、舞弥

は表情を曇らせて続ける。

「つい先日、名義を買い取ったばかりなもので、申し訳ないのですが、見ての通り何の準備もありません。生活の場としては相応しくないかもしれませんが……」

「構わないわ。とりあえず雨風さえ凌げるなら文句はいりません」

結界を破壊されて侵入が容易になった森の城に比べれば、隠匿の観点から言えばかなりマシだとアイリスフィールは解っている。それに、結界の術式を確認したら修復には2日はないと万全にできない程の壊滅的状况だったのだ。

「それでは、私はこれで」

一礼すると、舞弥は2人を残して車に乗って走り去った。

「さて、それじゃあセイバー、新居の点検といきますか」

「そうですね……」

まるで子供のようにうきうきと嬉しげに、アイリスフィールは半ばお化け屋敷かのような家を見て回った。セイバーはその後に付いて歩いた。その途中で、アイリスフィールは自身に構造的欠陥があるとセイバーに打ち明けた。その発言を含む、全ての行動がその場に居ない人物にまで届いているなどとは思いつかなかったであろう。

遠坂邸（前書き）

感想 にかま様、コクイ様
ありがとうございます！

遠坂邸

午後10時。その時間は、キャスターが襲撃の予告をした時刻である。無論、時臣は座して待つだけなどしなかった。出来得るだけの準備。その中には付近住民の避難も含まれる。をして、人払い、防音の結界も遠坂邸を中心にして新たに敷設した。アーチャーの攻撃は爆音を発し、さらには連続での攻撃になるが故に細心の注意が必要であった。

勿論、時臣は必要とあらば自身も戦う覚悟で準備をした。自分が魔術師見習いから、魔術師になったときから魔力を込め続けている宝石や、魔術礼装である柄頭に大粒のルビーが？め込まれたステッキを携帯していた。

アーチャーもやる気十分なのか、午前中は何所かへと行っていたが午後からはずっと遠坂邸に居た。召喚してから最長時間ではないだろうか？一日に遠坂邸に居た時間は。

「王よ、そろそろ時間です」

柱時計の時間を確認し、時臣はアーチャーに告げる。その言葉にアーチャーは頷くと、笑みを深くして立ちあがり、出迎えの為に霊体化して屋根に上がる。愉しみなのだ。どの様な手札を持ってして、格上たる自分に挑むのか。この世のすべてが自分の庭で、その中で英雄として名を馳せた人物が只者で有る筈が無い。英雄王ギルガメツシユにとっては、他者は雑種であると同時に道化なのだ。

「時間通りに来ているな。雑種」

遠坂邸の門前に、白一色のフリフリのついた服に身を包んだキャスターは立っている。その傍には、反対色の黒の鎧と霧に身を包む

バーサーカーも立っている。自身に挑む者と、不敬を働いた者。どちらも蹴散らすべき対象であり、それ以上でもそれ以下でもない。

「よもや、狂犬を引き連れるだけで覆せる戦力差と思っているのか？だとしたら、見当違いも甚だしい」

「いや、勘違いでもなんでもない。宝具の射出さえ凌げる手段があれば、後はお前に届けば勝てる」

その一言は、アーチャーは鼻で笑う。バーサーカーは確かに『王の財宝』を凌ぐのには十分役に立つだろう。しかし、自分の宝具はもうひとつある。

「では、ここまで来てみるがいい」

その言葉と共にアーチャーの背後が揺らめき、剣23、槍20、斧9、槌12、計64挺のもの宝具が展開され、轟音をたてながらキャスターとバーサーカー目掛けて射出された。どれも必殺の威力を持ち、ひとつでも中れば後続の宝具を避けるのは不可能であろうから、結果的に一撃中ればそこで終わってしまう。例え避けられても、射出する数を増やされれば、避けも捌けもできなくなる。故に勝つ為にはその数に達する前に近付き、アーチャーを斬り伏せるしか道は無い。

「！！！！」

「破道の四 白雷」

バーサーカーはキャスターから借りている宝具である刀を振るって、迫り来る宝具の雨を逸らさせる。キャスターはその後ろから先

に軌道が逸れるよう掩護をする。アーチャーの射撃の特徴は数の多さと威力にある。相手の隙についての精密射撃などなく、甘い狙いで乱射に近い。

故にコンビネーションなどない、暴走となら変わらない動きのバーサーカーに、キャスターが合わせているだけだが、それでも即席同然のペアの動きでも捌くには十分であった。

「ほお……」

そして、バーサーカーが一步踏み出した。たった一步だったが、次にはさらに一步進み、その次は先程より短い間隔で踏み出した。

「だが、いくら地を進もうがここまでは届かんぞ？」

地の利は完全にアーチャーにある。場所がマスターの拠点というものもあるが、それ以上に高低差が大きかった。キャスター達は距離を詰めるのも重要だが、同じ位に高低差を無くす必要もある。素直に遠坂邸内の階段を使う必要がないとは言え、普通なら近付くだけでも苦勞するのに高低差も埋めるのは非常に厳しい。そう、普通なら……

「……………」

「なあに……？」

前へ前へと愚直にも感じられる程に一直線に進んでいたバーサーカーの足が、突然なにも無い場所を踏み締めて坂を上るかのように進み始めた。コレにはアーチャーも驚いた。『王の財宝』に納められている宝具の中には空を飛ぶ、もしくは飛べるようにする宝具は数こそは少ないものの確かに存在する。だが、空気を固体であるかの

ように踏めるようにする宝具は無い。もしかしたら、把握してないだけで存在はするかもしれないが。その持ち主はおそらくは、キヤスター。バーサーカーが持っていたのなら、倉庫街で使って直接斬り掛かっていたであろう。

「成る程な……高みに立つ者への足掛かりは有るといつのか。だが、障害物の無い空中ではいいのだ」

ただ直進していたアーチャーの射出宝具が、軌道を直線から曲線に変えてバーサーカーとキヤスターに襲いかかる。しかも、どれも曲がり方が異なっている。これまではただ射出されるタイミングとスピードを見れば完全に全ての動きを読めたのだが、ここにきて曲線に変わったことによって、どれも着弾に“ズレ”が生じるようになった。さらに、空中に上がった事によってアーチャーの攻撃できる範囲が広がり、結果として射出宝具の数が増えた。

「『虚閃』」

キヤスターは不利なる状況を変える為に、左手を掲げるように突き出してアーチャーに中るように虚閃を撃つ。虚閃は宝具を幾つも巻き込みながら突き進むが、Eランク相当の宝具は撃ち落とせただのだが、Aランク以上は虚閃を切り裂いてしまう。切り裂かれたり、幾つもの宝具を撃ち落とすとした虚閃の威力はアーチャーに届く前に随分と削られ、アーチャーの対魔力と『王の財宝』から取り出した武器で簡単に消滅させられた。だが、役目は果たした。

アーチャーが大雑把な宝具の射出に調整を加えようとキヤスターが虚閃を撃った付近を見渡したが、忽然と姿が消えていた。

(消えた?)

「……………」

突然の右側からの咆哮にアーチャーは盾を取り出して来るであろう攻撃を防ぐ。盾は間に合い、バーサーカーの一撃を完全に防いだ。

(取った！)

バーサーカーの攻撃が防がれた瞬間に、キャスターはアーチャーの背後に転移して首を刎ねようと未解放の掬花を横に振る。必殺を確信した。アーチャーはバーサーカーに気を取らており、宝具を取り出すのには若干タイムラグがあるのは解っている。確実な手段でも、楽しめる戦い方ではないが、一番危険なアーチャーを倒せる。アーチャーをここで倒しても、あと4体も楽しめそうな相手がいるし、戦い方自体が自分では一方的に潰されるしかないのだから、つまらなくても納得するしかない。

だが、防がれた。ギリギリで透明な何かでできた盾が出現し、掬花を防いでみせたのだ。

「残念であつたな、雑種。我が気付いておらぬかつたなら、非常に腹立たしい事に貴様は私の首を刎ねておつたであろう」

アーチャーはバーサーカーを防いだ盾を見ながら言う。正確にするなら、鏡の様に磨き上げられた盾の内側に映るキャスターを見ながら言う。アーチャーには見えていたのだ。キャスターが転移してきた瞬間、掬花を振る瞬間が。

「戯れは此処までだ」

アーチャーが右手を上げると、それに合わせて宝具が刃先を下に向けて出現する。

「貴様等が立つべき場所は我よりも下だ。異論はないであろう?」

「逃げる!バーサーカー!」

キャスターの命令でバーサーカーは動きが若干鈍いものの逃げようと屋根から飛び降りたが、遅かった。その四肢へと宝具が突き刺さって地面に縫い付ける。逃げると言ったキャスターは、転移を使ってバーサーカーの影へと移動して助けようとしたが、鎖が出て来てバーサーカーを縛り上げる。

「では、これより処刑にうつる。我に挑んだ心意気と首を刎ねかけた事に敬意を評して、コレでトドメを刺してやる」

アーチャーの手に握られたのは、剣であった。しかし、それは異形の武器であった。柄があり、鍔もある、刀身もある。それだけなら、現存する剣となんら変わらないであろうが、刀身が違った。3段階に連なる円柱と、切っ先に当たる部分には螺旋状に捻じくれた鈍い刃がある。

「なりません、王よ!こんな早期の段階に、王の至高の剣たる乖離剣を使うなど!」

使ったとしても、『王の財宝』だけで済ますと高を括っていた時臣だったのだが、アーチャーが事もあろうに乖離剣を出したので止めるべく2階の窓から身を乗り出して屋根の上のアーチャーへの説得を試みたのだ。宝具を曝すのもそうだが、破壊範囲が確実に結界外に出てしまう。

「黙れ!」

時臣は必死に次の言葉を考えていたが、アーチャーの一言で黙ってしまう。

時臣が乖離剣と呼んだ剣は、円柱の三つの刀身を交互に回転させて既にタメの段階に入っており、本気であると窺わせる。滾り溢れる魔力は膨大であり、どれ程甘く見積もっても対軍宝具以上であると判る。

だが、魔力を溢れさせているのはもう一つあった。ソレを感じ取った時臣は目を疑った。

発生源はキャスターが造っている灰色の光の球体。見ればソレに自分の血を混ぜ込んでいる。血は魔力を通すのに効率の良い媒体であるのは、魔術師ならまず知っている事。では、血を使って造られているのは何なのか？最も単純な答えは効率を高めた魔術、もしくは魔法。そして、乖離剣に対抗するように造られている。

「抗うか！それも良い！」

いざ仰げ

『天地乖離す』

「『王虚の

グラン・レイ

開闢の星』！」

閃光』！」

両者が放ったのは魔力の束。奇しくも、似たような攻撃であったが故に拮抗しあう。『天地乖離す開闢の星』と『王虚の閃光』では『天地乖離す開闢の星』の方が格が上である。そもそも元となった伝承からして規格外である。天と地を切り分かち、その判別に確たる姿を与えたモノだ。判別としては対界宝具。

それに相対する『王虚の閃光』は、一瞬で有り得ないくらいの敵

を門ごと消し去ったくらいである。判別としては対界宝具より劣る対城宝具。

だが、アーチャーは全力で使っただけではない。なぜなら、全力を出せば今ある世界ごと壊してしまうからだ。それにより、拮抗したまま不安定になり、2人の丁度中間で爆発した。

爆風に煽られながらもアーチャーは依然として悠然と屋根の上で見下ろしていた。対するキャスターは、急激な魔力の消耗によって息も荒く片膝を付く。

「全力ではなかったとはいえ、私の『天地乖離す開闢の星』を相殺したのは誇りに思うが良い」

余裕な態度で、アーチャーは言う。傍から見ても、キャスターにはもう抗う力など無い。勝者たるアーチャーは笑みを浮かべて敗者であるキャスターを見る。

「光栄だ……」

まだ息も整ってないのに、キャスターは無理をして立ちあがる。

「次があれば、また挑むのを心待ちにしておくぞ。アーロニーロ・アルルエリ」

「それは…良い。次があつたらな」

笑い、アーチャーは今度こそトドメを刺すべく乖離剣を振り上げる。

だが、振り下ろす先に別の刀がアーチャーへと振り下ろされた。

「狂犬めがああああああああああ……！！！！！！」

遠坂邸（後書き）

霊子の足場

分類上は宝具に当て嵌まらない破面としての基本能力。

霊子を固めて足場にでき、壊れたりしない限りは足場として大抵の場所ので使える。

基本的には自分の足元だけに展開させて使うが、自分を基点として多少の範囲に展開可能。

壊したり消したりしない限りは使えるので、誰であろうと乗ることが出来る。

『王虚の閃光』

空間を歪める程の霊圧の塊を放つ

ランクA++ 種別 対城宝具 レンジ1〜99 最大補足100
0人

遠坂邸2 (前書き)

感想 教授様、unlimiter様
ありがとうございます！

遠坂邸2

キャスターは弱い。しかし、それはアークローニーロが弱いという訳ではない。あくまでキャスターとしての座クラスに縛り付けられている為に、弱体化している。速さも力も要らない技術であれば、生前となんら変わらないモノを出せる。しかし、大半の技はどちらかが必要であるので生前となんら変わらないモノはほとんど無い。では、そんな状態をどうにかするべくとる選択は？自身による宝具での強化か、他人の手を借りるしかない。楽しむであれば、他人の手はあまり借りたくないが、勝つ為なら躊躇わない。アーチャーはソレを身を持って知った。

黄金の鎧を切り裂き、バーサーカーの持つ2振りの刀 侘助
と鏡花水月 はアーチャーに傷を負わせる。なぜ四肢を貫かれ、しかも鎖で縛り上げられていたはずのバーサーカーが傷などまるでなかったかのよう動いている。

アーチャーにとって判らないのは、短時間でバーサーカーが全快していたことだ。鎖は斬つたりしたのだろう。移動はキャスターが転移させらるのであるう。傷だけは、そう簡単に治るものではなかったはずだ。アーチャーの宝具は、筋肉だけではなく骨も斬られている位置に突き刺さっていた。治療魔術でも一瞬で治せる程度の怪我ではなかった。だから、バーサーカーは戦闘不能として気にも留めなかった。

「図に乗るな!!! 雑種風情が!!!」

なんとか致命傷を避けたのは、アーチャーの幸運によるものである。すぐさま『王の財宝』から宝具を射出するが、バーサーカーには足止めにしかならない。

ひとまずはバーサーカーとの距離を取ろうとしたところで、アーチャーは体が自分の意思に反して動き出したのに顔を歪める。2度目の令呪による強制であった。内容は「私（時臣）を連れて逃げろ」。その命令に従いアーチャーはキャスターに襲われて、顔面蒼白になっていた時臣を助け出して『王の財宝』の中から目立たず、なおかつ速度の出るモノを取り出して逃げ出した。その顔は、終始怒りに染まった歪んだ表情であった。

「追撃をはするなよ。バーサーカー」

令呪による命令「キャスターの命令に従え」のせいで、命令に従わざるおえないバーサーカーは走り出そうしていたバーサーカーは足を止める。

「あの速度には追い付けん。それに、仕込みは出来たから行動は筒抜けだ。…………お前に言っても無駄だったな」

初めから時臣は雁夜との取引で殺すつもりはなかった。しかし、消耗した魔力を少しでも回復するために時臣を襲ったのだが、そのせいで逃げられた。尤も、捕まえた後に逃げられると捜すのが面倒なので、キャスターは魔力を奪う時に同時にあるモノを時臣の体に仕込んだ。それは、アイリスフィール、ウェイバー、ケイネスにも仕込んである。これで、キャスターは全ての陣営の情報が得られるようになった。

「さて、バーサーカー。お前は、マスターの所に霊体化して戻っている。

……何の用だ？間桐臓硯」

「ツッカツッカ！なんじゃ、バレておったか」

庭の隅の暗がり突然盛り上がり、蟲が臓硯の形になって出てくる。

「言っておくが、まだ出来て無いぞ。完成は明日になる。それとも何か？取引が不服になったか？」

「いやいや、あんな良い取引そうそう無いからのう。取引相手が消滅しないように見守っておったわけなんだ。それに、今回の戦いを見てお主が聖杯を掴んでもおかしくないと思つての。どうかの？わしが受け取る物は、聖杯にするというのは？」

どうせ要らんのだろう？そう続けて臓硯はキャスターに笑い掛ける。しかし、その笑みは腹黒い人物がそれを隠しきれずにする見ている人を不快な気分にする笑みであった。

「断る。手に入れた後なら承諾したかもしれないが、俺は確実にしたいんでな」

そう言つてから、キャスターは遠坂邸の中に入っていった。

「道具が随分と偉そうに……。まあ良いかの。あの2人に執着しておる理由は知らんが、あんなモノより良いモノが手に入る。今回は静観と決めておつたしの」

一人で呟き、臓硯は再び蟲に変わって姿を消す。

キヤスターは遠坂邸の隠された書籍を漁っていた。隠されていた書籍はどれも魔術に関する物であり、知識を後世へと遺すための役割を担っている。本気で自分の一族にしか遺さないつもりで術式が刻まれている　おそらく読もうとしたら燃え上がるなどする

モノは捨て置き、聖杯戦争に関する本を捜している。興味はあるが、最優先は聖杯戦争に関する知識、正確に言うなら、聖杯降臨のための儀式の手順と必要なモノだ。

(頼み綱はここしか残っていないんだぞ……)

始まりの御三家である遠坂邸なら、あるだろうと踏んでキヤスターは襲撃したのだ。アインツベルンは聖杯戦争の為だけの城に重要な情報は置いていないであろう。間桐邸にはあるだろうが、間桐臓硯はそう易々と見せないであろうし、偽の情報を掴まされる危険が非常に高い。なにより、キヤスターとしてはもう臓硯とは関わりたくないのだ。

だが、半分は予想通りで、そのまま見える物の中には欲しているモノはなかった。聖杯戦争の略歴みたいな物はあったが、肝心な物はない。処分したのか、誰かに預けるなどしたか、元々なかったかはすぐには知る手段は無い。

「直接取り出すしかないか？」

補完するなら、「遠坂時臣の脳から、直接情報を取り出すしかないか？」である。

そこまでしようと思うほどに、キヤスターからすれば聖杯戦争は胡散臭いのだ。まず、なぜ英霊をサーヴァントして使役して戦うのが理解に苦しむ。それに、なぜ始まりの御三家達だけで完結させ

ないのか。余所者にチャンスがあり、泥棒同然に盗られる危険を冒すのか。なぜ周期が存在するのか。万能の願望機と謳いながら、たった14人の願望を叶えられないのか。

そもそも、聖杯戦争に参加する大前提になる勝者は聖杯が手に入る。これ自体が怪しく感じている。なにをもつて聖杯と定義しているかは知らないが、最大数で12人倒しただけでなんでも望みが叶うのなら、誰も世の中で苦労なんてしない。こういう旨い話は、どこかで考案者が得をするのが常である。

しかし、それを判断する為の情報が非常に少ない。聖杯によりもたらされた情報は役に立たない。そういう聖杯^モがあるのと、必要最低限の常識が与えられるだけで、根本は完全に隠されている。

「まあいい。明日はランサーを襲うとするか」

4時間捜しても見つからなかったので、キャスターは諦めて遠坂邸を後にした。

遠坂邸2 (後書き)

怪しさと満点ですよ、聖杯戦争って。奇跡の代価が何かしらないと。

動き（前書き）

感想 にかさま様

ありがとうございます！

動き

遠坂邸陥落。それはすぐに全マスターが知る事となった。元々遠坂は始まりの御三家の一角であるのと、数多の宝具を射出するサーヴァントを使役していたので、使い魔で見張られていた。その使い魔が、突然消えたので全マスターは誰かが襲撃したと思った。しかし、それが判っても誰も直接行こうとは思わなかった。なにせアーチャーは強力すぎる。襲撃者がどのサーヴァントであろうとも、長くは持たないであろう。勝てる見込みがあるのは、現状ではライダーかバーサーカーくらいでしかない。

だが、マスター狙いでいけば案外いけるかもしれない。サーヴァントを捨て駒し、マスターだけを殺せば優秀な方のマスターとアーチャーが残る。尤も、それは自殺行為なのだが。戦う場所が相手の工房では、圧倒的に相手が有利になる。相手がにわか魔術師でもない限りは、工房崩しなんてモノは正気の沙汰ではない。しかも相手は、冬木の地を代々治めているセカンドオーナーの遠坂家だ。工房の敷設においては、衰退してなければ間桐がようやく右に出るくらいあったであろう。

故に、マスター達は遠坂邸へは新しい使い魔を出すだけに留まった。遠坂が負けるなんてまずないと考えて……しかし、使い魔達が目についたのは見覚えのある戦闘痕と、人の気配がまったく無い遠坂邸であった。結果として遠坂邸は陥落していた。新しい使い魔達が現場に付いた時には全てが終わった後であり、結果だけを知ったマスター達は愕然とした。遠坂邸陥落は、アーチャーの敗退を想像させた。

「アーチャーが敗退した？」

今日もキャスター捜しの一環として『神威の車輪』にのって霊脈巡りの旅をしていたウェイバーは顎に手を当てて考えこんでいた。別にアーチャーが敗退したのはマイナスではなく、むしろ勝率で言えばプラスである。自身のサーヴァントであるライダーの最終宝具である『王の軍勢』に勝てそうなのはアーチャー位でなければ不可能であろう。ライダーの**実力**だけで勝ち抜けるだろう。

そう、イスカンドルは勝利と聖杯を掴むであろう。しかし、それはウェイバーの勝利にはならない。ウェイバーにとつての勝利とは、皆が自分を優秀な魔術師と認める事だ。聖杯戦争に勝利しようとしているのは、手段でしかない。なのに、マスターとして、魔術師として何も出来ていない。せいぜいが魔力提供しかやっていない。それはマスターの義務なのに、それしか出来ないでいる。やった事は川に魔術の名残がないのか調べたのと、キャスターの拠点候補を上げただけである。しかも、どちらも成果は無いも同然の結果であった。

「坊主、具体的な事は解らんのか？」

「ん？あ、ああ。新しい使い魔を送った時には終わってた。多分余所もそうだと思う」

思考の渦に吞まれそうになっていたウェイバーだったが、ライダーに話掛けられて戻って来る。

「……仕掛けたのは、おそらくバーサーカーかキャスターであろうな。あるいは、その両方が……」

「はあ？何を根拠にキャスターが出てくるだよ。バーサーカーは對抗できるみたいだからおかしくはないけど」

「キャスターは勘と言うかだなあ、あやつならやつてもおかしくないと思っただ。相手が王だろっつが、何なんだろっつが気後れするような玉ではない」

豪快に笑いながらライダーは言う。

「だとしても、両方はもつとありえない。共闘なんてまずしないだろ」

聖杯戦争はバトルロワイヤル。自分以外は敵であるのが当然である。共闘を持ちかけられても、まず受けないのが普通である。信用できないのもそうだが、手の内をいずれ敵になる相手に晒さなければならなくなるかもしれないのだ。

「たった一回だけならどうだ？アーチャーという危険極まりないサーヴァントを倒す為だけに、連携など考えておらずに、同時に仕掛ける。もしくは、マスターが操られているとかな。セイバーやランサーは自分のマスターがその様な事をすれば反発するかもしれないが、バーサーカーは反発しないだろっ」

「……」

有り得ない話ではなかった。足りなければ、余所から持ってきて補うのは魔術師らしい考えであるし、キャスターのマスターは魔術師の様にはウェイバーには感じられなかった。暗示などに抵抗力を持つていなければ操ることは不可能でないし、協力しなければ令呪で自害しろと命令させればいいのだ。

「前者だったら、まだ良いけど。後者だったら、次に狙われるのは

「僕達じゃないか？」

「まあ、そうであろうな。余の宝具は最強であるからな。尤も、アーチャーが脱落していればの話になるんだがな」

「なんで脱落していないなんて思うんだよ。相手の工房に攻め入ったんだから、万全の準備をして押し入ったんだろ？遠坂邸が陥落したんだから、アーチャーは脱落したと思うのが自然だろ？」

「令呪を使えば、逃げる事も可能であろう。アーチャーのマスターが瞬時の判断を誤ったり、迷ったりしなければだがな」

「たつた3回だけの絶対命令権は、単純な命令ほど効果が強くなる。条件によつてはサーヴァントのポテンシャル以上の行動も可能にする。その力と、アーチャーの能力を考えれば逃げに徹すれば逃げる事はさほど難しくは無いであろうとライダーは考えていた。」

「アインツベルンの城への来訪。間桐邸への襲撃に続き、今度は遠坂邸への襲撃。キャスターは始まりの御三家の拠点に直接足を運んだ事になるのか……」

新たに手に入った情報に、切嗣は一人で安ホテルの一室で頭を悩ましていた。間桐雁夜とキャスターが手を組んで動いている。それを知りえたのは偶然に近かった。間桐邸を監視していた使い魔が、雁夜、バーサーカー、キャスターが間桐邸に乗り込む瞬間を捉えていた。しかし、捉えられていたの1体だけで、複数配置していた他

の使い魔は捉えてなかったので何かしらの手段で隠蔽していたのであろう。

遠坂邸への襲撃は使い魔を潰されたので見れなかったが、結果は知り得た。アーチャーと時臣は冬木教会に逃げ込み、バーサーカーとキャスターはどちらも欠けずに現界している。現界しているサーヴァントの数が減ったかどうかを知る手段が幸いにも切嗣にはあった。

どちらも今すぐにどうこうは出来ない。アーチャーと時臣は初めから監督役と繋がっていたようであったから、今現在時臣を匿っているのを問い詰めても無駄であろう。

バーサーカーとキャスターも危険であるが、出来る事は限られている。どちらのマスターも平然と戦場に出て来る事が無いであろうし、拠点に籠られると手が非常に出しにくいのと、その拠点が見つからないのだ。獲物マスターが完全に身を隠して居る限りは、魔術師殺しも狩りが出来ない。

出来る事は、セイバーを全快の状態にする。ランサーを退場させるか、『必滅の黄薔薇』を破壊するしかない。だが、バーサーカーとキャスターが共闘しているのでは、最善なのはこっちも共闘するか、サーヴァントを令呪ごと奪って服従させるだ。奪うとするなら、ライダーが好ましい。ライダーの宝具は非常に強力で、セイバーが万全でも勝敗が判らないのであるべく早く始末したいのだ。

だが、セイバーはそれをよしとはしないであろう。捕虜に戦わせるようなそんな行為は、清廉潔白であるセイバーが納得しそうな手段だ。尤も、共闘するにしても、奪うにしても現実的ではない。共闘はまずしようなどと他のマスターが考えない可能性が高い。

奪うのなら他のマスターの所在を掴めないのでは、遭遇戦に期待するしかない。サーヴァントが消えない限りは殺しても令呪は手に入るが、遠距離から狙撃による暗殺は令呪を奪うのならあまり良くない。折角殺しても、監督役の指示で自分達が令呪を回収する前に死体ごと回収されかねない。

確実に奪う為には敵のマスターをサーヴァントより先に殺すか、令呪が宿っている部分を切り離す必要がある。その際に、魔術師として戦い、秘術と秘術をぶつけ合わなければならぬ可能性もある。上手く行かなければ切嗣が死ぬ可能性が高い。

契約する上では、令呪は絶対に必要なモノではないのだが、サーヴァントが暴走したり反逆した場合に最低でも一画は必要である。一画だけであれば、自身の令呪を移せば良いのだがランサーにしてもライダーにしても令呪で強制しなければ従いそうに無い。

「なんにしても、ケイネスの拠点を見つけ出すか、アイリ達が遭遇しないと呪いが解けない、か……」

そう切嗣は呟くと、安ホテルを出て探索にでた。探し求めるのは、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

動き（後書き）

追記 2011年10月11日 設定と違う部分を発見したので修正。
ストーリーには影響無し。

動き2（前書き）

感想 にかさま様

ありがとうございます！

動き2

魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは遜色無しの天才である。家が魔術師の名家である事も加味しても、裕福で 他人から見れば 満ち足りた生活をしていた。その人生で、廃工場に不法侵入をした挙句に、そこを仮とはいえ拠点にしている現状は我慢ならないモノがあった。それはソラウもそうであった。その御蔭で、切嗣の搜索から逃れている側面があったりする。実は、宴の際にアインツベルンの城を襲撃しようとしたのは、まともな拠点を手に入れる為だった割合が大きい。城なら自分もソラウも納得できるであろうし、アインツベルンが拠点としていたのだから地の利は悪くなく、むしろ良い方である。アインツベルンの魔術は錬金術とは有名な話なので、マスター同士の戦いではまず負けられないという自信もあつたが。

しかし、好機と取って襲撃しようとして乗り込んだ先では宴が開かれていたせいで何も出来なかつたばかりか、キャスターに強制転移させられて良いとこ無しで終わった。その後でアインツベルンの城が外見上は無人になったのを使い魔で確認したのだが、畏の危険性がある為に手出しがでずにいた。

そんなケイネスにとって明るいニュースになったのが、遠坂邸陥落である。尤も、それが麗しのソラウの機嫌を良くはしない出来事だった。ソラウの不満はみずばらしい場所にいるのもそうだが、ランサーが明らかにソラウを避けている事であった。ランサーの魔貌の虜になって、恋する乙女のような状態になっているのだから仕方が無いであろう。

「ランサー、今日こそはその役目を果たせ」

「ハッ」

(昨日も、一昨日も同じ事を言っただけでなかったかしら?)

壺に入っている魔術礼装を抱えて拠点を出て行くケイネスとランサーを見送ってから、ソラウは使い魔を操って情報収集を再開する。彼女の行動原理はケイネスが勝つ事ではなく、ランサーであるディルムッド・オデイナが勝つ事である。女として凍っていた、もしくは枯れていた感性に火をつけた。ソレが魔貌による現象であろうとも、ソラウは女として抑えられなかった。

その事実はケイネスは知らない。ランサーにただならぬ感情を向けているのには気付いているが、ソフィア家の一員で魔に対する抵抗力を持つ彼女がランサーの魔貌の虜になっているとは思っていない。事実、アイリスフィールやセイバーは、ランサーの魔貌に前にしても抵抗力で無効にしていた。ソラウが持つ抵抗力は十分なモノであるが、抵抗する意思が無ければ効果を発揮しないのだ。

(ランサーどうかご無事で……)

そんな彼女は、死地へ向かっている未来への夫ではなく、その

魔術師ならそう見るべき 道具の心配をしていた。

「運が無いな……このままではセイバーとランサーが遭遇してしま

う

霊体化しているバーサーカーを連れだしたキヤスターは、戦支度の格好では無く昼間にしている格好にて路地裏で呟く。アイリスフィールとケイネスの位置情報と、進路を考えた結果である。

ランサーを襲撃予定だったが、ランサーの拠点には魔術師とはいえマスターではない女性がいたので、拠点を襲撃するのは止めたのだ。ランサーとの戦いに巻き込まれて、喰っても意味が無い程の損傷を避ける為の配慮な訳だが……

「まあ、問題無いか。その為のバーサーカーだ」

見えないはずなのに、バーサーカーの眼光が鋭くなったのを感じたキヤスターは命令を下す。

「実体化しろ。転移で遭遇しそうな位置の近くに行く。セイバーの相手をしてもらうが、殺すなよ」

「アイリスフィール、この闘志は間違いなくランサーです」

「そう……。呪いを解くチャンスね」

「それもそうですが、私にとっては唯一騎士として戦える機会です」

ランサーの放つ闘志を感じ取ったセイバーは、笑ってランサーが

いるであろう方向を見据えている。アイリスフィールは内心穏やかでは居られなかった。切嗣は間違ひなく闇の中から見守っており、確実に聖杯戦争の参加者を消すような手段を取るのには判っている。その手段はセイバーの掲げる騎士道とは対極の位置にある手段になる。それはセイバーも判っているだろう。

わざわざ「唯一騎士として戦える機会です」なんて口に出したの
は、手を出さないで欲しいという意思表示なのだろう。しかし、「
魔術師殺し」がその意志を尊重はしないであろう。

「セイバー……」

「皆まで言わないで下さい、アイリスフィール。判っています。だから、最初から全力で戦います。手を出す前に決着をつけられるように……」

悪辣な手段は止められない。だったら、それが行われる前に事を終えるしかセイバーには手段がない。騎士として正々堂々とした戦いを互いにしたいだけのだが、その戦いを用意した聖杯戦争という枠組みのせいで、互いにマスターによって不本意な決着の着き方になるところであった。

「やはりお前か、セイバー」

セイバー達が着いた場所は新都に行く為の橋であった。人が普段通る場所ではサーヴァント同士が戦うのは手狭だが、その上にある車道なら十分な広さがある。位置条件からして、ビルのような高層建築物から無い限りはまず見えないというのも良い。更に、ケイネスが結界を張った事で音が漏れる事も、人が近寄る事も無い。十分な広さがあり、ある程度隔離されたかのような状況は神秘の秘匿をしつつ戦うには持って来いの場所であった。

「ああ、そうだ。互いに悔いの残らない戦いにしよう、ランサー」

「元より、そのつもりだ」

セイバーとランサーは笑い、得物を抜く。

「これ」

「尋常に」

「「勝負!!」」

セイバーは不可視の剣を振り上げ、ランサーは短長の2つの槍を振るって目の前の敵に向けて最良の一撃を叩き込んだ。

4回の金属音と、4振りの刀がその一撃を防いだ。ランサーの2槍はキャスターが防ぎ、セイバーの剣はバーサーカーが防いだ。突然割り込んできた2人に、セイバーとランサーは驚愕を隠せなかった。

「キャスター……?」

「バーサーカー……?」

それぞれ相手のクラスを確認するかのようになり、意識を切り替えて眼前の相手を敵と認識して一旦は距離を取る。

「なんのつもりだ、キャスター。騎士の戦いに横槍を入れるとは」

「騎士の戦い?それがどうした。今の戦いはなんだ?聖杯戦争だ。」

戦争では横槍なんて日常茶飯事だろうに。それとも何か？マスターを狙って欲しかったか？」

「……」

キャスター達がマスター狙いの戦いをしていれば、セイバーとランサーはそれこそ手出しが出来ない内に敗北していた。やろうと思えば、バーサーカーと2手に別れてそれぞれのマスターを殺すなんて造作も無かったであろう。

「それではつまらん。だから、わざわざこうして止めるように横槍をいれた訳だ。バーサーカー、もういいぞ」

キャスターの言葉で、それまで動きを見せなかったバーサーカーが咆哮を上げてセイバーに斬りかかる。振るうのは2振りの刀。それがセイバーを斬り裂かんと風を斬りつつ肉薄する。

「セイバー！」

「余所見をするな。続き、という訳ではないが存分に闘おうか」

まるで倉庫街での再戦かのような構図になった。セイバー対バーサーカー、ランサー対キャスター。違うとすれば、キャスターとバーサーカーが手を組んでいる事であろう。

「クッ！」

バーサーカーの攻めは二刀流である利点である手数が多いのを活かした、反撃の隙を与えない終始攻めにまわる狩人のような戦法であった。弱点としては、動きが多くなると体力の消耗は比例して多

くなり、動きが鈍ったり、攻め切れなければ息切れを起こして途中で攻撃の手を緩めざるを得ない状況になる。それは、人間であった場合の話だが。サーヴァントの場合は、魔力が尽きない限りはなんら問題無い。マスターである雁夜が、以前のままであれば下手をすれば途中で死んでいたであろう。しかし、雁夜はバーサーカーに十分な魔力提供を行えている。自滅は今のままなら有り得ない。

前回の二の舞であった。魔力放出のスキルでセイバーはなんとかバーサーカーの猛攻を防いでいるが、それが何時まで続くかは判らない。バーサーカーが篡奪の宝具以外を使えたら、使わした時点でセイバーは負けてしまうかもしれない。

(如何にか……如何にかできないのか!?)

手が無い訳ではない。剣を不可視にしている宝具である鞘であるインヴェジブル・エア風王結界の応用である風王鉄槌ストライク・エアを使えば不意打ちを叩き込める。しかし、未来予知に近い彼女の直感がそれは危険だと告げている。たった一撃叩き込んだところで、バーサーカーが倒れ伏すなど無いであろう。

「何をやっている！キャスター如きに時間をかけるな！」

ケイネスは自分のサーヴァントを叱りつけるように怒鳴るが、それは無意味でしかなかった。ランサーは白兵戦に必要な俊敏と筋力においてはキャスターを上回っているが、それ以外は劣るか同等だ。

「Scalpp!」斬

自分のサーヴァントを愚鈍と決め付けて、ケイネスは壺の中から

出していた自身の魔術礼装の『月霊髄液』で掩護を開始する。『月霊髄液』は、ケイネスの魔術師としても稀有な2重属性である風と水が得意とする流体操作を遺憾なく発揮できる攻守万能の魔術礼装である。

常温で液体として存在する金属である水銀を使う事によって、攻撃の際にはその重さと高圧、高速で発生する運動エネルギーで超高圧水流カッターかのような斬れ味を発揮する。

防御においては厚さ1ミリ以下であろうとも、魔力で圧搾されれば鋼鉄となんら変わらない固さを発揮する。

そして、最大の利点は液体であるから形状は変幻自在。攻撃は鞭のようにしならせて遠方の敵を攻撃できれば、槍のようにして近くの敵を串刺しにもできる。防御では全方位からの攻撃であろうとも、球状にすれば相手の攻撃が『月霊髄液』の張った防御膜を突破できる攻撃をしない限りは絶対防御を発揮できれば、本当に壁のようにして分厚い防御壁を作ることできる。無論、あくまで存在する水銀を使いまわすので、量　今回は10リットル　以上に必要なる形状は不可能である。また、使いやすくする為に幾つかの形状が設定されている。

「くだらん」

だが、それらは全てが人間基準である。キャスターから言わせれば、単純な一撃だけを幾ら放たれようと中らない。サーヴァントにとっては人間が速いと言っても、普通に目で追える速さである。俊敏が極端に低いサーヴァントなら、至近距離であれば中るだろう。威力も、サーヴァントに傷を付けるには十分にある。

「主よ、危険ですから下がっててください！」

「黙っておれ！最弱と言われるキャスター1体に手間取っておる貴

様が言える事か!？」

(仲の悪いことだな……)

マスターとサーヴァントでありながら、連携など考えていない人組にキャスターは呆れたが、ランサーにはもう見るべき所が無いと見切りをつけ、決めにかかる。

「射殺いころ「AAAアアアLaLaLaLaLaLie!イッ」なア!??」

「またもや突然に戦闘に介入してくる者のせいで、決めるのを先延ばしにされた。」

動き2（後書き）

思い付いた最強な気がする組み合わせ。

バーサーカー＋月霊髓液

攻守万能な宝具の完成。対魔力がどれ程作用するかによって変わるけど。

ト・フィロティモ（前書き）

感想 煌 焰様、ニコラス様
ありがとうございます！

ト・フィロティモ

突然の乱入者はライダーとウェイバーであった。あの様な掛け声（？）と轟音と光を撒き散らしながら空から突撃してくるようなのが他にも居たら笑えないが……

「避ける！バーサーカー！」

避ける為に身を翻しながら、キャスターは自分とランサーを分けるように突撃したライダーが向かっている先にいるバーサーカーに命令を下す。間一髪で、バーサーカーは二度目の『神威の車輪』の餌食になるのを免れた。

「中断だ。攻撃するな」

「……ア^アr……ア^アr!!」

バーサーカーは下されている令呪による命令「キャスターの命令に従え」に抗って、動きこそ緩慢だがなおもセイバーに斬りかかるうとしている。

「チッ」

その動きを見たキャスターは舌打ちをし、バーサーカーの影に転移する。バーサーカーが暴走するようであれば、すぐにでも逃げられるようにだ。

令呪による命令は、単純であればある程に強力に強制力が発揮される。逆に言えば漠然とした命令には強制力は低く、サーヴァントによっては無視したり抗うことが可能になる。「キャスターの命令

に従え」は、漠然とした命令である為に強制力は低い。それこそバーサーカーの行動に影響が出るとはいえ、命令を無視できるくらいには。

それでも、元々マスターの命令すら無視するバーサーカーを大体は従わせられるのは大きい。マスターである雁夜に代わって、現場で命令を下せるのは令呪一画の消費にはお釣りがくるとさえマスターは思っていた。

「ライダー……」

またもや戦闘に乱入してきたライダーに、セイバーとランサーは何とも言えない表情を浮かべていた。必勝を確信していた訳ではないが、ライダーに戦いを中断させられたのはこれで2度目だ。

「さて、弁解を聞こうか。キャスターよ。なぜ、このような事をしておるのか」

さながら部下が起こした行動を窘めるかのようにライダーはキャスターに問い掛ける。彼からすればなぜこんな事を起こしたのかが解らない。勝つためだったら、決着がついたところで襲えばいい。

「戦う為だ。ランサーを倒し、セイバーを倒す。いずれはバーサーカーとも正々堂々と戦うつもりだ。ライダー、お前もな……。順番は少し変わるかもしれないがな」

「なんだ、戦闘狂だったのか？」

「まさか。今は戦争中だからな、戦える内に戦いを楽しもうと思っ
ているだけだ」

「では、余が、いや、余達が相手になろう！」

宣言と共に、キャスターとバーサーカーはライダーの固有結界へと引きずり込まれる。

「なに勝手な事をやっているんだよ、ライダー！」

「いやあ、すまんすまん。ほっとくと、バーサーカーがセイバーに斬り掛かっていたのであるうからな。それでキャスターがどう動くかは解らんが、みすみす逃す必要もないと思ってだな」

『神威の車輪』と一緒に乗っていたウェイバーは、否応無しに一緒に固有結界の中に来ることになった。それ自体はまだ良い。自分だけが敵のマスターとサーヴァントの前に放り出されるよりかは、数百倍はマシである。しかも、敵の中にはケイネスが居る。セイバーのマスターを倒すのを優先させるかもしれないが、アインツベルンが得意とするのが戦いに不向きな錬金術なので、ウェイバーの番が来るのはさほど遅くなくであろう。

「そこじゃ無い！なんでアーチャーを倒した組み合わせを固有結界内に入れたかだよ！やろうと思えば片方だけでも出来ただろ！」

『王の軍勢』は最強の宝具であるとウェイバーも思っている。しかし、それ程の宝具を持ってしなければ倒せないと思っていたアーチャーをキャスターとバーサーカーは倒したのだ。どの様な戦いがあったかは知らないが、どちらも欠ける事無く倒したのだからキャ

スターかバーサーカー、もしくは両方が強力な宝具を持っていると考えられた。

「言ったであろう。逃がす必要もない、と」

思わず身震いするような獰猛な笑みをライダーはする。その笑みはウェイバーに、獣、それもライオンなどの様な猛獣と言われるような肉食獣を想像させた。その笑みはアサシンの集団を蹴散らした時と同じであった。

「勝てるんだらうな？」

「勝つ勝たないではない。征服するのが余の戦いであり、王道だ。始める前に乗り換えんとな。キャスターの奴は律義に待つておることだしな」

遠目に確認できるキャスターとバーサーカーは配置された場所から動く事無く、ただ立っていた。何も動きが無いのが逆に不気味に感じられるが、ライダーは気にしたような素振りをまったく見せず「神威の車輪」から降りてブケファラスの背へ跨る。

「さあ、坊主、戦車の御者台よりはちよいと荒れる乗り心地だが、まあそこは腹を括って耐えることだ。ほれ、乗るがいい」

ライダーはそう言うのと腰を後ろにずらしてウェイバーが乗れるスペースを開けて手を伸ばす。

だが、ウェイバーはその手をすぐに取りれなかった。果たして、自分がそこに乗るに相応しい存在か？疑問に思うまでもなく、答えは否であった。聖杯戦争前のウェイバーであれば、是と考えたであろう。自分好みの自画像を鏡と信じて疑わなかったような頃なら。聖

杯戦争において、自分がどれ程無能かを理解せざるおえなかった。キヤスターの拠点を捜し出そうとしたが全てが空振りに終わり、戦闘らしい戦闘はしてないが、もし敵のマスターと戦ったら対等に渡り合えたか疑問であった。

「ボクは、乗れない。乗れる資格が無い……」

征服王イスカンドルと共に居るのにさえ、この身には不釣り合い。それが、ウェイバーの自身への評価。

「坊主、何を言っているんだ？資格なんぞいらん」

「ッ！？でも！」

「でも、ではないわ。まあ、資格が必要と言うのなら、貴様はもうすでに持ってある。朋友よ……」

「え……？」

朋友。そう呼ばれると思っていなかったウェイバーは、宝具の一撃を受けたかのような衝撃を受けた。ライダーが朋友と呼ぶのは英霊のような伝説や伝承を持つような存在ばかりと思っていた。

「余と共に戦場に臨んできた貴様を朋友と呼んで誰を朋友と呼ぶ！」

『然り！然り！然り！』

王の招集に応じた英霊達は王の言葉に是と返す。全員が初めから王の家臣であった訳ではない。かつては自分の国を守るためなどで、

イスカンドルに剣を向けて戦った事すらある。だが、その様な者も征服された後でかつての『夢』を思い出し、自分達と違って今この瞬間も『夢』に生きているイスカンドルに魅せられた。

「……………ボクが……………ボクなんか、で……………本当に、いいのか……………オマエなんかの隣で、ボクが……………」

溢れる嬉し涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにしながらウェイバー再度問わずにはいられなかった。ライダーの言葉が幻ではないのかと疑ってしまう程に考えられなかったのと、歓喜の感情が大きかった。

「貴様は今日まで、余と同じ敵に立ち向かってきた男ではないか。胸を張って堂々と余と比肩せよ！」

「……………」

ウェイバーは涙と鼻水を袖で拭き取ると、自分に差し出されている手をしっかりと掴んで自分もイスカンドルのようにブケファラスの背に跨る。

「皆の者！蹂躪せよ！」

『アアアア
A A A A L a L a L a L a L a L a i e ! ! 』

王の号令のもとに下された命令に、イスカンドルの家臣であり朋友である英霊達とウェイバーは声を高らかに張り上げて雄叫びを上げて突撃する。

全ては、勝ちに征く為に

彼方にこそ栄え在り（前書き）

感想 コクイ様、煌 焰様、竜華零様、かにかま様、ニコラス様、
卓あん様

ありがとうございます！

彼方にこそ栄え在り

迫り来る『王の軍勢』の前にしても、アローニーロは自然体でいた。焦りも、慢心も無い。

「バーサーカー、邪魔にならないように霊体化している」

「アアアア A A A A L a L a L a L a L a L a i e ! ! 」

アローニーロは左手の手袋を取り、その下に隠している口の様な器官を露出させる。自身を異形の化け物である証明になるソレが宝具であった。

「喰い尽せ！！」グロトネリヤ『喰虚』！！」

魔力の奔流によって、砂塵を巻き上げて一時的に全員の視界を塞ぐ。アローニーロの宝具が発動しきつた後に出現したのは、化け物であった。蝟のような足。臼歯が並んだ複数ある口。それらがキヤスターの下半身となっている。上半身は両手に手袋を着けていないのと、露出によって異形の左手が見えている以外に変化はない。全てをまとめた大きさは、見上げる必要がある程に高く、近付けば横幅もあるので全貌は見えないであろう。

ランクD 対人宝具 『喰虚』 効果は普段は人型に納めているアローニーロに、本来の姿を取り戻させるだけの宝具。あくまで効果はそれだけなので、ランクは低く、種別も対人宝具に収まっている。しかし、ランクこそ『王の軍勢』に大きく劣るが、人外の巨体を活かした攻撃をすれば、一撃で戦況をひっくり返せずとも、徐々に削ることは出来る。

その巨体にイスカンドル達は驚いたものの士気に下がることなく、逆に未知の相手を倒してその先へと進む為に士気は最高潮であったのに更に上がっていく。未知なる獣、未知なる異民族による戦術と兵器に翻弄されたの1度や2度でない。いくら未知なる存在であろうとも、それだけでは恐れることなど無い。

アサシンを蹂躪した時と同じように、鍔型陣形を形成したイスカンドル達はそのまま突撃する。

その先頭にいるイスカンドルを確認したアールローニークは、下半身から既に槍になっている揷花を取り出す。

「アールローニーク!!!」

「イスカンドル!!!」

互いに真名を呼ぶ。

ブケファラスが跳躍し、背に乗っているイスカンドルとウェイバーをアールローニークへと届かせる。イスカンドルはキュプリオトの剣を振り下ろし、アールローニークは揷花で打ち上げるように振る。キュプリオトの剣と揷花がぶつかって盛大に火花を撒き散らす。一撃打ち合っただけで、慣性の法則と重力によってブケファラスと背に乗ったイスカンドルとウェイバーはアールローニークを飛び越えて反対側に着地する。

2人が振り返り、信じられないモノが目飛び込んできた。最強である軍勢が、逆に蹂躪されていた。

全員がアールローニークに突撃したが、玉砕みたいに真正面からぶつかった訳では無く、ブケファラスが跳躍してからアールローニークの左右に展開し、通り際に手に持った各々の武器でアールローニークを攻撃した。体の大きさからして、一撃がどうしても効果が薄いのは仕方が無い。それは全員が解っていた事であり、さほど気に入していなかった。自分達が一撃入れられるまでは……

肉体だけを使った原始的な攻撃。アークニー口のした攻撃は、蛸のような足による横薙ぎであった。進行方向から来る足を避けられず一撃で何十人も落馬させられた。落馬させられる方も武器を向かってくる突き出して突き刺すが、やはり効果は薄い。

後続の英霊達は大きく迂回して足の攻撃範囲からなんとか逃れたが、被害は大きかった。落馬してしまつた英霊達は武器を足に突き刺してしまつたので素手で戦わなければならない。人型が相手だつたら、それでも戦えたであろう。しかし、今回の相手は見上げるほどの巨体を誇る化け物だ。傍から見れば、絶望的であつた。だがしかし、諦めてはいない。その眼には闘志をみなぎらせ、アークニー口に立ち向かう気でいるのが解る。

そこから地獄が始まつた。足のひとつが落馬した英霊の1人を器用に掴み、臼歯の並ぶ口に放り込み、一回噛んでから飲み込んだ。誰もが目を疑つた。人でも入りそうな口だと思つていたが、本当に喰らうとまでは思つていなかった。

「あ……ありえない……。サーヴァントがサーヴァントを食べたからつて、ステータスが上昇するなんて……」

マスターの透視力によつて、ウェイバーだけはアークニー口の変化に気付けた。低かつたステータスが目の前で上昇したのだ。マスターが変わることによつて、供給される魔力量が変わるなどしてサーヴァントのステータスが変化することはあるのは判つている。魔力があれば、ステータスを上昇させる事も限界があるが可能である。だが、目の前で起きたのはそれとは違つたように感じられた。

「1体でこんなものか……採算は取れるな」

笑つた。仮面越しなのに、それが判つた。同時に、まだまだ喰うのも判つた。餌食になる前に助けようと動くが、離れすぎているの

で足が掴む前に助けるのは無理であった。

イスカンドル達は知り得ないが、『喰虚』は燃費が悪い。人間サイズのサーヴァントを現界させ続けるのにも魔力の消耗は激しい。それが巨大になったのだから消耗は倍加では済まない。大きさを考えればそこまでは燃費は悪く感じないが、1対多以外の状況ではどうもその巨体を活かしきれない上に、神秘の秘匿の観点から使いにくい。だが、『王の軍勢』は固有結界を張って、あまつさえ増援を呼ぶ。『喰虚』の運用の難点である神秘の秘匿は固有結界の中に居る間は気にしなくても良く、理想的な1対多の状況になる。しかも、アローニーロの自身に宿るもうひとつの宝具は『喰虚』を使っている間は真名解放をしなくても効果を發揮できるので、サーヴァントを喰らえば魔力を喰ったサーヴァントが持っていた分だけは回復できる。イスカンドルは詰んでいた。『王の軍勢』が『喰虚』と相性が悪いというのもあったが、消耗狙いで消極的な戦法を取っていたとしても、別の宝具でまとめて斬られていただけであった。

「……………ッ」

ウェイバーは絶句するしかなかった。最強と思っていた軍勢は、次々とアローニーロに喰われていくのだその心中は想像を絶する不安などが溢れている。だが、逃げ出すという選択肢は考えられなかった。しかし、自分に乗せたブケファラスはアローニーロに向かって駆けず、イスカンドルは駆けよとも命じない。

「ライダー……………」

見上げれば、ライダーは厳かな真顔でキャスターと軍勢の戦いを見つめている。

「そういえば、ひとつ訊いておかねばならないことがあったのだ？」

「……え？」

「ウェイバー・ベルベットよ。臣しんとして余に仕える気はあるか？」

その問いは、ウェイバーは全てを投げ打つても欲したモノであった。朋友と呼ばれただけでも、身に余る光栄だったのだ。それ以上は、届かないと解っていた。それでも欲したモノだ。

「あなたこそ　あなたこそ、ボクの王だ。あなたに仕える。あなたに尽くす。どうかボクを導いて欲しい。同じ夢を見させてほしい」

「うむ、よかるう」

ここに　イスカンドルとウェイバーの間に　王と家臣の絆が生まれた。格式ばった儀式など不要。ただ、互いに了承するだけがいい。

イスカンドルがこの場で、求めた理由はウェイバーに解った。必死の覚悟を持って挑まねば、征服などアローニアにできない。勝つ勝たないではなく、征服する。それがイスカンドルの王道なのだから。

「……え？」

自分のその覚悟を持って挑もうと思っていたウェイバーの体は、イスカンダルの手によってブケファラスの背から降ろされた。

「夢を示すのが王たる余の務め。そして王の示した夢を見極め、後世に語り継ぐのが、臣たる貴様の務めである」

なぜ？と、問う前に王は言う。

「生きる、ウェイバー。すべてを見届け、そして生き存えて語るのだ。貴様の王の在り方を。このイスカンダルの疾走を」

最初の王の勅命は生きる。それに対してウェイバーは俯いたまま顔を上げない。それをイスカンダルは首肯と受け取った。

「さあ、いざ征^ゆごうぞ、ブケファラス！」

イスカンダルは愛馬の脇腹を蹴り、アローニーロに向かつて征く。このままでは全滅も時間の問題とし、イスカンダルは短期決戦にしようとする。幸いにも、アローニーロの上半身は人とあまり変わらない。キュプリオトの剣で心臓を貫くか、首を刎ねれば決着はつく。問題は、そこに至れるかだ。届く前に足で叩き伏せようとしてくるであろう。

「全軍！アローニーロを包囲せよ！」

なら、少しでも注意を逸らすしかない。王の命令に英霊達は色めき立ち、喜び勇んでアローニーロを包囲する陣形を作り出す。人外のアローニーロでも、後ろは死角になる。攻撃できないわけではないが、それでも効果はある。

イスカンダルは真正面からアローニーロに突撃する。それに合わ

せて、英霊達も突撃をする。

「アアアア
A A A L a L a L a L a L a i e ! ! !」

雄叫びが固有結界内に満ち、飽和し、反響する。

ト・フィロソフィモ
「彼方にこそ栄え在り」

己が人生と王道の基本。辿り着かんと愛馬と家臣達とで駆け抜けた。これは再演だ、再び愛馬と家臣とで挑んでいる。違つとすれば、これは泡抹の夢。

駆け抜ける

思わぬウェイバーの掩護にイスカンダルは微笑む。令呪によるバツクアツプを受け、イスカンダルの騎乗スキルが限界以上に高められる。

キャスターの元へ到れ

ブケファラスが少ない抜け目を掻い潜って足を避ける。迫り来る足の先端をキュプリオトの剣で切断する。そうして、届く範囲にア
ーロニーロの上半身を捉えた。

勝て

「はああアアツ!!」

再びブケファラスの跳躍によって、アローニーロの居る高さに合わせる。最初と違うのは、アローニーロを飛び越えられる勢いが無い。それに対してアローニーロは掬花でイスカンダルを貫こうと突き出す。しかし、その突きはブケファラスが主人を守るべく頭で中
りに行った。掬花はブケファラスを貫いて止まるが、イスカンダル

は止まらずに、頭を貫かれたブケファラスから更に跳躍した。

跳んだ位置は絶好の場所であった。完全にアールロー口の懐に入り込み、キュプリオトの剣で両断する勢いで振り下ろした。肩から侵入したキュプリオトの剣はそのまま下へと潜り込み、止まった。

キュプリオトの剣の幅の2倍程の深い傷をアールロー口に負わせたが、終わっては無かった。

「クソっ！がああああああああ！！！」

左腕は力無く垂れ下がり、動く右手は擦花を離してイスカンドルを殴り付ける。踏ん張る足場が無いイスカンドルは殴られて吹っ飛ぶ。それによって握ったままのキュプリオトの剣でさらに斬られたが、そのままにしておけば下手すれば左側を両断されていたであろう。アールロー口はすぐさま影から補肉剤を取り出して使う。

(これで後1回分しか残っていないな……)

傷はまるでなかったように治ったが、アールロー口の保険である補肉剤は残り1回分だけになった。時間と魔力さえあればまた作れるが、今のところもう作る必要は無いと考えていた。強敵には既に勝ちは見えているのだから。

「まだそんな隠し玉を持つておったか……」

「切り札2枚も使させられるとは思ってなかった。予想以上だったよ、お前とお前の軍勢は」

アールロー口は『喰虚』を解き、アールロー口は人型に戻る。そして、近くに残っていた『王の軍勢』の英霊を殺す。それに伴って固有結界が揺らめいて消える。『王の軍勢』の固有結界は、全員で

維持している。つまり、一定以上の人数を殺せば破綻して消えてしまふ。固有結界が消えた事で元の場所に戻ってきたが、セイバーとランサーとそのマスター達はいない。アローニーロにとっては好都合だが、多少ひっかかるモノがある。

「どれ、もうひと踏ん張りといこうか」

吹っ飛ばされて倒れてたイスカンドルは立ちあがり、キュプリオトの剣を握りなおしてアローニーロと対峙した。

彼方にこそ栄え在り（後書き）

『喰虚』 ランクD レンジ0

刀剣解放する事によって、本来の姿になる。解放した際に、傷が塞がるなどの効果も有る。

現界しているのに必要な魔力が跳ね上がり、マスター以外にも魔力を補給する手段がないと二分もしない内に魔力切れを起こす。

至りて……（前書き）

感想 にかさま様、ニコラス様
ありがとうございます！

至りて……

『王の軍勢』は消滅したが、イスカンドルは諦めてはいない。消耗しているのはお互い様であるし、どちらも大した傷を負っていない。アローニーロは、補肉剤で治したのだが。

両者は相手しか見ていない。今の2人はセイバーやランサーがどこに行つたなんて瑣事に等しい。今は目の前の相手が全てだ。

掬花とキュプリオトの剣が衝突する。剣と槍では間合いの差で槍が優勢なると思えるが、イスカンドルとアローニーロは互角の戦いをしてきた。持ち前の体格の良さをで間合いを補って戦うイスカンドルに、アローニーロは掬花を独特な高い構えで回転させながら戦う。波濤は発生させずに、純粹に武を競っていた。

衝突するたびに火花を散らし、甲高い金属音を辺りに響かせる。一撃打ち合う度にイスカンドルは前に進み、アローニーロは間合いの調整の為に退く。

「ハアア!!!」

気合いの籠った声と共にイスカンドルがしたのは上段からの振り下ろしによる斬撃。アローニーロは掬花の三叉に分かれている部分で受け止めて拮抗する。

イスカンドルは押し切ろうと更にキュプリオトの剣に力を込める。そこが分かれ目になった。イスカンドルが力を更に込めた瞬間にアローニーロは退きながらキュプリオトの剣を掬花で絡め取り、そのまま体ごと半回転させて石突きをイスカンドルに突き立てる。掬花の石突きは、鋭く尖っている。

いきなりアローニーロが退いたことでバランスを崩したイスカンドルは避ける事もできずに、狙った場所に突き立てられた。その場所は、心臓。サーヴァントでも、弱点となる部位は存在する。その

弱点が、首と心臓だ。このどちらかを破壊できれば、人間でもサーヴァントを殺す事が可能である。

「お前の負けだ。イスカンドル」

「そうさ……のう。此度の遠征は、ここまでのようだな……」

口から一筋の血を流し、終わりを確信する。間違いなく、ここが終着点だった。生前となんら変わらぬ夢を追い続けた2度目の人生。2度あつたなら、3度目があつても可笑しくはない。

「『グロトネリア喰らう事による略奪』」

あり得る3度目に思いを馳せて穏やかな微笑みを浮かべているイスカンドルに、自身が誇る宝具を解放する。

ランクEX 捕食宝具 『喰らう事による略奪』 死者の全身を喰らう事によつて、幸運と宝具を除くステータスを上昇させることができる反則級の宝具であつた。なぜ反則かというと、喰らうのがサーヴァントであれば、保有スキルとクラススキルでも自分のモノにできるからだ。また、自身の技術が宝具化しているような場合は、その宝具もアーロニーロの一部となり、使うことが可能になる。クラスこそキャスターだが、その保有スキルにライダーが持っていたモノもたつた今追加された。

勿論、制限などもある。スキルや宝具を発現できるのはサーヴァントだと1体しかできず、喰らつた相手が自分の持つステータスより低いまたは同じステータスの上昇はごく微量になる。

また、スキルによつては劣化したりもし、小指ほどでも欠落があれば効果を發揮出来ずに不発に終わる。

だが、『喰虚』を發動している間は全ての能力を同時に発現でき、真名解放しなくても喰えば同等の効果を發揮できる。

「『王の軍勢』の奴らも喰ったせいであまり上がらなかったな。まあいい。騎乗 A + は使う機会があるかは判らんが、使えるスキルだろ」

強化された自分に概ね満足したところで、キャスターは全てを見ていたウェイバーに近付く。

「さて、俺はお前の王を喰い殺した敵な訳だが……どうする？」

掬花を目の前に突き付け、ウェイバーに問う。

「お前は敵だ。でも、お前に挑めばボクは死ぬ。生きると言われたボクは、殺されようとも生きる」

足も声も震え、直視するだけでも限界に近かったが、ウェイバーは毅然と言い放つ。

「……………敵は殺す主義なんだが……………イスカンドルからはもう十分に奪った。これ以上はもう奪わん」

キャスターは背を向け、自分の拠点に帰ろうとしたところで思い留まった。

「必要なら、拠点に送るがどうする？」

令呪もサーヴァントも失ったウェイバーは既にマスターではなく、ただの魔術師。だが、キャスターには全員がそう思うとは考えられない。ビルを倒壊させてでもマスターを殺そうとするような奴が居るのだから、ウェイバーが安全とは考えられなかった。

「必要……」

ありがたい申し出だったが、ウェイバーは断ろうとした。その瞬間に、キャスターに組み伏せられた。

それに続いて何やら金属音がしたので、ウェイバーはさらに混乱する事になった。

「失敗だ。早急に撤退をしろ舞弥」

『了解しました』

右耳に付けたインコム越しに聞こえた返事を聞き、切嗣は自分も急いで撤退の準備を始める。

ウェイバーを狙って発砲したの切嗣と舞弥であり、殺すつもりでほんの少し離れた位置からそれぞれウェイバーを狙撃したのだが、キャスターが庇ったので弾丸はキャスターに中って失敗した。そもそも、ウェイバーを危険と判断して殺そうとしたのではない。再びマスター権を得る可能性があったから、確実にマスターに成り得る人物を消そうとしたのにすぎない。ライダーとキャスターが固有結界から出て来てから戦っている間に幾らでも殺せる機会はあったが、キャスターがどういう訳はライダーに有利であろう接近戦を始めたので、そのままにしていたのだ。ライダーが勝てばそれでよし、キャスターが勝ったら、本気でランサーを奪う作戦を考えなければならぬ。

結果は、キャスターが勝った。そして、ライダーのマスターに槍を向けたのでそのまま殺すと思っていたのだが、これまたどういう訳かキャスターはマスターを放置して去ろうとした。それを見た切嗣は危険因子を可能な限り消す為に、引き金を引いたのだ。

「なるほど、悪い条件ではないな……」

左耳に付けたイヤホンから聞こえてくる会話に切嗣は笑い、すぐに狙撃地点から離れる。最悪、キャスターが転移してくる可能性もある。

「大丈夫か？」

「いつ、いつたい、なにが……」

キャスターに組み伏せられた瞬間にウェイバーは走馬灯を見た。てつきり心変わりして自分を殺そうとしたと思ったが、実際は逆で自分を助ける為だった。

「まあ、無事でなによりだ」

「それよりさっきの金属音は……」

未だに混乱が抜けきっていないウェイバーはつい、疑問をキャスターにぶつける。

「鉛と鋼がぶつかる音だな」

銃弾は鉛でできている事が多く、キャスターのスキルである鋼皮イェロに照らし合わせて、合っているようで間違っている解答をわざとしたのだ。それを知らないウェイバーは、服の下にキャスターは鉄板のような物でも仕込んでいたかと思った。

「お前の拠点は安全か？」

「たぶん……」

「……（次があったら間違い無く死ぬな）よし、お前の拠点を一週間は敵に見つからないようにしてやる。一週間もあれば聖杯戦争も終わるはずだ」

強制的に、ウェイバーはキャスターからほぼ安全になれる状況を作られる事になった。

至りて……（後書き）

おまけ

「なんでここまでしてくれるんだ？」

ウェイバーは難解な術式で編まれた結界を見ながら、キャスターにそれとなく聞く。

「お前が死んだら誰が今回のイスカンドルを語り継ぐ」

「ボクが語り継いたら、オマエは悪役なのにか？」

「重要なのは、語り継がれる事だ。それに、英雄の前は悪の代名詞みたいなモンだったしな」

（こんなんでも英雄だったんだ……）

仮面に白いフリフリが付いた服……ウェイバーには英雄にはとても見えなかった。

解説

ランクEX 捕食宝具 『喰らう事による略奪』 レンジ1 最大補足1人

死者の全身を喰らう事によって、幸運と宝具を除くステータスを上昇させる宝具。

喰らうのがサーヴァントであれば、保有スキルとクラススキルでも

自分のモノにできる。また、自身の技術が宝具化しているような場合は、その宝具もアークニーロの一部となり、使うことが可能になる。

ただし、スキルや宝具を発現できるのはサーヴァントだと1体しかできず、喰らった相手が自分の持つステータスより低いまたは同じステータスの上昇はごく微量になる。また、スキルよっては劣化したりもし、小指ほどでも欠落があれば効果を発揮出来ずに不発に終わる。

『喰虚』を発動している間は全ての能力を同時に発現でき、真名解放しなくても喰えば同等の効果を発揮できる。

スキル 鋼皮

自分の肌を鎧のように硬化している。魔力量によって硬度が変化する。

ライダーの一撃で両断されなかったのはこのスキルの御蔭。

敵の居ぬ間に（前書き）

感想 教授様、竜人丸様
ありがとうございます！

敵の居ぬ間に

セイバーとランサーとそのマスター達が橋に居なかった理由。それを作ったのは昨晚キャスターとバーサーカーに負けた時臣であった。アーチャーが『王の財宝』と『天地乖離す開闢の星』を立て続けに使ったのと、キャスターに魔力を奪われた事によって、丸一日近く時臣は眠って魔力の回復に努めなければならなかった。

「ここは……？」

時臣が目を覚ましたのは冬木教会の一室であった。「私を連れて逃げる」によって、アーチャーが逃げた先は冬木教会であった。本来であれば、門前払いを受けたほうが監督役の言峰璃正 綺礼の父であり、先代の遠坂の当主と親交のあった人物 是味方であった。アーチャーが選んだのか、それとも時臣が無意識でその場所を選んだかは解らなかったが、安全ではあった。

自分の居る場所が冬木教会と判った時臣はひとまずは胸を撫で下ろした。最悪、逃げる場所は妻と娘のいる隣市の禅城ぜんじょうの屋敷に逃げ込んでいたかもしれなかった。巻き込まない為の配慮として避難させたのに、自分がそこに逃げ込んで意味が無い。

「目を覚ましましたか？ 導師」

とりあえずは情報が必要だと判断し、時臣は綺礼か璃正を捜して自分が寝かされていた部屋を出てたところで、偶然にも看病に来たであろう綺礼と会うことができた。

「ああ、不甲斐ない姿を見せてしまったね、綺礼。ところで、戦況と、王は……？」

気に掛かるのはその二つ。王がご立腹なのは聞かなくても判るが、戦況は聞かなくては判らない。その問いに答えるべく、綺礼は目を瞑って放つてある使い魔の視覚を借りる。使い魔は、既にサーヴァントを捉えていた。

「戦況は今のところ変わってはいませぬ……いえ、セイバーとランサーに、キャスターとバーサーカーがたった今衝突しています。ギルガメッシュは……」

綺礼が言い淀んだので、てっきり自分が予想するより酷い状況かと勘繰ったが、続く言葉で時臣は笑った。

「個人的な私の酒を飲み荒らしています……」

「ははは……濟まない。後日にも、弁償しよう。遠坂邸も似たような被害を受けたから判るよ。王の舌は大層肥えているから、貴重な酒から飲まれてしまうからね」

凜が成人でもした時に開けようと思っていたワインも開けられていたりする時臣であった。

「まあ、その事は聖杯戦争が終わってからのしよう。今は、戦況を教えてくださいませ」

「はい、……ライダーが戦いに乱入しました」

（またか……）

ライダーが自慢の戦車で戦いに乱入したところを時臣は幻視でき

た。アーチャーに単騎で勝てる可能性があるサーヴァントであるから、仔細に姿を思い出せたからであろう。

「固有結界にキャスターとバーサーカーを引きずり込んだようです」

それを聞いた途端に、時臣は嫌な予感がした。キャスターは対城宝具を持っている。『王の軍勢』と言えども、もしも対城宝具を連続して使われたら破られるのでは？英雄王ギルガメッシュをトドメは刺せなかったものの、キャスターとバーサーカーの実力は高い。サーヴァント1体ではまず勝てないであろう。

「綺礼、至急に言峰さんと相談がある。会わしてくれないだろうか？」

魔術師の顔になった師に綺礼はすぐさま父に会わせるべく「わかりました」と返事をして、璃正の執務室に案内したのだった。

ライダーがキャスターとバーサーカーを固有結界に引きずり込んだのだが、セイバーとランサーは睨み合ったままで膠着状態に陥っていた。理由としては、ライダーにしるキャスター達にしる、いつ戻ってくるかが判らないからだ。固有結界内で相討ちなんて都合の良い事はまず起きないだろう。必ずどちらかが戻ってくるのは決まっている。

戻ってきたのがライダーならセイバーとランサーの決着を待つだろうが、キャスター達はそんな事はしない。戦って消耗しているとこちらに戻って来られたら、最悪の場合はやられるであろう。相手も

消耗しているだろうが、バーサーカーは怪我さえしなければ消耗を感じさせない戦いぶりをする予想でき、キャスターは手の内が予測できないのでバーサーカー同様危険だ。かと言って、このまま膠着状態を維持し続けるのも無駄のように思えた。

退くべきか？マスター達がそう考え始めた頃合いを見計らってかのように、冬木教会の方から魔力のパルスが放たれた。

その意味は招集。監督役がルールの変更など伝える場合などに使われる手段である。魔力で着色された煙が夜空に煌めいていた。

「あれの意味は……『中断』『緊急』『直接』？。意味としては、
「聖杯戦争を中断してすぐに直接マスターが来い」かしら？」

難なく読み解いたアイリスフィールだったが、どうにも腑に落ちなかった。わざわざライダー、キャスター、バーサーカーがいないこの状況で招集をかけるのは不自然に感じられた。

「ランサーのマスター。一時休戦して教会に向かいませんか？こちらにはあの招集を受けるつもりですが、そちらはどうしますか？」

ケイネスは少し考える素振りを見せたが、思いのほか早く結論を出した。

「ふむ……こちらも向かう。この状況での招集ということは、余程大事な案件なのだろう」

「急な招集に応じてくれたのを感謝しよう。このタイミングを逃せば、キャスターも来る危険性があったので致し方無かった訳だ」

璃正は信徒席に集まった3人と2体に礼を言い、先を続ける。

「さて、実はキャスターとそのマスターは聖杯戦争において重大な違反を犯し、その行動が些か目に余るとは言い難い状況であると言う事と、それに対する一時的なルール変更をする事になった。

まず、重大な違反なのだが、キャスターとそのマスターは神秘の秘匿に気を使わないばかりか、このところ続いている連続行方不明事件の下手人だと判明した」

璃正は説法の習慣で、聴衆の反応を見るべく語りに間を開けた。

反応は上々で、この事態を軽く受け止めた者は居なかった。マスター達は神秘の秘匿を重く受け止め、騎士道精神あふれるサーヴァント達は無関係な人間が犠牲になっているのを重く受け止めた。

「さらに、バーサーカーを使役して聖杯戦争に大きな一手をした。

このところは、本来なら監督役として関与すべきではないが、それによって引き起こされるであろう惨劇は見過ごせない。このまま進めば、聖杯を獲るのはキャスターのマスターである可能性が高く、無関係な人間に手を掛けるような輩が万能な願望機である聖杯を手にした時にどんな願いを託すかは想像に容易いだろう。

また、バーサーカーのマスターが如何なっているかは判らないが、キャスターと共闘しているのは見過ごせない。

以上の点を持って私は、非常時における監督権限をここに発動し、聖杯戦争に暫定的ルール変更を設定する」

廠かにそう宣言してから、璃正はカソックの右袖を捲り上げ、右

腕の肌を露わにした。そこに刻まれていたのは、聖杯戦争のマスターにとつては、より身近に見知ったモノだった。

「これは、過去の聖杯戦争を通じて回収され、今回の監督役たる私に託されたものだ。決着を待たずしてサーヴァントを喪失し、脱落したマスター達の遺産　彼らが使い残した令呪である。」

これらの令呪の中から、キャスターとバーサーカーの双方に一つずつ懸賞として賭ける。しかし、バーサーカーについては、必須ではない。悪の根源であるキャスターさえ討伐できれば良しとする。また、協力して討伐にあたった場合は、協力したサーヴァントのマスター全員に令呪を譲渡する」

令呪は聖杯から託されるの奇跡であっても、一度宿れば他者に移植するなどは可能な消費型のフィジカル・エンチャントの一種に過ぎない。

「ふむ、そうか」

間を開けたタイミングで、監視者の1人が璃正に耳打ちし、来た時と同じようにそそくさと退散していった。

「たった今、キャスターがライダーを破ったそうだ。これより、聖杯戦争のルール変更を有効とする。」

キャスターの消滅をこちらが確認でき次第、改めて従来通りの聖杯戦争を再開するものとする。

……これは余計な事かもしれないが、単独で挑んで返り討ちにあう愚行を冒す者が居ない事を祈る」

暗に協力するようになると言い、役目を終えた璃正は礼拝堂から退散し、その裏の司祭室に行く。実はその司祭室と礼拝堂は壁で隔てら

れているのだが、間仕切りとしての意味しかなく、司祭室から礼拝堂で起きる物音すべてが筒抜けになるように配慮されている。

（後は、時臣君の交渉術に任せるだけだ）

キャスターを討伐の為の大義名分はある。なら、令呪という餌に喰い付かないはずが無い。

目下のところ望むのはセイバー、ランサー、アーチャーによって確実に障害になるキャスターを排除するだけだ。バーサーカー単騎では、アーチャーには絶対に勝てないのが戦力評価だ。

「どうした綺礼？」

「実は、この様なモノが教会に届けられました」

綺礼が持っていたモノは「英雄王 ギルガメッシュへ」と書かれた果たし状であった。

キャスターのステータス+ (前書き)

サブタイ通りです。ステータス。
最後らへんにバーサーカーのもあります。

キャスターのステータス+

能力表

クラス キャスター 真名 アーロニーロ・アルルエリ

マスター 雨生 龍之介

属性 混沌・中庸

召喚時

筋力 D + 魔力 A

耐久 C + 俊敏 C +

幸運 E 宝具 EX

クラススキル

陣地作成：B - 魔術ではなく、魔法で構築した防御に特化した陣地や隠蔽に特化した陣地を形成可能。

道具作成：EX 元々もっていた開発能力と合わせり、大抵の物を作れる。ただし、宝具に匹敵する道具は作れない

保有スキル

魔法：EX 魔法先生ネギま！に出てくる魔法のほとんども使用しなせる

鬼道：EX BLEACHに出てくる鬼道のほとんども使用しなせる

心眼（真）：A 長年の鍛錬により磨き上げた洞察力。経験の豊富な相手の動きほどよく読める

鋼皮 自分の肌を鎧のように硬化している。魔力量によって硬度が変化する。

霊子の足場 分類上は宝具に当て嵌まらない破面としての基本能力。霊子を固めて足場にでき、壊れたりしない限りは足場として大抵の場所で使える。基本的には自分の足元だけに展開させて使うが、自分を基点として多少の範囲に展開可能。壊したり消したりしない限りは使えるので、誰であろうと乗ることができる。

首刎ね 対生物技。刃物を握っているなら、相手の首を刎ねる動きを瞬時にできる。反応さえできれば防御は可能

宝具

掬花（ねじばな）

真名解放することで刀から3又の槍に変容する。槍の時は波濤を生み出し、それを操ることができる。波濤は対魔力の影響を受けない。
ランク：B 対人宝具 レンジ2～4 最大補足 1人

侘助（わびすけ）

真名解放することで刃が7のような形に変容する。斬ったモノの重さを斬る度に倍にする。解放を解くか、侘助を破壊しない限りは重さは元に戻らない。

ランク：B 対人宝具 レンジ1～2 最大補足 1人

神鎗（しんそう）

真名解放することで刃が伸縮自在になる。伸びる長さは刀100本

分。

ランク：B 対人宝具 レンジ1～50 最大補足 50人

神殺槍（かみしにのやり）

神鎗の上位解放。伸縮速度は音の500倍、最長で13?伸びる。

ランク：A 対軍宝具 レンジ1～99 最大補足 1000人

鏡花水月（きょうかすいげつ）

真名解放を一度でも見せた相手の五感を支配する完全催眠に陥らせる。逃れる方法は解放する前から鏡花水月に触れているか、解放を見ないしかない。

生前に知らていなかったために宝具としての格が落ちている。

ランク：C 催眠宝具 レンジ1～? 最大補足 ?人

虚閃（セロ）

宝具と分別されているが、正確には宝具クラスの攻撃。威力、範囲共にある程度は使用者の融通が効く。魔力の塊のようなモノなので、対魔力によつて軽減されてしまう。

ランク：A - 対軍宝具 レンジ2～50 最大補足 50人

王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）

空間を歪める程の霊圧の塊を放つ。虚閃と同様の理由で対魔力で軽減されてしまう。

ランクA++ 種別 対城宝具 レンジ1～99 最大補足 1000人

喰虚（グロトネリア）

刀剣解放レクシオンをすることにより、本来の姿になる。

魔力の消費量が跳ね上がる。

ランクD 種別 対人宝具 レンジ0 最大補足 1人

喰らう事による略奪（グロトネリア）

死者の全身を喰らう事によって、幸運と宝具を除くステータスを上昇させる宝具。

喰らうのがサーヴァントであれば、保有スキルとクラススキルでも自分のモノにできる。また、自身の技術が宝具化しているような場合は、その宝具もアローニーロの一部となり、使うことが可能になる。

ただし、スキルや宝具を発現できるのはサーヴァントだと1体しかできず、喰らった相手が自分の持つステータスより低いまたは同じステータスの上昇はごく微量になる。また、スキルによっては劣化したりもし、小指ほどでも欠落があれば効果を發揮出来ずに不発に終わる。

『喰虚』を発動している間は全ての能力を同時に発現でき、真名解放しなくても喰えば同等の効果を發揮できる。

1体のサーヴァントのスキルなら、個別で任意に発現可能。

ランクEX 種別 対人宝具 レンジ1 最大補足 1人

ライダー達捕食後

筋力B+ 魔力A

耐久B 俊敏B

幸運E 宝具EX

クラススキル

陣地作成：B - 魔術ではなく、魔法で構築した防御に特化した陣地や隠蔽に特化した陣地を形成可能

道具作成：EX 元々もっていた開発能力と合わせり、大抵の物を作れる。ただし、宝具に匹敵する道具は作れない

保有スキル

魔法：EX 魔法先生ネギま！に出てくる魔法のほとんどを使いこなせる

鬼道：EX BLEACHに出てくる鬼道のほとんどを使いこなせる

心眼（真）：A 長年の鍛錬により磨き上げた洞察力。経験の豊富な相手の動きほどよく読める

鋼皮 自分の肌を鎧のように硬化している。魔力量によって硬度が変化する

霊子の足場 分類上は宝具に当て嵌まらない破面としての基本能力。霊子を固めて足場にでき、壊れたりしない限りは足場として大抵の場所で使える。基本的には自分の足元だけに展開させて使うが、自分を基点として多少の範囲に展開可能。壊したり消したりしない限りは使えるので、誰であろうと乗ることができる。

首刎ね 対生物技。刃物を握っているなら、相手の首を刎ねる動きを瞬時にできる。反応さえできれば防御は可能

ライダースキル

対魔力：D シングルアクション 一工程による魔術行使を無効化する。魔力避けけのアミュレット程度の対魔力。ライダーを喰らって手に入れた。

騎乗：A+ 騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣のものまで乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。ライダーを喰って手に

入れた。

カリスマ：E 数人を指揮できる程度。ライダーを喰らって手に入れたが、彼の人柄による割合が大きかったために、かなり劣化している。

軍略：E 数人による戦略が出来る程度。ライダーを喰って手に入れた。アーロニーロに軍を率いた経験がないためかなり劣化した。

神性：E - 神霊適性を持つライダーを喰って手に入れたが、様々なモノが混じっているアーロニーロゆえに劣化し、僅かにある程度。

クラス バーサーカー 真名サー・ランスロット

マスター 間桐 雁夜

属性：秩序・狂

パラメータ

筋力 A 魔力 C

耐久 A 敏捷 A +

幸運 B 宝具 A

クラススキル

狂化：C 幸運と魔力を除いたパラメーターをランクアップさせるが、言語能力を失い複雑な思考ができなくなる。

保有スキル

対魔力：E シングルアクション 一工程による魔術行使を軽減する。無いよりはマシ程度。

精霊の加護：A 精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せせる能力。その発動は武勲を立てうる戦場においてのみに限定される。

無窮の武練：A+ 如何なる精神状態でも十全な武芸を保つ。

騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）

ランク：A++ 種別 対人宝具 レンジ：1人 最大捕捉：30人

手にした武器に自らの宝具としての属性を与え、駆使する宝具。

どんな武器、兵器であろうとも手にした時点でDランク相当の宝具となり、元からそれ（D）以上のランクに位置する宝具であれば、従来のランクのまま支配下に置かれる。

己が栄光の為でなく（フォー・サムワーズ・グロウリー）

自らのステータスと外見を隠蔽している。本来は他者へ変身する宝具だが、狂化しているため令呪の助けがなければ真価を発揮することが出来ない。

ランクA 種別 対人宝具 レンジ：0 最大補足：1人

無毀なる湖光（アロндаイト）

二つの宝具を封印することにより使用可能となり、装備者の全パラメーターを1ランク上昇させる効果を秘めている。また、火を吹く大蛇を退治した伝説により、龍属性を持つ者に追加ダメージを与え

る。

ランク：A++ 種別 対人宝具 レンジ：1〜2 最大補足：1人

マスター交代？後

筋力A+ 魔力B+

耐久A+ 敏捷A+

幸運A 宝具A

完璧なる騎士に相應しいステータスになりました。

三騎士同盟（前書き）

感想 イチロー様、教授様、心なし人様、一方通行様
ありがとうございます！

三騎士同盟

「アーチボルト殿、アインツベルン殿。よろしければどちらか私達と協力してキャスターとバーサーカーを討つのはどうだろうか？」

璃正が礼拝堂を後にしてすぐに時臣はケイネスとアイリスフィールに提案をした。

「知つての通り、アーチャーはキャスターとバーサーカーに敗北した。しかし、キャスター単騎であれば確実に討ち取れる。バーサーカーさえ抑えていただければ、キャスターはものの数ではない」

淡々と、事実だけを時臣は話していく。

「それに、キャスターの悪行は冬木市を預かるセカンドオーナーとしても魔術師としても、到底見過ごせるモノではない」

大義名分もあり、時臣の言葉セイバーとランサーに感情面では好評かだが、マスター達とセイバーには戦略面では警戒させる。この場で一番に両者に誘いを掛けたのは、自分だけが令呪を得得る機会を絶対に逃さない意図があったのは見え透いていた。しかし、見え透いていても誘いに乗らなければ令呪を得る可能性を自分で潰す事になる。

キャスターとバーサーカー相手に勝ちを収めるのは単騎での達成はほぼ不可能。前衛と後衛が揃っているのも理由の一つだが、キャスターがキャスターらしからぬ異常と、バーサーカーの武器を篡奪する宝具だ。いくらサーヴァントと言えども、己の武器を奪われれば圧倒的に不利になる。セイバーとランサーは正にそのようになるであろう。

「あのアーチャーが果たして、他のサーヴァントの助力を素直に受けるかが甚だ疑問に感じますが？そのところはどうぞお考えですか、遠坂」

「心配は御無用です。アーチャーに1敗くわされたのが余程気にくわなかったのか、キャスター討伐に1番乗り気なのはアーチャーです」

すでにアーチャーはキャスター以外の他のサーヴァントなど眼中に無い。時臣の令呪による命令のせいで強制的に敗走させられたが、時臣が居なかつたとしてもそうせざるおえなかつたであろう。戦つた時は致命傷こそ避けれたが、あのまま続いていれば危険であつた。それを頭で理解しているが、感情のほうは雑種に敗走させられたので冷静ではいられる訳ではないのだが……

「バーサーカーが相手なら、私のランサーが適任だ。いくら物を宝具化しようとも、『破魔の紅薔薇』の前では普通の物とならんら変わらない」

「バーサーカー相手なら、セイバーの方が適任と思えますが？どうやらあのバーサーカーはセイバーに執着しているようなので、1度戦いだせばキャスターと言えども思うがままには使役出来ないですよ」

同時に相手するなら、アーチャーの強さは心強い。それに、キャスターはセイバーとランサーの戦いにバーサーカーと割って入つたからには、勝てる算段があつてのことだろう。事実、セイバーとランサーは押されていた。

「では、全員でキャスター討伐をするかどうか？三騎士が揃えば、相手がどの様なサーヴァントであるとも負けはない」

力強く、はっきりと時臣は言う。同盟については誰も反論しない。反論すれば、自分だけが同盟から外されて令呪を得られずに不利になる。そうなるよりは、全員が令呪を増やして現状維持の方が良い。

（キャスターとバーサーカーかさえ居なければ、我々の勝利は揺ぎ無い！）

（セイバーなら、一対一での戦いならまず負けないわ。……それに、切嗣も居る）

（キャスターとバーサーカーを倒した後は、アインツベルンと同盟してアーチャーを倒せば勝てる！）

三者三様に、キャスターとバーサーカーを倒した後の事を考え始めていた。

「では、今夜のところはこれまでにし、戦略などを考える為に明日も冬木教会に集合するというのはどうだろうか？時間は……都合がつくなら、13時で」

「私は構いません」

「異存はない」

三騎士同盟。おそらくこれが一番に異常事態を認識させる出来事だろう。最弱と自滅を誘発させるクラスのサーヴァントに対して最優、最速、三騎士の一角のサーヴァントで雌雄を決しようとする事

態になると誰が予想しただろうか。

「決勝、いや、準決勝は明日の夜に行われる。雁夜、その時にお前との取引である「時臣と戦える舞台を用意しろ」は達成させられる。まあ、真正面から挑んだらお前は負けるな。遠坂邸にあつた情報によると時臣は火の属性。それを十分に活かすなら、単純に火もしくは炎を使うだろうからな。蟲使いの天敵みたいなもんだな」

可笑しそうに柳桐寺の一室で雁夜に話していた。

「それがどうした。勝てないわけじゃない」

「そう、勝てないわけじゃない。ただ、俺はお前はまともに戦うつもりがあるのかが知りたい。まともでなければ、お前はまず負けな。悪くて引き分け、良ければ勝利を手にするだろう。そういう準備は出来ている。後は、お前が実行するだけだ」

果たし状なんて時代錯誤のものを教会に送り付けたのは行動を誘導する為の小道具。内容を見てきつとこう思うだろう。「キャスターとバーサーカーを討つ好機」と。文面にはただ雁夜と待っている場所と時間に書いてあるだけで、一騎討ちだとかなんて書かないでおいた。理由は騎士道精神を持つセイバーやランサーでも参加できるようにと、例えばアーチャーと時臣だけで来ようともバーサーカーと刈るつもりだからだ。

「どんな汚い手を使ってでも時臣は殺す。葵さんを悲しませた事と、桜ちゃんを臓硯に渡した事を後悔させて殺す！」

雁夜は憎悪に目を染めて言う。その目は使役しているバーサーカーに似ており、爛々と輝いている。彼はその事と、桜を助ける事だけを目的として聖杯戦争に参加したのだ。桜がキャスターによって助けられた今の目的は、遠坂時臣を殺す事だけである。

「……まあ、意気込みは良いだろう。だが、結果の後はよく考えておけよ。遠坂時臣が死んだらどうなるかを……」

目先しか見えてない雁夜に忠告すると、キャスターは臓硯との取引の品を受け渡しする為に間桐邸へと移動した。

「時臣が死んだら……？」

他にする事も無い雁夜は、悶々とその事を考え始めたのだった。

三騎士同盟（後書き）

最優、最速、最……

三騎士なのに、アーチャーのクラスだけ最が付くのが無いという……
個人的には最強を入れたかったけど、ギルガメッシュだからでクラ
スの強さではないから断念。

攻撃可能距離は最長の可能性はあるんですけどね……弓兵ですし。

準備（前書き）

感想 にかさま様
ありがとうございます。

準備

三騎士で同盟を結成した後で、時臣はアーチャーと共に果たし状を見分してキャスターの思い通りに考えた。「キャスターとバーサーカーを討つ好機」と……。だが、同時に準備が必要とも感じた。果たし状には間桐雁夜が遠坂時臣に挑むとも書かれており、互いに秘術を使った魔術師同士の戦いになる。別に戦う必要も無いが、避ける必要も無い。間桐の落伍者とは言え、聖杯戦争に参加しているマスターであるなら戦う術くらいは持っているのが当然と考えるべきだ。そう考えれば、魔術礼装無しで手持ちの宝石と魔術刻印だけで勝てるような相手では無い。

その為には、1度は遠坂邸に戻る必要がある。手持ちの宝石は戦うつもりでいたから1回戦う分には十分だろうが、自分が戦う必要がいつ出るかが判らないので心許無い。自身の魔術礼装は今も遠坂邸の2階に落ちているはずである。他にも、持ち出したい物が幾つか遠坂邸にあるので、絶対に行かねばならない。だが、陥落した工房がどの様になっているかが不明すぎる。キャスターが居座っている事はおそらくない。キャスターは自分の拠点を持っているようにあるし、いくらキャスターでも他人の工房を自分の工房に改造するには手間も時間も掛かるであろうからそんな事はしない……と、思う。が、簡易な罠くらいは仕掛けたり、魔術礼装や宝石は持ち去られているかもしれない。

「王よ、私も挑戦を受けようと思っています。その為に明日の朝に1度家に準備を整えるべく戻りたいのです。その際に、守っていただけないだろうか。あの姑息なキャスターが卑怯な罠を仕掛けているやしませんので……」

単身で行けば罠を張ってあれば即脱落など十分に考えられる。な

ら、アーチャーを連れて行くしかない。対魔力と『王の財宝』があるアーチャーならどの様な状況でも無事に切り抜けられる。最悪の場合は、アーチャーだけが無事で終わるのだが。

「よかるう」

少なくとも、これで安心して荷物を取り行ける。時臣は胸を撫で下ろしたのだった。

早朝から時臣は遠坂邸に舞い戻った。やはりと言うべきか、遠坂邸の損傷はすぐに全てを直せるモノではなかった。庭は射出された宝具によってクレーターが幾つもできており、窓ガラスは『天地乖離す開闢の星』と『王虚の閃光』の余波で半分ほどダメになっている。それだけならまだよかったのだが、一番深刻なのは屋根に開いた穴だった。アーチャーがどこに避けても中るようにと、地面に垂直に降り注いだ宝具によって開けられた穴である。槍を中心に使われたので、基本的には屋根から地面まで貫通する穴を開けられただけが大半であった。

(修繕……いや、いつそ建て直した方が良いだろうか?)

どちらにしても聖杯戦争中は無理だろうが、最低限の修繕は時臣は自分でやっておいた。壊れた物を直すのは、魔術師にとっては基礎中の基礎であるからそこまで時間を掛けずに済んだ。それでも、屋根の穴を塞ぐだけにせざるを得なかった。時間を掛け過ぎるとア

「チャーの機嫌が悪くのは明白であつたし、13時には教会に居る必要がある。まだやるべき事が三つもあるのだから、迅速に動かなければならない。」

（よかつた……。宝石も魔術礼装も全て無事だ。金庫が壊されてたり、書物が荒らされてはいるが……）

明らかに荒らされているが、無くなっている物はなに一つなかった。金庫の扉が両断されているのを見た時はその中であつた家宝の宝石を諦め掛けていたが、それも無事であつた。それは歴代の遠坂家当主の魔力が込められており、他の宝石とは格が違う。

「アゾット剣、ペンに用紙、宝石、魔術礼装、あとは着替えがあれば十分か……」

必要な物は全て揃っている。後はしておくべきことをするだけだ。

妻の実家である禅城の門前に時臣は居た。そこに、娘である凜を呼び出た。

「敗北も有り得る」そう感じさせたのは、キャスターとバーサーカーであつた。もし、令呪が後1秒でも遅かつたら、アーチャーと時臣は聖杯戦争から脱落していたであろう。聖杯戦争は勝ちを約束された儀式という認識であつたが、それは崩された。自分が死ぬ可能性もある。そして、その可能性が最も高くなるのが、今夜である。負けるとは思つてはいない。だが、可能性を考えるとゼロでは無い。

「凜……成人するまでは協会に貸しを作っておけ。それ以後の判断はおまえに任せる。おまえならば、独りでもやっていけるだろう」

何を話すかは決めていた。自分が死んだらと仮定し、予め考えてはいた。それでも、口に出すまでは迷いはあった。だが、1度口にだせば、次から次へと言葉が出てきた。伝えておくべき事柄は多くある。

「凜、コレはおまえが持つておくべき物だ」

そう言って握らせたのは、家宝の宝石。魔術刻印と共に受け継がれてきたその宝石は、価値は同等とまではいかずとも、当主が持つべき物という点では同等である。次代の遠坂家頭主と指名したと同然である。他にも、地下にある工房の管理など全てが頭主に成るにあたって必要な事だ。

「凜、いずれ聖杯は現れる。アレを手に入れるのは遠坂の義務であり、なにより魔術師であろうとするなら、避けては通れない道だ」

根源へと至る道標。それが聖杯戦争であり、根源へと至る手段が聖杯。何も聖杯だけが根源へと至る手段ではないが、根源へと至るのが決まっている道だ。魔術師なら、歩むべき道に相違はない。

「それでは行くが。後の事は解っているな」

「はい。行ってらっしゃいませ、お父様」

伝えるべく事は伝えた。なら、後は行動で示すだけだ。

禅城邸を後にし、時臣は教会に向かうのだった。

「切嗣、本当なの？キャスターがライダーを喰ったのは……」

不測の事態は常に起こる。それに臨機応変に対応できなければ脱落あるのみ。それが戦いというものであった。対応するべく、切嗣は行く予定の無かった拠点に足を運んだ。

「ああ、間違い無い。それに、ステータスが上昇した。おそらく、喰えば自身の能力を増大させる宝具を持っている。問題はそこじゃない。アイリ、中に入ったかい？」

第三者からすれば、最後の意味は推し量れなかっただろうが、アイリスフィールには解った。

「……いいえ。アサシンが倒されてから中身は変わってないわ」

「やはり……か。あのキャスターは聖杯戦争に呼んではいけない英霊だったわけだ。まさか、そんな根本から破綻させるサーヴァントが存在するとは……」

「キャスターが最優先になるわけね？」

「まあ、そうせざるおえない。他のマスターは気付けない。尤も、とりたてて何かをする必要は無い。遠坂陣営が拠点を知っているか

もしれない。知っているなら、今夜であるのキヤスターが脱落する可能性が高い。なら、これまで通りに動けばいい。

そうだ、念には念をいれなければね、幸いな事に、マスター候補をこの冬木の地から追い出せるかもしれない」

12時。約束の時間の1時間前になるのだが、アイリスフィールとセイバーを教会に来ていた。

「約束の時間には、早すぎると思いますがな」

璃正は率直な感想を言う。30分前とかなら、まだ予想の範疇であつたが1時間前に集合するマスターがいるとは思っていなかった。

「それは十分に解っていますわ。ただ、しかるべき処置を監督役がしていないようですので」

「しかるべき処置？」

そもそも遠坂時臣と結託してる時点で公平であるべき監督役として処置をしていないが、それは今責める事では無い。責めても、しらを切り通されてそれお終いだらう。

「言峰綺礼。彼は自身のサーヴァントが脱落したと虚偽の報告して教会を騙しました。なのに、何も処置をしていないのは教会の沽券に関わると思いますか？」

「……」

「それに、監督役への信用問題にもなります。適切な処置が行われなければ、そもそも監督役が言っているキャスターの悪行と報酬が信用できなくなりませう。場合によっては、私達はキャスター側に付かせていただきます」

「……」

勿論、嘘である。聖杯を完成させるためにはキャスターの排除が必須と解っている。なら、傍観する事はあってもキャスターの味方に付く事なんてしない。

しかし、璃正にはアイリスフィールがどこまで本気が判らない。

「無論、アーチボトルもお誘いしてです。監督役が信用できない以上は、従う必要などありません。外来のマスターであるなら、尚更です」

「……もし良ければ、適切な処置とはどのような処置とお考えかお聞かせ願えないだろうか……？」

璃正は折れるしかなかった。折れなければ、今夜で時臣とアーチヤーが脱落するのが非常に高まる。それだけは、避けねばならない。それに、人1人とサーヴァント2体ではどう考えても釣り合う筈が無い。

「そうですね……今すぐに冬木市から退去させるのと、聖杯戦争中は冬木市への出入り禁止が妥当と考えます」

準備（後書き）

思い付き

関係者しかいない第5次聖杯戦争

セイバー　ワカメ大使

アーチャー　相沢さよ

ランサー　アローニール

キャスター　エヴァンジェリン

バーサーカー　アヨン

アテンダント（従者）　絡繰茶々丸＋チャチャゼロ

ランナウエー（逃亡者）　長谷川　千雨

アサシンとライダーは犠牲になったのだ……穴埋めの犠牲にな……

完璧と轟と(前書き)

感想 kyuriosu7789様、煌 焰様、教授様
ありがとうございます！

完璧と蟲と

「そうか、退去しなければならぬのか……」

「はい。そうしなければ、今すぐ敵になるのも辞さないと言いつベルンが言ったそうです。アーチボルトも巻き込んで……」

言峰綺礼の退去は決まってしまった。流石に形だけのパフォーマンスをするだけにかずに、本当に退去させるのだ。しなければ、魔術協会内での派閥同士での衝突すらありえる。その様な闘争は求めるところではないし、たった1人を退去させるだけで済むのならそうする。故に、時臣は綺礼に見送りの挨拶をしていた。

「残念でならない。璃正さんと一緒に君にも、我が遠坂の悲願の成就を見届けてほしかったのだが……」。

考えてみれば、ライダーの情報収集の為とは言え安易にアサシンを使わべきではなかった。私の手落ちだ。まさか、虚偽の報告をしたとして君を排斥させる動きをさせるなんて思いもしなかった訳だが」

「いえ、導師だけの責任ではありません。そこまで思い至らなかった私の責任でもあります」

「そう言ってくれればと助かる」

苦笑いしながら、時臣は持ってきていた書簡と黒檀の細長い箱を綺礼に差し出した。

「……導師、これは？」

「書簡は、まあ簡略なものであるが、遺言状のようなものだ。黒檀の箱は、君個人に対して、私から贈くる物が入っている」

相変わらず苦笑をしたまま時臣は続ける。

「万が一、ということも考えておくべきだと思ってね。凜に家督を譲る旨の署名と、それからアレが成人するまでの後見人として君を指名しておいた。これを『時計塔』に届けてくれれば、後の諸事は協会の方で面倒を見てくれる。後見人に指名したのは綺礼、君には兄弟子として凜の指導に当たって欲しいのからだ」

表情を苦笑いから真摯なものへと変えた時臣に、綺礼は何時に無く本気であると解った。

「お任せ下さい。不肖ながらも、もしも場合は御息女については責任を持って見届けさせていただきます」

なら、綺礼の答えは決まっていた。託された務めを果たすことにかけては誠実かつ厳格である。

「箱の中身はアゾット剣だ。当家伝来の宝石細工で、魔力を充填しておけば礼装として使える。なにやら、別れの品のような感じがするが、今日渡せなければ下手をすればもう渡す機会がないかと思っ
てね。君が遠坂の魔導を修め、見習いの過程を終えたこと証明する品だ」

流石にどこに人の目があるか判らない場所で中身を確認させる訳にもいかず、中身の簡単な説明してそれで良しとした。

「我が師よ……至らぬこの身に、重ね重ねのご厚情。感謝の言葉もありません」

「君にこそ感謝だ。言峰綺礼。これで私は後顧の憂いなく戦いに臨むことができる」

時臣は澄んだ笑顔でそう言い、握手のために手を差し出す。綺礼も手を差し出して握手をしっかりとする。時臣は満足そうに握手した後は別れの言葉もそこそこにして見送った。

(やはり、私を解ることなどなかった)

綺礼が胸に懐いていたのは諦めに近い達観であった。自分が求めているモノはまだ掴んでいない。

なるほど悪行で得た愉悦は罪かもしれん

不意に、アーチャーが独り言のように言った言葉が脳裏をよぎった。このまま冬木市を去れば、これまでと全然ら変わらない日々を繰り返すであろう。だが、まだ求めるなら、劇的に変わる。そんな確信が持てた。

(私は……)

「来たか。準備は万全か？」

「万全だ……」

キヤスターが果たし状に書いた場所は全サーヴァントが一堂に会した倉庫街であった。まだ修繕なされておらず、相変わらず爆撃でもされたかのような惨状であった。現場検証などで修繕を先延ばしされた結果である。そんな場所を戦いの舞台に選んだのは、わざわざ新しい場所を戦闘の余波で壊すのがしのびなかったのと、都合が良かったからだ。

「雑種、我を呼び出すとは随分と嘗めた真似をしてくれるな。その罪は死に値するぞ」

アーチャーだけが言葉を発する。他の面子　時臣、セイバー、ランサー　は黙っている。掛ける言葉など思い当たらなかったし、戦いに来たのだ。

「……ア^アr……t^サh^アu^アr……」

そんな言葉を発したのはバーサーカーであった。それを聞いたキヤスターは縛っておくのが限界と感じた。しかたなく、命じる。バーサーカーが望んでいる命令を。

「バーサーカー、己が思うままに戦え」

「動くな」と命令されていたバーサーカーはその縛りから解放され、まるでバネ仕掛けの玩具のように予備動作無しで跳ぶように真っ直ぐセイバーに7のような形の刃を持った刀と普通の形の刀で斬りかかる。

それが、開戦の合図となった。

サーヴァントはマスターを戦いに巻き込まないように場所を少し移動したので、雁夜と時臣だけがその場に留まっている。これはどちらも予定通りの動きだった。

「遠坂時臣、お前は間桐の魔術を知っているか？」

「なに？」

開口一番が呪言の詠唱ではなく、よもや自分の家系にまつわる魔術を知っているか？これには思わず時臣は聞き返してしまった。

「知っているかと聞いている！」

激昂する雁夜に呆れながらも、それに答えるのはやぶさかではないので、自分が知っている魔術をすらすらと答え始める。

「間桐は水の属性の使役を得意とする。言うなれば、本領が発揮できるのは自分よりも強い存在を使役している時だ」

時臣が知っているのはそこまである。使役を得意とするから、令呪システムを考案したのは他ならない間桐であり、サーヴァントの使役に関しては間桐が最も得意なはずなのだ。

「やっぱり、それだけか……。知らぬが仏とは、まさにこのことだろうな。時臣！お前に思い知らせる！間桐の魔術がどの様なモノかを！！」

周囲の物影からネズミくらいの大きさの這虫が姿を現す。同時に身を震わせ、脱皮をする。まるでセミが幼虫から成虫になるかのよう、蛆虫のような幼体から甲虫の成体へと瞬く間に姿を変える。

『翅刃虫』。時臣と雁夜は知らないが、桜を殺しかけた虫である。それと、臓硯との取引でキャスターが手に入れたモノの1つである。ソレが隊伍を組んで空中に舞い上がり、時臣を包囲するように移動を開始する。

だが、そんな光景を前にしても時臣は余裕であった。そもそも魔術師として年季も格も雁夜に数段勝る。それに、死を意識するのは魔術師の常である。恐れる理由など何処にありもせず、悔いの無いように準備をして来た。

「蟲使いが私に正面から挑むのがどれ程愚かな事か教えてあげよう」
時臣は自らの礼装であるステッキを振りかざし、柄頭に？め込まれた大粒のルビーから炎の術式を呼び起こす。

虚空に描いた防御陣は遠坂の家門を模し、夜気を焦がして紅蓮と燃える。触れればすべてを焼き尽くす攻性防御。弱点は、燃やしたり融かせないモノにはその防御力が皆無になっってしまうが、この紅蓮の炎なら蟲は簡単に焼き尽くせる。

しかし、一匹もその防御を突破しようとは突撃せず、ギチギチと威嚇するように顎を鳴らしながら時臣のまわりを旋回し続けている。

（攻撃を誘っている？それとも、私の防御陣の穴を捜しているのか？）

どちらにしても、時間を掛ける必要は無いと判断し、紡ぐ。

「我が敵の火葬
Intensive Eina scherung
は 苛 烈 なる べし
」

紡がれた呪言によって、防御陣の炎が蛇のようにうねり、雁夜へと襲い掛かる。だが、雁夜は微動だにせずに炎を笑って見ていた。炎はそのまま雁夜を貫いた。その結果に狼狽したのは時臣の方であった。炎は雁夜を焼くはずであり、貫くなど有り得ない結果であったからだ。

それが表情に表れていたのであろう。炎の切れ目からソレをみて雁夜は狂ったように笑い出す。

「はははははははははははは！どうした？ご自慢の炎は俺に届いていないぞ？

今だ！時臣を喰え！」

炎を攻撃に使ったので、僅かに薄くなった防御陣に勢いよく雁夜は翅刃虫を突撃させる。だが、すぐさま時臣は薄くなった分を補強し、なんとか突撃してきた翅刃虫を焼き払って無事で済んだ。

「幻術の類か……キャスターの仕業だな」

雁夜はほんの1年前まで魔術との関わりを断っていた。なら本物と誤認させるほどの幻術など使えないはずであろう。

「ああそつだ。今見えているのは他の場所にいる俺を写し出しているだけだ。だから、お前に俺は倒せない！」

キャスターの考えたまともでない戦い方。雁夜は違う場所に居てそこから蟲に指示を出して戦う。翅刃虫を物影に潜ませていたよう

に、雁夜の目となる視蟲も潜ませており、雁夜は戦況を十分に把握できる。使役が得意なら、ソレを活かす戦法としては定石の類になるだろうが、魔術師同士の決闘は高貴なる戦いで互いに姿を晒すのが普通だ。闇討ちに等しい雁夜の行為は時臣の予想外であった。

「だが、君の蟲が通用しない私では君の勝ちもない」

バーサーカーをいち早く排除する為に雁夜を排除したかったが、どこに居るか判らない相手では手を出せない。だが、そもそも手を出す必要も無い。バーサーカーにはセイバーとランサーが相手にしているのだからまず心配無い。脅威なのはサーヴァントであり、雁夜ではない。勝てないのは癪に障るが、この場合は仕方が無いと諦めるしかない。

「そうやって自分の判断が絶対のように考えるから足元を掬われた事にすら気付けない！桜ちゃんを傀儡にしようとしていた臆硯の考えなんて知りもせずに！」

「なっ!?!」

本当に時臣は足元を掬われた。蟲が自分の足元の地面に潜んでいるなどと想像できなかった。それでも、確認でき次第焼き払おうとした状況判断は素晴らしいものである。だが、突然の痛みと魔術回路に掛かった負荷で術自体は発動したが、翅刃虫2匹を取り逃がした。

致命的な失敗であった。1匹はすぐ近くの時臣の左足の皮と肉を喰いちぎって内部に侵入し、もう1匹は魔術礼装のステッキに襲い掛かる。時臣はステッキを引き寄せながら、自分の左足を膝から下を焼却する。苦肉の策であったが、放置しておけば全身を喰われていた。しかし、もう1匹は健在である。

時臣には、その瞬間が非常にゆっくりと目に映った。左足を失ってバランスを崩した自分が倒れていくなか、翅刃虫が魔術礼装ステッキに喰らい付き、その強靱な顎で噛み砕く。その衝撃で手放さないようにしていたルビーが手から零れ落ち、翅刃虫が突撃をかましてルビーを手の届かない場所まではじき飛ばす。その時点で、防御陣は消え失せた。

(ここまでか……)

絶対の信頼を置いていた魔術礼装を失った。それだけで決着は付いた。翅刃虫の数は多く、手持ちの宝石では対処がまず追いつかない。死を覚悟し、目を瞑る。しかし、何時までたっても新しい痛みは訪れずれなかった。疑問に思った時臣は恐る恐る目を開けた。そこには、雁夜が立っていた。

「……………お前を殺せば、葵さんが悲しむ。だから、俺はお前を殺さない」

結果の後はよく考えておけよ

それが、キャスターの忠告への雁夜の答えだった。時臣を殺せば、雁夜は一時は満足できるだろう。しかし、少し考えれば自分が愛する女性が悲しむのは明白であった。だから、自分の気持ちを押し殺して時臣を生かす。

「誓え！葵さんを幸せにすると！悲しませないと！」

「雁夜、君はそんなにも……………」

鬼気迫るモノがある雁夜の言葉に、時臣はある想いを感じた。だ

が、雁夜の幻体は時臣がそれ以上何かを言う前に時臣から離れようとしたが、時臣が呼び止めた。

「待て！桜が傀儡とはどういうことだ！」

「……お前には関係の無い事だ」

忌々しそつに言うと、今度こそ雁夜の幻体は時臣から離れた。

完璧と蟲と（後書き）

補足

時臣を襲った突然の痛みと負荷は寄生している録霊蟲によるもの。痛みは痛覚神経を刺激して、魔力回路の負荷はいつも吸っている魔力量より急に多く吸って起こした。時臣の分だけ今回は雁夜の支配下にあった。マスターに仕込んだのは録霊蟲。

おまけ

雁夜は倉庫街の地下、下水道にいた。キャスターの魔法によって言動をそのまま地上に映しているにすぎないので、下水道でもまったく同じ言動をしていた。

「葵さん、これで良かったんだよね……」

雁夜が傍から見れば、下水道で一人芝居をしていたのに気付くのは後日であった。

騎士（前書き）

感想 教授様、零崎煌識様、CANCER様、かにかさま様
ありがとうございます。

騎士

セイバーとランサーはバーサーカーと互角の戦いをしていた。その最優と最速を持ってしても互角であった。バーサーカーが手強い事は2人とも承知していた。アーチャーが射出する宝具を掴み取るのだからそのステータスは侮れるような数値なはずが無い。バーサーカーの持つステータスを隠蔽する宝具によってそのステータスは知ることが出来ないが、手合わせすれば予測も立てられた。そして、前回戦った時よりもそのステータスが上昇しているとセイバーは判った。

「ランサー、どのようなカラクリかは解らないが、バーサーカーのステータスが上昇しているようだ」

「ああ、直接戦うのは今回が初めてだが、上がっているのは俺にも判る。それよりも厄介なのは、あの剣だ。俺の『破魔の紅薔薇』と打ち合つて無事なところを見ると、アレは元々宝具だ」

バーサーカーが両手に持つ刀はバーサーカーの黒い魔力に浸食されている。まず破壊しようとランサーが『破魔の紅薔薇』で両方と打ち合つたが、どちらも触れた部分より先は魔力の浸食は引いたが、『破魔の紅薔薇』が離れればすぐに戻ってしまった。

「しかも、キャスターのか……」

「まったく、あの英霊はびっくり箱に事欠かないようだな。俺も宝具を一つ使わせたが、その時は剣を槍に変えた上に、波濤を発生させた。おそらく、アレにも何かしら能力があるんだろう」

「その事だがランサー、7みたいな形の方にはあまり触れるない方がいい。私の直感が触れること自体が危険と言っている」

「お前の直感なら信用できるな。が、完全に触れないのは無理だな」

バーサーカーの猛攻は凄まじい。避け切るのは至難の技であり、その殆どは得物で受けなければ自分に届いてしまう。バーサーカーはセイバーだけを狙っているようでランサーには目もくれない。それを利用して後ろから攻撃すれば戦術として最良だろうが、騎士道をゆくランサーはそんなことをせずに、セイバーの左側をフオロースするように動いていた。

「……………」

咆哮を上げながらバーサーカーは狂化しても失われない武芸と、自身の損傷を振り返らない攻めでもってバーサーカーは2人を嘲笑うかのように攻め立てる。恐れず、退かず、ただ敵を殺すべくする行動は、セイバー達に薄ら寒く感じさせる。同時に、ここまで素晴らしい武芸を誇る騎士がなぜ狂気に吞まれたのが解らなかった。

「ランサー、このあたりで一か八か、賭けに出る気は？」

「このまま続けても勝機は薄い……良いだろう。乗るぞ」

キャスターを倒し次第アーチャーが援軍に来る手筈になっているが、2人ともソレには期待していない。アーチャーの攻撃は掩護に向かないのは判りきっているのと、狂気に吞まれた哀れな英霊をせめて同じ騎士である自分達の手で倒すのがせめての手向けにしようと考えていた。

「風を踏んで走れるか？」

「む？　フフン、なるほど。造作もない」

セイバーの言葉は謎めいたものだが、セイバーと一度だけとは言え死力を尽くした戦いをしたランサーには理解できるものであった。

「風王鉄槌ッ！」

セイバーが放ったのは一撃限りの風の破砕鎚。その威力は鉄槌の名に恥じない十分な破壊力を持っており、サーヴァントによってはその一撃が致命傷になることもある。だが、そんな一撃もバーサーカーは真正面から迫り来るソレを左手の刀で斜めに切り裂いて無力化してしまう。それは、バーサーカーの膂力をフルに使った攻撃であった。

「いざ　覚悟ッ！」

セイバーとバーサーカーは互いに放った一撃で硬直している。ランサーは、そのセイバーが作った隙を逃さないように、『風王鉄槌』が通って一瞬だけ真空になった場所に流れ込む風を足場にして一息でバーサーカーとの距離を詰める。それだけではなく、バーサーカーより高い位置から攻撃することで対処できない攻撃を繰り出す心算であった。まず、左手の『必滅の黄薔薇』で頭を狙った突きをする。それはバーサーカーの右手の7のような刀で絡め取るようにして受け止める。だが、ランサーの本命は右手に持つ『破魔の紅薔薇』であった。左手は振りきった後ですぐには動かせず、右手はたったいま動かして急には違う動きはできない。『破魔の紅薔薇』を防げる手段を持たないバーサーカーの心臓に突きを入れる。

「獲つたり、バーサーカーっ！」

必勝を確信し、その魔貌を笑みの形にしてランサーは宣言した。だが、後ろにいたセイバーの表情はランサーの笑みとは違う形に歪めていた。

結果として、ランサーの攻撃は失敗し、『破魔の紅薔薇』はバーサーカーの体を浅く傷付けるだけに終わった。バーサーカーは刺突される直前に右腕を無理矢理動かして絡め取った『必滅の黄薔薇』を伝ってランサーを地面に叩き付けたのだ。地面に叩き付けられてもランサーは刺突した、だが狙いは大きく逸れてしまったのだ。

地面に叩き付けられても 地面に神秘など宿っていないのでランサーにダメージは無かったが、敵と認識したバーサーカーはトドメを刺そうと刀をランサーの首に掛けようとしたが、その前にセイバーによって弾かれる。

「^{アア}Arthur^アッ！」

セイバーが割って入ったので、バーサーカーの視線はセイバーだけに注がれる。セイバーはそのまま攻めずに、ランサーから離れるように横に跳ぶ。バーサーカーはセイバーを逃さんと後を追いかける。

（済まん、セイバー）

心の中でセイバーに礼を言い、槍を掴んで立とうとした時、ランサーは変化に気付いた。

「重く、なっている……？」

驚愕の一言を漏らした。

「クッ！」

「！！！」

前回の二の舞の状況であった。ランサーが立て直せるように引き離したが、それを好機とバーサーカーは取ったのか攻めを苛烈にしてきた。直感で触れてはならないと判つていても、セイバーは何度も詫助に触れてしまう。

「セイバー！ 剣の能力は重さの増加だ。それ以上は触れるな！」

「なにッ!？」

まるでランサーの言葉が発動のトリガーだったかのように、セイバーは鎧と剣の重さを意識する事になった。ランクB 対人宝具『侘助』 斬ったモノの重さを倍にする宝具であった。この宝具の恐ろしいところは、倍加に限界が存在しないのと、斬った時の重さの倍にする点であった。持ち主はキャスターなのだが、篡奪の宝具によつて所有権はバーサーカーにあるのでその効果を遺憾無く発揮している。

セイバーやランサーのように得物を持って戦う者にとっては、悪夢のような宝具であった。多少の重量の増加であれば、技は粗くなるだろうがなんとか扱える。しかし、何倍にも膨れ上がればそうはいかず、抱えでもしなければ得物を持ってない程になってしまう。

「悪辣な宝具を持っているものだな……」

「だが、負けられない。このままでは罪の無い者達がキャスターの餌食となる。それに、騎士があのような姿にされて苦しんでいるだろう」

かたかたと乾いた金属音がかすかに大気を震わせる。音源はバーサーカーであった。その音はまるで嗤っている声かのように聞こえる。

その音に怪訝な顔をしながらもセイバーとランサーはバーサーカーを凝視する。その前で、バーサーカーの細部を曖昧に認識させていた黒い霧が全身鎧フルプレートに吸い込まれるかのように消えていき、ついにバーサーカーの詳細な姿を見れるようにする。

「ッ！」

華美でもなく、武骨でもない。その鎧は機能美と豪華さを兼ね備えた誰もが羨む完璧な鎧。セイバーの知っている鎧であった。だが、セイバーは目の前の光景を信じられなかった。否、信じたくなかった。

「貴方は　　　　　そんな　　」

セイバー知る限り誰よりも『騎士』として在るべき姿を体現した人物。その人物かれが、狂化の呪いに侵されて黒く澱んだ姿など、有り得てはならなかった。

そんなセイバーの想いを無視するかのように、騎士は今迄自分が使っていた武器を惜しむ様子もなく地面に突き立て、腰の鞘込めのまま携え持っていた剣に手をかける。

抜き放たれたのは、セイバーのエクスカリバーに通ずる意匠。刀身に刻まれた精霊文字の刻印。刃の照り返しは月下に輝く湖水の如し。

見間違えるはずが無い。その剣も鎧も『完璧なる騎士』と謳われた彼が持つべき物。剣の名は、『アロンドライト無毀なる湖光』

「アアArthurッ！」

今のセイバーには解った。アレはまともに喋れずに、憎い相手の名を言っているのだと。

「……そんなにも、貴方は………そんなにも私が憎かったのか、とも朋友よ………そんな姿に成り果ててまで………そうまでして私を恨むのか、サー・ランスロット湖の騎士！」

騎士（後書き）

侘助の効果はバーサーカーが手放しても残っています。

王と騎士(前書き)

感想 零崎煌識様、CANCER様、教授様、かにかま様、シユン
コ口槍様、達人鬼様、ウツイ様
ありがとうございます！

王と騎士

『湖の騎士』サー・ランスロット。彼の呼び名はモノはあと2つある。『完璧なる騎士』と『裏切りの騎士』。それぞれ確かに彼の相応しい物なのだろう。湖の乙女という精霊に育てられたから『湖の騎士』。円卓の騎士の中でとりわけ抜きん出て勇敢で騎士道を守る心を持っていたから『完璧なる騎士』。王を裏切りつたから『裏切りの騎士』。

しかし、裏切り関して言えば人間であつた故の過ちであろう。騎士の不義は、王妃と恋に落ち、円卓の調和を乱した事であろう。ランスロットの知らぬ事だが、王は王妃と騎士の関係を知つても、黙認しようとしていた。それが性別を偽っている王に嫁いだ王妃の幸せに繋がるなら……と。しかし、王の失墜を企む者達によつてその不義は曝され、対処しなければ示しつかない事になってしまった。王も王妃も騎士も、誰も悪くはなかつた。だが、巡り合わせは悪く、最悪の事態になつた。3人が3人とも後悔し、誰も報われない結末になつた。

その結末は、英霊となつて座に着いても騎士を苛めた。そこに届いたのは、まるで悪魔の囁きよつな声。憎悪と後悔に塗れた、ある男の呼び声。

来たれ狂える獣よ、来たれ執念の怨霊よ。その声は騎士の内側で響き、かつての騎士の考えた有り得ない可能性を刺激した。

そもそも自分が騎士でなかつたのなら？

狂化を喜んで受け入れ、名誉も誓いも苦悩も忘れて、ただ殺すだけの獣に成り下がつた。それが、『バーサーカー』。

そこまでして私を恨むか、湖の騎士！

そうとも。ああそうだとも。

あのとき、騎士でなく男として

忠臣でなく人として、貴方を憎悪していたならば

己は、あの女を救えたのかもしれないのだッ！

「セイバーっ！」

セイバーはバーサーカーの攻撃を避けようことができず、呆然としたまま剣で受け止めた。だが、耐え切ろうと踏ん張ったり、衝撃を逃がそうとしなかったのでまともに攻撃をくらったセイバーは跳ね飛ばされる。

「クっ！」

このままではセイバーは翩り殺されると察したランサーは、バーサーカーの目の前に躍り出て、2槍でもって足止めをしようとした。だが、『無毀なる湖光』を抜いたバーサーカーに一撃でセイバーと同じように跳ね飛ばされる。『無毀なる湖光』には装備者の全パラメーターを1ランク上昇させる効果があり、今のバーサーカーのステータスは全てがA以上という破格のサーヴァントになっている。今のバーサーカーはステータスだけで言えば最強であった。

それでも、サーヴァントを防御の上から一撃で戦闘不能にするだけの力はなかった。だが、セイバーはバーサーカーがランスロットであり、自分への恨みからそうなっと思ひ。ランスロットに刃を向

けるなど出来ないでいる。

「……………」

それでも、バーサーカーは一切攻める手を緩めずにセイバーに斬り掛かり、怨敵を殺そうと『無毀なる湖光』を振るう。本来の宝具を手にしたバーサーカーの技の冴えと威力は、効果を抜きにしても仮初の宝具を振るうより段違いであった。攻撃を防ぐ度に、セイバーは自身がそれほど恨まれていたと意識する。

止むを得ぬ理由で互いに剣を向けたが、心根では判り合っており、互いに相手を恨んでなどいないとセイバーは思っていたのだ。それは間違っていない。しかし、それはセイバーが『王』としてであるように、ランスロットが『騎士』としてあるようにであった。つまり、『獣』として現界してるバーサーカーにソレは当て嵌まらない。不意に、セイバーは後ろに引かれて来るであろうバーサーカーの一撃から逃れる。だが、代わりにランスラーがその一撃を受ける位置に立つ。無情にも、避ける余裕など無く、ランスラーは2槍で防ごうとするが2鎗ともども叩き斬られる。

「な……ぜ……………」

「セイ……バー……救って……やれ」

セイバーを助けたランスラーが途切れ途切れでも、顔だけに向けて言う。その眼は、言葉以上にセイバーに想いを伝える。獣に堕ちたなら、お前が救い上げる。お前以外に、ランスロットを救える奴は居ない。

バーサーカーが邪魔なモノを斬り払うために『無毀なる湖光』を振り上げる。

「やめろおッ!!」

セイバーの声の限り叫ぶが、そんなモノをバーサーカーが聞き入れるわけもなく、既に致命傷を負っているランサーにトドメを刺す。両断された英霊は、さっきまで居たこと自体がまるでなかった事にされたように、跡形もなく消滅する。

「うう…うあああああ!!」

双眸から涙を流し、セイバーはランサーが消えた事で呪いが解かれて全快した左手も使って、両手でしっかりとエクスカリバーを握ってバーサーカーに斬りかかる。さっきまで戦意を失った主の手の中で光を失っていた聖剣は、その光を僅かに取り戻す。

セイバーにはランスロットを今すぐに救う手段は思い当たらなかった。しかし、獣であることを止めさせる手段はある。倒せば、倒して聖杯戦争から退場させれば、クラスからは解放させる。そしてこの手に聖杯を握めば、全てを救える。奇跡を起こしうる聖杯をもつてして、民を、ランスロットを、ギネヴィアを、分け隔て無く救う。

「ッ!!!!」

だが、生前からの力の差が覚悟だけで覆せるはずがない。それに、狂化によって戦闘力の底上げがされてるバーサーカーに武と武で競い合っては勝てる道理があるはずもない。

打ち合えば、当然のようにセイバーが押し負ける。『風王結界』と鎧を解き、その分の魔力を魔力を放出して加速などつける魔力放出に当てても、詫助によって重さの増えたエクスカリバーを存分に扱えない。白兵戦では勝ち目など今のセイバーに無い。万全の状態です、ようやく僅かな勝機を見出すのがやっとなのだ。

圧倒的な膂力による剣の猛威に骨は軋み、筋肉は負荷で断裂し、手足は痺れつつも痛みを訴える。だが、一番悲鳴を上げているのは心であった。救うのに必要な犠牲だとしても、セイバーにはそうやすやすと切り捨てられる相手でも、存在でもない。果たして、これは本当に正しい行いなのか？ 打ち合いながらも、セイバーは自問し続ける。答えは、出ない……

「う……う……」

嗚咽を抑えながらもセイバーは戦う。そうしなければ、彼女の考える『王』の責務が果たせない。偶然か、ほぼ同時に剣を振り上げる。セイバーは直感で感じた。このまま同時に振り下ろせば、互いに左肩を抉る大打撃を受ける。もしかすれば、カムランの丘での最後ののように、相討ちに終わる。

ソレを、受け入れていた。このまま戦うよりは、良いように思えた。自分ではバーサーカーに勝てないとも解っているからでもあっただろう。

「『^{エクス}約束された勝利の剣』ッ……！」

ランクA++ 対城宝具 『約束された勝利の剣』星が鍛えし聖剣による魔力を交換し絶大な出力の“光”の斬撃として放つ。その一撃はバーサーカーより先んじて放たれ、重量が増加していたのも相まって肩から腰近くまで叩き斬った。

「あ………ああッ……！」

宝具の使用はセイバーの意思ではなかった。令呪による命令「『約束された勝利の剣』を撃て」によって強制されたものだった。

大打撃を受けたバーサーカーは双眸の憎しみの色を強くして、セ

イバーの目の前で消えた。

あっけなく(前書き)

感想 にかさま様、White Seal様、教授様
ありがとうございます！

あっけなく

絨毯爆撃かのような『王の財宝』による宝具の射出から逃げながらキャスターは戦力差を振り返る。自分とアーチャーでは、単純なステータスで言えばアーチャーの方が幸運値が高いので運が入り込む余地のある戦いなら優勢である。

スキルで言えば、アーチャーは一对一の戦闘ではまず役に立たないスキルしか持っていないので自分が優勢である。

そして、最後の要因になる宝具だが、ランクだけなら同ランクである。それでも、戦力評価ではまともに戦う限りはアーチャーの勝利は揺ぎ無い。『王の財宝』に対抗すれば、その数で押し負ける。『天地乖離す開闢の星』と対抗すれば、出力の差で押し負ける。真つ向からの戦いでは宝具を使えばまさに最強だ。逆に言えば、宝具を封じるか、わざわざ対抗しない方法で潰せば勝てる。簡単な事では無いが、キャスターにはそれを可能とする宝具がある。

「正解『神殺鎗』」
かみしこのやじ

本来の持ち主が、嘘の能力で最速の斬魄刀と言っていた事と、かみ神殺と名に入っているのも、もしかしたら神の因子を持つ存在により威力を発揮するかもしれないと無意味に思い、体の向きを反転させる。

逃げに徹していたキャスターが突然振り向いたので、アーチャーはようやく腹を括ったかと思い、弾幕の密度を上げようとした。しかし、なぜか視点がズレ落ちていく。

「・・・？」

声が出ない。疑問に思ったが、それより異常な事に地面が近付い

てぶつかって来る。

「英雄王といえども、不意打ちには敵わんか『喰らう事による略奪』

」

アーチャーが最後に見たのは、人外の口であった。

ランクA 対軍宝具 『神殺鎗』伸縮速度が音の500倍になる
驚異の速度と、13?も伸ばせる驚異の長さを持つ宝具。キャスタ
ーは、その宝具を使って離れた状態からアーチャーの首を刎ねた。
スキルになる程に磨き上げた首を刎ねる動作は一切の無駄無く、ア
ーチャーに反応させる暇を与えずに行われた。振り向くと同時に行
われたと、「キャスターの攻撃なら、距離の開いてる今なら反応で
きる」と慢心していたのも成功の大きな要因になった。

「……やはりステータスは上がらないか。スキルも対魔力くらい
しか戦闘には役に立たないな。しかし、人の事は言えんが宝具特
化型みたいなもんだな」

サーヴァントである以上は、宝具が必殺の力を持っているのは普
通にある事なのだが、アーチャーはほとんどの場面で有効な物を出
せる『王の財宝』と、出力ではまず負けない『天地乖離す開闢の星』
はどちらも破格にしか思えない。それこそ初期のステータスでは逃
げるのも一苦労だったであろう。

ギルガメッシュがアーチャーで単独行動のスキルを持っておらず、
なお且つマスターが時臣でなかったら、キャスターはマスター暗殺
を全力で実行していた。

「戦況は……意外だな。セイバーがバーサーカーを退けるとは、ラ
ンサーの退場は当然か?わざわざ『破魔の紅薔薇』の対策として『
詫助』と『鏡花水月』を持たせたからな。まあ、出来れば喰いたか

「つたんだが、もうどうしようもあるまい」

既にこの戦場の決着は着いている。なら、後は引き上げるだけとしてキャスターはバーサーカーが『詫助』と『鏡花水月』突き立てた場所まで歩く。

セイバーが膝をつき、嗚咽を漏らして泣いているのを見たが、キャスターはなにもせずに『詫助』と『鏡花水月』を地面から抜き、解放を解いて腰の鞘に納める。今なら、刈るのは容易く、勝ちが確定する。だが、それではつまらない。戦いを愉しむ為に現界しているのに、刈るのでは意味が無い。

精神的に追い詰められているのが嫌でも判るが、特にできる事はない。そもそも敵であるのだから気遣いなど無用である。もっとも、セイバーと全力で戦えなくなる可能性が出てくれば、少しの間、どさして気にしない。

雁夜を回収するべく下水道に転移する。

「キャスターか、すまない。セイバーの宝具のせいでバーサーカーが大打撃を受けたから、令呪を使って強制的に霊体化させたんだが……」

「構わん。たかが令呪の一回でバーサーカーが生き延びたのなら、令呪より価値がある。まあ、俺がバーサーカーに勝てたらの話だな」

「本気、なんだな……。バーサーカーとの2人掛かりなら絶対に勝てるのに、わざわざバーサーカーと戦って生き残った方がセイバーと一騎討ちができるようにする。お前の方が戦闘狂って意味で、バーサーカーのクラスが相応しいじゃないのか？」

「残念ながら、聖杯戦争のバーサーカーは狂気に堕ちたことのある

英霊でなければなれん。俺は……無いはずだ。まあ、そんなどうでも良い事は置いておく。ケイネスが人目のありそうな場所に行く前に捕まえたいのでな、マスターは拠点に戻ってもらう。ああ、バーサーカーなんだが拠点で実体化させてコレを使ってやれ」

そうしてキャスターが渡したのは補肉剤。最後の1つである。

「いいのか？これは桜ちゃんを助ける際に使ったって言う補肉剤だろ？」

一応は雁夜に桜救出の一部始終をキャスターは教えてある。流石に、桜が死にかけた事は伏せてなのだが。例えそれを教えたとしても、それでも桜を助けたことはキャスターに感謝していただろう。ほとんどの傷を治せる補肉剤を惜しげも無く使ったのだから。

「どうせ後2回しか戦わんし、バーサーカーは大打撃受けたんだから拠点に敷いてある陣を使っても回復しきれんだろう。それだと明日がつまらん。最悪の場合は、また作るか回復しきるまでおとなしくしていればいい話だしな」

補肉剤を作るには結構な量の魔力が必要になるので、そう気軽に作れないのだがキャスターは「所詮は道具だ。使ってこそ意味がある」と言っただけで締めくくる。

ランサーが敗れたとケイネスが知っての選択は帰国であった。サ

「ヴァントを失った以上は、もはや聖杯戦争に参加し続けるのは不可能であるし、聖堂教会の世話になる必要は無いからだ。ちなみに、もしもケイネスが教会に保護を求めて行こうとしたら、網を張っている切嗣と舞弥によって教会の敷地内に入る前に狙撃をされる運命であった。」

少し悲しいことに、切嗣と舞弥の網は獲物を捕まえずに終わった。ケイネスは帰国しようとし、時臣は焼き切った足にしっかりと治療を施すために教会に行かずに、関係者の居る病院に救急車を出してもらって病院に向かったからだ。そこまで長居する気は時臣にはないが、それでも病院を出るのは明日になるであろう。

思わぬところで難を逃れていたのだが、死に方が変わるだけであった。

「まったく、あの使えんランサーが……。最後が敵を庇ってだと？ 私を馬鹿にしてるのか」

「……」

戦いは使い魔を通して見ており、ケイネスは憤りをぶつける相手がいないので、小声でブツブツと念仏でも唱えるように呪詛を紡いでいた。ソラウは、ランサーが死んだ事にショックを受けて茫然自失状態でぐったりとしている。

既にケイネスはアーチボルト家に連絡して帰りの手段が整えば迎えを超越するように命令したので、後は迎えが来るのを待っているだけであった。仮初めの拠点で2人は最後になると微塵も思わず過ごしていた。

（ハア……聖杯戦争に参加したのは失敗だったかもしれない。私の経歴を完璧なモノにするはずが、傷を付けてしまった。……生き残ったのは、自慢にもできない。せめて、遠坂や間桐のマスターを倒

せていれば話は違ったんだが……)

帰った後のことを考え、不愉快な事実なのだが聖杯戦争で何も得られなかったと後悔していたのだが……

「ソラウ？」

いつの間にかソラウが姿を消していた。慌てて、捜す為に月霊髓液を使って自動索敵を廃工場全体を網羅するかのようには水銀の触手を伸ばす。

(居ない？どういふ事だ……)

糸のように細くしてまで廃工場の中に張り巡らせたのに、人の気配はない。気落ちしていたソラウがそう遠くに行くはずが無いのでまず有り得ない事になる。無理にでも現状に合わせるなら、突発的に走り出したのだろう。しかし、いくら注意をはらってなかったとは言え、ソラウが走り出したりしたら近くに居た自分が気付かないはずがない。

「ソラウ！どこに居るんだ!？」

声を張り上げて呼ぶが、返事は無く夜気に吸い込まれて消えていく。

(どうなっている！侵入者など居ないはずなのに、ソラウが消えるなど有り得んことだぞ！)

「どうした？捜し人でもいるのか？」

上からの声にケイネスは振り向く。キャスターが、月光を受けて廃工場の穴の開いた場所から見える場所に立っていた。

「ッ！……流石はキャスターだな。私の敷いた結界を騙して侵入するとは。わざわざ姿を現したと言う事は、私と取引か何かをする意図があるのだろうか？」

動揺を悟られまいと、ケイネスは冷静に言いながら廃工場内に張り巡らせた月霊髓液を集める。なにかしら意味があるはずと考えを巡らせながら、最悪キャスターと戦う覚悟を決める。

「ああ。取引ではないが意味はある。」

水銀を回収するのが面倒だから、集めてもらおう意味がな」

一瞬でケイネスの背後に転移し、脇差しで一突きして終わらせようとした。

だが、月霊髓液の自動防御が発動して銀の防御膜を張ってケイネスを守る。防御膜を貫かれましたが、鏢が邪魔になってそれ以上は進めなくなっている。英霊の一撃を防いだとケイネスは得意げに笑みになった。

「射殺せ『神鎗』」

しかし、一撃を防いだのケイネスの勘違いでしかなかった。脇差し程度の長さだったのが、一気に太刀位まで刃を伸ばしてケイネスを刺し貫き抜いた。

ランクB 対人宝具 『神鎗』 伸縮自在の刃を持つ刀。最短で脇差し程度、最長で刀100本分の長さにできる宝具であった。

「道具…風情が…」

そう言い残してケイネスはこと切れた。

あっけなく（後書き）

アーチャースキル

対魔力：C 第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。 大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

単独行動：A マスター不在でも行動できる。 ただし宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合は、マスターのバックアップが必要。

黄金律：A 身体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。 このランクなら一生金には困らない。

カリスマ：A+ 大軍団を指揮・統率できる。 ここまでくると人望ではなく魔力、呪いの類である。 人柄などでなかったため、劣化しなかった。

神性：E- ギルガメッシュ自身は最大の神霊適性を持っていたが、それを遥かに上回る様々なモノが混じっているアーロニーロゆえに劣化して、僅かにある程度。

おまけ

「……衰えたな」

『はい』

夜が明けるまで冬木教会の付近で網を張っていた2人のは、イン

コム越しにそんな短い会話をしていた。

義骸（前書き）

感想 教授様、h a l様、かにかま様
ありがとうございます！

義骸

義骸。本来とは違う用途なのだが、キャスターは雁夜の新しい体になっている。ホムンクルスと同じように作りだす物なのだが、根本的な考えは違う。

ホムンクルスは戦闘などを前提に作られる事が多く、アイリスフィールも特別な目的の為に作られたの一点モノである。基本的には魂込みで作られる。

義骸は言うなら魂を内容物と考えるなら、ソレを受け入れる容器である。しかし、魂ならなんでも入る訳でもない。本来なら、魂と肉体は2つで1のように唯一の組み合わせである。臓器移植のように、拒絶反応がでる危険性も存在する。

「とまあ、そんな危険性もあるんだが。身体を変えるでいいのか？」

「ああ、構わない。俺の身勝手だけど、蟲に犯されて穢れた体よりはずっと良い」

「まあ、後は僅かに調整を入れれば桜の体は完成だ」

「もうそこまで出来ていたのか？」

「当たり前だ。基礎自体はお前と取引した日から作っていた。その後は顔などの調整をしたり、魂が馴染みやすくしてやるだけだったからな」

実は雁夜の体になっているのは魔力供給量を増やす為に龍之介の体にする予定だったのを、急遽雁夜用に作りなおした一品だったりなどもする。道具作製：EXは伊達ではない。それでも、顔や肉付

きなどを変える手間があった。それで髪は雁夜の健康だった頃の色ではなく、面倒だったので脱色して今と同じ白髪にした。髪なら、元の色の方が良いのなら染めればいいだけ、というのも理由にありたりするのだが。

「しかし……この寺に体を作れる場所があるのか？そんな場所は寺を見回った時には無かったんだが」

「当たり前だ。わざわざ捜せば簡単に見つかるような寺に、そんな場所を作るわけ無いだろう。スペースの問題もあつたんだが……。まあ、桜を連れて一緒に来い。……。未だに、俺と話そうともしないからな」

若干、話そうともしない事にショックを受けているキャスターであつた。

「（常識があつたら、キャスターのような戦支度の格好の奴とは誰も話そうとしないと思うんだけど）……。まあ、桜ちゃんは人見知りだからね」

「まあいい。ちょっと歩くからな」

キャスターが雁夜と桜を連れて行った場所は、円蔵山の地下である。そこには大聖杯と呼ばれる魔法陣あるのだが、キャスターはそれを見ても感動も感激もせず、ただ「なんか凄そうな物があるな」としか思わなかつた。それでも、霊脈から魔力を吸い上げる術式などをそれから読み取って、利用したりしている。

「……衛生面で、大丈夫なのか？」

「問題などない」

柳洞寺の一室を家としての拠点とするなら、そこは魔術師にとつての工房になる。ただ、雨風の心配が無いので 雁夜からすれば 怪しげな機械が地面に直に置かれている。その中には、ピンク色の液体で満たされた、巨大な試験管を逆さまにしたかのような水槽があり、液体以外にも桜の分の義骸が入っている。

「わたし……？」

雁夜の後ろに隠れている桜が不思議そうに義骸を見つめる。まるで鏡に写したように、自分が水槽の中に居るのが解らないのだろう。

「アレはまだ桜ちゃんじゃない。これから、桜ちゃんの病気を治す為にアレを使うんだよ」

この事と、間桐邸であった事は全て記憶から消す予定なのだが、怯える姿など見たくない雁夜は桜が怯えないように、優しく嘘の理由を言う。

「わかりました……」

だが、桜は怯える様子など微塵も無く、当たり前と言わんばかりに平然と受け入れている。

雁夜はそれを見て憤りを覚える。心が、壊れている。精神を麻痺しびさせているだけと願い、信じていたが、臓硯から引き離し、蟲から解放されても、桜は一度も笑顔を見せない。

「キヤスター。記憶の封印で、本当にこうなる前の桜ちゃんに戻せるんだろっな？」

「可能性があるだけだ。どの道、1度変質してしまえば元には戻らん。限りなく、近い状態にはできるがな。その為に使うのが、義骸と『鏡花水月』だ」

ランクC 催眠宝具 『鏡花水月』 一度でも解放を見た者を五感全てを支配する完全催眠に陥れる宝具。キャスターをそれを利用して、嘘の記憶を刷り込むつもりである。方法としては、眠っている間に記憶封印の魔法で間桐邸での記憶を封印し、続けて魔法で補佐しつつ『鏡花水月』の完全催眠で抜け落ちた期間にあった出来事を作り上げて、それを記憶だと錯覚させる。魔法だけでも同じような事はできるが、『鏡花水月』の方が真に迫った記憶を作り上げられる。あたかも本当にあったかのように感じられるだろう。

「体を勝手に変え、宝具で記憶を弄繰り回す……。将来、恨まれるかもな……」

「お前が話せない限りは一生解らんだろ。その辺はお前次第だ」

行為だけを考えれば蟲による改造となんら変わらない。そこが、雁夜にとつての悩む所であった。それと、普通ではない桜が果たして普通に暮らせるようになるのかも疑問であった。

「不安か？安心しろ。桜がどういいう道を進もうと、この体は役に立つ」

魔力遮断型の義骸であり疑似魔術回路を多数持っているのに、まづ魔術師とは認識されない義骸。更に、義骸そのものが魔術礼装として魔術と魔法の運用などを補佐を可能とする逸品。雁夜の知らない事なのだが、キャスターは最高の逸品として完成させている。そ

の為に、ケイネスとソラウは殺してもすぐには喰わずに解析もして作り上げる際の参考に使っている。それと、元々の虚数属性は影に近いようなので、影の魔法が使いやすいように調整もしてる。

「魔性の道を歩くなら、誰よりも歩きやすいだろう。平穏な道なら、苦も無く歩ける。そういう風になるように願って作った……」

仮面で表情は窺い知れないが、キャスターは穏やかな口調で言う。

「さて、無駄口はここまでにする。魂の移動に関してはすぐに終わるが、その後の処置には少し時間が掛かる。ああそうだ、お前の体に追加する機能があるから、お前も眠れ」

なにやら不吉な気がした雁夜であったが、逃げれるはずもなく桜と一緒にねむらされてしまった。

義骸（後書き）

おまけ

「うう……」

「目覚めたか？ 雁夜」

「ああ……。ところで、機能って何を追加したんだ。流石に体を弄
繰り回されるのはいい気分じゃないんだが……」

「なに、すぐに解る。『回転しろ』」

ギューイイイー……ン

キャストの言葉で雁夜の右腕が突然音をたてて右回転し始めた。

「……なん……だと……」

「『逆回転しろ』」

今度は左回転し始める。

「元に、戻せー！……！」

（左腕は、蛇腹剣みたいに伸びるとは教えない方がいいな）

追加したメインは魔力遮断なのだが、つい余計な追加をしたキャスト
ターであった。

本編では、余計に追加したモノはでない。

……はず。

バーサーカー（前書き）

感想 kyuriosu7789様、煌
焔様、hai様、零崎久
識様、通りのすがりん様
ありがとうございます！

バーサーカー

準備は 勝とうが負けようが 万全になり、後顧の憂いが無いようにしてある。もうほとんど放置していた龍之介を街から回収して、最後になるかもしれない戦いの見物客にしている。

「旦那、アレと戦うのか？なんか黒い鎧ってCOOLって感じじゃないか！？あれ？そういえば旦那は、アレと共闘したんじゃないの？なんで戦う事になってんの？」

「なに、戦ってみたいからだ」

「ん〜、まあいいや。旦那！派手な戦いを期待してるぜ！！」

龍之介は生で見られるサーヴァント同士の戦いに胸を踊らせ、純粹な期待を持ってキャスターに指定された安全圏に座る。

その様子をキャスターは呆れながら見ていた。戦いが見える位置というのは、危険域に他ならないのにどうしてこつも純粹に楽しそうに居られるのか。子供のように純粹で、理解できない召喚者の最後の期待に応えるべく、自身が最強と考える脇差しを鞘から抜く。他では、『無毀なる湖光』に拮抗できないという考えもあったが、バーサーカーは最強の敵なのかもしれないのだ。全力を出さなければ負けるは必然である。

「正解『神殺鎗』」

まだ伸ばさず、解放するだけに留める。

「バーサーカー、最後の命令だ。全力で俺と戦え」

どちらかが勝とうが、最後になる。仮面の下で笑い、『無毀なる湖光』を『神殺鎗』で受け流す。筋力、耐久、俊敏、魔力、幸運はステータスでは完全に負けている。なら、覆すのは技量スキルと宝具をもつてするしか勝てる可能性は無い。

両手でしっかりと握り、続けて繰り出される攻撃を後ろに退きつつ受け流す。拮抗なんて出来ないのは解りきっている。まともに受け止めれば、その時点で体に戦闘に支障が出る程のダメージを受ける。受け流してダメージを最小限に抑えつつ、刃先を兜の下の眉間を貫くつもりで伸ばす。が、バーサーカーは一步右に移動するだけで避け、伸縮の隙を突くつもりなのか複雑な思考ができないからか、何も躊躇わず突っ込んで斬ろうとする。

『神殺鎗』の伸縮はバーサーカーが避けた時点で、元の脇差し位の長さに戻っていた。高速で伸縮を繰り返す『神殺鎗』の技である「連刃舞踏」に繋がれたのだが、敢えて切先を下に向けて伸ばす。棒高跳びの棒の代わりに伸ばしたのを使って、バーサーカーの上を取る。その瞬間、黒いモノが跳んで来たので、反射的に靈子の足場を作り、それを蹴って横に避ける。

「まるで弾丸だな……」

黒いモノはバーサーカーだった。ただの跳躍で、弾丸さながら速さで一直線に突っ込んで来たのだ。何も考えず、敵を倒すだけに行動しているからなのか予想だにしない行動を平気でとる。しかも、閉鎖空間であるから、次がある。

避けられたバーサーカーは地下の天井に着地(?)し、そのまま天井を踏み締めて再びキャスター目掛けて跳躍をする。

「縛道の三十七 吊星つりぼし」

飛んで来たモノを捕まえたり、落下を防ぐ縛道は今のバーサーカーを捕まえるのに最適であろうと放つ。しかし、魔力で作られた敷布団のような物はあっさり両断される。

それで十分であった。狙ったのは目くらましと、隙を作る事。攻撃の直後は大抵の場合は隙ができる。例えバーサーカーが吊星を斬らなくても、中れば隙はできる。振り切った直後なら、勢いのついた跳躍後での空中ならまず避けられない。

「！！！」

「なっ!?!」

バーサーカーは避けなかった。否、避けずに、むしろ中りに来た。自分から中ること、損傷を最小限にしようとしたのだ。

頭から『神殺鎗』に斬られるかたちになっていたのを、頭を上半身ごと捻って刃が入り込む場所を変えて斬りずらい入射角にし、すれ違う一瞬には『無毀なる湖光』を右に振ってキヤスターを斬ろうとまでした。火花が散り、バーサーカーは兜と鎧と共に右肩を斬られたが、戦うのに支障がないレベルでの損傷に留めさせた。良くも悪くも切れ味の高い日本刀であるからの結果であろう。切れ味が高いと言っても、それは最適な角度で斬り込んだ時での話であり、意図的にずらされれば切れ味は落とされたも同然になる。それでも鎧を斬れたのは、宝具であるからであろう。

それに対するキヤスターは背中に一筋の紅い線を入れられた。すれ違いざまでの一撃で斬られた傷である。血が滲み、白い服がじわじわと紅く染まっていくが、治癒の魔術で傷を治す。

「さっきので、獲るつもりだったんだが、なあア！」

キヤスターは着地すると、『神殺鎗』を伸ばして横に薙ぎ掃う。

バーサーカーとの距離は約8メートル。その程度の距離なら、伸縮は余裕の範囲。勢いの乗った十分な威力を持ったその一撃をバーサーカーは避けずに『無毀なる湖光』で受け止め、刃を触れ合わせたまま距離を詰める為に駆け出す。受け止められるのは予想の範疇だったキヤスターは、刃を縮めながらバーサーカーと斬り結ぶ。しかし、どれも完全に受け止められる。

伸縮速度は凄まじい『神殺鎗』なのだが、それを使うキヤスターの俊敏はBである。伸縮しても一直線にしか伸びないのだから、鏢などの見える部分でおおよその伸びてくる位置は判る。バーサーカーは反射的に伸びてくるであろう位置に『無毀なる湖光』を移動させて迎撃している。

「『虚閃』」

距離が残り2メートルを切ったところでキヤスターは左手を『神殺鎗』から離して、バーサーカーに向けて『虚閃』を撃つ。灰色の魔力の激流は、バーサーカーを呑みこまんと殺到するが、吊星のように両断されて無力化される。

「^{おもて}面を上げる『佗助』」

キヤスターは左手で佗助を抜き、解放した『佗助』で『無毀なる湖光』を斬りつける。まず、振り下ろす。これで2倍。次に、少し浮かせて引いて7のような形の先端に中てる。これで4倍。さらに、上に上げて返しのように付いている刃の部分を中てる。これで8倍。

「縛道の六十一 六杖光牢」

バーサーカーではなく、『無毀なる湖光』に縛道をかけて動かなくする。バーサーカーはそれを力尽くで破ろうとするが、罅がはい

るだけですぐには壊れない。

その際に、キャストは更に侘助で攻撃して重くしていく。16倍、32倍、64倍。そこで六杖光牢は破壊されて、バーサーカーは『無毀なる湖光』を振り上げる。その際に『侘助』は打ち上げられてキャストの手から離れる。それでも、『侘助』の効果は消えずに残っているので、『無毀なる湖光』の重さは124倍になっている。それでも、バーサーカーは『無毀なる湖光』から手を離さずに持ち上げている。

筋力が『無毀なる湖光』の効果もあって、A++になっているからかさほど重さを感じていないのかもしれないが、その重さは俊敏を落とす事になる。それでも、キャストと渡り合うのには十分であつた。

「恐ろしいな……」

距離を詰められ、紙一重で避けたキャストは肝を冷やしながらかく。地面は木端微塵に砕かれてさっきまで地面だったものを粉塵にして巻き上げたが、バーサーカーはそれを無視したままキャストへの攻撃を続ける。重さは破壊力の増大に大きく繋がり、今はおそらく一撃必殺の破壊力を持つているだろう。

「この速さなら、小細工は追加しなくてもいけるな」

先程までとにかく距離を取って戦ってキャストは、今度は離れずに一転して白兵戦に切り替える。今迄消極的に立ち回っていたのは、白兵戦ではどう足掻いても勝てないのが解っていたからである。バーサーカーが『無毀なる湖光』を手放して戦うのだったら、キャストはもう少し時間を掛けて動きを鈍らせるつもりであつた。

「戦いの旋律・二倍速」

身体強化の魔法を掛け、キャストはさっきまでのお返しと言わんばかりに肉薄し、左手で鞘から『掬花』を抜いて、『神殺鎗』を脇差し程度に縮めた状態でバーサーカーに斬りつける。身体強化をしても、重しを持った状態のバーサーカーとほぼ同等の速さになっただけであるので、右手で持った『神殺鎗』による眉間を狙った突きは反応されて防がれる。

「水天逆巻け『掬花』」

背中に隠すように持っていた掬花が槍に変容し、キャストはそれをバーサーカーの腹に突き立てようと刺突を繰り返す。

ガツキン！！そんな金属音がし、『掬花』はバーサーカーの右腕を貫く。

「腕を…盾にしたっ!?!」

思いがけない防御に、一瞬だけキャストの意識がそれだけに集中する。

バーサーカーは左手だけで握っていた『無毀なる湖光』を手放して、開いた左手で無防備にガラ空きになっていたキャストの腹を豪打する。

「ガア……………!」

もろに殴られたキャストは僅かであるが血を吐き、仮面の下から血を滲み出る。肌を鎧のように硬化させる鋼皮なのだが、硬いものは総じて打撃に弱い傾向があり、鋼皮も例に漏れなかった。

「クソがつ!」

悪態をつきながらでも、キャスターは『掬花』を影にしまい、自分に治癒をかけながら距離を離す。バーサーカーの右腕は『掬花』で貫ぬかれたのでまともに動かせないようだが、重しになっていた『無毀なる湖光』を手放し、近くにあった『侘助』を左手で掴む。瞬く間に、『侘助』は黒い魔力に飲み込まれていき、鎧も黒い霧に包まれる。『無毀なる湖光』を使う為に封印していた騎士ナイト・オブは徒手フにオーナー死せずと己が栄光の為にフォー・サムワンなくを解禁したのだ。ス・グロウリー

「縛道の九十九 禁！」

苦し紛れに縛道を放つが、避けられて距離を詰められる。仕方なく、『神殺鎗』で迫り来る『侘助』を何度も受け止める。効果は続いており、重さが倍にされていくが打てる手はない。ただ相手が持っているだけなら、解放を触れてなくても解けるのだが、今はバーサーカーの宝具になっているので不可能なのだ。

7度目になる攻撃を受け止め、次の攻撃を凌しのごうとしたところで限界がきた。

思うように持ち上げられずに、防げなかった『侘助』がキャスターの右肩を掠める。それだけで、服とキャスターの重さは倍となる。

「縛道の二十一 赤煙遁！」せきえんとん

掌から煙幕を発生させ、キャスターは一時的にバーサーカーの視界を封じことに成功する。バーサーカーは反射的に後ろに跳び、煙幕を斬って飛散させる。しかし、そこにキャスターは居ない。

（こんな使い方、したくなかったんだがな……）

そんな事を思いながら、キャスターは切先を下に向けて、『神殺鎗』

を放した。自由落下に任して落ちた先は、バーサーカーの上であった。

キャスターは煙幕を張ると同時に空中に逃げて、バーサーカーの真上に移動していたのだった。

殺気の無い攻撃にバーサーカーは反応できないとキャスターは思っていたが、バーサーカーは頭上にせまっていた『神殺鎗』に気付き、『侘助』で打ち払おうとしたが、刃と刃を合わせたその瞬間に『神殺鎗』の重さは更に倍になり、『侘助』を押し折ってバーサーカーの胸に突き刺さる。

「一応、俺の勝ちだ」

そう宣言すると、『神殺鎗』の重さと刺さっている位置の悪さで動けなくなったバーサーカーを、キャスターは喰らった。『侘助』の解放を解き、鞘に仕舞った。

「やっぱり旦那が最強か。でも、途中旦那が負けちゃうんじゃないかっておもっ……痛ッ！」

キャスターが勝利したのを見た龍之介は無警戒で近付き、素直な感想を言おうとしたところで突然の右手首の痛みに顔を顰めてみる。

「あれ…？」

手首から先が、消えていた。綺麗に、すっぱりとさっきまであった右手が無くなっていた。

「なんで！？俺の右手はッ!？」

消えた右手を錯乱しながらも捜す龍之介だったが、さらに腹

に痛みが奔る。今度は何かが腹に刺さっていた。それを辿って見ると、キャスターの持っている『神殺鎗』に行き着く。しかも、キャスターの左手は消えた筈の龍之介の右手を掴むように持っている。

「旦那……なんで……？」

自分と同類であると思っていたキャスターの暴拳に、龍之介は涙を浮かべて聞く。

「最後だから教えておこつ。俺は、お前が嫌いだった。消える『虚閃』」

構え無しで放たれた『虚閃』は龍之介を飲み込み、塵すら残さずに消し去った。

バーサーカー（後書き）

戦っていた場所は大聖杯のある地下です。

バーサーカー捕食＋マスター交代

筋力A 魔力A＋

耐久B＋ 俊敏B＋

幸運E 宝具EX

バーサーカースキル

狂化：C 幸運と魔力を除いたパラメーターをランクアップさせるが、言語能力を失い複雑な思考ができなくなる。一度発現すると、アローニークの意思では解除できなくなる。

対魔力：E シングルアクション 一工程による魔術行使を軽減する。無いよりはマシ程度。

精霊の加護：- 精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。しかし、アローニークは祝福を得られずに実質消滅した。

無窮の武練：A＋ 如何なる精神状態でも十全な武芸を保つ。

騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）

ランク：A＋＋ 種別 対人宝具 レンジ：1人 最大捕捉：30人

手にした武器に自らの宝具としての属性を与え、駆使用する宝具。

どんな武器、兵器であろうとも手にした時点でDランク相当の宝具となり、元からそれ（D）以上のランクに位置する宝具であれば、従来のランクのまま支配下に置かれる。

絶望（前書き）

感想 にかさま様、教授様、赤羽様、煌 焰様
ありがとうございます！

絶望

セイバーは心身共に疲れきっていた。十分な魔力供給がされていないので、肉体の疲れなど存在しないはずなのだが。精神的な疲れがセイバーの体を蝕んでいた。それでもセイバーは倉庫街から単身でそこであつた出来事から逃げるように拠点に戻った。

令呪によって撃たれた『約束された勝利の剣』は見事にランスロットだけに中つた。偶然にも、ランスロットの背後は街ではなく、海が広がっていたので無用な犠牲は出ないで済んでいた。それでも、セイバーはランスロットを自分の手で斬った事実が変わることが無いので、少しも心を晴らす要因には成り得なかった。

うつすらと空が白み始めた頃に拠点に着いたセイバーは家に入らず、庭にある土蔵に向かう。そこにはアイリスフィールと共に描いた魔法陣があり、そこでアイリスフィールは休んでいる。重い土蔵の扉をなるべく音がたたないように開け、セイバーはアイリスフィールがその中で休んでいるのを見て安堵の息を漏らす。

（よかつた。アイリスフィールは無事だ）

懸念の一つであつたアイリスフィールの安否を確認したセイバーは扉を閉め、アイリスフィールの傍による。

討伐対象であつたキャスターは、セイバーが余裕を取り戻した時には姿を確認できず、倒されたのかすら不明であつた。故に、拠点で1人で居るであろうアイリスフィールの身を案じていたのだ。『器の守り手』である彼女を、キャスターが誘拐などしてはいないだろうか気が気では無かつた。

「ん……」

アイリスフィールが身じろぎし、瞼を上げてセイバーを見つめる。

「起こしてしまいましたか？アイリスフィール」

「そんな事はないわ。それより、大丈夫なの？セイバー」

疲労が声と顔に出ていたセイバーに、アイリスフィールは上半身を起こして心配そうに聞く。

「……大丈夫と言えば、嘘になります。ですが、貴方を守ってこの戦争に勝ってみせます」

彼女が縋るのに残っているのは、聖杯による奇跡と守ると誓ったアイリスフィールだけだった。

「無理しないで、セイバー」

しかし、その言葉はセイバーの方がアイリスフィールにかけたかった。上半身を起こすのも辛そうにしたアイリスフィールは、セイバーの目から見ても症状が悪化していた。自分が居ない間に何かがあったのではないのだろうか？と疑問に思うが、口には出さない。

「心配は要りません。今回はマスターの掩護で勝ちを拾えました。残っているのは、あとは私とキャスターだけなのでしょうから必ず勝ちます」

安心させようと一先ず戦況を一通り教える。ランサーとバーサーカーが脱落した事。アーチャーとキャスターの戦いはどうなったかは詳しく判らないが、残っているのはキャスターであろうと。

しかし、掩護のところでアイリスフィールは顔を顰めた。そこま

で詳しくないのだが、切嗣のやり方はセイバーにとっては良くないのは判り切っている。今回もセイバーにとっては許し難いことをしたのではないのだろうかと勘繰ったのだ。切嗣とセイバーの間に、戦いに影響が出る程の軋轢が生まれてないかが唯一の気掛かりであった。

「……ねえ、セイバー、あなたは、切嗣を仲間と思って戦える？」

すでに聖杯戦争は最終局面になっている。マスターとサーヴァントが不仲だったせいで今回の聖杯が失われるのは避けなければならぬ。聖杯による奇跡に縋ろうとしている2人が、そのような行為をするなんてアリスフィールは考えてはいないが、キヤスターはきつと1人では勝てない相手だ。負けも有り得る。

アリスフィールの言葉に、セイバーはすぐに断言出来なかった。ランスロットが消える直前に見せた、憎悪と狂気で彩られた眼が忘れられなかった。深く深く自分を憎悪しているその眼が、『約束された勝利の剣』を受けた時には、憎悪が狂気を押し遣って純粋な憎悪に支配されたかのように見えたのだ。

そう見えただけと、セイバーはそう開き直ることなどできない。

「……私の願いを聖杯に託すためにも、私が敵を斬る“剣”になるのは何の異存もありません。キヤスターとそのマスターが外道ならマスター同士で決着を着けてくれるなら私にとっても幸いです。ですが、無駄な血を流さない為に召喚された私からすれば、できれば彼なりのやり方での介入はして欲しくありません」

言葉を濁さずに、はっきりと言う。嘘、偽りは自分とアリスフィールの間には無用と想つての言葉であった。

「?人の気配が近づいてきます。アイリフィール」

「ああ、大丈夫。この気配は舞弥さんだわ」

結界の反応で誰なのかを特定したアイリスフィールは、セイバーが武装しないように制する。

土蔵の扉をノックしてから入ってきたのは舞弥であった。相も変わらず感情を表に出さない舞弥は、目的の人物を確認すると本題を切りだした。

「セイバー。今日はあなたに用件があります」

「私に？」

てつきり舞弥はアイリスフィールに何らかの用事があると思っていたセイバーは、少々面食らいながらも聞き返した。

「はい。最終局面になっている現状ではもう必要の無いかもしれませんが、メルセデス（自動車）を充分に乗りこなしているようでしたので、切嗣の指示で用意した市街地向けの機動手段を見ていただけませんか？」

「無碍にする訳にいきませんが……」

チラリとセイバーはアイリスフィールを見る。もしもキャスターが此処に襲撃を仕掛けてきたのなら、アイリスフィールを危険に曝す事になる。キャスターがアイリスフィールの重要性を知っているかはセイバーには判断できないが、つい悪い方に考えてしまう。

「見てみたいでしょう？行って来てもいいわよ」

そんなセイバーの背中をアイリスフィールは押す。昨夜なにがあったかは判らない彼女であったが、今のセイバーに必要なのは気分転換だと見て取ったのだ。

「貴女がそう言うのなら……」

「では、こちらです」

舞弥はセイバーを連れて土蔵から離れる。それに合わせて、舞弥と共に敷地内に入っていた人物が土蔵に近付き、土蔵の扉を開けて入る。

「調子はどうだい？アイリ」

「悪くは無いわ。切嗣」

微笑みながら、アイリスフィールは切嗣を迎え入れる。それは、未だに「魔術師殺し」に戻りきれない切嗣を苛める。犠牲にするべく存在する妻の笑顔が、胸を抉る。また、大切な人を犠牲にして、この手に血を塗り重ねる。それでも、人類の救済に近付くなら、救われる命があるのなら……

「切嗣？」

「ッ！なんだい、アイリ……」

「……。セイバーに教えなくていいの？もしかしたら、聖杯が現界しないかもしれないって事」

サーヴァントを喰らって、その魂を自身に取り込むサーヴァント。

キャスターの存在は前例が無い為に、どうなるかが予想ができないでいた。聖杯の現界には、世界規模での願いを叶える奇跡には、サーヴァント5体の魂は必要ならずであった。

「アイリ、どの位杯は満たされている？」

「だいたいだけど……2体分位」

なのだが、半分にも達していない。計算上はキャスターが3体喰らったか、バーサーカーがまだ生きているかだ。バーサーカーが生きている場合は、セイバーでは勝てない。その場合は、キャスターのマスターがキャスターを自害でもさせないと聖杯は完成どころか、現界しないであろう。

冬木の聖杯は、サーヴァントを7体貯め込んでそれが座に戻ろうとする際の力を利用して、『根源』への道を開く試みなのだ。それが本来の使い方であるのだが、サーヴァントの魂を魔力に変換すれば世界規模の魔法を可能とする程の膨大な魔力が得られる。その場合は、必ずしも7体のサーヴァントを聖杯への贄として捧げる必要はなく、6体捧げればほぼ確実に、5体でおそらく可能になる。規模さえ小さければ、3、4体でも奇跡は可能であろう。

「……どの道、教える必要はない。セイバーがキャスターを倒せば、もしかしたらキャスターが取り込んだ分も注がれるかもしれない。なにより、セイバーが聖杯が現界しないかもしれないと聞いて、戦意を失わないと保障できない」

「……そう。切嗣、もう終わりが近いからコレは私が持っているよ、あなたが持っている方が良いわ」

アイリスフィールは胸に手を当てると、自分の体の中から黄金の

粒子を流出させて、それに本来の姿を取り戻させる。ランクEX
結界宝具『^{アヴァロン}全て遠き理想郷』持ち主の老化を停滞させ、あらゆる傷
を癒し、呪いを跳ね除ける効果があるが、それだけでなく真名を開
放すれば数百のパーツに分解され、所有者を守る宝具。『約束され
た勝利の剣』の本来の鞘であり、セイバーの召喚に使用した聖遺物
セイバーからの魔力供給によって概念武装として力を発揮するソレ
は、今迄アイリスフィールを護っていた。アイリスフィールはパス
は繋がっていないのだが、近くにいても多少は効果を発揮するので
彼女が持っていたのだ。

「……」

切嗣は無言で受け取ると、アイリスフィールの目の前で自分に封
入する。それを見たアイリスフィールは、力無く笑い、倒れた。『
全て遠き理想郷』を失えばそうなると解っていた切嗣は、倒れる前
に抱きかかえ、静かに寝かせる。アイリスフィールの崩壊を押し留
めていた最後の砦がなくなり、本来の役割を果たす形状になるのが
これから加速する。

切嗣は静かにその場を後にする。アイリスフィールが1人になっ
た僅かな時間に、彼女の影が広がり、音をたてずに飲み込んだ。土
蔵から、アイリスフィールが消えた。

揃ったピース（前書き）

感想 教授様

あいごとうございます！

揃ったピース

アイリスファイルの誘拐はすぐに切嗣に知らされた。よもや自分が土蔵を去ってすぐに誘拐されるなど考える筈も無く、寝耳に水の出来事であった。それでも、切嗣の頭は犯人はすぐに誰かと答えを出した。

犯人はキャスターであろうと。なぜ拠点が特定されたのかは解らなかつたが、行動を余儀なくされた。

元々聖杯を現界させるための召喚場所を確保する行動は予定に入っていた。問題は、キャスターの行動が見当がつかない事であった。アイリスファイルが『器の守り手』であるのを知っているのは

間桐邸か遠坂邸で情報を得たと 十分に考えられる。しかし、そんな予想はなんの意味も成さない。重要なのは、キャスターが一体何処で召喚しようとするかである。召喚可能な場所は4ヶ所存在する。

最有力候補は、天然の大洞窟『龍洞』^{ryuudou}を擁する円蔵山だ。『龍洞』にはユステイーツアを基盤とする大聖杯があり、始まりの御三家のみが知る秘密の祭壇だった。180年も前から用意されていた本命なのだが……円蔵山の敷地内で、広いスペースは無いのかと探していたキャスターに発見されてしまったのだ。切嗣がそれを知れる訳は無いので、『龍洞』には搜索の手は入れずに柳桐寺、遠坂邸、冬木教会を搜索し、どこもキャスターの手に渡って無いのを確認した。切嗣が搜索しない4番目の後発的の霊地である新都の市民会館は、舞弥が搜索に向かった。一番危険と可能性が無いのと、他と比べれば搜索が容易であるからだ。

それでも、互いに監視用の使い魔を4ヶ所全てに配置した。瀕死の重体になれば、互いに判るようになっていくがそれは本当に緊急用である。

キャスターは、宝具の使い所さえ間違えなければ最強であった。

アーチャーの首を刎ねた宝具は、使い魔に付けてあったCCDカメラでは全貌ははっきりとは解らなかった。それでも、能力は3通り予想できた。

因果を反転させて、斬ったもしくは首を刎ねた結果を先に作り出す、回避は幸運値が高くないと不可能な宝具。

見えない刃を発生させる宝具。

刃がカメラや目で認識できない速度で伸縮する宝具。

以上の3通りを切嗣は予想していた。どれであろうと油断はできない。セイバーは直感で回避は可能かもしれないが、一番良いのは使う前に倒すにかぎる。しかし、セイバーの宝具は一撃必殺を必ず繰り出す宝具ではない。もし、因果反転の宝具だった場合は宝具の撃ち合いで負けるか引き分けの可能性が高い。引き分けなら、切嗣としては構わないのだが負けだけは赦されない。

アイリスフィールが誘拐されただけでバイクで拠点から目星も付せずに跳び出したセイバーを放置して、切嗣は最も可能性のある場所で網を張った。業腹の事なのだが、マスターが戦場に出てこなくて、なお且つ所在不明の拠点に隠匿しているキャスターを打倒できるのは、セイバーしか居なかった。

キャスターに誘拐されたアイリスフィールは、そうなっていると知らずに眠っていた。彼女が眠っている場所は、切嗣が搜索をしなかった『龍洞』である。もしも、切嗣が搜索の手を伸ばしていたら発見できていたであろう。それでも、救出は不可能であった。ほんの一部であるが、キャスターの工房としての役割のあるその場所は、防御に特化した陣地と化しており籠城戦でもすれば人間ではま

ず破れない砦となっている。それを維持する魔力は龍脈から汲み上げていたので、土地が敵になっていく状態になる。

そんな場所でアイリスフィールは、土蔵に描いた魔法陣を大規模にし、さらにアレンジを加えられた魔法陣の中心に寝かされている。話ができる程度には回復させるキャスターの意図があつて、そうなっている。

そのキャスターは、自分用の龍脈から魔力を汲み上げて供給する魔法陣の中で、どこからか持ってきた机の上でなにやら資料をまわめている。その傍らには折れた侘助もある。ついさつきまでバーサーカーと激戦をやっていたなど誰も思わないだろう。

「起きたか……」

苦しげな呻き声を聞き、キャスターは椅子から立ち上がってアイリスフィールにゆっくりとした歩調で近寄る。アイリスフィールは起きた場所が土蔵でなかったので混乱したが、キャスターの姿を見て自分が誘拐されたと知った。

「さて、できれば嘘をつかずに、知っている事の全てを話してくれると助かるのだがな」

「貴方に話す事なんて何一つ無いわよ。キャスター」

気丈にもアイリスフィールはキャスターを睨みつける。

「あまりしたくないが、この『鏡花水月』の餌食になってもらう事になるんだが？」

『鏡花水月』の切先をアイリスフィールの目の前でチラつかせて脅すが、なおもアイリスフィールは態度は一向に変化はない。下手

に情報を漏らす位なら、彼女は死ぬつもりであつた。聖杯戦争で死ぬのは、生まれたその時から決まっていた事柄なので、彼女はそれを恐れない。夫が勝つと信じて、命を散らすのになんら疑問は無い。むしろ、夫に自分を殺させる役目を背負わせないで済むのならその方が良いとさえ思っている。

「それで私を殺すと脅してるの？ご生憎様、私は死ぬのは怖くはないわ」

「勘違いするな。お前が握っているのはお前の命ではなく、お前の^{セイバーの}仲間の命だ」

キャスターの背後の空間がズレルように四角く切り取られて、映る筈の無い人物がそこに映し出される。柳桐寺に陣取つて、キャスターが現れるのを今か今かと待ち受けている衛宮切嗣だった。

「最ッ低…！」

「それは大人しく話すという返事か？でなければ、この聖杯戦争はすぐに終結するな」

話せなければ、殺してくる。キャスターは言葉を選んだが、それでも内容は一切変わらない。キャスターは知らないが、切嗣を人質に取られるのは実質的にはアイリスフィールにとっては、2人人質に取られているのと変わらない。

「いったい何が知りたいの。聖杯降臨の儀式かしら」

「それより先に、お前にサーヴァントを強制的に飲み込む能力があるかを知りたい。怖くてこれ以上近付けないからな」

キャスターはそんなあるかどうか判らない能力を警戒して、アイリスフィールには触れていない。宴の時に寄生させた録霊蟲によって、アイリスフィールの中にサーヴァントの魂が取り込まれたのは判っている。なら、強制的に取り込む手段を持っけていても可笑しくはないと考えている。

いくら他のサーヴァントを取り込もうと、キャスターはサーヴァントの枠から出れず、令呪のようなサーヴァントに絶対的な力を持つているモノからは逃れられない。

「そんな能力は存在しないわ」

迷い無く教える。そんな便利な能力があれば、聖杯の完成はそこまで苦労しないと心中だけで愚痴り、アイリスフィールは次の質問を待った。

だが、次の質問の代わりに、キャスターはアイリスフィールに手をかざして意識を飛ばさせる。キャスターが直接アイリスフィールに聞かなければ危険と考えていたそれだけだったのだ。正確な情報が欲しいのなら、記憶を覗いた方が確実であるし嘘のつきようが無い。それをしなかったのは、直接触れる必要があり、それをすれば取り込まれる可能性があったからだ。

キャスターは、求めた情報を全て手に入れた。

「成程な。結局の所、俺等は聖杯への生け贄だったという訳か。よくもまあ、思い付いたもんだな」

謎の解けたキャスターは呆れたようにそう呟くと、嗤った。

「しっかし、俺が勝つたら聖杯が現界できんな。いや、負けても現界しないかもしれんな。少しだけ惜しいが、準備が整ったら完成の

「一歩手前」のことについてやるか」

揃ったピース（後書き）

おまけ

「『侘助』は流石に今日中には直らんな……」

「宝具は直らないじゃないのか？たしか、そう妖怪からそんな説明をされた気がするんだが」

「普通は直らん。まあ、例外ってヤツだ。それでも、直りきるまで真名解放は出来ないんだがな。……直るの明後日位になるか？」

「さあ……」

「勝ったら聖杯に願うのも良いかもしれんな。侘助を直してくれと」

（万能の願望機で叶える願いじゃない……）

「まあ、現界する理由が無いからすぐに座に戻るわけなんだがな」

正に、無駄使いである。

2011/11/06 ちよつと修正

用意された杯（前書き）

感想 教授様、かにかま様
ありがとうございます！

用意された杯

言峰綺礼は答えを得ていない。ならば、その答えがある可能性の高い冬木の地を、退去させられただけで諦めるような精神はしていない。仮に、その程度で答えを諦めるなら、とっくの昔に答えを捜す求道など放棄してる。

しかし、とりあえずは冬木の地を去らなければならなかった。父の綺礼への絶対の信頼からか、監視などはなかったが、それでも予定などが決められていた。退去した翌日の昼にはイタリヤ行きの飛行機に乗らなければならない。

だが、綺礼は飛行機に乗らずに、冬木の地に足を運んだ。昼間に聖杯戦争が開かれる事はないとして、なるべく誰かに発見される危険性を極力減らすために夜に冬木に着くように時間調整をして踏み入った。父の信頼を裏切ったことに対する良心の呵責はあったものの、自らの行いには迷いは無かった。

冬木市民会館。総工費80億あまりを投じて建設されたこの施設は、駅前センタービル計画と並んで冬木新都開発のシンボルとも言うべき建築物である。

しかし、今現在は外装しか完成しておらず、内装は未だにコンクリートの壁が露出していたり、最低限の防災装置しか敷設されていない。そんな場所を、キャスターは聖杯の召喚場所にした。これにはある種の皮肉と、真つ当な理由がある。皮肉は、ほとんど中身の無いのを現在の小聖杯の状況と掛けたモノであり、理由は、戦う場所

として此処が適していると判断したからだ。

柳桐寺と遠坂邸では、一般人を巻き込む可能性が大きく、冬木教会では、監督役の役割の妨げになると判断したからである。

冬木市民会館の近くにも民家はあるが、対軍宝具や対城宝具でも使ったり、自分から近付かなければならぬ問題は無い。逆に言えば、対城宝具である『約束された勝利の剣』を使えば、無関係な一般人を巻き込む可能性があり、セイバーが『約束された勝利の剣』を使うのを封じる目的もある。

影のゲートで眠っているアイリスフィールをお姫様抱っこで抱えて直接内部に侵入したキャスターであつたが、すぐに異変に気付いた。

「結界が張られているな。これは探知か？」

簡易ではあるが、侵入者を知らせる結界が張られていた。キャスターは結界のど真ん中に出現したので、結界は作動して術者に侵入を知らせた。しかし、その程度で焦るキャスターではない。

「網が張られていたか。では、狩りといこうか。Fervor, 沸き立て、
ei sanguis 我が血潮」

術式起動の呪言を呟くと、キャスターの影からケイネスの魔術礼装であつた月霊髓液が出てくる。欠点である量が決まっているのを少しでも補う為に、増量されたソレはより自由度を得ている。

「Automatoportum 自動 quarere: Dillie 索敵
ctus 攻撃 incursio さらに『騎士は徒手にて死せず』」

発現するサーヴァントの能力を狂化のみ発現しないでバーサーカ

「切り替えて、触れて月霊髓液に宝具属性を追加する。それだけで、灰色の魔力に染まって月霊髓液は本来以上の力を得る。」

「さて、何秒で終わる？」

突然だが、久宇舞弥という女性は本来なら存在しない。彼女の国籍のある戸籍で調べれば、同姓同名の人物は存在するかもしれないが、切嗣の助手である舞弥の本当の戸籍を捜しても見つからない。その理由は、彼女が切嗣に戦場で拾われたからである。現在の名は、最初の偽装パスポートでの名を使っているにすぎない。

故に、舞弥には切嗣以外に、何も無い。精神はとつくの昔に壊れ、人より機械か道具に近い存在になっている。それは、「魔術師殺し」の切嗣に近くて遠い存在である。決定的な違いは、自らが胸に抱く理想に従っているのと、精神が壊れていない事だ。舞弥は、切嗣の手本であるのと戒めであった。

そんな彼女に、灰色の魔力に浸食された水銀が迫っていた。冬木市民会館の構造を調べ尽くそうと、部屋から部屋へとか細い系のようになって広がっていた。触覚を鋭敏化されているソレは、生物が居れば瞬く間にキャスターに知らせると同時に、攻撃命令を待つ。か細い系になつては攻撃は出来ないとされるかもしれないが、宝具化して強化された月霊髓液は糸状態なら脅威的な切れ味と範囲を持つ。例えるなら、ピアノ線に近いだろう。しかも元は液体なので、物理的に破壊するのは不可能である。可能性があるのは、魔術的破壊のみである。

だが、舞弥にそんな手段は無い。相対したその時点で詰んでいた。

もつとも、彼女は役割は果たされている。彼女の役割は、キャスターが市民会館に現れたらすぐさま切嗣に知らせるだけだ。

舞弥は視認し辛い月霊髓液を前にしても淡々と対処し始めた。キヤレコ短機関銃を向けて、引き金を引きながら退く。短機関銃から吐き出された鉛弾は幾つかは命中するが、綺麗に切断されて何もなかったかのように通り過ぎるだけに終わる。

それを見た舞弥は撃つのを止めて、手榴弾のピンを引き抜いて月霊髓液の前に落ちるように投げ、自分は巻き込まれないように部屋に跳び込む。爆風と破片で吹き飛ばそうと襲い掛かるが、月霊髓液はそれを床に張り付くようにして耐えきる。普通の道具と宝具であったから当然の結果であった。

舞弥が跳び込んだ部屋は別の部屋に繋がっておらず、逃げ場は存在しない。

死を覚悟し、糸から動く水たまりに姿を変えた灰色の水銀を見る。

(こんなモノに殺されるのか……)

自嘲気味に舞弥は笑った。

月霊髓液は槍のような形態になって舞弥の心臓を貫いた。

「あっけない……。まあいいか」

もう少し粘ると思っていたキャスターは、セイバーが着くまで遊ぼうかと思っていたのに全然粘らなかつたで殺してしまった。

「どうせすぐにセイバーが来るだろう。その前に、注ぎ込んでおくか」

眠っているアイリスフィールの胸に、キャスターは未解放の『掬花』を突き刺す。そして、自分の中の『王の軍勢』のサーヴァントの魂を4体分をアイリスフィールに注ぎ込む。成功するかも謎の方法だったが、内部に魂が留まっているので成功したようだ。

成功したが、急速にアイリスフィールが崩壊し始めた。元より完成するなら邪魔にしかならない梱包である。しかも、魔力を周囲に影響を及ぼす程に撒き散らし始める。それを危険と判断したキャスターは封印の術式を月霊髓液で描いてそれを抑え込む。抑え込むのに成功したら、今度は鬼道で半透明な封印の結界を張り、嚴重に漏れ出ないようにする。

「願望機……ねえ」

無駄な破壊を起しかけていた、アイリスフィールから出てきた装飾の無い黄金の杯を見ながら呟く。それはどこか神々しい気がしなくもないが、犠牲を前提にして出てくるそれに聖杯の名など似つかわしいと感じた。

「まあ、これで優勝賞品は準備できたわけだ。後は、セイバーと戦うだけだ」

満足そうに言うと、キャスターはサーヴァントの気配を察知した。

「来たか」

予想通りの展開に笑うと、最後にする舞台へと足を運んだ。

セイバーは突然の令呪による転移に驚きはしたが、転移が完了する時には戦支度になって何時でも戦える状態になっていた。心配があるとするれば、転移されたのが自分だけであっただけである。ほんの短い間であつたが、自分の足になっていたバイクがどうなつたかは想像が難しくない。

「ここは……？」

冬木市の地理に詳しくないセイバーが飛ばされた場所が何処なのか判る筈が無く、警戒して辺りを見回す。真つ先に目についたのは目の前にある大型の建築物である冬木市民会館であるが、セイバーは名称を知らない。

ただ、そこが戦地であると直感した。

「アイリスフィール、待っていて下さい。必ず、助けます」

意を決して、セイバーは市民会館に入った。

市民会館（前書き）

感想 教授様、誦音夫様
あいがとうございます！
サブタイが思いつかない……

市民会館

市民会館の主要部ともいえる、1階から3階までを占める広大なコンサートホール。キャスターはそこを最後の戦いの舞台に選んで、中央に立っていた。セイバーが着くまでのほんの短い時間で、今生を振り返っていた。

どういう訳か呼ばれ、逆らう気もなかったので召喚に応じた。自分の座に呼び掛けるのは世界ぐらいだったので、きつとまた世界なのだろうから逆らおうとしても無駄と解っていたからでもある訳なのだが。

しかし、召喚の際に情報が自分に流れ込み、自分を保持したまま召喚された。もし、掃除屋として召喚されたのなら有り得ない事であった。

聖杯戦争に招かれた。ソレが幸運かどうかは判らなかった。なにせ、自身の最後は僅かな後悔はあったものの、覆したり、新たな望みは無かった。

満足して、逝った。それは自分のただ1人の娘に会っても胸を張って言える事であった。それで娘が納得するかは、別の話になる訳なのだが。

招かれた理由は不明だったが、どうせなら愉しもうと思いい行動した。ただ、マスターは変えたいと初対面の時から思っていた。快樂殺人者は、不快でしかなかった。他人の死に冷淡なアローロニードでも、連続で目の前で殺され、そうさせたのが自分だというのは不快な気持ちにさせた。自分が死体を喰っているのを棚上げにして、なのだが。

愉しめたのは、同じサーヴァントとの戦いだけであった。ステータスだけで言えば、自分では勝てない相手は新鮮であり、生前の武器を向けるのに相応しい猛者ばかりであった。

ライダー、バーサーカーは特に良かった。一步間違えていれば負

けていた。その瞬間は、聖杯なんて呼ばれている願望機より価値があった。

他にも、価値があると思えたモノはある。今のマスターである雁夜の心意気だ。惚れている女性の為に命を賭けるなんて何処の創作物語だと思いはしたが、それが本気であるのは事実であつたし、救おうとしている桜に感情移入した。残して逝つた娘を思い出すからか、つい力をいれた。らしくないと思ひながら、自分にできる事はほとんどやった。

本当に、らしくない。アローニローは仮面の下で笑い、コンサートホールに入ってきたセイバーを見つめる。最良と呼ばれるクラスを得て現界した英霊。獣であつたバーサーカーとは違い、人である。化け物を倒すのは、神話の時代から人であつた。もしかしたら、バーサーカー以上に愉しめるかもしれない。そう、アローニローは密かに期待する。

「キャスター、アイリスフィールは何処だ」

静かに、怒気を孕んだ言葉が向けられる。それだけで、臆するアローニローではない。

「戦場においても邪魔になるだけだ。だから、此処にはいない。捜したいのなら、俺を倒して行け」

尤も、もうアイリスフィールは死んでいるがな。

そんな言葉は飲み込み、ついさっきアイリスフィールを殺したも同然の『掬花』を鞘から抜いて手で回転させる。

「水天逆巻け『掬花』」

最も信頼する宝具はその姿を槍に変える。

それを見て、セイバーを顔を顰める。ランサーが言っていた波濤を発生させる槍なのだろう。それを思い出すと同時に、ランサーの最後も思い出す。

「さて、最後まで名乗りを上げるか？セイバー」

「異存は無い」

「仮面の英雄、アローニーロ・アルルエリ 尋常に」

「ブリテン王アルトリア・ペンドラゴン いざッ！」

「」
「勝負！」

勝負！の掛け声と同時に、アローニーロはホルの出入り口にいるアルトリア目掛けて、アルトリアはステージに立っていたアローニーロ目掛けて同時に駆け出す。

先制攻撃を取ったのは槍でリーチの長いアローニーロだ。圧碎、両断しようとする波濤を追従している攻撃を上から叩き付ける。アルトリアは横に避け、ガラ空きになっている懐に飛び込もうと踏み込むが、剣の間合いに入りきる前にアローニーロはバックステップをしながら横に薙ぐ。

このままでは避けられないと直感したアルトリアは、『掬花』の一撃を受け止めて、その衝撃と自身の魔力放出によるブーストで波濤の攻撃範囲から離脱し、着地と同時に鎧と『風王結界』を解除してまた魔力放出して波濤が通り過ぎる前に突撃する。

ランサーを相手にした時と同じ戦法であるが、相手の攻撃の終わった後の僅かな隙を狙い澄ました一撃になる。例えこの戦法を初戦の時に見られていたとしても、成功させる自信はあった。

「遅い！」

波濤が通り過ぎ、視界にしっかりと突撃してくるアルトリアを見定めたアローロニーロが避けようと動くが、遅い。必殺で無かろうと一撃を叩き込めるといふ確信していた。直感が危険を察知するまでは。

鮮血が紅い飛沫となり、床に滴り落ちる。

アローロニーロは懐に入り込まれる直前に、石突きをアルトリアの頭が通るであろう場所に突き出した。しかし、アルトリアは直感により察知して頬を軽く削られはしたものの避け、剣先がギリギリ届くアローロニーロの腹筋を斬りつけたが、その手応えは不可解極まりないモノであった。

「薄皮一枚、斬られたか」

楽しそうな雰囲気の声に伝播しているアローロニーロと違い、アルトリアは剣先とアローロニーロの腹筋を見比べる。どちらも何ら可笑しな点はなんらない。だが、剣先から伝わった感触は人と服を斬った感触ではなく、鉄の鎧のような硬い物に斬りつけたような感触であった。

初めは、服の下にチェインメイルのような物を着込んでいるのかと疑って見てみたが、アローロニーロの斬れた服の下からは血で赤を付け足された肌以外は何も無い。なら、『約束された勝利の剣』の刃が潰れるなどしてあたかもそう感じさせる要因があったのかと見てみるが、万全の状態であった。

「不思議そうだな。まあ、無理もない。種明かしをしよう。俺の肌は鋼皮イェロと言ってな、それ自体が武器となりうる硬度を持っている」

「……」

はたして、そんな肌を持っている人間がかつて存在したのか？ア
ーロニーロの言葉に疑問を憶える。どの聖杯戦争の参加者を思い出
しても、少なくともそこまで人間離れた体は持っていないかった。
そういう宝具なのかもしれないが、そんな人からかけ離れた体を持
つ逸話の想像が出来ない。

「疑問は解けただろ。続きといこうか」

アーロニーロは腹筋の傷を治癒させると、構えをとる。

(アイリスフィールさえ居てくれれば……)

アルトリアはそう思わざるおえなかった。頬の傷は出血が多いが、
傷としては浅い部類に入る。アイリスフィールなら、この程度の傷
はすぐに治せたであろう。無い物ねだりだが、マスターである切嗣
は令呪を使う以外の掩護はしてくれてないので期待できなかった。

(少し時間が掛かりそうですが、必ず貴女を助けに行きます。だか
ら、待っていて下さい)

鎧を再展開して、待ちの構えのアーロニーロにアルトリアは正々
堂々と真正面から挑み掛かった。

アールロー二口が小聖杯を周りへの被害が出ないように封じた部屋に切嗣は立っていた。キャスターが市民会館に踏み入った時点で、舞弥から知らせを受けて急行していた。その途中で左手小指の付け根に奔った痛みは、舞弥の死を告げる痛みでしかなかった。

それでした事は、自分のサーヴァントを冬木市民会館に転移させた事だ。

冬木教会がキャスターに占拠されていないかを調べに行った際に監督役からバーサーカー討伐分の報酬として 最初は渡すのに難色を示したものの 受け取った一画を使ってしまったが、後二画残っているのでバーサーカーの時のように宝具を使わせるのを視野に切嗣は入れていた。

サーヴァントは困さえしてくれば良いと思っていたが、マスターが狩りようなないキャスターは自分のサーヴァントに任せるしかないと解っていたので、切嗣は聖杯の確保に動いていた。

そこで見たモノは、黒い箱であった。人一人は入れそうな立方体が部屋の真ん中にあり、ソレを中心にして封印の術式が水銀で描かれている。

(この中に聖杯を封印しているのか?)

状況からしてそうなのだろうが、黒い箱の色が嫌に目につく。絵の具の黒を塗りたくったような黒ではなく、まるで憎悪などのような負の感情に色を与え、ありとあらゆる色つきの負の感情を混ぜたかのように感じられた。

ピシリ……

そんな軽い亀裂の奔る音がしたかと思えば、床と接している部分に亀裂が出来ている。

箱が崩壊する。そう思えば、呼応したかのような亀裂は複雑に糸を張り巡らせた蜘蛛の巣状に広がって崩壊し、箱の色と置いていた黒が解き放たれて切嗣を飲み込んだ。

市民会館（後書き）

声優ネタ

時臣「俺は面倒が嫌いなんだ！」

「アレ（聖杯）は俺の物だ！」

アーマードコアに出てくるステインガーと中の人と同じだったはず

……

聖杯の中の絶望（前書き）

感想 んんん）・（ 様
ありがとうございます！

聖杯の中の絶望

衛宮切嗣の原点、否、「魔術師殺し」の原点は当然のように殺しである。しかも、殺した魔術師は彼の父親である衛宮矩賢のりかたであった。彼は魔術師として『根源』への到達の研究の為に『死徒』となつて永遠の時間を得る研究をしていた。そして、その試薬が悲劇を生んだ。

最初の犠牲者はシャーレイという名の助手とも雑用係とも言える立場の女性であり、切嗣は彼女に惹かれていた。好奇心に勝てなかつた彼女は試薬に触れ、『死徒化』した。矩賢からすれば失敗作の死徒となり、その結果、ソレに噛まれて同類の化け物になっているかもしれない他の住人も処分するべく、魔術協会と聖堂教会の人間が小さな島に人員を派遣した。島は夜が明ける頃にはかつての住人は全て死に絶えた。

魔術協会と聖堂教会は互いに目的は違つたのだが、危険な『死徒』を放置するような考えは持つておらず、『死徒』であるかどうかを判別する余裕がなかつたので無差別に処分をした。

小さな村が焼かれる光景をまだ少年であつた切嗣は、心に刻みつけた。

もしも、自分がシャーレイの願い通りにナイフで彼女の心臓を裂いて殺していれば、犠牲者は彼女だけで済まされたのでは？そんな事を思わずにいられなかつた。

だが、悲劇を生んだ矩賢は多少の後悔こそあつたのだが、『死徒化』の研究を続けるつもりであつた。魔術師らしい判断だつたが、切嗣には理解できなかつた。

なぜ、悲劇を生んだ研究を続けるのか？

なぜ、犠牲を生んでも続けるつもりなのか？

正義の味方になりたいと願つていた少年は悲劇の再発を防ぐべく、森で出会つた女性に借り受け拳銃で無防備に背中を見せていた父

を撃った。

悲劇を繰り返させたくない気持ちと、父を殺したくない気持ちが切嗣の中でせめぎ合っていたのに、切嗣の手は震えずに事を達成した。それは、切嗣が生まれ持った才能であった。

笑えない話なのだが、悲劇の再発を防ぐとして行った事父殺しは、その名目では無駄に近い行いであった。悲劇は稀有な事例ではなく、日常茶飯事のように繰り返される魔術師の愚行であった。

それを知った切嗣は、悲しいのに笑いたくなくなった。自分のやった事はなんだったのだと……

もし、本当の意味で価値を見出そうと思うなら……

それは父と同類の異端の魔術師達を、全て残らず狩り殺した果てにしか見出せない救済でしかない。幸か不幸か、切嗣は自分に拳銃を貸した女性　ナタリア・カミンスキー　の元で過ごす事で学び、自分を鍛えられた。

幾つかの“牙”を手に入れた切嗣だったが、1人で事を成した際に殺したのは母親みたいに思っていたナタリアであった。起こり得る惨劇をくい止めるのに、必要な犠牲だった。切嗣の行いは多くの人を惨劇から未然に防いだ正しい行い。すなわち、『正義』であった。だが、感情は納得しない。

『正義』は、父を殺した。

『正義』は、母親同然の女性ひとを殺した。

『正義』は、それよりも多い人を救った。

ならば、自分は正しい。自分の感情を押し殺し、自分の行いを肯定する。たとえ欺瞞に満ちていてもしなれば、自分は立ち止まって積み重ねた犠牲と行いは無価値にしてしまう。

そう、自分は正しい。

「　　そうよ、切嗣。あなたは正しい」

気が付けば、まるで己の人生を具現化させた屍の山の上に、切嗣

は妻と共に立っていた。

「きつと来てくれると思っていた。あなたなら、ここに辿り着けると信じていた」

「アイリ」

優しく慈愛の笑みを浮かべている妻に、自分も微笑みを返そうとしたが、違和感がそれを邪魔する。

見たこともない黒いドレスを着ているからか？いや、違う。なぜ、自分が妻と一緒に立っている？彼女は既に聖杯になり、死んだはずなのに……

それに、自分は黒いナニカに飲み込まれたはずだ。自分が近付いたから、キャスターの仕掛けた聖杯を守る魔術がコレを見せているのか？ならば、違和感を感じる妻は幻影なのだろう。

「よくできた贗者だ。キャスターの趣味かもしれないが、生憎とアイリはそんなドレスを持っていないし、既に死んでいる」

魔術の類なら問題なく突破し、破壊しうる自身の起源である切っ掛けを叩き込む『起源弾』が装填されたコンテンドーの銃口を向ける。後は引き金を引くだけで魔弾は発射され、こんな幻は消え失せる。

「違うわ、切嗣！確かにこの姿は『仮面』だけど、ここは聖杯の内側。あなたの望みが叶う場所よ！」

取り乱した姿は見たことはないが、彼女ならこんな感じで取り乱すだろう。連れ添った妻の生き写しのようだ。

「聖杯の内側？」

仮に、この贖者が言っているのが真実とするなら、ここが聖杯の内側だとすれば？

脈動する海の如き黒い泥。

朽ちた屍が、そこかしこに山を成しては沈んでいく。

空は赤い。血のように赤い。黒い泥の雨が降る中、漆黒の太陽が天上を支えている。

吹き渡る風は、呪いと怨嗟。

こんな 地獄のように救いのない場所が、聖杯の内側？

「そうよ。ここは聖杯の内側。だけど、コレはまだ形のない夢のようだから。まだ産まれ落ちるのを待っているだけ。アレが、聖杯」

指差した先は、漆黒の太陽であった。しかし、それは太陽ではなく、「孔^{あな}」であった。しかも、黒い泥の雨はその孔から降っていた。

「まだ形は得ていないけれど、6体分のサーヴァントで十分に満たされているわ。あとは祈りを告げるだけでいい。どんな願いを託されるにせよ、それを成就させるに相応しい姿を選び取る。そうやって現世での姿と形を得ることで、アレは初めて“外”に出て行くことができるの」

「……………」

「さあ、だからお願い。早くアレに“容^{かたち}”を与えてあげて。あなたこそ、アレの在り方を定義するに相応しい人間よ。切嗣、聖杯に願いを告げて」

人類の救済を、もう二度と流血の起きない世界へと変革させる。

父を、ナタリアを殺した時からずっと胸に抱えていた理想^{ユメ}を告げる事が出来ない。

地獄を内包している聖杯が、どのような形でソレを遂げるかが理解できない。

「……聖杯は、どうやって世界を救うんだ？」

「世界の救い方なんて、あなたはとくに理解してるじゃない。だから私は、あなたが為してきた通り、あなたの在り方を受け継いで、あなたの祈りを遂げるのよ」

「何を　　言ってる？」

その方法は、全人類を救う事はできない。理解できないのではなく、理解したくない。

「答える。聖杯は何をするつもりだ？アレが現世に降り立ったら、いったい何が起こるんだ！？」

「　　仕方ないわね。じゃあそこから先は、あなた自身の内側に問いかけてもらうしかないわ」

そこから、悪趣味なゲームの始まりであった。自分を入れた501人を人類最後の生き残りとし、何度も間引く必要がある。自分が、その間引く人達を殺すゲーム。

問いかけずとも、解っていた。しかし、自分はそれ以外の方法を求めて願望機に願いを託そうとしたのだ。……なのに、これはいったいなんだ。

498人を犠牲にして最後に残ったのは、妻であるアイリスフィールと、娘であるイリヤスフィールに自分だけであった。切嗣にと

って、他を犠牲にしても守り抜きたい存在。

「ね？解ったでしょう。これが聖杯による、あなたの祈りの成就」

最後の人類として3人の家族は未永く幸せに暮らして、物語りはめでたし、めでたしで終わるだろう。

「さよなら」

感情から切り離されている指先は、矩賢やナタリヤを殺した時のように、為すべき事をした。

至近距離からコンテンドーから吐き出された銃弾が、イリヤスフイルの頭を吹き飛ばす。

「何を　あなたツ、何をオツ!？」

娘を殺されたアイリスフィールが鬼女の形相で掴みかかってくるが、なんら訓練の受けていない素人は簡単に組み伏せられた。

「^{おまえ}聖杯は、在ってはならないモノだった……」

妻の喉に指を絡み付かせ、首を絞める。

「……あなた、何を……なぜ聖杯を、私たちを、拒むの……私のイリヤ……そんな、どうして!？」

「　だつて、僕は　」

掠れた、まるで枯れ葉が擦れ合うかのような声で答える。

「僕は　　世界を　　救うから、だ」

より価値のある方を救う。『正義の味方』である「魔術殺し」の判断であった。たった2人と、その他の全人類。より価値があるのはどちらかは、『正義』の元では明白である。

「　　呪ってやる　　」

そんな呪詛と共に触れている手から呪いが流れ込むが、切嗣は手に込める力を強める。

『正義』は、妻を殺した。

絶望、その先に（前書き）

感想 教授様、偽善者様、かにかま様
ありがとうございます！

ゴリ押し切嗣さん……

別に気にしないでください。

絶望、その先に

アークニーロとアルトリアの戦いは、アークニーロが押していた。ステータスこそアルトリアに劣るものがあるアークニーロであるが、長年の鍛錬により磨き上げた洞察力である心眼（真）：Aであらゆる動きを予想し、自分に有利に戦いを進めていた。他にも、アークニーロは怪我を負っても自分で治療できるが、アルトリアは治療ができないので自然と傷が多くなっている。

それでも、致命的な攻撃は直感：Aで察知されてアークニーロは決めるに決められない。

「ハアアッ！」

『風王結界』を跳躍のブーストに使った意表をついた攻撃。しかし、1度見た技であるソレの特性などは大体把握しており、アークニーロは簡単に反応して撃墜する。先程からずっとその繰り返しであり、単調とすら思えた。それでも、戦場であるコンサートホールは悲惨な状態になっている。サーヴァントである2人が踏み締めただけで床は決めるか砕け、『掬花』の波濤は床に叩き付けられるような使い方をされれば当然の如く床を破壊する。

「本当に、最後に回して正解だったな」

アルトリアの萎える事の無い闘志と、勝てそうで勝てない状況にアークニーロは嗤う。どのサーヴァントも最後まで諦めなかったが、アルトリアの気迫は段違いであった。背負っているモノの差か、それだけ追い詰められているか、だ。

尤も、それを演出したのはアークニーロだ。バーサーカーについては他に手が無かったのと、望んでいたようであるからそうした。

アイリスフィールを誘拐したのは、少しでもアルトリアに力を出させる為の意味合いが非常に強い。生前は他人に人生を捧げた奴が最も力を発揮できるのは、同じように他人の為であろう。根性論はあまり肯定しないアローニーロだが、気の持ちようで人が変わるのには理解している。だから、アイリスフィールを誘拐した。そもそも聖杯に価値を見出していない時点で、アイリスフィールには特に用が無く、聖杯戦争の裏を知ろうとしたのはついでに過ぎない。

「まあ、そろそろ終わりといこうか」

何かを狙っているようだが、時間を掛け過ぎだ。それすら打ち破ろうとも思っていたが、あまり長い事戦っていると外に余波が漏れる可能性がある。最後の戦いであるからそこまで気にする必要はないだろうが、それでも破壊し尽くのはあまり良くない。

「これ以上アイリスフィールを待たせるのも悪い。次で決めさせてもらおう」

自然と開いたどちらの得物でも届かない距離。アルトリアはその距離をさらに開け、壁の凹凸に足を掛けて天井へと駆け上がった。一度似たような手段で狙われたアローニーロにとってなんの為の行動かは明白。

(存外、似た者主従だったかもな)

笑い、次の一撃で討ち取るべく構える。構えは独特の高い構えではなく、両手でしっかりと『掬花』を掴んで突きを繰り出す構えだ。威力が使い手の技量に大きく反映される単純な突きをトドメにするつもりなのだ。

対するアルトリアは天井に着き、3階分の高さからアローニーロ

の位置を見定めて、天井を踏み締めて跳躍する。跳躍の際には魔力放出と『風王結界』でのブーストで一気に加速し、重力も加えて自分に出せる最高速を引き出す。何度も打ち合って勝てる可能性を見出した作戦。対城宝具である『約束された勝利の剣』を使うことも考えたが、攻撃範囲が広すぎるので選択から除外した。それに、コレは十分に勝てる可能性があるかと直感も言っている。

アルトリアがアローニーロの間合いに入るのに一秒も掛からなかった。一瞬の交差。その一瞬での攻防はアルトリアの勝ちであった。アローニーロが自分目掛けて跳んでくる銀の弾丸の如きアルトリアを捉えて槍を突き出すのは造作も無い事だった。空中ではまともには動けず、例え動いたとしてもアローニーロはそれでどうなるかを簡単に予測し、すぐさま修正する。アローニーロを読みを覆すのは、動きを見られてはいけない。

だが、自分を動かさなくても自分に影響を与えられれば、読みをずらさせる事は可能であった。『風王結界』を加速に使ったように、アローニーロの間合いに入りきる前にブレーキとして使って突き出す最高のタイミングをずらさせる。タイミングをずらされたアローニーロは予備動作無しでの行動だったので反応できず、そのまま突き出す。

アルトリアは脇腹を鎧ごと抉られるのに構わず、『約束された勝利の剣』で仮面諸共アローニーロの頭蓋を砕かんと振り下ろす。

『約束された勝利の剣』はしっかりとアローニーロの頭を捉えてはいたが、ギリギリでアローニーロは下がるのが間に合って致命傷は避ける。それでも、仮面と鋼皮越しでの衝撃は逃がし切れず頭を強打されたと同じ状態であった。仰け反り、後ろに数歩下がる。

カラン…カタカタン……。

そんな乾いた音が響く。その音は、砕けたアローニーロの仮面の上部が落ちる音であった。追撃をしようとしていたアルトリアであったが、顔を見て思わず足を止めてしまった。

(誰だ…アレは?)

仮面の下から出てきたのは宴の時に見せた顔ではなく、黒髪の東洋人であった。

酷く狼狽した様子で、アローニークは左手で顔を隠すついでに額から流れる血を拭うのと治癒を同時にしてから仮面を修復させる。

「クソ……。読み違えたか。だが、もう次はないぞ」

修復した仮面を撫でながら、アローニークは先程とは違って刺々しい雰囲気言い放つ。一度見れば次があるかもしれと予測でき、連続での『風王結界』の応用が使えると解れば、アルトリアが単独でとれる戦法は全て予測可能。

周りへの被害を気にして勝つには、もう手段は残っていない。ならば、彼女が勝つ為に使う最強の手札はおのずと判る。

(アイリスフィール……どうか、巻き込まれないで下さい)

アルトリアは祈りながら『約束された勝利の剣』を振りかぶろうとした。

しかし、連続での爆音で中断してしまう。

何が起こっている?それが2人の気持ちであった。2人が知れる筈が無いのだが、聖杯の内側を知った切嗣が聖杯を壊す一手の準備であった。

壁が爆音と共に爆せて、巻き上げられた粉塵の中から、切嗣が姿を現す。暗殺者である彼が、わざわざ目立つ為かのように壁を爆破して姿を現したのにアルトリアは怪訝な顔をする。爆破自体は取り得る手段で判るが、なぜ戦場に出てきたのかがまったく意図が掴めないからだ。

粉塵がはれた切嗣の後ろに、アルトリアは黄金の杯である聖杯を

見た。

(まさか、私に聖杯を見せる為に?)

鼓舞する材料なのか?自分のマスターがそんな事をするような人物ではないと思っっているが、それ以外にアルトリアは思い当たらなかった。

聖杯は現界し、勝利者を待っている。それだけでもアルトリアは戦える。それに、アイリスフィールの姿が見えないのが気掛かりであつたが、聖杯の心配をしないで『約束された勝利の剣』を撃てる。

「令呪を以てセイバーに命ずる」

敵のサーヴァントの前で堂々と切嗣は令呪を使おうとする。アーロニアが邪魔をするではないかと思つたアルトリアは、切嗣の前に躍り出て守ろうとする。

「宝具にて、聖杯を破壊せよ」

セイバーは発動された強権に従うべく、聖杯に向き直つて『約束された勝利の剣』を振り上げる。だが、アルトリアは自分の持てる力の全てで撃つただけは阻止しようとする。最高ランクの対魔力は、令呪の縛りを瀬戸際で食い止める。

強権と抑止。拮抗し合う2つの力は荒れ狂いてアルトリアを内側から苦しめる。

「アーロニア!『約束された勝利の剣』を私ごと攻撃して逸らすか、剣を振れなくしてくれ!」

助けを求めたのは自身のマスターである切嗣ではなく、敵のアー

ロニー口であった。聖杯が無くなるのはアローニー口とて困るであらうと考えたのと、切嗣が聖杯を破壊するつもりだからだ。

「いったい何がどうなっているんだか……」

とりあえずは、要望通りに剣を振れなくしてやろうとアローニー口はアルトリアに近付こうとし、乾いた発砲音に反応して反射的に後ろに下がって飛来してきた物を避ける。

「チツ」

舌打ちし、アローニー口は銃を撃った相手を見る。撃ったのは切嗣であり、飛来したのは『起源弾』であったがアローニー口は簡単に避けた。アローニー口を倒そうなんて切嗣は思っていない。必要な僅かな隙を得られれば最後の一手は決まる。

セイバー、聖杯を破壊しろ！

令呪による強権は、別に口に出して言う必要は無い。使うという意志と令呪があれば使える。

「やめろおおおオオツ！！」

重ねがけされた強権にセイバーが逆らえるはずもなく、彼女の残存魔力全てを込められて『約束された勝利の剣』は振り下ろされる。『栄光』という名の祈りの結晶が、勝利の栄光と共に手に入れるはずだった物を焼き尽くす閃光となったのは皮肉であろうか。

得ようとしたものを自らの手で破壊したアルトリアは、現界し続ける意思も力も無くして消えていく。

「何やらかしてくれてんだか……」

忌々しそうにアールニー口は切嗣を見据えて呟く。聖杯にはなんら価値を見出していないので破壊したのはどうでも良い。だが、その所為でアルトリアとの戦いが未決着で終わったのが気に入くないのだ。あのままだったら自分の勝ちであった確信はあったが、切嗣の掩護があれば話は変わってくる。もしかしたら、自分が負けていたかもしれない。

戦いを愉しむ為に現界しているアールニー口は最後に邪魔をした奴を殺してやるうかとしたところで、気付く。切嗣は上しか見ていないのに……

『約束された勝利の剣』によって破壊された市民会館の天井には、口のようにも見える穴が開いていた。そこから、切嗣が聖杯の内側でもみた“孔”が開いているのが見えていた。そして、その孔から滝のように黒い泥が流出した。

戦闘に集中していて孔の存在に気付いていなかったアールニー口だったが、切嗣の視線と上から感じる異常な魔力で此処に居るのは不味いと本能的に察知したアールニー口は切嗣を掴んで市民会館の外に転移する。

「何だよアレは……」

一時は難を逃れたが、泥は市民会館だけに収まらずに溢れていた。

「笑えねえ……」

まるで追ってくるかのような泥から逃れる為に、アールニー口は切嗣を掴んだまま霊子の足場を作って空中に避難する。泥が追っこないのを確認してから、アールニー口は掴んでいた切嗣を放して泥の引き起こした惨状を見つめる。

泥は何であろうと焼いてまわっている。基線の存在しない死を、平等に飲み込んだモノに与えつつ広がって行く。中には飲み込まれずに済んだモノがあったが、それらも泥が通った後に残される炎によって燃やされるか、煙に巻かれて酸欠で死んだりしている。

「そんな……なぜ……？ 聖杯を破壊して回避したはずなのに……？」

切嗣の目には聖杯の内側で見た光景と眼下の光景が重なる。

「キャスター、今すぐ降ろせ！ 今ならまだ助けられる人がいるはずだ！」

コンテンドーに新たな『起源弾』を装填して、切嗣は銃口をアローロニーロに突き付ける。

「ついとほ言え、アレから助けた恩人に銃口なんか突き付けるか普通……まあいい。死んでも後悔するなよ」

アローロニーロは要望通りに切嗣を地面まで転移させる。

「……雨が降っても、変ではないよな？」

アローロニーロは、そう呟くと被害が少しでも減るようにと大気中の水分を集めて雨として降らせ始めた。

絶望、その先に（後書き）

解説

壁を吹き飛ばした爆薬は、舞弥が切嗣の指示で予め市民会館に持ち込んでいた物。もしもキャスターのマスターが現れたら確実に殺す為に使うか、キャスター相手に目暗ましに使う予定だった。

綺礼とかは次に持ち越し

契約（前書き）

感想（ ）様
ありがとうございます！

契約

惨状を目にしていたのはアローロニーロや切嗣だけではなかった。切嗣を探し求めていた言峰綺礼もまた、偶然にも全てを見ていた。全てとは、天に孔が開くところから泥が市民会館の周囲一帯の街区に広がるまでだ。

その間だけは、綺礼は切嗣のことを忘れて孔を見ていた。ソレの存在感に身を震わせながら見ていた。しかし、恐怖で身を震わしていたのではない。その美しさに、感動して身を震わせて見惚れていたのだ。孔が消えて我に返って気付いた。自分が涙まで流して感動していた事に。

(なぜ？今までこんな事は……………)

記憶の反芻によって、「聖職者 言峰綺礼」に強烈な打撃が与えられる。1度だけ、似たような事があった。たった1度だけだが、その1度が己を崩壊させる強烈な毒^{ゆえつ}なのだ。「聖職者」であろうとするなら、この記憶も奥底に封印するか、忘却しなければならぬ。だが、それは不可能であった。親しい者の死程度だったら、「聖職者」としての本分に立ち戻ることも可能だったであろう。しかし、綺礼が目にしたのは彼が無意識の内に避け、「聖職者」として拒絶していた愛するモノそのものと言っても過言ではないモノだったのだ。

それでも、まだ気付いていない。綺礼は、きっと別のモノだと決定付けてアレが何だったのかを知るべく、惨状の中心へと急ぐ。アレ程の現象は、サーヴァントか聖杯でなければ起こすの不可能。なら、聖杯が起こしたとすればソレを願った者が居るはずだ。

雨の降る悲惨な火災現場の中を綺礼は確かな足取りで歩く。足場

が悪いが、それだけでは綺礼の歩みを遅くすることは出来ても、止められない。途中で何体もの焼死体を見ても、綺礼は特に顔色は変えないで中心を指して足を勧める。神父服で火災現場を歩いているその姿を見た人間が居れば、こう言ったであろう。「焼死体の顔を見て笑う不気味な男がいた」と……。無意識な行動であったが、綺礼は苦悶の表情で引き攣って死んでいった顔を仔細に観察して笑っていた。

捜し求めていた男が居た。しかし、その男は少年を助けて感謝していた。

(なぜ……?)

切嗣は自分と同じハズ。そんな綺礼の考えを否定する光景がそこにはあった。

(なぜ、そんなにも見た側が羨むほどの笑顔をできる。

なぜ、そんなにも満ち足りた顔なのだ。

おまえも、私とは違ったのか)

綺礼は逃げた。長い求道でまた徒勞に終わった出来事がたった一つ増えただけだが、今回は今迄で一番期待していた。そして、一番違った事がシヨックであった。

「ハア…ハア……。ハ…ハハッ」

軽く息が切れるまで走り、笑った。勘違いで自分と同じ思って、そんな無駄な行為で父の信頼を裏切った。勝手に期待して、勝手に絶望する。自分は道化でしかなかった。笑わなくてはやってられない。

(……まだだ。まだ終わっていない！この惨状を作り出したキャスターかそのマスターが居るはずだ！)

そうして、綺礼はキャスターを捜し始めた。

「どうするか……」

アローニーロは焼け崩れた元市民会館の入口であった場所であった。普通の炎なら何も警戒しないのだが、魔力で発生した炎であるから自分に燃え移る可能性もあるので、周りの残骸などは遠ざけてある。

考えているのは、今後どうするかである。勝とうが負けようが現界し続けるつもりは無かったのだが、いらん横槍の所為で決着が着かなかった。ソレが心残りである。

幸か不幸か、決着を着けられる舞台を作ることはおそらく可能である。聖杯による奇跡。60年待つ必要はあるが、成功の見立ては非常に高い。

「尤も、聖杯が願望機だったらの話なんだがなあ……」

惨状を見つめなおす。降り注いだモノが魔力の塊であったとしか情報のないアローニーロは、聖杯が使えるかがどうにも判断できない。アイリスフィールの記憶から聖杯がどんなモノであるかは判った。しかし、どうにも違うように思える。聖杯は壊れているのなにか？そんな疑問が胸に渦巻く。

壊れているのなら、直せば良い。そう考えたが、大聖杯を直に調べたが上辺はなんらおかしい所はなかった。それよりも、解らない部分が非常に多かったのだが……

自分が使うのと根本的に違ったのだから当たり前なのだが、魔力を汲み上げる部分は似通っている感じがしたので使えたのだ。ケイネスの知識が足された今なら、解る部分は増えているだろう。

だが、自分で弄る案は永久凍結した。模倣ならまだしも、原型が判らないで弄るとどんな悲惨な結果が訪れるか判ったモノではないからだ。

「いつそ、座に還るか？」

果たして、そこまでの程にアルトリアとの決着は価値はあるのだろうか？ そう思った時だった。

「見つけたぞ、キャスター」

「あ？」

綺礼がアローニーロを見つけた。白尽くめのアローニーロの格好はかなり目立つ。綺礼がアローニーロを見つけるのにさほど時間を必要としなかった。

「何か用か？ 座に還ろうかと考えているとこなんだが」

「質問に答える余裕はある訳だな。この惨状を引き起こしたのはおまえか？」

アローニーロにはなぜアサシンの元マスターがそんな事を聞くか判らなかったが、別にどうでも良い事なのでありのままに答える。

「違う。聖杯から流れ出たモノが引き起こした」

「違う」と言われたらとこで綺礼は残念そうな顔をしたが、聖杯が起こしたと知るやいなや笑いだした。

「つまり、聖杯が自ら引き起こしたと？」

「そこまでは判らん。ただ、中身がそう言う事を引き起こしかねないモノだってことだな」

奇行などまるでなかったかのように、2人は会話を続ける。

「では、キャスターよ。もしもまだ聖杯を求めるのなら、私と契約しないか」

「ふむ……」

決着をつけようと行動するのなら、渡りに船だ。なにより、アーロニーロにとってこの男は都合が良かった。

「令呪を剥いだうえでなら、受けよう（尤も、お前に繋ぐのは魔力供給の因果線だけだが……）」

「では、契約しよう（葬れる手札を得る必要があるな）」

互いに相手を信用しない契約が此処になされた。

Zeroの終着(前書き)

感想 PALUS様、ターボー様、教授様
ありがとうございます！

Zeroの終着

束縛術式：対象 マキリ・ゾオルケン

ゾオルケンの刻印が命ず：下記条件の成就を前提とし：誓約は戒律となりて例外なく対象を縛るもの也：

：誓約：

マキリ・ゾオルケンこと、間桐臓硯に対し、間桐雁夜並びに間桐桜の両人を対象とした、例外の存在しない、殺害、傷害の意図および行為、並びに例外の存在しない両人の意思を捻じ曲げる行為を永久に禁則する。

また、間桐臓見は間桐桜を間桐雁夜の娘とし、戸籍上でもそれとなるようにする。ただし、例外として結婚によっての戸籍変更は認めぬ。

また、間桐臓硯は間桐雁夜と間桐桜が貧困にあえぐ事無きように配慮しなければならない。

：条件：

キャスターこと、アローニーク・アルルエリは間桐臓硯に義骸2体を贈呈し、間桐臓硯の治療をする。

セルフギアス・スクロール
自己強制証文。決して違約しようのない取り決めを結ぶときのみ用いられる呪術契約のひとつ。

魔術刻印の機能を用いて行われるソレは、魔術刻印が存在する限

りどのような方法であろうと解除不可能な効力を持つ。死後の魂ですら束縛するこの術は、後戻りなどできない。成されてしまえば絶対のモノとなる。

そんな物騒なモノだと見た雁夜は判らなかったが、アールニーロがああ妖怪と取引までしてくれたとすぐに解った。

契約がなされた事目の見える証拠としての羊皮紙。普通の便箋。灰色の表紙の本。その三つが、アールニーロが雁夜に残した餞別。それはまとめてテーブルの上に置いてあり、雁夜がすぐにも見れるようになっていた。

最終決戦の前に、アールニーロは雁夜と桜をある家に送っておいた。雁夜には戦う理由が無いのと、万が一にならない為だ。

「……」

雁夜は続いて便箋から手紙を取り出して読む。

「面と向かってこんな話をするのは気が退けたので手紙という形で伝える。

お前等を送った家は、お前の家だ。臓硯が用意した物だ。おそろく、目の届くところに置いておきたいんだろう。改造が完全に済んでいないとは言え、桜は間桐の魔術を多少は扱えるし、お前が子を成せばその子は間桐の血を受け継ぐ子供だ。もしもの場合の保険にしておきたいんだろう。

自己強制証文によって間桐臓硯はお前と桜に危害は加えられないだが、敵になるのは臓硯だけではない。臓硯は自主的に動けなくはしたが、お前と桜は魔術協会にとっては貴重なサンプル足りえるかもしれない。不安を煽るようで悪いが、異能は異能を引き付ける。絶対に安全とは言えないのがお前等2人の現状だ。

まあ、なんだ、半分位は俺のせいになる。そこで、俺はお前等に使えそうな術を纏めた本を残す。

お前が魔術を嫌っているのは解っている。が、魔術に対抗できるのは同じ魔術か、神秘のあるモノだけだ。別に魔術を極めるとは言わん。護れるだけの力は必要不可欠になるだろうからな。

それに、嫌っているお前だから残す。念の為に書いておくが、嫌がらせではないからな。嫌っているのなら、必要の無い限りはお前は使わないだろうと思っただ。

幸いというか、絶対に狙ってなんだろうがその家には入り口が隠されている地下室がある。そこなら、外に色々と漏れないらしい。そこで鍛えると良いだろう。

あと、余計なお世話かもしれないがしっかりと職を探せよ。職の斡旋は俺ではどうしようもないからな。

追伸 どれだけ嫌でも、本に纏めてある最初の術だけは習得しておけ。対間桐の蟲用に考えたやつだ」

「はあ……明日からまずは仕事探しになるか」

雁夜は苦笑いしながら、灰色で表紙に何も書かれていない本を片手に地下室を目指すのだった。

それは、第四次聖杯戦争の決着が着くほんの少し前の話。

第四次聖杯戦争の終わった次の朝の朝のニュースは、昨夜の大火災で持ちきりだった。原因不明のその火災は大々的に取りあげられている。現場にはテレビ局のカメラが到着してピントを合わせて、無惨

な焼け野原を映していた。

それを見るウェイバーには聖杯戦争の余波だと判った。しかし、
どういう経緯でそうなったかは疑問が残った。ウェイバーが知る限りは、こんな事を望む人物は居なかつたはずである。真つ当な考えなら、人道的にも、神秘の秘匿での観点でもこんな大災害を引き起こすのは正気ではない。

それでも、起きてしまった。もし、王と一緒に勝ち残っていたらこれは防げたのではないかと思ってしまう。そんなもしもの話を考えても、意味は無いと解っている。だが、考えてしまう。王と駆け抜ける未来を……

「……ねえ、お爺さん、お婆さん。ちょっと相談があるんだけど、いいかい？」

神妙な声で切り出したウェイバーに、暗示でウェイバーを孫と思
い込んでいる2人はコーヒを啜る手を止めた。

「どうしたんだ？改まって」

「うん、実はね……しばらく休学しようと思うんだ。もつろんトロントのお父さんにも相談してからだけど。学校の勉強よりも、別のこと
に時間を使いたくなつて」

「ほっ」

「あらまあ」

思わぬ孫の発言に、老夫婦は目を丸くする。

「でもまた、どうして急に……もしかして、学校が嫌になつたの？」

「いや、そういうわけじゃない。ただね…今まで勉強以外のこと、ろくに興味持たなかったのを、ちよつと後悔しているんだ。それでね…うん、旅をしようかと思う。外の世界を見て回りたい。これから先のことを決める前に、もっと色んなことを知っておきたい」

「まあ、まあ」

夫人は何やら嬉しげに胸前で手を合わせ、朗らかに微笑む。

「ともかく、まあ色々準備というか、先立つものも必要になるし、まずはアルバイトでも始めようかって。……それで、さ。ここからが本題なんだけど。この冬木で、英語しか喋れなくても勤まる働き口って、ないかな？」

グレン老人が思案顔で腕を組む。

「んん、まあこの街は、日本にしては珍しく外来居留者も多いしな。儂の同僚のつてを頼れば、けっこう色々見つかると思うが」

「ウェイバーちゃん、それじゃあ　もうしばらく日本に？」

目に見えて明るい顔になったマーサ夫人に、ウェイバーは頷いた。

「うん、もし構わないようなら……目処がつくまでこの家で厄介になっても、いいかな？」

「もちろんですとも！」

まるで小躍りせんばかりの喜びようで夫人は手を叩く。そんな老

妻の隣で、グレン老人は真顔のまま、ウェイバーだけに解るように小さな目礼を寄越してきた。ウェイバーもまた軽く肩を竦めて、照れながらもウインクを返した。

実の所、グレン老人に掛けられた暗示は既に解けている。グレン老人が効きにくい体質だったのか、それともウェイバーの掛け方が甘かったのか、あるいはその両方かは定かではないが、グレン老人はウェイバーが他人だと認識している。

それなのにウェイバーを追い出さないのは、仮初めだとしても孫と過ごす時間が自分もマーサ夫人も楽しいからだ。もう少しだけいいから、今の生活を続けて欲しい。

そんなお願いをしたグレン老人も、承諾したウェイバーも、お人好しなのだろう。

時間は少し巻き戻り、アールニーロと言峰綺礼が契約した時に遡る。

綺礼は命令違反をして冬木にいる事を思い出したアールニーロは、それを利用して三文芝居を思い付き、実行した。

しかし、アールニーロは気付くべきだった。三文芝居に出る犠牲を笑って受け入れた綺礼に……

第四次聖杯戦争の最後に出た被害は隠匿するのは不可能な規模だった。それを現状から少しでも改善する為の監督役の仕事は多く、璃正は老骨に鞭打って仕事に集中しなければならなかった。

「む……」

突然、執務室に殺気りが満ち溢れる。璃正は敵襲だと判断した。しかし、疑問しかない。聖杯戦争中であるのなら、予備令呪が聖言に守護されていると知らない無知なマスターに狙われるのは想定内の範囲内である。

だが、つい先程聖杯戦争は終わったはずである。個人的な恨みの線もなくはないが、このタイミングで仕掛けてくるかが疑問だ。

影からの右腕を狙った槍のようなモノを璃正は間一髪で避けた。

「キャスターか……」

初撃をなんとか避けた璃正は影から出てくる敵を見つめる。かつては聖遺物の回収を「試練」として世界中を巡り歩いた時に培った経験が勝率はゼロだと訴えるが、同時に逃げられる可能性もゼロだと告げる。

「その腕をくれたら見逃すが？」

「フツ……（甘く見られたモノだな……）」

老いで力が衰えた璃正であるが、正調な八極拳ではまだ息子である綺礼にも後れを取らない。むざむざ腕と令呪を渡すつもりは璃正にはまったくない。

それに、犬死にであろうとも、職務に殉じて逝くのなら悪くはないとさえ璃正は思っていた。

「時間を掛けるのはあまり良くないのでな。射殺せ、『神鎗』」

しかし、戦いにすらならなかった。璃正は反応すらできなかった。躊躇無く、アローロニーロは真名解放して璃正の右腕を切り落とす。

目的は令呪だ。もしもの場合の一時的な魔力の供給源と、うまくすれば自分に令呪で強制させることも可能であろう。サーヴァントへの絶対命令権を、自分自身に使うサーヴァントは前代未聞になるだろうが。

「グッ……！」

璃正は悲鳴を上げずに、切られた部分を手で押さえて止血をしようとする。しかし、痛みと疲労で目が霞み、老いを急に意識しだす。

（せめて、息子に看取られる位の平穏な終わりを期待していたのだが……）

一矢報いようと、璃正は止血を諦めて片腕で構えを取る。負けるのは必然。なら、父は勇敢なる最後だったと、息子が誇れる位には立ち回りたい。そんな一心であった。

背後からの黒鍵の掩護を受けるまでは……

「綺礼……」

黒鍵はアローニー口を貫かんと猛然と襲い掛かるが、どれも斬り落とされる。

「父上、無事ですかッ!？」

まさかの援軍に、璃正は目を疑った。退去させたはずの息子が援軍として現れるなど、予想はしていなかった。純粹に、璃正は嬉しかった。しかし、同時に悲しくもあった。息子共々キャスターに殺されるかもしれないからだ。

「……。欲しいモノは手に入れた」

そう言うとアールローロは消えた。死を覚悟していた璃正からすれば拍子抜けする結果だったが、息子と命を繋げられたのは僥倖と感じられた。

「父上、すいません。妙な胸騒ぎを感じて、退去の命令を受けたのにこうして命令違反を犯しました」

アールローロが消え、殺気も飛散したのを確認してから綺礼は璃正に謝る。

「……」

組織の一員としては、命令違反は許されざる行為になる。息子がそんなことをしたのを悲しく思う反面で、璃正は嬉しく思った。組織の命令より 結果論にすぎないが 自分の命を優先してくれたのだ。親としてはこれ程嬉しい事は無い。命令違反にはこれまで無縁だった綺礼であるから尚更である。

尤も、それはアールローロの三文芝居なのだが。

「綺礼。ひとまず、止血の手伝いをしてくれ」

「はい」

璃正は綺礼に助けられ、子が親を助ける為に命令違反をした美談ができる。はずだった……

父親の苦痛に歪んだ顔。それが最後の切欠になった。

璃正は処置の大半を綺礼に任せようと、傷口が綺礼に見えるようにしていた。綺礼は、その傷口に黒鍵を刺し込み、続けて逃げたり

抵抗できないように各関節にも黒鍵を刺し込む。

「ガッ!???」

更に叫び声を上げられないように口を塞いでから喉を潰す。

突如の綺礼の凶行によつて、璃正は苦痛に顔を歪めつつも眼には恐怖を浮かべている。

その姿は、綺礼にとっては美酒かのように感じられる。自分の感情と行動に驚きつつも、綺礼は笑いながら間接に突き立てた黒鍵を抜く。

ソウダ、クルシミガユエツニツナガル……

「おい、何をしている」

影から出てきたアローニーロが、綺礼の手首を捻って動かせなくしてから問い詰める。下らない三文芝居だったのだが、欲しい令呪を奪った後は璃正が寝ている間に聖言を記憶から盗み見る算段であった。

綺礼がやっているのは苦痛を与える方法であつて、殺すつもりが無いのはアローニーロにも判っている。だが、それは必要の無い事だ。

「何とは失礼だな。おまえが戦いを愉しむように、私は私の愉しみをやっているだけだ」

「拷問かが?」

「拷問? 私は純粹に苦しめているだけだ」

(思ったよりヤバイ奴と契約しちゃったな……)

ほんの少しだけ、綺礼と契約したことを後悔したアローニー口だったが、いつまでもそうしている訳にもいかない。

「まあいい。死んでいなければ取り出せる。だが、ここでは続けるのには……」

ゴト……。そんな物音が扉の向こう側から聞こえた。

「私が処分してこよう」

有無を言わずに綺礼は璃正をアローニー口におしつけると、見ていたであろう自分の師を追いかけ始めた。

「まったく……」

溜め息をつく、アローニー口は痛みで気を失った璃正から聖言に関する記憶を捜し始めた。新たな犠牲者を哀れみながら……

「クッ……！」

片足の代わりに松葉杖をつきながら時臣は逃げる。勿論、綺礼からである。綺礼の凶行の一部始終を見てしまった時臣は信じられなかった。キャスターと手を組んでいるのもそうだが、自分の父を笑

いながら髑つていたのもだ。彼の中の綺礼の人物像からかけ離れた、悪魔のようなその行為に恐怖を憶えた。

(アレは誰だ……？自分の弟子の皮を被っている悪魔は……)

自分が作り上げた人物像を否定できない時臣は、自分が見た綺礼を否定する。そんな事もしても、何も変わらないというのに……
そもそも、否定されようが肯定されようが綺礼はどうでもよかった。苦しむ姿を見れば、それで良いのだから。

黒鍵が松葉杖を短くする。あっけなく、時臣はバランスを崩して床に叩き付けられてしまう。

「誰かッ！誰か居ないのか!？」

助けを求めて声を上げるが、教会に虚しく響くだけであった。火災によって聖堂教会のスタッフは全員出払っており、教会には璃正と時臣しかいなかった。

他人を頼りにできないと判った時臣は、無駄と解つていながら宝石を取り出そうとポケットに手を入れた。だが、手は宝石を掴んでも二度とポケットから出てくる事は無かった。

時臣が死んだからではない。投擲された黒鍵が手首より先を時臣から切り離れたからだ。

「最後に、コレをお返しします。導師」

朗らかに笑って、綺礼は冬木を退去する前に渡されたアゾット剣を時臣の心臓を突き破るように刺突する。時臣がこと切れるのはほんの一瞬であった。死に顔には苦悶が張りついており、綺礼好みの顔に仕上がっていた。

「どの道殺すにしても、せめて楽に殺していやる気遣いはお前にはないのか？」

辟易したと言わんばかりの声音で、璃正を背負ったアローニーロが綺礼に歩み寄る。

「逆に聞くが、お前は敵と戦う時に宝具ですぐに決着をつけるか？」

「……それと同じと聞いたいのか？」

「ああ、そうだ。やりたい事をやった結果が殺した。おまえと同じで、結果より過程を愉しみただけだ」

「お前は碌な死に方をしないな」

「死体を喰らう英霊に言われるとは、私は中々のモノのようだな」

笑い、綺礼は黒鍵を投げる。狙い違わずに、黒鍵は璃正の頭を貫く。

「チッ」

舌打ちをしてから、アローニーロは飛び散った血に魔力を通して月霊髓液の応用で全部の血を集めて、犯行現場の偽装に取り掛かった。

Zeroの終着（後書き）

時臣の葬式って書いた方がいいですかね？

葬儀（前書き）

感想 教授様、たぬき様

ありがとうございます！

葬儀

時臣の死去から半年掛かってから、葬儀は開かれた。開かれるのがそこまで遅くなったのは、魔術刻印を摘出する為にロンドンの魔術協会本部への運搬や摘出手術に加え、それに伴う様々な手続きや折衝のせいで、時臣の亡骸が故郷に戻るまでに半年も掛かったからだ。

死因は、鋭利な刃物によって身体の急所を一突きされた傷である。他にも到る所を切られていたが、それが意味する事に気付ける者はいなかった。

公式な時臣の死の見解は、キャスターによる殺害となっている。証拠は綺礼の証言だけだったが、璃正と時臣の亡骸が教会から離れた場所で発見されてほぼ確定された。

キャスターがいまだに現界しているという事実は、聖堂教会も魔術協会も無視できない事実だったのだが、捜査は早々に打ち切られた。冬木の地に限定されていても誰もその拠点を発見できなかった。英霊を世界規模で捜すのは無駄や無謀に等しいのと、サーヴァントを狩ろうとするならば現存する宝具でも持ち出さなければ個人では不可能であるからだ。

それに、キャスターが非常に危険であるからだ。危険であるなら早々に始末するべきなのだろうが、キャスターが出す犠牲と、狩るのに出る犠牲を考えれば組織に大きな損害を出してまで狩ろうとは思えない。例えキャスターが研究に出る犠牲を考えない魔術師であっても、そんな魔術師は腐るほど居る。

どちらの組織であっても、とりわけ危険な魔術師が新しく出現しただけである。

「 Amen. 」

時臣の亡骸の入った棺は大地に贈られ、祈りの言葉の締めくくりをもつて葬儀は終了する。元々数の少なかつた葬儀の参加者は1人また1人と去つていき、最後に4人だけが残る。

「ご苦労でした」

喪主を務めたつら若き未亡人に綺礼は労いの言葉を掛けるが、見るからに心労の溜まつている葵は微笑すら浮かべずに暗い声で返事をする。

「あの人の妻として、当然の責務を果たしただけです」

最愛の夫を失った葵は、日を追うごとに痩せている。心の支えであつた夫を亡くしたのだから当然だ。それに、殺されたのだから殺した犯人を恨むなどして生きる糧に変えるなどもできない。元々復讐など思い付かないような人物であることもそうだが、犯人がサーヴァントとなつているのも要因になつている。

「綺礼、お母様は疲れているの。だから引き留めないでくれる？」

時臣の娘である凜が、母を守るかのように綺礼と葵の間に割つて入る。その眼にはハッキリとした綺礼への敵意が宿っている。別に父の仇と知っている訳ではない。ただ、父を守れなかつた綺礼に怒りを抱いているだけだ。真実を知れば、敵意は殺意に変わるであろう。

「ああ、済まない。だが、話しておかなければならない事があつてな」

「それはお母様も付き合わないといけない話？」

敵意を剥き出しにしている凧に対して綺礼は淡々と先を続ける。

「ふむ……2度手間になるやもしれないから一緒に聞いてくれた方が都合が良いな」

「それじゃ、お母様は先に車に戻っていて。私は綺礼のお話を聞いてから戻ります」

「え……でも……」

凧は少しでも母親の苦勞が減るようにと思つて行動している。

「ありがとうね、凧」

まだ自分にはこの子が居る。自分にそう言い聞かせて葵は先に車に向かう。

「で、何の話」

「何、またしばらく、私は日本を留守にする。後見人としては不甲斐ないと思ひ。有事の際に頼れるように友人にこの冬木の地に居てくれるように頼んだ訳だ」

「必要無い」

凜は綺礼の申し出に即答する。綺礼の友人であろうと頼る気な
て凜にはまったく無かった。

「可愛げのないガキだな」

綺礼の後ろに控えていた黒髪の東洋人が、凜の返答に思った事を
はつきりと言う。

「その無礼な奴が友人？」

綺礼が連れてきた時点で凜にとっては敵も同然。綺礼同様に凜は
その人物を睨みつける。

「ああ、彼は志波海燕^{あしな}。都合^{あつち}がついて、なお且つ信頼のできる人物
だ」

「綺礼の友人の海燕だ。それと、無礼と言うのならお互い様だ。初
見となる相手を睨みつけるのは、品格を問われる」

「ム……」

正論を言われた凜はばつの悪そうな顔をして、自分の行動を思い
返す。遠坂家当主にしては、綺礼への応対も含めて優雅さに欠けて
いた。

家訓である「どんな時でも余裕を持って優雅たれ」は、今のよう
な状況でこそ実践しなければならぬ。そう判った凜の行動は早か
った。

「海燕さん失礼しました。しかし、私には必要ございません」

表情こそ強張っていたが、凜の行動は年齢を鑑みれば不釣り合いにも大人の対応である。しかし、断る根底には綺礼の力を借りたくないとする感情だ。

無論それだけではなく、原則は等価交換という考えもある。借りを作れば、いつの日には必ず返さなければならぬ。つい今し方会ったばかりの男に、どれ程になるか判らない借りを作るなど魔術師としてできない。相手が裏の人間と密接に関わっているならなおさらである。

「等価交換とか気にしているんだったら、その返事は取り消して欲しいな。別に魔術師同士の貸し借りって訳ではないしな」

純粹に、心配している。凜が言葉と雰囲気を感じ取った海燕の感情はそれであった。

「まあ、海燕がどうしても嫌というのなら、有事の際は手遅れになる前提で私に連絡するのだな」

「手遅れになる前提」綺礼のその言葉が凜の不安を煽る。魔術関連であれば警察に下手に連絡する訳にもいかなく、信頼のできる魔術師なんて近隣にはいない。間桐は冬木の地の管理に協力しているが、信頼できるかになると凜の中では綺礼の方が信頼できる。

そもそも、凜は魔術関連で的確に対応できる人物は綺礼以外に伝手がない。時臣の友人なら的確に対応できる人物は捜せば必ずいるだろうが、魔術師であろう。自分本位の魔術師が、凜の面倒を見るだけの為に冬木に腰を落착けるなんてまずしない。

尤も、凜はそこまで魔術師の事をまだ理解していない。魔術師がどこまで冷酷になるかを時臣がまだ教育してないからだ。

「お2人がそこまで言うのなら、こちらは無碍には出来ません。連

絡先は教会でいいですか？」

あくまでも凜が折れる形になった。

「いや、ここに連絡してくれ。俺は聖堂教会でも魔術協会の人間ではないから」

渡された連絡先を書かれた紙を受け取ると、凜は葵が待っている車に小走りで向かった。

「暗示の魔術を使ってまで取り入るとは、流石はキャスターのクラスのサーヴァントだな」

周りに誰も居ないのを確認してから綺礼は海燕に笑って言う。

「暗示と言っな。強制認識と不安を増幅させただけだ。元々自分の父親が手遅れで死んだと思っっていたから、思っただけ以上に効果が出たんだがな」

何でもないかのように海燕もとい、キャスターもとい、アローニローは言う。

「自分があたかも心配していると認識させ、その後不安を増幅させる。順序は逆だが、まるで悪徳商法だな」

綺礼の指摘にアローニローは顔を顰める。

「言っておくが、心配は本当にしている。強制認識させたのは俺を信頼できる、だ」

「そんな事は私が関知することではない。ああ、そうだ。これを今日渡すつもりだったが、渡しそびれてしまったな」

綺礼が懐から取り出したのはアゾット剣であった。

「殺した凶器を葬儀に持ち出すなんて悪趣味だな」

「なに、思い出の品としてこれ程相應しいモノが無かったのな。ふむ…コレは半年後の2度目の刻印移植の際に渡すでしょう」

急ぐ必要も無い。そう思って、綺礼はアゾット剣をしまう。

「アローニーロ、私が居ない間は凜を頼む。これからすぐに任務に向かうのでな」

「頼む、なんてらしくないな」

「なに、アレが歪な花を咲かしてくれるまえに枯れるなどしたらつまらんからな」

綺礼にとって凜は咲くのが楽しみな花の種なのだ。しかも、その育成にアローニーロが一枚噛むのだから咲かせる花はさぞや歪になると思っている。

アローニーロが真つ当な影響を凜に与えるなんて綺礼には想像できなかつたのと、真つ当であっても父親の仇とされている人物と知ったらどんな反応をするのかが今から楽しみであった。

葬儀（後書き）

「なんで、こうなったんだ」

時臣の墓に訪れた雁夜は、悔しそうに言う。時臣への憎しみが完全に消えた雁夜ではなかったが、葵と凜と桜の次くらいには時臣は死んでほしくない人物になっていた。葵の幸せな生活に時臣が必要不可欠だと解っているからだ。

「グスッ……」

そんな雁夜の隣では桜が泣いていた。養子に出されたとしても彼女にとって親であった事は変わらず、その死を悲しんでいた。

「桜、もう行こうか」

「はい、お父さん」

落ちつたら桜を葵と凜に合わせようかと思っていたが、雁夜はもう少し先延ばしにした。

許可の宝石一本釣り(前書き)

感想 教授様、higgassii様、かにかま様
ありがとうございます！

後書きにちょっとしたアンケートあり

許可の宝石一本釣り

アローニーロは働いていない。理由は2つある。そもそも働く必要が無い。黄金律：Aのスキルはお金に恵まれるスキルで、最高クラスなのでお金の方から寄って来るから黄金律を発現している間はお金に困る事は無い。

別の理由は戸籍が無いからだ。偽の戸籍なんて綺礼が協力すれば割と簡単に作れるが、下手に存在の証拠になるモノはなるべく無いようにしたいからだ。

ついでに、車の運転免許とかも当然持っていない。車での移動が必要になる位に遠出するなら電車か転移を使う。

それでも必要になったら、騎乗：A+のスキルの出番である。別に無くても車の運転は出来るが、もしもの場合を想定して発現させている。尤も、普通の車なんてアローニーロは持っていないので車にはまず乗らない。

基本的に綺礼の名義で買い取った新都にある5階建ての地下付きビルに引き籠っている。そのビルは魔術師の工房に改造済みで、結界92層、魔力炉9基、獵犬代わりの悪霊、魍魎、虚数^{ホログ}十体、無数のトラップ、部屋の一部は異界化させている空間もある。

窓から侵入しようとすれば、出入り口の無い地下（悪霊、魍魎、虚の3分の1がそこに納められている）に強制転移させられる。割と本気で工房の敷設をしてある。ただ、穴が一カ所だけ開けられている。正面の出入り口と、1階の居住空間は結界外になっている。結界や罫があるのは2階から上の階と地下だけになっている。人を招くなんて滅多にしないが、凜などが訪ねてくるかもしれないので開けられている。

隠蔽方向に特化されているので、結界の数の割には防御力は低い。それでも張られている結界の半数は五感を限定させるモノなので結界空間に入れば一寸先は闇の状態になってから悪霊、魍魎、虚に嬲

り殺される事態になる。今の所は、犠牲者はゼロである。

「もしもし、志波ですがどちら様ですか？」

工房で暇つぶしの魔術礼装作りにいそしんでアローニーロだったが、電話が鳴ったので作業を中断して各階に備え付けられている電話にでる。

魔術礼装と言っても、魔力を通しさえすれば簡単に使える安易な物がほとんどであって実戦向きの武器としての面が非常に強い。

完全に遊びで作っているが、物によっては綺礼に貸してモニターしてもらっている。

『海燕さんでいいですか？』

電話をかけてきたのは凜であった。

「ああ、海燕だ。緊急って感じではないさそうだが、何の用だ」

『綺礼が貴方を信用できるって言っていました。けれど、私は貴方の事を名前と連絡先以外何も知らないのです、できれば具体的に何ができるかをこちらの自宅で聞きたいのですが、いいですか？』

「構わない」

『では、お待ちしていますのでなるべく早く来て下さい』

「ついでに話をつけておくか」

制作途中の改造黒鍵をアローニー口はほっぴり出すと、予め用意しておいたリュックを背負うとビルを後にした。

「俺にできるのは武術を教えるくらいだな」

あいさつもそこそこで終わらせたアローニー口はきっぱりと言った。

海燕としてできる事は非常に限られる。義骸を着ている今はスキルこそ発現できるが、身体能力は制限してある。

「随分とはっきり言うんですね」

「ハッキリしておかないといけない事だからな」

「聞きたくありませんけど、その、有事の際はどう対応するつもりだったんですか……」

恐る恐るといった様子で凜が聞く。

「有事の際は綺礼との取り決めでは、各方面に連絡を入れるだけだ。どこかの身の程知らずが冬木の地で暴れるようなものだったら、討伐には出るかもしれないがな」

(居ても居なくても変わらないんじゃないか……)

「そもそも冬木、というか日本は比較的平和な部類だ。それに、遠坂、間桐、アインツベルンの三家の息がかかっている土地で狼藉を働ければどうなるか位は大半の魔術師は知っている」

「……その、どの位の实力があるんですか？」

「完全装備で綺礼に勝つ程度だ」

(代行者と渡り合えるのなら、割と強いよね)

「まあ、それでも魔術使いとしてはあまり強くない。俺自身の魔術の才能は低いから、凜のような才能の塊に魔術を教えようなんておこがましい。そんな訳で教えるとしたら武術だ」

「才能の塊」と評されたのが嬉しかったのか、凜は上機嫌になったが、すぐに眉を顰めた。

「……ちょっとまって下さい。魔術使いってなんですか？それに、この前は魔術協会に属してないって言うてましたよね？」

「『根源』へ到るのが魔術師の本懐だ。だが、そこを目指さない。または、目指せない輩が魔術を紙やペンのようにただの道具のように扱う。『根源』を目指さないのは魔術師にあらず、って事で誰かがそういう連中を魔術使いと言った。俺もその1人という訳だ。魔術教会には本当に属していない。俺はフリーランスだ」

魔導に誇りを持つ魔術師にとっては、魔術使いなんて下賤な連中に見えるだろう。だが、あえてアークローは凜に教えた。工房の隠蔽用の結界には自信はあるが、絶対に見つからないとまでは思っていない。色々と仕掛けはしたが、必要と思えばビルは放棄するつ

もりさえある。

それに、先に話しておけば後から話すのより信憑性が出る。凜には強制認識を掛けてあるが、それにも限界はあるし、ずっと掛けておけば抵抗力が上がって効果が薄れたり無効化される。

「さて、この前は俺が魔術使いと知らずに冬木の地に居られる許可を口上で出したが、ソレを知ったらタダでは置いておくのは体面上はいかないだろう。

そういう訳で、コレだ」

アローニーロは背負っていたリュックから直径15？高さ10？の瓶を三つ取り出す。

「ッ！」

凜は瓶の中身を見て息を飲む。瓶の中身は宝石で、宝石魔術を使う凜にとっては何よりも先に優先して手に入れるべきの物だ。しかし、宝石は高価な物だった1つでも万はする。しかも、宝石魔術は宝石を使い捨てにするので非常に金のお金掛かる魔術なのだ。

量より質を優先して掛かる経費を抑えたり 尤も、込められる魔力量が宝石の質や曰くに大きく左右されるので、一概には経費削減の為だけとは言えない 先祖代々ある商才でなるべく高質の宝石を収集している。

アローニーロの用意しておいた宝石は最高級よりいくらかランクは下がるが、それでも良い品質である。

「とりあえずこれだけの宝石でどうだ？」

「わかりました」

即答であった。

アローニー口の用意した宝石は凜の目でも申し分のない物であったし、遠坂家の者としてこの取引は破格のものだったからだ。

元々居る予定だった人物に許可を与えるだけで宝石が手に入る。普通だったなら何か裏があると疑って掛かるが、まだ幼い凜はそのまま頭が回らなかった。尤も、裏なんて無くてアローニー口にとつては物でのご機嫌取りでしかなかった。

(やっぱり、子供は子供だな……)

宝石の瓶詰を宝石の輝きに劣らずに、キラキラと目を輝かしている凜にアローニー口はそんな感想を持ったのだった。

許可の宝石一本釣り（後書き）

おまけ

完成した改造黒鍵の刃を実体化させてアローニー口は黙ってしまった。

「なんだろうな……コレ」

実は綺礼に依頼されて黒鍵を改造していたのだが、その依頼内容は……

「なるべく苦痛を与えられるように改造してくれ」

と、いうものだった。切れ味が低いと斬られた側が非常に痛いと感じたことのあるアローニー口はとりあえず切れ味を低くし、ついでに刃の到る所にやじりのように抜けにくくするようにした。

その後で何を思ったのか、抜けにくくする為の部分を引き抜いたら刺さっていた部分を抉れるように空洞に変えてしまった。

「渡すべきだろうか……」

流石に、迷うアローニー口であった。

アンケート

一気にステイナイトに進んだ方がいいでしょうか？
ちよつとご意見を下さい。

訓練開始(前書き)

感想&ご意見 教授様、ツユリ様、PALUS様、他のリスナー様、
m i k e様、クレイ様、j a c k s様、雨下家s様、煌 焰様、o
i n a様

ありがとうございます！！

2、3話位やってからステイナイトにいくに決まりました。

訓練開始

アーロニーロは冬木に居られる許可を得ると共に、凧を鍛える事になった。魔術に関しては寶石魔術なんてまったく解ってないアーロニーロが口出しなんてできるはずがないので、護身術として武術ぶっちゃけると白打を教える。中には3次元戦闘を前提にしている技もあるが、空を飛ぶなんて魔術では効率面でまず使えないので多少アレンジを加えたものになる。

訓練に使うのは遠坂邸の庭である。広いし、景観を良くすると結界の敷設にしか使われていないので十分な広さがあるからだ。雨天の場合は中止か、遠坂邸内でできることしかやらない予定である。

「さて、始める前に決めておきたい事がある」

「なんですか？」

「目標だ。何を成すにしても、コレがあったほうが身が入るだろうからな」

「ん…」

凧は顎に手を当てて目標を考え始める。

「別に今すぐ決めなくてもいいぞ。おいおい決めていくのでもいいからな」

「……その、綺礼を殴れるようになる。ってのでもいいですか？」

綺礼を目標にするのは悪くない。綺礼は代行者として十分な実力

を持つているので、非常に高い目標になる。人間のままで、己の肉体だけを武器にした肉弾戦で勝てる人間は少ない方であろう。

しかし、凧はそこまで解って言っている訳ではない。妥当（打倒）な目標にできるのが綺礼しか思い付かないからだ。

「……何を目標にするかは個人の自由だ。しかし、代行者を目標にするのはかなり厳しい訓練を望んでいると取っていいのか？」

「「どんな時でも余裕を持って優雅たれ」の家訓を実践できるようになる為なら、どんな訓練でも耐えきって見せます」

「まあ、まずはどれ程動けるか見てみるから、コレをつける」

アローニーロが持ってきていた荷物の中から目的の物を見つけると、凧に投げて渡す。

「安全の為のヘッドギアとグローブに変わる正義装甲ジャスティスハチマキだ」

（酷いネーミングセンス……）

白いはんぺんにチューブをくつつけたのようなソレを凧は受け取ったが、着けられないのに気付く。チューブを結んで落ちないようにしようとしても、チューブが短くて結べない。

「あの、これどうやって着けるんですか？」

チューブを軽く引つ張ってみても伸びないのを確認した後で、困った凧は素直に聞いてみた。

「受けてみよ 正義の力！正義装甲ジャスティスハチマキ 装着
！。っと言いながら額に当てれば自動的に装着される」

「ナツ……！」

「なんでそんな恥ずかしい台詞を言わなければならないの！」凜は恥ずかしさからそう怒鳴りつけようとしたが、アローニーロはふざけている雰囲気ではない。

（きつと試されているのよ。私が家訓を実践できているかを）

自分に言い聞かせて、凜は深呼吸してからジャスティスハチマキを額に当てて、上ずった声で言い放つ。

「受けてみよ 正義の力！正義装甲ジャスティスハチマキ 装着
！」

……。何も起きなかった。恥ずかしい台詞を言ったのに、ジャスティスハチマキはうんともすんとも言わない。

「受けてみよ 正義の力！正義装甲ジャスティスハチマキ 装着
！」

発音に問題があったかもしれないと思った凜は、再び恥ずかしい台詞を言う。結果は同じであった。恐る恐る凜はアローニーロを見る。

「プツ……ククク、本気で言ったよ。しかも、2度」

アローニーロは笑っていた。口を手で隠して、凜を直視しないよ

うに目を逸らしている。それに、肩を見ればプルプルと震えている。

「しっ…死ねええー！！！！」

羞恥心で顔を真っ赤にした凧は、掴んでいたジャスティス八チマキをおもいつきりアローロニーロの顔面目掛けて投げつける。そのフォームは、野球経験者ではないかと疑うほどにしっかりとしたフォームであった。

ベチンッ！

割と痛そうな音をたてて、ジャスティス八チマキはアローロニーロの手に収まる。凧が怒ってジャスティス八チマキを投げるのはアローロニーロは予想していた。それでも、「受けてみよ 正義の力！正義装甲ジャスティス八チマキ 装着！」の件はやらないといけなと思ったのだ。

「そう怒るな」

「フン！」

笑いながらアローロニーロはジャスティス八チマキを再び凧に渡す。凧は受け取ったが、ジト目で睨んでいる。相当ご立腹なのか、腕を組んでそっぽを向く始末であった。

「（やっぱり子供だな）……宝石やるから機嫌を治してくれ」

怒るのを予想していたのだから、その後のことまでアローロニーロは準備をしていた。普通の少女なら、ここは甘いお菓子やかわいぬいぐるみを出すべきなのだろうが、アローロニーロは宝石を出す。

「物では釣られません……」

口ではそう言っているが、目はしっかりと宝石を捉えている。

「それじゃあ、そろそろ真面目に訓練に移るか」

「あ……」

欲しがっていたは百も承知。だがアローニー口は簡単に宝石をくれてやるつもりは無かった。何でも簡単に与えると我が儘になり易いと解っているし、コレは苦い経験になるだろう。

「ジャステイスハチマキの着け方は、上から2番目のチューブの端を同時に押すだ。外す時は一番下のチューブの端を押すだ」

凜はジャステイスハチマキを着けながらも、ジト目でアローニー口を睨むが、アローニー口は悠然と受け流している。

「着けたな。素の状態での程度動けるかを見るから、魔術での強化と道具は無しで全力で俺に殴り掛かれ。反撃はしないから、思う存分な……」

八つ当たりも同然だが、凜は早くも巡って来た殴る機会なので思いつきり殴ろうとする。が、殴るなんて経験自体が乏しい凜がしっかりとした体捌きや、足運びができるはずもないのでどのパンチも弱い上に遅い。そんなパンチがアローニー口に中るはずもなく、凜が諦めるまでアローニー口は紙一重で避け続けた。

(当然と言えば当然だが、変な癖とかは無いようだな)

「なんで、あたんの……」

肩で息をしている凛と違って、アールロー口はなおも余裕がある。義骸にも限界はあるが、トラックに撥ねられるといった人間では耐えられないような事をしなければかなり持つ。

「方針は体力作りと、自分の体をイメージ通りに動かせるようにするだな。一応聞いておくが、何か注文はあるか？」

「あ…ありません」

「それならよし。じゃあ、また今度な。ああ、そうだ。正義装甲ジヤステイスハチマキはくれてやるから、自分で管理しろよ」

訓練開始（後書き）

正義装甲ジャスティスハチマキ 修行と言ったらコレを出さないといけない気がした……出した理由なんてそんなもんです。ちなみに、洗濯機で洗えます（笑）

僅かな幸せを（前書き）

感想　P A L U S様、コクイ様、麻布十番様、煌　焰様、竜人丸様
ありがとうございます！

僅かな幸せを

間桐雁夜は忙しい。なぜそうなのかと言うならば、新しい職場は仕事がどういふ訳か仕事が増えるようにあり、個人に回される仕事も多くなっているからである。雁夜がその職場に入れたのは、猫の手も借りたくなるそんな忙しさからくるものであった。

会社は羽振りが良くなっているからか、入社したての雁夜にほんの僅かな差であるが後輩ができるほどであった。ちなみに、アーロ二一口がその会社の筆頭株主である（無論、綺礼名義である）。黄金律は今日も猛威を揮っています。

「そろそろ、かな……」

雁夜はずっと前から考えていた事を実行するのを決意した。時臣の左足を駄目にした負い目があつて、葵に会うのを先延ばしにしていた。それは無意識であつて、建前は時臣の死から葵が気持ちを整理できるようにとの配慮である。まあ、1年と半年以上も姿を見せない雁夜を葵は死んだのではないかと疑っていたりするのだが……。

「いきなりおし掛けるのは失礼だよな」

雁夜は遠坂邸に電話をかけるのだった。

「今日はここまでだな」

「つ、疲れたあ……」

体力作りの一環で走り込みをやらされていた凧が地べたに倒れ込もうとするが、それより先にアローニーロが凧の服の襟部分を掴んでそれを阻止する。

「ちよつとっ！服がのびちやう！」

「疲れたからって、ここで倒れるなど言っただははずだ。服が汚れる」

「む〜」

不満たらたらの凧を鼻で笑い。アローニーロはしゃがんで凧に背中を向ける。

「ほれ、早くしろ」

アローニーロを半目で見つめていた凧だったが、いつまでのそうしていても余計に疲れるだけなので、いつものようにその背中に乗る。

アローニーロはギリギリまでの訓練をさせるので、終わった後の凧は非常に疲れているので、休憩もかねてアローニーロがお風呂場まで凧を運ぶ事になっている。

「海燕さん、ジュースは？」

「ジュースじゃなくて、スポーツドリンクでだ」

予め用意していたストロー付きペットボトルを背中中の凧に渡して、

ゆつくりと遠坂邸に入る。

勝手知ったる人の家。聖杯戦争中に中を探索したのであって、アーロニーロは遠坂邸の大部分を知っている。工房などは流石に把握しきれてはいないが、位置自体は大まかに解っている。それが特に意味があつた事は無いが……。

「あの、志波さん。すいませんが、もうすぐ友人が来ますので、もてなす準備の手伝いを頼んでもよろしいですか？」

「手伝いが終わったら、邪魔しないように裏口から出ていった方がいいか？」

葵の頼みを断る理由の無いアーロニーロはとりあえずは受ける。

「いえ、お気使い無く。できれば、もう少し凜と一緒に居てくれなんでしょうか。魔術の事とかを気兼ね無く話せる相手があなたしかいないので……」

葵は魔術師の妻であつたが、それだけであつた。その血筋は配偶者の能力を最大限引き継いだ子を成すという特異体質を持っている。凜と桜が魔術師として優秀なのは、その体質の御蔭である。尤も、その体質のせいで子を養子に出さなくてはいけなくなったのだから、母親としては嬉しくない体質なのかもしれない。

「いいだろう」

なんとなくであつたが、その友人に心当たりのあるアーロニーロはそれも了承した。

(しかし、思ったより遅かつたな)

「久しぶりね、雁夜くん」

「……こちらこそ、葵さん」

遠目で何度か葵の姿を見ていた雁夜であったが、間近で見ると遠目で見るとの差に驚愕していた。実年齢より若く見えていたのに、今の姿は老けていると感じさせる。原因が何かは嫌でも解った。時臣の死だ。桜の時とは違って、永遠の決別となったのが大きいだろう。

「……今日は、ちょっと葵さんに頼みたい事があって来たんです」

「珍しいわね。雁夜くんが私に頼み事なんて」

雁夜と葵は幼馴染であったが、互いに頼み事なんてまずしなかった。互いに相手に迷惑になるだろうと遠慮していたのと、気兼ねなく頼み事をする程には親しくなかったからだ。

「本当なら、もっと早くに来るべきだったんですけど。お互いに落ち着いてからの方が良いかと思って……」

そこまで言って、雁夜は開ける。それは迷いからだった。きっと葵はこの頼みを受け入れるだろう。が、魔術師としての道を歩んでいる凜はどうするかが未知数であった。

拒みはしないだろうか？もう関係させない方がいいのではないのだろうか？

しかし、幸せだった頃に少しでも近付けるのなら……3人の幸せを願うのなら、試さずにはいられない。

「仕事で帰りが遅くなりそうになる日だけでも、桜を預かってくれませんか？」

「……え？雁夜くん……今なんて……」

言われた事が信じられない葵は、目を瞬かせて聞き返す。雁夜から桜の事を聞けるのは期待していたが、雁夜がそんな事を言うとは思っていなかった。

「その……仕事で帰りが遅くなりそうになる日だけでも、桜を預かってくれませんか。って言いました。」

桜は、今は僕の娘となっています」

「どう……いう事なの……？雁夜くん」

「詳しい事は、盟約に触れるかもしれないので話せません」

詳しい事を話す訳にはいかない雁夜が用意した免罪符いんわいけは、遠坂と間桐の間にある盟約であった。秘術などが外に漏れ出ないようにする為に、魔術師は総じて秘密主義であるので、盟約なども当人や信頼のおける者でなければまず内容を知ることにはできない。雁夜も盟約の詳しい内容を知らないが、葵も知らない。騙すように心苦しい雁夜であったが、時臣の死の一因を担っているかもしれないのでキヤスターとの取引などを考えると話せない。

「私はいいけど……凜に聞いてくるわね」

魔術師の家では当主の意見が最も力を持つ。それが、魔術師の家では当然だ。現在の遠坂家当主は遠坂凜である。魔術師の家系の余所の子供を、一時的でも預かるのは当主が決めるべき事柄になる。元は遠坂の子というのは、葵が勝手に了承する理由にはなりえない。

「報われないな……」

「ウオツ!?!」

葵が凜に意見を聞く為に部屋を出ていったのだが、そのタイミングに合わせてアローロニーロが反対側のドアから部屋に侵入していた。雁夜がそれに気付けるはずもなく、いきなり後ろから声が聞こえたので椅子から跳び上がった。驚いたのだ。

(誰?)

「初めましてなるな。志波海燕だ」

「あ、ご丁寧どうも。間桐雁夜です」

音を立てずに背後に立っていたのには驚いたが、丁寧に挨拶してきたので雁夜はとりあえずは挨拶しかえした。当然のように右手を差し出してきたので、しっかりと握手するのだった。

(ふむ、魔力の循環はいたって正常。僅かだが、前より流れ方も良くなっている。しっかりと特訓している証拠だな)

別にアールローは雁夜の顔を見る為だけに出てきたのではない。雁夜がしっかりと特訓しているかを魔力を通じて知ろうとして出てきたのだ。雁夜と桜の義骸は、魔力が外に漏れ出ないように出来ている魔力遮断型なので、アールローでも直接触れなければ体内の魔力は感知できない。そんな理由で、アールローは丁度良いだろうと思つて握手するべく出てきたのだ。

「では」

用の済んだアールローは、そそくさと部屋から出ていく。

「なん、だつたんだろう？」

よく解らない行動をアールローがしたので、雁夜の中では志波海燕は奇人変人のカテゴリーに入れられることとなった。

「 ? どうしたの、雁夜くん」

「志波つて人が来たと思つたら、すぐに戻つていったから……」

「志波さんが? ……気にする必要はないと思つわ」

「いまいち釈然としない雁夜であつたが、そんなことより重要な事がある。」

「預かる話だけど、中学3年までで一部の部屋の入室禁止でよければ問題無いって」

「預かつてくれるのだけでもありがたいので、それでいいです」

「そう、よかったは。そういえば、雁夜くんは前とは違った仕事をしているの?」

「まあ、色々とありまして」

「よかったら、聞かしてくれない?」

「いいですよ」

他愛もない雑談だったが、雁夜には幸せを感じられた時間であった。

僅かな幸せを（後書き）

おまけ

黄金律の恩恵を受けている人物が教会にも1人いた。

「増えたな……」

綺礼はアーロニーロから返してもらった預金通帳を見て、そう呟いた。そこまで浪費なんてしない綺礼は、元々貯金はまとまった金額があった。その金額が、桁で増えていた。

増えた分は、アーロニーロが名義などを貸してもらっている代金として振り込まれた金である。

（あつて困る訳ではないが……額が額だな）

高いワインでも買うことしか使い道の思い付かない綺礼は、他の使い道がないか模索を始めるのであった。

受け継がれるモノ（前書き）

感想 煌 焰様、PALUS様、セルド様、環境様
ありがとうございます！

受け継がれるモノ

天才とは、常人より遙かに優秀なモノを持つ人物に贈られる認識である。

間桐家に生を受けた間桐慎二は、天才と呼べる才覚を持っていた。しかし、魔術師の家系で評価される大前提となる魔術回路を慎二は備えて生まれなかった。一般人としてなら、それでも天才と評されたであろう。だが、魔術師の家系であるのだから、魔術回路すら備えていない慎二が家の中で天才と評される事は無かった。

それでも、慎二は魔術師の家に生まれたことを誇りに思い、自分を特別とした。間桐の蔵書を勝手に見て、魔術の知識を吸収していた。知識で魔術回路が慎二に備わる筈もなく、正に無駄であった。そんな慎二に、転機が訪れた。アーロニーロが作った義骸に、臓硯が慎二の魂を移したのだ。努力している慎二へのご褒美だとか、孫がかわいくて臓硯がそんな事した訳ではない。

慎二の魂を義骸に移したのは、実験であった。義骸に不備がないか、アーロニーロがおかしな仕掛けを施していないか、使いこなすのにどれだけ時間を要するかを調べていた。

もしかしたら、自分では判らないように仕掛けがあるかもしれないと想定し、優秀な人形師に義骸を調べるように依頼もしていた。それらを知らない慎二は、純粹に喜んだ。いつの間にか居なくなっていた妹だった桜を忘れる位に。

自分の両親が、まるでおぞましいモノを見るように慎二を見ているのを気付かない位に。

解る筈がなからう。家を実質支配しているのが臓硯であり、義骸を上手く使いこなしている慎二の価値がその両親より高まり、慎二以外が不要になったなどは。

臓硯がどんなモノなのかを知っていた慎二の父親である鶴野は逃げようとした。遅かれ早かれ、蟲の餌にされるのは鶴野は解つてい

たし、慎二という強力な駒が手に入った以上は自分には価値は無いとして臓硯が追って来ない可能性を賭けたのだ。

気取られないように、静かに家から出て行けばいい。

「カツカツカツ、どこに行こうとしているのだ？ 鶴野よ……」

まるで光の一切届かない闇から流れ込んできたような、底冷えさせる冷気が鶴野を包む。否、それは冷気ではない。狩人が、絶対に逃げられない獲物をどう捌いて楽しもうとしている時に溢れる感情だ。

狩人が臓硯。哀れな獲物は鶴野。覆しようのない力関係には絶望しかない。

「十分役に立つただろうツ！！？もう解放してくれ！！！」

「確かに、才能が無いなりに役にはたったのう」

「だったらー！」

ありもしない希望に、鶴野はしがみ付こうとする。しかし、いくら願おうが、いくらしがみ付こうが、ありもしないには変わらない。

「最後まで、役にたってもらおうかのう」

無理矢理顔を引き伸ばして作られたのかのような、邪悪とすら感じさせる笑みを浮かべて臓硯は最終宣告を言う。

「案ずるでない鶴野や。慎二の元の体でつい最近身体を作り変えたばかりで、また変えるのは早くとも数カ月先になる。じゃが、キャ

スターの治療の御蔭でもう少し先になりそうなんだ。それまで、蟲蔵で大人しくしておるんじゃぞ、鶴野」

「や…やめろ。くるなア!!」

物影より湧き出てくる蟲から鶴野は逃げようと背を向けて逃げようとするが、翅刃虫にあっさりと追いつかれて足の腱を噛み切られる。

「や…やめてくれえ…せめて、楽に……」

「殺すものか」

嗤いながら、臍硯は鶴野が蟲に引き摺られて蟲蔵へと運ばれるのを見続けていた。

「せいぜい、苦しむがいい」

第四次聖杯戦争から5年。衛宮切嗣は静かに暮らしていた。

一時的な拠点として購入した屋敷をしっかりと手直しして、そこで第四次聖杯戦争の最後に助けた少年　　名前は士郎　　と暮らしている。

助けたのは切嗣だったが、救われたのは切嗣の方であった。もしも、火災のなかで士郎を見つけられなかったら、切嗣は死んでいただろう。だが、切嗣は生き残っていた士郎を奇跡的を見つけた。

火災によって全てを失った切嗣だったが、新たに得たものの筆頭が士郎であった。そこから、身寄りの無くした士郎を養子として引き取り、家族として過ごしていた。

己の願望を果たした後で過ごすと思っていた穏やかな日常を、思い描いた人物とまったく違う士郎と過ごすのは可笑しなモノであった。

欲したモノであったが、酷くチグハグで歪んでいた。少しでも望んだ形にしようと、イリヤスフィールをアインツベルンから解放しようと切嗣は何度も家を空けて、アインツベルンの所領へと足を運んだ。

その全ては、徒勞に終わった。森の結界が頑として開かれず、切嗣はイリヤスフィールがいる城に入れもしなかった。全盛期である魔術師殺しだったなら、森の結界を破壊して城への道を切り開いて侵入できたかもしれないが、聖杯の中身に呪われて半病人同然になった切嗣には不可能であった。できた事は、執拗に訪れる事と、吹雪の中を凍死寸前までさ迷い歩くだけだった。

そんな無理が、死期を早めたのだろう。切嗣は、自分の終わりがすぐそこまで迫っているのを感じていた。

「……子供の頃、僕は正義の味方に憧れていた」

縁側で月を眺めていた切嗣がふと、そう溢した。

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ」

一緒に月を眺めていた士郎は、不機嫌そうに言う。切嗣を偉大な人物だと思い込んでいた士郎からすれば、切嗣の自らを否定するような言葉が嫌だったのだ。

「うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、オトナになると名乗るのが難しくなるんだ。そんなコト、もっと早くに気が付けば良かった」

『正義の味方』になろうとして、得たモノもあつた。しかし、得たモノは全て失われた。残ったモノと言えば、罪悪感と無価値にしてしまった今までの犠牲だけだった。

償うなんて到底できる筈も無い。それでも、最後に魔術師殺しとしての仕事をした。再び聖杯戦争の戦端が開かれぬように、地脈に爆薬の類で細工をし、大聖杯を封印される手筈を整えた。早ければ30年後に、ソレが発動する。遅いかもしれないが、60年周期の聖杯戦争ではお釣りがくる。

「そうだね。本当に、しょうがない」

苦し紛れの説明について考え込んでいた様子の子士郎であったが、彼なりに答えを見つけた。

「うん、しょうがないから俺が代わりになつてやるよ」

切嗣を見て、『正義の味方』に憧れていた少年は、そんな誓いを立てた。

受け継がれるモノ（後書き）

おまけ

「どうした、食べないのか？アールローロ」

「綺礼、俺はコレを食べ物と思えない。てめえだけで喰っている」

2人の前にあるのは、麻婆豆腐である。……綺礼好みの、と付け加えておこう。

「友人なのだから、こうして一緒に食事でもして親交を深めようと思ったのだが？」

笑っていた。綺礼は非常に良い笑顔で笑っていた。アールローロが目の前の麻婆の辛さを知っており、絶対に食べようとしなのが解っているからだ。

「食事だったら、普通のモノを作ってやるから今度にしよう」

同時に、出されたモノを食べないなんてしないのも綺礼は解っている。アールローロがどうしようか苦悩している姿を綺礼は楽しんでいるのだ。

そして、結局どうするかも解っている。

後日、マスクをして凜に訓練をするアールローロの姿があった。

桜さん(前書き)

感想 教授様、PALUS様、煌 焰様、gon様、セルド様
ありがとうございます。

ぶっちゃんけると今回は無くてもいい話

桜さん

「それじゃあ、行ってきます。お父さん」

「ああ、いつてらっしゃい。桜」

私はそう言っ、家から出ます。今日から、穂群原学園の生徒です。高校1年生になったから、お父さんの帰りが遅い日に遠坂家に行けなくなっただけ、姉さんはそれ以外は何も変わらないと言ってくれました。嬉しいのと同時に……ちょっと、心苦しかったです。隠し事をしているのに……

「よお、桜」

「兄さん」

青っぽい色のなぜかウェーブのかかった髪の毛の間桐慎二がいました。戸籍上はいとこになりますが、血は繋がっていません。顔は整っていますし、ルックスも良い。女子に結構人気がある人なんです。お父さんによると間桐の血筋である時点で大抵碌でもないそうです。

自分と親と甥を貶めています。事実、お父さんは酔っ払った時に碌でもない発言をした事があります。

「葵さん……」なんて言っ、私に抱きついてきた時は、本気で殴りたくなりました。そこまで想っているなら、結婚すればいいのに……それと、兄さんと呼んでいるのはお父さんの入れ知恵です。なんでも告白を断る際に、「兄として見ているので、恋愛対象に見れない」という言い訳を使えるようする為だとか……

ホントに、考えから普通思いつかないって意味で碌でもない感じ

がします。

「おいおい、いくらなんでも僕の顔を見惚れるなよ」

まじまじと見ていましたけど、それだけはありません。

お父さんの『本当に在り得る間桐の可能性』の話だけでも、間桐はかなり印象が悪いんですが、兄さんのナルシスト的な性格も印象が悪いです。自分に都合の良いように思い込むのが無ければ、兄としてはとても良い人なのに……

「見惚れていません」

「そう言うなって」

にやにやと笑っています。顔は整っているのですが、それなりに絵になります。それでも、私は微塵も魅力を感じません。裏の顔があると思うと、どうにも笑顔の裏でどんなことを考えているかが判らないので、距離を感じます。

それでも、表の顔の時は割と頼りになる兄です。姉さんと料理勝負で負け込んでいた時に、料理の上手い人を紹介してくれた時は感謝しました。その後で知ったのですが、姉さんも母さん以外の人に料理を教わっていました。なので、ズルとかではありません。

「兄さん、どこまで付いて来るんですか？」

「え、いや……」

他愛も無い雑談をしながら歩き、校門を過ぎ、靴箱もすぎなのになぜか、私の教室の前まで兄さんが付いて来ています。たぶん、私のクラスを知る為なのでしょう。クラスとかそういうのを一切教え

ていませんから。

ちなみに兄さんは、知り合いの間ではシスコンで通っています。実際はいとこなので間違いになるんですが、私が兄さんと呼ぶのと苗字が同じ間桐だからでしょう。まあ、行動も私にかなりかまっていますから当然なのですが……

「そつだ。部活とかはもう決めたのか？よかつたら、弓道部ウチに来いよ」

話を逸らさないで下さい。口に出して言いませんが、察して下さい。

「他に良いのがなかったら、考えておきます」

運動は得意な方ですが、陸上競技だと辛いモノもあるので肩とか胸とか 弓道は良い選択かもしれません。集中力を磨くにもいいかもしれませんね。

しかし……兄さんと同じ部活だと、あらぬ疑いを持たれるかもしれませんね。特に心に決めた人がいる訳ではありませんが、兄さんによるガードが堅いと思わぬ障害になるかもしれません。

「ふう……」

入学初日は入学式だけなので、午後は丸々時間が開きます。なにをするか迷いますね。このまま真っ直ぐに家に帰ってもお父さんは

居ないので、友達と遊びに行くのも良いかもしれませんが、夜にやる鍛錬を昼にやって今夜は早めに寝るのも良いですね。

「桜、これから暇？」

「ね…遠坂先輩」

いきなり後ろから呼び止められたので、危うく姉さんと外で呼んでしまうところでした。私の境遇は微妙なモノなので、あまり他人には知られたくありません。なので、外では姉さんを苗字に先輩をつけて呼びます。

「暇と言えば暇になりますが、良いんですか？今日は海燕さんとの約束の日でしょう」

志波海燕。遠坂邸によく出入りしているよく解らない人。たしか、今日は訓練の日だったはずです。

「今朝、向こうから今日は無しって連絡があつたのよ」

だったら、サンドバックでも殴っていけばいいじゃないですか。私知っているんですよ？家の裏にサンドバックがあつて、ストレス発散と訓練でいつも殴っているのを……

思わず、そう口走ってしまいそうになりました。どうも、最近切り替えが巧くできませんね……

虚数魔法を使う際に負の部分を曝け出さないといけないせいか、魔法を使う時とそうでない時で性格が違ってるかのようになってます。鍛錬は、影だけにしたい方がいいかもしれませんね。それか、もつとハッキリと区別化するべきですね。自分じゃない自分を生み出す様で、あまりしたくないんですが……

「用事が出来ましたので、遊びに行くのは今回は遠慮します」

どっちにしても、家の地下室でないとできません。だから、今回は断ります。私が魔術使いなのは、お父さんと私以外には秘密。姉さんにも教えられない秘密です。

桜さん（後書き）

次から第五次聖杯戦争に入ろうかと思えます。
あと、桜視点だったのは彼女出番が無さそうだからという……

回り始める歯車（前書き）

感想 PALUS様、Shinchan様、YF-19様、教授様、
mimi様、ココ様、eXs様
ありがとうございます！

回り始める歯車

本来なら、あと50年先の未来に起きる筈であった戦争が、参加者に令呪の分配という形で知らされた。異例の速さで起こる聖杯戦争を喜びはしても、嘆く者は誰一人として居なかった。

7人の魔術師と、7体の使い魔サーヴァントの尤も参加者の少ない戦争が始まるうとしていた。

「 告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

紡ぐは英霊サーヴァントを使い魔として現界させる呪文。自ら聖杯戦争に参加しようとする魔術師ならば、まず紡ぐべき詠唱。

「 誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。」

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

「！」

呪文を完璧に詠唱し、魔法陣より最も相性の良いサーヴァントが出現する。……はずだった。

「あれ？」

遠坂凜は首を傾げた。詠唱、魔法陣になんら問題は無かった。呪いとも言える遠坂家の人間に遺伝する『うっかり』で失敗しないように何度も確認した。問題はなに一つ無いので、失敗する筈がないのだ。

「パスは……しっかりと繋がっているわね」

凜は意識を集中して魔力供給をするのに使うパスを辿る。まだ見ぬ自身のサーヴァントが現界しているのを確認すると共に、その居場所を探る。どれだけ離れていても、繋がりが断ち切れなければ細かい位置は把握できなくても、大まかな位置は互いに把握できるようになってきているのだ。

「上？」

感じた繋がりは、ほぼ魔法陣の真上の上空だった。

「まさか……」

どういう訳か、違う位置に召喚してしまった。その事実気付いた凜は地下室を出ようとしますが、それより先に爆発音じみた音が響く。

（屋根の損壊、なんて説明しよう……）

サーヴァントの心配などせずに、凜は今は禅城に避難している母親になんて説明するかを考えていた。別に薄情なわけではない。サーヴァントであるなら、屋根にぶつかって死ぬなんてまずありえない。神秘の宿らないモノで、サーヴァントに傷を付けるのは不可能だからだ。

地下室を出て、1階を通り過ぎて2階のサーヴァントが居る筈の部屋の前まで来た。

すぐさま扉を開けようとしたが、扉か枠が歪んだようで開かない。

「フツ…」

開かない扉に意味は無い。扉が開かないより、開きっぱなしのままの方が良い。何より、自分のサーヴァントへの最初の命令が霊体化して扉をすり抜けるなんて馬鹿馬鹿しい。

扉に叩きこむのは、単純な打撃。技わざではなく業わざ。見栄えは良くなく、地味でただ殴っているのと見た目は変わらない。が、打ち出される拳は強烈と評する相応しい破壊力を叩き出す。

「一骨！」
「いっつ」

動かない的に拳を叩き込むのは、目を瞑ってでも100%できる。イメージ通りに体を動かせるようにずっと訓練させられ続けたのだ。一撃で扉と蝶番を變形させて、意味のない粗大ゴミに変える。

(やば、つい技名を言っちゃた)

後悔しても遅かった。部屋の中に居た人物はしつかりと一部始終を見聞きしており、啞然としていた。

「……なるほど。どうやら私は武闘派の魔術師に呼ばれたわけか」

それで乱暴な召喚だったのか。そう呟いているサーヴァントは落下の衝撃で散らかった部屋でしみじみとしていた。

赤い外套、褐色の肌、くすんだ白髪。特徴をあげるとすればその三つがまず目につくサーヴァント。ソレが、凜の召喚したサーヴァ

ントだ。なぜか左手を抑えている。

「で、あんたが私のサーヴァント？」

「パスは繋がっている。私は君が召喚した。君のサーヴァントでなければ、私はいったい誰のサーヴァントなんだね？」

「私が聞きたいのはそんなことじゃない。アンタが私に従うかって聞きたいの」

「ほお……」

サーヴァントは凜を見る目を細めた。サーヴァントは強力だが、魔術師にとっては最高位の使い魔程度の認識になるはずだ。聖杯戦争に参加する為の道具。参加者の中には決してサーヴァントの、英霊の人格を認めないような者までいるのだ。召喚して従うかを聞くなんて普通ならしない。服従が基本だからだ。

「なかなか良い人間に引いてもらえたようだ。良いだろう。アーチャーのサーヴァントは、君に従おう。存分に使ってくれ。尤も、私の理念や意志に反する行動は、その令呪を使わせる事になるだろうがね」

アーチャーは凜に対して礼の姿勢をとる。

「わかったわ。アーチャー、貴方は私の剣となり、盾になり戦いなさい。………やっぱり、セイバーじゃないわよね。ステータスにAが無いし……」

セイバーを召喚し、セイバーがしっかりと自分に忠誠を誓ったら

言おうと思っていた言葉をアーチャーに凜は言った。その後、つい本音をボソリと言ってしまった。

「む……。最良と謳われるセイバーのクラスを欲するのは解るが、優秀な君が召喚したサーヴァントである私もまた優秀だ」

「（……ステータスがB以下でよく言えるわね。まっ、弓兵アーチャーならステータスが低くても、相手を近付けないようにしてやればキャスタ以外には独壇場にできるわ）

その自信、よほど高名な英雄だったのね。今さらだけど、名前を交換しましょうか。私は遠坂凜」

「凜？　ああ、その響きは君に実に似合っている。

……言いくいのだが、乱暴な召喚のせい記憶の混乱が起きている。今の状態では真名を教えられない」

「ハア！？」

自分の真名が判らない。それは致命的な欠点なる。真名が判らなければ、どんな宝具を持つても判らない。敵ならいざしらず、味方がそうでは困る。真名が解つていれば伝承での弱点を無くせなくても、改善させることが普通ならできるが、判らないのではどうしようもない。

もしかしたら相手が真名を当てて、弱点をついてくるかもしれない。それに、サーヴァントの最大の武器である宝具の使用にも影響が出るに違いない。

「……まあいいわ。それは時間が解決してくれるわ」

「……すまない」

なんとも居た堪れない空気になり、凜の目に柱時計が入った。さつき言った「時間」とその柱時計で、ついさっきまですっぽりと抜けた記憶のピースがカチリと組み合う。

「ああー！ー！ー！！！！！！」

「っ！？なんだね？」

アーチャーから見たら突然マスターが叫び出したのだ。何が起きたと思つて凜を見てみれば、柱時計を指差して口をパクパクと開け閉めしている。

柱時計、1時間早かったから時間合わせしていたからな

ほんの数日前に、1時間早かった柱時計は正しい時間を刻んでいた。しかし、凜はそんな事を忘れて柱時計の時間が早いと思つて召喚の儀式を1時間遅くやってしまったのだ。

「今度会ったら、海燕さんを殴つてやるっ」

拳を握り締め、凜はそう言ったとか……………

「ハックション！」

碌に行きもしない冬木教会で、アーロニー口は盛大にくしゃみを

した。

「……サーヴァントでも風邪をひくのか？」

サーヴァントが飲み食い以外で人間らしい行動を見たことのない綺礼は、そんなことをアローニークに聞いた。

「サーヴァントが風邪をひくわけないだろ。まあ、義骸は風邪の状態になるだろうがな。そんな事より、凜は召喚したか？」

サーヴァントは幽霊みたいなモノなのだ。実体化している際に何かしらの刺激を受ければ、人間とほとんど変わらない反応はしても風邪になったりするような肉体の変化はあり得ない。

尤も、アローニークは普段はサーヴァントであることを隠す為に義骸を着ている。義骸は人間の体に近い人形のようなモノであって、身体がある事によって起きる不都合もある程度は起きる。

「ああ、召喚したな。アーチャーを」

監督役が持つ特別な道具。ソレはサーヴァントが召喚されたの感知し、召喚されたクラスを知れる。第5次聖杯戦争の監督役になった綺礼は、その道具を管理していてソレで凜がどのクラスを召喚したかを当てたのだ。

「アーチャーの方が相性の良い奴がいたのか？」

「それが……」

「「うっかりだな」」

遠坂家の遺伝する呪いが、その力を発揮したのを2人は確信していた。予定の時間の1時間遅れで召喚されたのそうだが、英霊の召喚なんてここ一番つてところで『うっかり』が発動しないわけがないと思っていた。それでも、アローニークは凜の『うっかり』が起きる可能性を可能な限り排除した。柱時計も、その一環であった。逆効果だったのは、アローニークはまだ知らない。

「しかし、凜がアーチャーを引いたか。ギルガメッシュじゃないだろうな？」

「導師でも触媒を使って召喚したのだ。娘の凜だからといって、触媒無しでは召喚はまずできまい。それに、お前がいるからな」

「まあ、そうだろうな。世界は同一の存在を嫌う。俺が喰ったサーヴァントは、触媒を使わなければまず召喚不可能だろう」

完璧に同一の存在にはならないだろうが、イスカンドル、ギルガメッシュ、ランスロットを取り込んだアローニークは、その3体の召喚の軽いストッパーとなっている。それはアローニークの予想でしかないが、世界の法則に照らし合わせれば簡単に予想ができた。

尤も、完璧に同一の存在ではないので、触媒さえあれば召喚は可能である。

回り始める歯車（後書き）

ライダー（メデューサ）「後書き リストラ同盟！」

注意 で判ると思いますが、ギャグみたいなモノです。タイガー道場やフェイトノタイガーころしあむを見る時のような目で見てください。キャラ崩壊するんで……

ライダー「作者の思い付き企画の始まりです。ここで今回の話の裏話をやむにやまれず本編出すのを諦めた主要キャラクター（通称リストラキャラ）で話をしようというモノです。尤も、ネタバレにならないように今回は私1人だけですが」

ライダー「……まずは、私がリストラの訳を話しましょうか。簡単に言うと、召喚する適性を持った人物が居なかったからです。私は本編でも少ない触媒無しの相性召喚されたサーヴァントです。ですから、桜が救われた時点で私が第5次で召喚される可能性は絶望的になりました。……いいです。桜が救われるなら……まあ、慎^{ワカメ}二も多少適性はあったのですが、枠が埋まっていたとの理由があつたりもするんですよ」

ライダー「……綺麗なワカメ。間違えました。綺麗なワカメと感想でありましたが、私はワカメの時点で嫌です。さて、裏話にいきましようか。今回は1つだけですな。

アーチャーが左手を抑えていた理由です。別にフラグだとか、伏線ではないそうです。

運悪く、アーチャーは凜の父親が魔術で直した部分に左手をぶつただけですから。

裏話をしつていれば、流石は幸運：Eって感じられるように入れた

そうです。

今回はここまでです。あと、このタイトルを募集します。感想ついでに良いタイトルがあったら書いて下さい。
では、また更新されるまで……」

日常（前書き）

感想 『』の深淵様、煌
焰様、久遠様、
適切な評論家様、ク
レ
イ様

ありがとうございます！

日常

トントントンと、規則的な音が衛宮邸の台所から聞こえる。音の正体は、野菜を切る包丁の音だ。包丁を握っているのは家主である衛宮士郎である。家の住人ではないが、士郎以外に朝食を食べる人物が2人いるが、どちらも調理を手伝おうなんて殊勝な心がけはない。

「士郎、ご飯できた？」

朝食をたかる『冬木の虎』と異名を持つ藤村大河ふじむら たいがが台所と繋がっている居間から士郎に聞く。大河なんて男のような名前であるが、立派な女性である。士郎の幼馴染で、姉貴分で、保護者を自称している25歳の英語教師である。

「後は配膳だけから待っていてくれ」

料理は完成し、あとは食卓に並べるだけである。士郎が料理を運ぼうとする前に、もう1人の人物が居間から移動してくる。

「慎二はそっちの料理を運んでくれ」

「言われなくてもわかる。……いつも思うけど、よく作るよな」

朝食にはちょっと多めの量を見て、間桐慎二は呟く。

「ごはん ごはん 士郎の作ったごはん」

「……まあ、よく食べるからな」

「……だな」

居間から聞こえる楽しそうな声を聞きながら、士郎と慎二は誰が多く食べるかを明言せず配膳をする。慎二も最初は大河と同じように配膳の手伝いすらしなかったが、慎二は大河と同じというのが嫌で配膳を手伝うようになった。自分も手伝いをしなかったら、将来自分もあなるのではないのだろうか？そう慎二はそう思ったのだ。本人は反面教師になっていたことは自覚しておらず、慎二が手伝いをし始めた時は、偉いわね〜と思っただけである。

「……いただきます」「」

食べ始めるのは一緒に。そんなささやかな衛宮家の掟^{ルール}。毎日繰り返して、3人するのが日常化している。

「む、この味噌汁のお豆腐。いつものより良い物ね」

「ああ、今日慎二が持ってきてくれた物だな」

朝食を食べさせてもらっている慎二は、時折良い物を持ってくるのだ。士郎は申し訳ない気がしているが、慎二からすれば土日や祝日を除いた毎朝と昼飯のお弁当のお礼が、勉強を教えるだけでは等価交換として釣り合わないと思っっているのだ。

去年の年末までとりあえず良い食材を持ってきていたのだが、年末だからといってキャビヤなどの高級食材を持ってきた。だが、士郎がそれらをどう調理するか悩んだのだ。普段ならまず使わない食材の数々の良い使い方を知っている筈が無い。

そこに『冬木の虎』が襲来して、恐ろしき『年末の鍋の悪夢事件』を起したのだ。その日を境に、慎二は持つてくる食材を選ぶように

なつた。

「あら、そうなの。いつもありがとうね、慎ちゃん」

「藤村先生、学校では絶対にそう呼ばないでくださいね」

慎ちゃんとは、慎二のことである。まるで弟分がもう1人できたように感じた大河が、親しみを込めてそう呼ぶようになったのだ。ただ呼び捨てするのでは、親しみを感ぜられなかった大河が勝手にちゃん付けにしたのである。公私の区別はしっかりとするので、学校では間桐君と呼ぶ。慎ちゃんなんて慎二が呼ばれているのを知っているのは、慎二、士郎、大河の3人だけである。もしも知れ渡ったら、ふざけて同じようにように呼ぶ不届き者が出るであろう。

「慎ちゃんはいつまで経つても堅いわね。士郎みたいに藤ねえって呼んでもいいのよ」

「丁重にお断りしておきます」

お姉さんは解っているわよ、恥ずかしいんでしょ？そんな言葉を言っていないのに、微笑ましいもの見るかのような大河の視線はそう思わせるには十分であった。

自分の分を食べ終えた虎が、虎視眈眈と他の2人の分を狙っていたが、2人とも対処法は心得ているのでおかずの防衛には成功した。たまくに取られることもあるが、じゃれ合いのようなモノなので雰囲気が悪くなることは無い。慎二が好物を取られない限りは……

「私は先に学校に行っているけど、2人とも朝練に遅れないようにね」

士郎と慎二は弓道部に所属しており、その顧問が大河なのだ。

「毎朝毎朝元気だね」

「そこは藤ねえの良い所だろ？」

「まあ、そうなんだろうけどねえ……（元気があるって、大人の評価としてすこし微妙な気がするんだよな）」

平和でありがちな衛宮邸での日常の一幕であった。

トスン。そんな軽い音を立てて、士郎の放った矢は的の中心に吸い込まれたかのように到達する。

「いや、相変わらず面白いように2人とも中てるね」

話掛けたのは、美綴綾子^{みつづりあやこ}。穂群原学園弓道部の部長で、士郎と慎二の同級生である。ちなみに、副部長は慎二である。始めは慎二を部長にとの意見があったが、慎二は女子受けが良いのだが、男子受けはあまりよくない。綾子は男女どちらにも受けが良いので、実力よりも受けを優先した結果である。尤も、慎二は元々やる気がなかったりするのだが。

「まあ、な」

中って当然。土郎の弓の腕は正に百発百中である。今までど真ん中を外した事は1回しかなく、その時は射る前から外れると解っていた。

「勝負にならないってのは気に入くないけどな」

1勝1敗残りは引き分け。それが土郎と慎二の戦歴であった。

慎二が弓道部に所属しているのは、土郎に弓で勝つ為だったりする。天才肌の彼は、負けるなんてあんまりなかった。彼が憶えている出来事で一番初めに負けたのは、土郎に弓で負け事である。

部活巡りで弓道部に来た際に、試しに射させるので慎二は真中こそ外したものの、的に中てはした。しかし、次の土郎は初めてだったのにと真ん中に中てたのだ。そこから、土郎の弓道部に入るのが慎二、大河、当時の弓道部部长によってあれよあれよという間に決定された。

慎二は対等な条件で勝たねば意味が無いとして、大河はどうせだから目の届く場所に置いておきたくて、部長は土郎の腕を欲しがって結託したのだった。本人の意思はガン無視であったが、例えば慎二や部長が入れようとしなくても、大河によって入れられていただろうが。

「ハイ。みんな朝練は今日はもう終わりよ。HRホームルームに遅れないようにするのよ」

顧問による終了の掛け声で、部員たちは片付けを開始する。

「それじゃ、放課後な」

「まったく、喰い付くなら別の奴に喰い付けよ。獲物は他にもいた
だろうがッ！」

「まあ、俺達も悪いんだけどな」

慎二と士郎は2人で部室の掃除をやらされていた。他の部員は既に帰っており、ほとんど罰ゲーム状態である。

事の顛末は部活時間まで遡る。別にいつもとなんら変わらない部活であった。ただ、巡り合わせが悪かったのか、元氣よく大河が部屋に入ってきたまではよかった。元氣よく入り、足元に濡れた雑巾があること気付かず踏み、微妙に態勢を崩したがなんとか態勢を直そうと左足を踏み出した。

だが、踏み出した先にも雑巾があり、ソレを踏んで完全に態勢を崩した大河は後ろに派手な音を立てながら転んだのだ。後頭部を強打した大河は、目を廻した。派手な音を立てたので、当然部員は急いで駆け寄ったし、彼女の心配をした。

2人を除いて……。そう、その2人は士郎と慎二である。丁度勝負をしていた2人は、集中していて周りの雑音などは意識から追い出していたのだ。割と早く回復した大河は、自分が氣絶おぼこす程の大事なのに、それをまったく意に介さずに勝負を続けていた2人に激怒した。

先に雑巾を放置していた奴を怒れよと2人とも思ったが、言っても火に油を注ぐ結果になると判りきっていたので大した反論はしなかった。その結果が、部室を2人で掃除することとなったのだ。

「……外、もう暗いな」

掃除を終えて、窓から外を見た慎二がそう溢した。

日常（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

ライダー「……。今回も、私1人で進めていこうかと思えます。予定では、今回でもう1人ここに来る予定でしたが、キリが良いとここで切ったらそうだったそうです」

ゴスウツ！！！（壁を殴る音）

ライダー「タイガー道場でも2人が基本だったのに、なんで私は2回も1人でやらなくてはならないのですか……。次こそは、次こそは！独りで喋る現状が打破されると信じておきましようか」

ライダー「さて、今回の裏話は『年末の鍋の悪夢事件』です。

……名前だけでなんとなく解ると思いますが、コレ位しか話のタネがありませんね。そもそも裏話かすら疑問ですね。

まあ、仕事なのでやりませう。ほとんど本編で書かれているので、大河が何をやらかしたかを言いまししょう。

全部を鍋にぶち込みました。鍋だったらまず失敗しないだろうという考えも元に、そんな愚行を行い、3人で仕方が無くそれを食べる事となったのです。

結果は、3人も食中りを引き起こして、正月は布団の中で過ごす破目になったのです。

……なんというか、料理の出来ない男かのような話ですね。慎二だったら、いきなり料理することになったら、やりそうですが……。それでは、また更新されるまで……」

非日常への入り口(前書き)

感想 教授様、PALUS様、インベクティブS様、Lapis
lazuli様、イースト様、クレイ様
ありがとうございます！

非日常への入り口

「ッ！？」

「どうかしたのか？」

辺りは暗くなっており、あまり人気がない道を歩いていた土郎と慎二だったのだが、慎二が突然あらぬ方向を向いたので、土郎は疑問に思つて声を掛けたのだ。

「いや、なんでもないよ（いったい誰が、防音と人払いの結界が張つたんだ？しかも、内側じゃないか！）」

慎二は焦っているのをおくびにも出さず、答える。一般人だと思つている土郎を、自分が参加している戦争に巻き込むつもりがないのと、知れば絶対に首を突っ込むと解っているからだ。知っている者からすれば自殺行為も甚だしいが、自身より他人の身を優先する土郎を知っている慎二には手に取るように解る。

キーン！。擬音で表すなら、そんな金属音が聞こえた。しかも一度や二度ではなく、連続で。

「なんの…音だ？」

まるで金属同士を打ち合わせるような音に土郎は疑問に思う。金属なら鉄パイプで不良同士が殴り合っていると考えられるが、そんな感じではない。絶え間なく金属音を響かせ続ける真似が人間にできるはずがない。なら、機械が出し続ける音か？それも違う。金属加工の工場や鍛冶屋なんてこの付近には無いと知っている。

「士郎、なんかおかしいから早くここから離れよう」

ナニカを警戒して、慎二は声を潜めて提案する。その言葉に頷こうとしたが、一際大きな金属音が響いて、ある物が士郎の足元に突き刺さる。

「剣？」

それは白い剣だった。

「あー、もう。最悪」

凜はアーチャーを伴って夜の冬木を歩いていた。敵捜しでもあるが、アーチャーに少しでも街の地理を憶えさせようとしての行動であった。それでも、戦うつもりはほとんどなかった。

サーヴァントが派手に戦っても大丈夫そうな場所は、令呪が宿った日から捜して幾つも見つけてある。しかし、ほとんどの場所は広くて人があまり近付かないだけの場所で、弓兵が戦うには不向きな場所である。弓兵の本領を發揮させようとするのなら、どこか高いビルの屋上で待ち伏せをして狙撃でもさせればいい。だが、狙撃する敵が1人以外は一切不明なのでまだ実行するには早すぎる。

ただでさえ、始まりの御三家ということを目を付けられているから、手札をまだ曝け出す訳にはいかない。一度狙撃をすれば、警戒されて拠点に引き籠られてしまいかもしれない。その拠点が判

っているなら、狙撃ができるかもしれないが、情報がほとんど無い今は悪手にしかならない。狙撃するのは、せめて全てのマスターの顔が割れてからと凜は決めていた。

「ハッ、どうにも解せねえな。弓兵が剣でここまで食い下がるのもそうだが、その剣をいつたいいくつ持ってやがる」

「さてな、自分の目で確かめるといい」

ただの見回りで終わらせるつもりだった。だから、こんな戦闘も、アーチャーが白兵戦で紅い槍を持った青い装束のランサーと張り合っているのも予定外だ。戦う時は、アーチャーの宝具が使えるようになってからにしようかと決めていたのだ。だが、ランサーと遭遇戦をしている。

驚いたことに、アーチャーは白と黒の陰陽剣を無尽蔵にもつてるかのように幾つも出していた。ランサーは突きで幾つもその剣を突き飛ばしているが、アーチャーは飛ばされたらすぐさま新しい剣を手にする。

互いに様子見なのに、凜の常識からかけ離れている現象を引き起こしている。そもそも、ランサーの突きもアーチャーが新しい剣を出すのを凜の目はハッキリと捉えていない。剣が飛んでいくのと、アーチャーの手にはまだ剣があるのを見て、何が起きているかを仮説を立てたにすぎない。

(まずいわね……)

相手が最速のクラスと謳われるランサーであることもそうだが、こっちは決定打が欠けている。宝具を使えないハンデは非常に大きい。無尽蔵にある剣が宝具かもしれないが、普通に使う分には問題無くても、真名解放が出来ないのかもしれない。今は膠着状態だが、

きつとすぐに姿の見えない相手のマスターが痺れを切らして真名解放で決めに掛かるだろう。

宝具を使えないのなら、別の切り札を使うしかない。令呪による命令だ。

相手がどんな手札を持っていようが、使う前に決めてしまえば無意味に終わる。ゲームなら面白味なんてあつたもんじゃないが、命懸けの戦いなのだから手段なんていちいち選んでいられない。

(問題はタイミングね)

相手は最速のサーヴァント。マスターに授けられる透視能力で、俊敏が2ランク劣るのは確認した。これでは、「ランサーの首を刎ねろ」なんて令呪で命令してもまず成功しない。致命的な隙を作りだすか、2人にとって予想外なタイミングで使うしかない。

幸いにも、相手は最高の対魔力を持つセイバーではなく、まあまあ対魔力を持つであろうランサーだ。手持ちの質の高い宝石を使えば対魔力を貫通して、手傷を与えるに至らなくても注意を逸らすくらいはできるはずだ。注意が逸れた瞬間に、アーチャーが好機とって斬り伏せればよし、反応が遅れたりするようなら令呪を使って取ればいい。

三騎士の一角であるランサーの首と令呪の二画が釣り合うかは微妙だが、やる価値は十分にある。絶対に勝るとするなら……

そこまで考えて、賭けるのを忘れていたモノを思い出した。アーチャーとの信頼だ。生前は騎士の誇りを掲げていたかもしれないアーチャーが、横槍と令呪の命令を快く思わないかもしれない。アーチャーがしっかりと聖杯戦争と解っているなら、何も問題は無い。戦争では一騎討ちでなければ1対多や、多対1も有り得る。そして今は一騎討ちではない。今は1対1の状態になっているだけだ。

しかし、それは凜の考えであってアーチャーの考えではない。今の状態を一騎討ちと思って、誇りある騎士の戦いとアーチャーが考

えていたら、信頼はゼロかマイナスになる。

最良と謳われるセイバーなら、令呪と信頼を損なっても取る価値はある。しかし、今の相手はランサーで戦いはまだ序盤もいいところだ。今はまだ危険な賭けをするべきではない。

（ああ、もうっ！うっかりしてたわ！アーチャーが忠誠を誓ってくれたのに気分を良くして、アーチャーが聖杯戦争をどう見ているかを聞き忘れていたわ！）

アーチャーの聖杯戦争への認識を聞いておけば、避けられた事態だ。認識の齟齬さえなければ、ランサーを討ち取れる絶好の機会なのに、凜は指をくわえてサーヴァントの戦いを見るしかなかった。

キーン！心なしか、今迄の弾く音より大きめの音を立てて白い剣が弾かれる。

「剣？」

凜の耳に、アーチャーでもランサーでもない声が聞こえた。人間の凜に聞こえたのだから、サーヴァントである2人にも聞こえたのだろう。凜にはハッキリと見えない先を見ている。

その視線を感じたのか、はたまたは見えていたのか走り去る足音が僅かに聞こえた。

「チツ！見られたようだな。決着が着かねえのは心残りだが、目撃者は消せって命令を受けているんでな。胸くそ悪いが、消しに行かせてもらおう」

本心からの言葉であるそれを言うと、ランサーは逃げた一般人を追って姿を消した。

神秘の秘匿は魔術師なら当然の義務である。だから、聖杯戦争の

一般人での目撃者を消すのは褒められた方法ではないが手段足り得る。

相手が人間ならランサーから逃げるのは絶望的だ。放っておけばランサーが勝手に目撃者を消す。万全の状態でない今はこのまま家に帰るのが戦略上は最善だ。

「アーチャー、ランサーを追い掛けるわよ」

「ランサーの追撃かね？」

「違うわよ。一般人を保護するのよ」

無力だった10年前とは違うのだ。今回は助けようとするのは誰とは解らないが、助けられる命を見捨てても勝とうなんて凜は考えてはいない。

「そういえば、一般人はどんな格好の奴のだったの？」

「ああ、マスターの学校の男子の制服を着ていた」

「なっ！急ぐわよ、アーチャー！」

「士郎、二手に別れるぞ！」

「ああ、判った！」

丁度良く分かれ道に差し掛かったところで慎二が提案し、士郎はそれを受け入れた。

追いつかれたら不味い。普段は荒事から程遠い生活している士郎にも、それは解った。

見られた。それだけで、一瞬死を身近に感じた。視線だけで死ぬなんてありえないが、こちらを殺そうという意志は感じたのだ。

「士郎の家の土蔵に集合だからな！」

「解っている！」

いつだか冗談半分で決めた避難場所が、衛宮家の土蔵であった。

がらくた置き場になっているそこなら、どこからか拾ってきた金属製のなにかなどがあるので武器には事欠かないのと、出入り口が鉄の扉のそこなら簡単には侵入ができないから避難場所にしようとしたのだ。

その避難場所の確認をしてから、2人は別れた。

慎二は、士郎が脇目もふらず走っている背中を見ると、ランサーが来るであろう方向に向き直る。

「なんだあ、逃げねえのか？」

さっきまで完全に逃げ腰であった慎二を見て、ランサーが疑問に思う。

「逃げる？必要無いよ！」

慎二が高らかに宣言すると同時に、ランサーを背後から短刀ダイクが襲った。

非日常への入り口（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

ライダー「さあ、今回でリストラの2人が判明しました！皆さんの予想は合っていましたか？」

アサシン（佐々木小次郎）「リストラめ2人目の、アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎だ。

まずは拙者がリストラされた理由を話すでしょう。実の所、あの女狐に召喚されない限りは、第五次聖杯戦争に参加できない身の上だな」

ライダー「端折り過ぎです」

アサシン「……ルール違反で召喚されたのでな。柳桐寺の山門を触媒にするくらいの事をしなければ、拙者は召喚不可能なのだ。キヤスターが召喚したというのも、召喚された要因であつたからな」

ライダー「では、次行きましようか。なぜ、ワカメのサーヴァントがアサシンかです」

アサシン「拙者が召喚されるという案もあつたな」

ライダー「ワカメとは相性は良さそうですが、正規のサーヴァントでないのでワカメに召喚不可能と考えられたから、ボツになったんですけどね」

アサシン「いやはや、世知辛い。死合いができれば、マスターは選

り好みしないというのに」

ライダー「間桐にはランスロットの聖遺物があるのでは？と思うかもしれませんが、慎二は触媒無しで召喚しています」

アサシン「あの妖怪の指示で、あわよくばアローニーロを召喚しようとしての事だったか？」

ライダー「そうです。慎二は触媒無しでも、その実力なら強力なサーヴァントを召喚できると聞かされていますが、妖怪の本音はアローニーロを召喚してくれれば万々歳って感じですよ」

アサシン「本人が作ったモノなら、触媒として十分であろうからな。実力は前回の聖杯戦争で判っている。もし召喚できれば、すぐに義骸の製作に取り掛からせて、次の世代の駒の優秀な体を作らせる、か……。外道の考えそんな事よ」

ライダー「懸念は、アローニーロが現界していたら召喚できない。その懸念が見事に的中して、アサシンが召喚された訳ですが……」

アサシン「アローニーロを捜して蟲が這い回る……。『面妖な』」

ライダー「では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

非日常へ(前書き)

感想 教授様、クレイジー様、k n t様、零崎重識様、二度様
ありがとうございます！

非日常へ

「なるほど。てめえもマスターだったわけか……」

背後からのダークの投擲をギリギリで避けて、頬に一筋の傷を負わされたランサーが1人で納得する。

「ああ、そつだよ。この僕、間桐慎二がアサシンのマスターだ」

その言葉に合わせるように、白い髑髏の仮面と黒いマントでその風貌を隠しているアサシンのサーヴァントが慎二の前に立つ。

「慎二殿、取り損ねました」

「いや、仕方がないさ。相手は最速のクラスのランサーだ。まあ、俊敏の能力値だけでいえば同じAランクだから、次こそは取れよ」

「必ずや」

アサシンがランサーへとダークを投擲しながら肉薄を開始すると同時に、慎二は魔術回路を励起させて魔術の行使を開始する。

暗殺者がアサシン槍兵にランサー真正面から挑みかかるのは無謀である。慎二もそこは解っている。だから、2人で戦うのだ。慎二が行使する魔術は間桐の十八番とも言える蟲の使役。魔術の産物たる蟲は神秘が宿っており、サーヴァント相手でも傷を負わせる事が出来る。それに、虫による攻撃は対魔力の影響を受けない。対魔力はあくまでも自分を対象にした魔術への抗力であり、魔術ならなんでも無効化や軽減できる力ではない。それ故に、虫の物理攻撃は対魔力を素通りしてサーヴァントに届く。

尤も、慎二が今使役している翅刃虫の顎によって碎けない鎧で相手のサーヴァントがガチガチにかためていたら、慎二は無力になるのだが。

ランサーはアサシンと無数の翅刃虫に瞬く間に囲まれる。蟲の武器は大きさ以上にある攻撃力と、小さいのでかなりの数で攻められることだ。そこに本命であるアサシンが混ざって、ランサーに襲い掛かる。

慎二が蟲によって敵を攪乱し、アサシンが蟲に紛れて敵を殺す。それが慎二の考えた作戦であった。

アサシンは俊敏が高ランクであるのを活かして背後に回り込もうとする。無論、そう簡単にランサーの背後を取れるわけがない。最速と謳われるのは伊達ではなく、名実ともに備わっている。

しかし、それでも全方位から攻撃全てに対応はできない。

生前は軍を相手に戦った事のあるランサーではあったが、蟲の軍勢を相手取った事などない。魔獣の類なら相手取った経験はあったが、蟲ほどに小さい相手とは戦った事は無い。正にランサーにとつて未知の領域の敵であった。

蟲だけなら、脅威にはならなかった。蟲を操っている慎二さえ倒せば指揮官を失った蟲は攻撃を止めるであろうし、噛まれるのさえ気にしなければすぐにでも自慢の槍で慎二の心臓を貫き受けるなど造作もない。

だが、慎二はアサシンのサーヴァントを連れており、そのアサシンはダークを投擲しながら着かず離れずの距離を維持して、後ろに回り込もうとしている。これは牽制と隙を窺っているのだ。

矢避けの加護を持っているランサーであったが、そのスキルを持っているなら矢の方から避けてくれるようなスキルではない。狙撃手が見えていれば、大抵は対処できるという証明に近い。

(このまま普通に戦っても消耗した所を狙われるだけだ。真名解放

で一気に決めるか)

切り札を切るうとしたところで、念話によってマスターから待ったがかかる。

(退けだど？そっちの命令は解らないもないが、その後の命令はなんだッ！？)

ランサーは、蟲とダークを落としながらマスターと念話で会話をする。しかし、伝えられるのは一方的な命令のみで、話をしようとする意志がマスターからまったく感じられない。

内心だけでランサーは舌打ちをすると、ルーンの魔術で炎を発生させて蟲を焼き殺しながら霊体化してその場を去った。

ランサーが撤退するほんの少し前。あまり離れていなかったのが、凜とアーチャーはすぐにランサーに追い付いた。

「加勢するかね。それとも、3人射抜くかね？」

「必要ないわ。それより、さっき逃げたのはあいつだけ？」

「いや、もう1人いた筈だが……」

「そう。あいつと一緒にいたのなら、きっとあいつね……」

慎二と士郎が親友なのは穂群原学園内では有名な事だ。慎二はその整った顔と成績優秀の御蔭で有名であり、士郎は大抵の頼み事を嫌な顔ひとつせずに引き受けてくれるから「穂群原のブラウニー」と呼ばれて有名だ。同じ部活に所属しているから一緒に登下校なんて当たり前だとか。物凄くどうでもいい事だが、一部の趣味の人達に非常に人気がある2人なのだ。

「今の目的は一般人の保護。だから、もう1人の方を保護しに行くわよ。構わないでしょ？」

「マスターがそう決めたのなら、私は従う所存だ。……ところで、どこに向かった判っているのかね？」

「……たぶん、いえ！、絶対に、自宅に向かったはずよ！」

苦笑いしているアーチャーを連れて、凜は衛宮邸を目指すのであった。

つけられているのを警戒して何度か回り道をして、士郎は無事に自宅に帰り着いた。家には入らず、そのまま土蔵のに入って外を見れるように、ほんの少しだけ扉を開けて、転がっていたボールを手取る。

扉をほんの少し開けたのは、敵が入って来た時は結果が反応して警鐘を鳴らす^{すべ}が、慎二が入って来た時には何も反応しないので目視するしか確認の術がないのだ。

「慎二は、無事か……？」

自分は逃げられた。それは、運良く撒けたのか、自分が追いかけられなかったの2つのどちらかを意味する。

「無事でいてくれよ……」

士郎は祈るように、親友が姿を表すのを待った。

慎二なら、例え追いかけてもきつと自分より上手くやって逃げおおせる。そう思う一方で、アレからは人間では逃げ切れないとも考えてしまう。

「クソッ！」

何分、いや、何時間か過ぎたろうか？ただ待っているだけの士郎には、それだけの時間が過ぎたかのように感じられた。

やはりあそこは、自分が見を呈してでも時間稼ぎをするべきだった。そう考え始めた時だった。結界が警鐘を鳴らし始めたのだ。敵が侵入してきたのを知らせる事しかできない結界だが、それだけで十分だった。

慌てて扉を閉めようとすると、ソレに先んじて僅かな隙間に紅い刃先が刺し込まれて閉じるのを邪魔される。

「悪いな」

観音開きの扉を開け、ランサーが土蔵の中にあっさりと侵入を果たす。ランサーがマスターにより受けた命令は、撤退と一般人の目撃者の排除であった。

「運が無かったな」

紅い槍が士郎の心臓に狙いをつけて突き出される。

トレース・オン
「同調開始！！」

突き出されるまでの僅かな時間。その時間で士郎は魔術回路を作り、解析の工程を飛ばして手に持っていたボールに強化の魔術を使用する。強化したボールを槍の進路に入れて、なんとか槍の一撃を逸らす。

「……てめえも、魔術師だったわけか。もしかしたら7人目だったのかもしれないな」

驚きの表情をランサーは見せたが、すぐに表情を元に戻して、再び槍を突き出す。今度は、確実に殺すべく、人間では防げないであろう速さと威力の一撃だ。

だが、届かなかった。

「なっ！？」

それは2人にとって突然だった。土蔵の中で突風が吹き荒れ、その中心からナニカが飛び出してランサーへと跳びかかって土蔵の外に追い出す。ほんの一瞬の出来事で、士郎には何が何だか判らなかつた。

「問おう 貴方が私のマスターか？」

非日常へ（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「……その言葉は、言わなければならないのか？」

ライダー「貴方は言う必要はありませんよ。私専用の台詞ですから」

アサシン「そうか……。では、裏話に行こうか」

ライダー「慎二がアサシンと組んでランサー相手に善戦していた理由でもいきましようか。

ハッキリ言いますと、ランサーが本気でしたら即負けていました」

アサシン「本気とは、宝具か？」

ライダー「ええ、ランサーの対軍宝具にかかったら、蟲とアサシンは簡単にやられていたでしょうね。

ランサーのマスターは、確実にある相手を葬れるようにするためにランサーに宝具を使わせないようにしているのに助けられましたね」

アサシン「るん魔術とやらで蟲を焼き払われても負けるのではないのか？」

ライダー「蟲がやられるようなら、慎二はアサシンに宝具を使わせるつもりだったので、やったら殺られていました。

とっとと宝具を使わせれば良いだろうと思うかもしれませんが、慎二はランサーと戦っていた相手に見られるのを警戒して使わせなかったのです」

アサシン「では、次といこうか。士郎がランサーに追い付かれた理由。探索のげーなすで足が着いたらしい」

ライダー「士郎を殺そうとした命令をだした理由が、軽い復讐だとか……。何を考えているんでしょうか……」

アサシン「まあ、悲しむ者があるから、というのも理由のひとつらしいの」

ライダー「では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

事情（前書き）

感想 ウツイ様

ありがとうございます！

事情

その光景は、地獄に堕ちても忘れないだろう。

月光による優しい逆光を背に、美しい金髪をさつきまで吹き荒れていた突風でなびかせて凜とした声で士郎に問いかけた。しかし、一瞬で状況が変わり過ぎたのと彼女の姿に見惚れていた士郎は返事が出来なかった。

「……話は後にしましょう。先に敵を片付けます」

「いやまっ……」

士郎は引き留めようとしたが、彼女はそれを聞かずに土蔵からとび出してランサーへと相對する。

「まさか、本当に7人目だったとはな」

しっかりとセイバーを見据えたランサーは思わず笑みをこぼす。元々なんら関係の無い一般人を消すのはランサーの意に反する行為だったのだ。一般人と思って消そうとしたの2人が両方とも魔術師だったのは驚きだが、むしろ良かったとさえ感じていた。

それに相手は残っている枠から考えて、参加がほぼ確定しているセイバーのクラスのサーヴァント。最良と謳われるクラスと戦えるだけでランサーの血は滾る。ランサーが聖杯戦争に参加したのは、死力を尽くしたをする為だ。生前に後悔や未練が完全に無い訳ではないが、もはや過ぎ去った過去であり、誰にも変えられないモノなのだ。

ありとあるゆる時代の英雄豪傑が一堂に会する冬木の聖杯戦争は、最高の戦場だ。なのに、マスターが気に入らない奴だったり、令呪

で強制こそされてはいないが真名解放を禁じられた。真名解放を禁じられたのは勝つ為には手痛い、死力を尽くした戦いが出来ないわけではないので許容範囲だ。

「聞いておくが、てめえは何のクラスだ？俺はランサーだ」

「私の得物を見て量るがいいランサー」

真名を名乗り合うなんて相手もしないだろうと思っていたが、自分のクラスを言わないのにランサーは煩う。

それに、得物を見て量れというのは不可能だった。目の前のサーヴァントの得物が見えないのだから。

（気に入らねえな）

なにが、と問われれば、ランサーは得物を隠しているのが、と答えただろう。そういう伝承のある宝具なのか、有名すぎるから隠しているかは判断はつかなかったが、己の半身である得物を隠しているのが気に入らなかった。

武人であるなら、宝具はだいたいが生前に使っていた武器になる。それは誇りであり、断じて隠すようなモノではないとするのがランサーの考えだ。得物を隠すのは暗殺者か、それに誇りを持ってないような輩が大半になる。

聖杯戦争では、有名すぎる造形の武器なら真名を隠す上では賢い手だ。それ自体は解っている。しかし、それをセイバーのクラスのはずのサーヴァントがやっているのが特に気に入らない。

「……はあ…興が削がれた。退かせてもらっせ」

またもやマスターからの退けと命令が下された。

「そんな事をさせると思っているのか？」

「いいのか？2組、近付いて来てるぜ」

命令も理由の一つだが、ランサーが退く一番の理由はこのままでは3対1になるかもしれないからだ。どの主従とも敵対したこの状況では、真っ先にランサーが狙われる可能性が高い。アーチャーがアサシンとぶつかる可能性も無くはないが、見た感じで歳が近いようであったから知り合いの可能性も捨てきれず、マスターの面が割れてないランサーを先に潰そうと結託するかもしれない。

ランサーとしては、1対1での真正面からのぶつかり合いの方が好ましい。しかしソレが望めなさそうなので、仕方なく退くのである。

「遠坂、こんな時間に散歩かい？出歩くなら、もっと明るい時間じゃないと痛い目にあうぞ」

「あらあら。こんな時間に散歩は、お互い様でしょ？それに、痛い目に合わないように強力な護衛がいるから、ご心配なく」

衛宮邸のすぐ近くで、凜と慎二は膠着状態で舌戦をしていた。互いに士郎を助けようと行動していたのだが、慎二はそれを解つてない。慎二はランサーと戦っていたのが、凜のサーヴァントであるアーチャーと知らないからである。

凜は目的は一緒だと解っているが、慎二にそれを言っても信じて貰えなさそうなので言っていない。それなら凜が退けば丸く収まるのだが、それでは慎二に負けた様な気がして凜には嫌なのである。だったら戦えばいいのだが、互いに相手を攻撃しにくい理由がある。

凜の理由は、慎二は桜の兄的存在であるのと、間桐の後継者だからだ。

凜は間桐へといった桜が気になっており、自分なりのやり方で氣遣っている。割と接する機会はあるのだが、どうにも間桐での桜の立ち位置が解らないのだ。古い盟約によって間桐の養子になったとは知っているが、間桐がそんなモノを持ち出す程に問題があるようには感じられない。

それに、桜の戸籍上の父親が雁夜だというのも謎である。ひとつだけ、その理由になりそうなのは見つけたのだが、それならわざわざ養子になる必要が感じられないのだ。

それらの疑問は置いておくが、慎二が傷付くと心優しい と思っている 桜が悲しむのはではないのかと、実力が未知数なので手加減抜きで戦わねばならなくて、もしかしたら殺してしまうかもしれない。

もしそうなら、桜が間桐の後継者と担ぎ上げられるであろうし、土地の管理での間桐の協力が一時的であろうが支障が出る。

慎二の理由は、今引き連れて蟲の数では少し心許無いのと、凜が桜の血の繋がった姉であるからだ。

蟲は元々そこまでの数は連れておらず、その半数がランサーによって駄目にされた。蟲は消耗品としか考えていないが、その消耗品が底を尽くと負けると解っている。他に手はない訳ではないのだが、決定打に欠けると解っているのと、凜の宝石魔術が瞬発力に長けていた場合は負けが目に見えている。

そもそも慎二は、臓硯から蟲の使役しか本格的に習っていない。数の多い蟲を一度に使役するのは思いのほか難しく、自分の手足のように操れるようになるのには特訓あるのみだからだ。

それは臓硯の建前であり、本音は反逆された場合に牙が無いようにする為だ。蟲の管理は一括して臓硯がしており、引き連れるのも臓硯の許可が必要になっている。たとえ反逆しても、使役する蟲がいなくては、慎二はスタンダードな魔術を使える魔力量の多い魔術師にしかない。

今の所は反逆しようなんて慎二は一切考えてはいないが、それでも蟲だけでは危険な場合もあるだろうと隠れて別の魔術の鍛錬もしている。本人は知らないが、臓硯にばれている……

聖杯戦争には直接関係は無いが、凜を傷付けると慎二が狙っている桜が自分を敵視するかもしれない。初めは臓硯に桜が優良物件と示唆されて、桜をてきとうに気に掛けるか、と軽い気持ちで接していた。そこまで会う機会がある訳ではなかったのだが、成長と共に異性として意識し始めたのだ。

特に慎二の目についたのが胸だ。ハッキリ言うと、桜の胸は大きい。日々の訓練で体が引き締まった姉である凜とは違って、桜は全体的に女性らしい身体つきとなっている。

慎二は本気で桜を自分のモノにしようと考えている。記憶にある限りは、母親の愛情を受けられなかったからか、慎二は母性のある女性が好みだったりする。

「「はあ……」」

相手を攻撃しにくい。そんな理由で舌戦を繰り広げているマスターを持ったサーヴァントが、溜め息をついた。

（お互い、大変だな）

(ええ、優秀なのが唯一の救いなのですが)

共感したアーチャーとアサシンが互いの雰囲気だけで会話を始めた。思うのは、やっぱり相手も苦勞しているのだという共感。

(ここは1つ、互いのマスターに目的を忘れるなど忠告するのはどうだね?)

(そうしましょう。なにやら、話が関係のない方向に進んでいるようですし……)

なぜか、サーヴァントより熱くなってどちらが優秀かを言い始めたマスターを後目に、アーチャーとアサシンはしめし合わせる。

「凜」

「慎二殿」

「目的はいいのかね?」ですか?」

「あ……………」

事情（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「此処で会話することを強いられている！（集中線）（キリッ！」

ライダー「なにふざけているんですか？アサシン」

アサシン「いやなに、ネタに走れと言われたのでな」

ライダー「まあ、いいでしょう。裏話にいきたいのですが……」

アサシン「ないようだな」

ライダー「そうなのですよ。何を話すか困りますね」

アサシン「なら1つだけネタがあるぞ。

こちらではランサーのマスターを隠しているが、感想では平然とばらしている」

ライダー「……まあ、原作と同じですから隠す必要がないのかもしれませんがせんしね。こっちだと、原作を知らない人が見るかもしれないから隠しているのですが」

アサシン「そうなのか？」

ライダー「そうなんですよ。では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

そつだ、衛宮邸に行こう（前書き）

感想　ge様、Lapis Lazuli様、Fox|OPS様、
ほらい様、教授様、かにかま様、クロス元帥様、煌　焰様
ありがとうございます！

そつだ、衛宮邸に行こう

「士郎が死んでたら、遠坂のせいだからな！」

「うつさい！こんな時間に出歩いてるあんた達の方が悪いでしょ！
だいたい、なんで死んでるとか考えるのよ！」

「ランサーのマスターが誰だか判ってないだろ。最悪の場合はそいつが何かするかもしれないだろ！」

((結局舌戦をするのか……))

凜と慎二は並んで、衛宮邸へ向かって走っていた。互いに相手を敵視しており、そんな相手に背中を見せるなど出来ようはずも無い。そこで取ったが、相手を横において進むというものであった。これなら両者共に相手に背中を見せずに済むし、常に相手の行動を監視できる。

牽制に凜はアローロニーロからプレゼントされた指先が露出するオープンフィンガータイプのドレスグローブを着け、指と指の間にはすぐにでも使えるように宝石を挟みこんでいる。

それに対して慎二は、なにかあればすぐにでも喰らい付けるように身構えている翅刃虫を1匹肩に乗せている。どちらも、相手が不審な行動をすれば殺せる準備を整えていた。

それでも一緒に行動しているのは、無関係な人間を巻き込むのを良しとしない考えが一致しているからである。

「むっ、慎二殿。サーヴァントの気配がします」

「チッ、敵か」

「こっちに真っ直ぐ向かって来ているようだな。どうする、マスター？」

「決まってるでしょ。倒すのよ」

そこで凛は隣の慎二を見る。目が合って、慎二が頷く。

「意見が合うな。ここは協力して倒そう」

「それじゃあ、とつとと倒すわよ。アーチャー、貴方は前衛を務めて」

「アサシンはダークでアーチャーを掩護しろ」

来るべき敵への迎撃の準備はすぐに済まされた。

前回の経験が、彼女を突き動かす。まともにマスターと会話をしていないが、そんな事は些細な問題だ。重要なのは、自分が敵のサーヴァントを倒すだけ。守りたいモノを害される前に、害するものをその剣で斬り伏せる。

（見つけた！）

ランサーが去り際に言った2組の敵。見れば敵は既に戦闘態勢に入っており、赤い外套で白と黒の剣を持ったサーヴァントと、前回で見たことのあるアサシンの仮面と似通った仮面と黒いマントを身に付けたアサシンぽいサーヴァントが待ち構えている。

すぐにどちらの方が危険か判断する。アサシンぽいのは、きっと今回のアサシンと判断して狙うは赤い外套のサーヴァント。姿を曝け出している暗殺者など恐るに足りず、敵と言えそうなのはクラス不明の赤い外套のサーヴァントだからだ。

敵との距離はそこまで開いておらず、3歩で間合いに入れられる。まず一歩目。赤い外套のサーヴァントは顔を強張らせて、驚いているようである。

次に2歩目。女性のマスターと思しき魔術師が、「アーチャー！」と呼ぶ。そこで、ようやく身体から無駄な力が抜けたようで、振られるであろう武器を防ごうと動く。

最後の3歩目。アーチャーは防ごうと動き出しているが、遅い。既にセイバーの剣は振り上げられ、後は振り下ろすだけで致命傷にならずとも、決して無視できない傷を負う。そうすれば、アサシンを先に片付けてから多少時間をかけてもきつと独りで倒せる。

そのセイバーの描いた理想的な道筋は、直感によって不可能と警告された。

振り降ろしていた剣が横から飛んで来たダークによって軌道を狂わされ、続いて頭を狙って投擲されたダークを避けるべく、セイバーは前のめりとなって身体全体で斬りかかっていた姿勢から頭を後ろに反らせる。

そうなくても剣を振りきったが、アーチャーは陰陽剣を交差させて防御し、なんとか無傷で済みます。

その結果に、セイバーは思わず唇を噛み締める。いくらセイバーと言えども、2対1で圧倒できるとは考えてはいない。だから、先制攻撃で動きを鈍らせるくらいには最低でもしたかった。

「おい、待ってくれよ!」

そこに、士郎が駆け付ける。士郎からすれば、彼女は命の恩人だ。その彼女が自分を殺そうとしていたのと対峙していた時と表情を変えずに、そのまま走りだしたので急いで追いかけてきたのだ。

「……………」

その姿を見て、驚いたのは凜と慎二だ。

「ねえ、ちょっと」

「なんだ、遠坂。こっちは状況はなんとなく解るんだが、なんでそうなのかが解らないんだ。今、べつの答えを考えて忙しいだ」

「とりあえず、質問に答えなさい。あいつから、魔力を感じた事ある?」

「ない」

「じゃあ、あいつの近くに魔術関連のモノはある?」

「ある。結界が家にあるけど、ろくすっぽ手入れしてないのが…………」

衛宮邸に結界があるのは慎二は気付いていた。そもそも、慎二が衛宮邸に出入りするようになったのは、士郎が魔術師かを調べる意味合いが最初は強かった。士郎と仲良くなって「魔術師殺し」の技術が継承されているかを調べる為だ。しかし、魔術刻印は臓器移植に近く、血の繋がらない士郎が受け継げられないと予想されていた。それでも、魔術を数ある道具の1つとする考え方と、魔術以外の牙

が砥がれていないかを調べる必要もあった。

慎二なり調べた結果は、士郎は白であった。まず、士郎から魔力を感じない。次に、士郎は間桐の姓を持つ自分を普通に家に招き入れた。さらに、結界は張ってあるが手入れがまったくされていない。どれもミスリードするべく用意された材料とも考えられたが、慎二には士郎を魔術師と考えられなかった。その思考と行動がまったく魔術師らしからぬからだ。等価交換という考えをまったく持っておらず、休日にはボランティアに精を出すなんて当たり前で、基本的に対価を要求せずに一方的に献身するのだ。それは、魔術師がする行動ではない。

「マスター、危険ですから下がって下さい」

「まず俺はマスターなんて名前じゃない。俺の名前は士郎だ」

「では、シロウ。危険ですから貴方は下がって下さい」

セイバーはアーチャーとアサシンの動きに注意を払っているので、士郎に意識を向けるわけにはいかない。意識を逸らしたその瞬間が、致命的な隙になりかねない。

「『解らないモノは、とりあえずはただ受け入れる』……とりあえず、あいつがマスターとしましょう」

『解らないモノは、とりあえずはただ受け入れる』その言葉は、凜が機械を扱う上でアローニーロに言われたものである。

「……まあ、それしかないな。アサシン、攻撃はとりあえず中止だ」

「承知」

「アーチャー、貴方もよ。…武器は、まだしまわなくていいわよ」
「了解した」

狩られる側が、いつの間にか狩る側になっていたなど凜と慎二は予想できなかったが、とりあえずは戦闘は無意味とは悟れた。しかし、セイバーはそうと判らない。相手が組んでいるというのが現状での自然な答えであり、自分が劣勢に立たされているのだ。

「おい、士郎。お互い元気そうだな」

「慎二ツ！それに遠坂ツ！？」

慎二の声を掛けられてようやく慎二に気づき、そのすぐ近くにいる凜に驚いた。慎二の交友関係が広いのは士郎は親友としてよく知っている。しかし、その中に遠坂凜はいなかったはずである。2人とも優等生だが、不気味な位に学内で顔を合わせなかったり、まず会話なんてしないのだ。なのに、テストなどで張り合っている節が見られるのだ。

そのせいで生前からライバル関係だとか、ご先祖さまの代からいがみ合っているとか、常時冷戦とか言われているのだ。

「とりあえず、3人で話をしないか？心配なら、自分の後ろにサーヴァントを控えさせていいからさ」

「わかった。ところで、サーヴァントってなんだ？」

その質問に、慎二と凜は呆れかえる。

「……やっぱり、巻き込まれただけか……。土郎の前に立っている
そいつが、土郎のサーヴァントだ」

「そうなのか？」

「はい。私はシロウのサーヴァントです。必要なら、敵を斬って捨
てて見せますが？」

「いや、そんな事しないでいいから。というか、女の子が武器なん
て振り回したら危ないだろ」

「私は剣です」

「いや、女の子がそんな物騒な事を言うなよ」

「おい。サーヴァントと親睦を深めるのは勝手だが、僕達を忘れ
ていないか？」

「あ、悪い。とりあえず、皆で家に来てくれ」

そつだ、衛宮邸に行く(後書き)

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「ふむ、思ったより話が進んでおらんようだね」

ライダー「……まあ、十中八九がほん数秒の戦闘描写と、慎二から見た士郎のせいでしょうね」

アサシン「ほんの数秒の戦闘描写で400字近く使っているぞ……。激化する聖杯戦争での描写が酷く長いモノになりそうよ」

ライダー「それは置いておきましょうか。裏話ということで、アローニーロの凜へのプレゼントの手袋にいきましょうか」

アサシン「凜に令呪が宿ってから作り、プレゼントした逸品。元は、綺礼から聞いた魔術師の使っていた手袋の再現だね？」

ライダー「思いつき、あの人ですね……」。

まあ、オープンフィンガータイプのドレスグローブの理由が、宝石を掴み易くしたりする為とか、凜向きに作っているようですが。魔力を通している間は鋼鉄のような強度を得る品。ただし、完全に固まるので魔力を通すのを止めないと形が維持されるという状況によっては欠点を持っています」

アサシン「神秘が宿っているから、サーヴァントをも殴れるドレスグローブ。しかも、魔力を通すまでそうとは感じさせない隠蔽性を持っている、か……。何処を指したらこんなモノを作るのだから、暗殺者向きな気もしくもないのだが……」

ライダー「ちなみに、凜は反動無視での強化し、この手袋を使えばクリーンヒットさえすれば、サーヴァントの首をも飛ばせるそうです。そんな場面は出ないでしょうが……」

アサシン「……バケモノになつておらんか？」

ライダー「強化と言っても、まずは普通に魔術で強化して筋力を底上げし、次に暗示で普段は使われない筋肉をフルで使えるようにして上限を上げるモノです。全力を出せば筋肉が断裂するようなドーピングみたいなモノです。

そこまでしても、サーヴァント相手では真正面から殴り掛かったら避けられるでしょうね。では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

教会（前書き）

感想 教授様、Shinchan様

ありがとうございます！

教会

(……なんだ、この空気)

衛宮士郎は、胃に穴が開くのではないのかと思うプレッシャーを周りから感じていた。とりあえず居間へと全員通して、お茶を全員に配った。凜と慎二はそのお茶を受け取って飲んだのだが、サーヴアントは互いに牽制し合っているようで受け取らない上に、立って3人とも各々の武器を持ったまま睨み合っている。非常に、空気が重かった……

「さて、士郎。まずは、お前も魔術師ということでもいいんだな？」

空気が重くても話はしなければならぬ。慎二は冷戦状態のサーヴアント達を意識の隅に追いやってきりだす。そうでもしなければまともに会話もできない。なにせ暗殺者だろうと、弓兵だろうと、剣士だろうと放つ殺気は　毛色こそは違うものの　背筋が凍るモノがある。

「も、ってことは慎二と遠坂もか？」

同年代の魔術師、いや、自分以外の魔術師なんてあまり考えたことのない士郎からすれば、当然の疑問である。

「ああ、そうさ。しかも、僕も遠坂も魔術の名家でね。遠坂も一緒に話に加わっているのもその辺が関係しているんだよ」

そうなのか。そんな感じに士郎はなんとなく納得し、2人が成績優秀なのはそんなところから来ているのか？などと考えた。

「それじゃあ次の質問だ。聖杯戦争を知っているか？」

「知らない」

「やっぱりな。士郎、お前はサーヴァントを使った魔術師同士の殺し合いに巻き込まれたんだ」

「ゲーム？」

「参加者は魔術師7人に、それに仕えるサーヴァント7騎で最後の1組になるまで殺し合う。優勝賞品はなんでも望みを叶える聖杯。簡単に言くとそれが聖杯戦争」

「なんだよそれ……。ふざけてるだろ!!」

「……お前なら、そう言うと思ったよ。けどな、士郎はもうそのふざけているゲームに参加している。否応無しに戦わないと殺される」

熱くなっている士郎と違い、慎二は冷徹に言う。感情に流されず、目的だけを果たすのが魔術師たるべき姿なのだ。

「だからって、相手を殺せと言うのか!」

「それはあくまでも選択肢だ。何も相手の魔術師を殺すのが絶対に必要じゃないからな。サーヴァントだけを倒すように心掛ければいいだけだ。でも、サーヴァントをサーヴァントで倒そうとするよりも、サーヴァントで魔術師を殺した方が簡単なんだよ」

「……………」

サーヴァントと人間にある差は、士郎は身をもって感じたからこそ反論できない。もしも、セイバーが召喚されなければ自分が死んでいたのは容易に想像できた。一撃逸らしたのも奇跡に等しかった。

「ひとまず、僕からの話はここまでだ」

それまで2人の会話を眺めていただけの凜がようやく口を開く。

「それじゃあ、私の番ね。はっきり言って、一般人が巻き込まれてないんだったら、私個人としてはここは慎二だけに任せれば良かったのよ。だけど、衛宮くん。貴方が魔術師というのが遠坂凜には問題なのよ」

「俺が魔術師だと何が問題なんだ？」

「遠坂家はねえ、冬木の地を預かるセカンドオーナー。冬木の地で外道にはしる魔術師が出ないようにしたり、魔術師を監視したりする仕事があるの。あんたみたいな不法滞在している魔術師も取り締まっているの」

「不法滞在……………なんでさ……………」

「基本的に、冬木に移住する際にはセカンドオーナーである遠坂に申し出たりしないといけないのよ。しなかったら不法滞在扱いせざるおえないのよ。言っとくけど、これは冬木じゃ魔術師の常識だから。」

今は聖杯戦争中だから、そんな事で衛宮くんを特に責めるつもりはないから安心して。だけど、聖杯戦争が終わったら、きっちりと

話し合うからそのつもりでね」

(ッ！寒気が……！)

凜は笑顔で言ったが、絶対に表情と感情が一致していない。

「それじゃあ、いきますか」

ここで話しておくべきことは話終わったので、慎二がおもむろに立ちあがる。

「行ってくてどこにだよ」

「負けた場合の駆け込み寺に挨拶にだよ」

「？」

「おい、お前のセイバー凄く機嫌が悪いぞ」

「やっぱり、アレは失敗か……」

「当たり前じゃない。もっとマシなのはなかったの」

「鎧を着たままで羽織れるのがアレしかなかったんだから仕方がないだろ」

セイバーが目に見えて機嫌が悪くなっている理由。それは、オレンジの雨合羽を着させられているからだ。なぜそんなモノを着ているかというと、セイバーが鎧を脱ぐのを承諾しなかったからだ。いつ敵が現れるか判らず、いつかは敵になるサーヴァントが2体とも実体化している状態で気を抜けないからだ。

鎧さえ解けばドレスのようだが服で通るような格好になれるが、それはまだ隠しておく手札とした。魔力全てを攻撃に回すその状態は場合によっては切り札になり得るからだ。

それでも、オレンジの雨合羽を着るのを完全に納得したわけではない。譲歩しなければ先に進まないから、仕方なく、着たのだ。

「てゆうか、なんで遠坂まで一緒に来てんの？ 士郎が魔術師というのは聖杯戦争後に話をつけるんだろ」

「別件で教会に用があるのよ」

凜の用事は電話で済ませられるのだが、士郎と慎二が同盟するのをなんとか阻止するか、自分も同盟に入れるようにできないかを必死に考えてる。親友である2人が同盟するのは明白であり、セイバーとアサシンの組み合わせはきっと凶悪なコンビになると凜は予想していた。

セイバーが真正面から敵と戦い、アサシンは裏からマスターを狩る。そんなことをやられれば、まず勝てない。騎士であろうセイバーがそんな作戦を受け入れるか疑問だが、受け入れられたら凜にとっては非常にまずいことになるのだ。

「冬木教会。ここがサーヴァントを失ったマスターの避難所。保護してくれるらしいから、サーヴァントを失ったからって普通の生活にそのまま戻るなよ」

「む…流石にそんなことはしないぞ」

「どうだかなー、虎の餌やりに朝だけでも戻るんじゃないのか？」

「……………」

「おい、否定しろよ」

しかし、士郎は目を逸らすだけで否定はしなかった。その反応を見た慎二は、士郎が脱落したら無理矢理にでも冬木教会に押し込むのを決心するのだった。

「ちよつと、無駄話してないで、衛宮くんのマスター申請終わらせるわよ。ああそつだ、アーチャー、貴方は外で待っていて。あいつにわざわざ貴方の姿を見せる必要も無いし」

「了解した」

「…………シロウ、私も外で待っています」

「わかった」

「アサシン」

「判っております」

サーヴァントを待機させた士郎達は古めかしい教会の扉を開け、閑散とした礼拝堂に足を踏み入れる。

「ほお、最後のマスターが来たと思ったら、意外な客も一緒ではないか」

照明を点けずに、月明かりだけで照らされている礼拝堂の奥から、乾いた靴音を響かせながら1人の男が出てくる。

「春がきたか？」

「違うわよ!!」

ガーツ！と怒鳴る凜を後目に、第五次聖杯戦争の監督役の言峰綺礼は士郎を目に停める。

「見ない顔だな。コレが最後のマスターか？」

「ええそうよ」

「名を聞いておこうか」

「衛宮士郎だ」

「衛宮、士郎だな。もしもサーヴァントを失って、教会に保護を求めらるなら喜んで歓迎すること約束しよう」

士郎にはその言葉が社交辞令ではなく、そうなる事を望んでいるように感じられた。しかし、本能的に敵と感じられた相手の保護を受けるなんて行為は士郎は絶対にしないと決めた。

「マスター申請ってこれだけか？」

「ああそうだが。監督役がマスターの顔を把握わたくしさえしていればそれでいいのでは」

「衛宮くん達は先に外に出て待っていて。個人的な用を済ませるか」

「ああ、わかった」

用が済めばこんな所に長居するつもりが無い士郎は足早に外へと続く扉に近付き、手をかけた。

「喜べ少年」

引き留めるように、綺礼が士郎に向けて言い放つ。

「君の望みはようやく叶う。」

明確な悪が存在しなければ、明確な正義もまた存在できない。14人も望みを持つ者が揃う聖杯戦争では、悪の1つや2つは紛れ込む。その悪を打倒できれば、正義の味方になれるであろう」

喉の奥で嗤っている綺礼を見ずに、士郎と慎二はそのまま外に出る。

「さて、私になんの用があるんだ？」

士郎達が完全に外に出るのを見届けてから綺礼は凜に向き直る。

「完全に個人的な用よ。第四次聖杯戦争での生き残りのキャスターのサーヴァントの情報は無いの？」

「残念ながら、聖堂教会、魔術協会どちらにも一切情報は無い。そもそも未だに現界し続けているかを疑問視する声もある。10年間完全に消息を断っているのではな」

「そう、ならいいわ。……もし、この聖杯戦争に現れたら私に知らせてくれないかしら？」

「監督役として肩入れはできないが、全マスターへの非常事態としてなら知らせよう」

「それだけで十分よ」

それだけ言うと、凜は士郎達を追いかけて外に出る。

「ク……」

嗤った。

「よもや、仇討ちを考えているとはな。だが、そうでなければ愉しめない」

自分の父親の仇を第四次聖杯戦争のキャスターと思い込んでいる凜の姿が、綺礼には酷く滑稽に見えた。きっと、自分が渡したアゾット剣を今も大切に保管しているだろう。アーロニー口を捉えれば、仇討ちに相応しい武器としてソレを持ちだすだろう。

ソレが、本当は父親の命を奪った凶器だと知らずに……

その事も含め、全てを知った時の反応が綺礼は愉しみでならなかった。

「さて、再開しようか。聖杯戦争を……」

誰に言つでもなく、尚も歩いている求道の終着を望みながら、綺
礼は自分の聖杯戦争を再開させる。

全ては、聖杯の内側を知るべく……………

教会（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「ようやく教会に行ったな」

ライダー「展開が遅いですね。次VSバーサーカーではなく、ライダーの予定らしいですが。……紛らわしいですね」

アサシン「それは兎も角、裏話といこうではないか」

ライダー「士郎がやけにあっさりマスターになるのを承諾している所ですかね」

アサシン「原作では前回の悲劇を知って、参加する気になったような気がせんでもないからな。正直に言っつて、違和感があるのだが……」

ライダー「参加する理由は、マスターとなった人物をなるべく助ける為というのがあります。親友の慎二を死ぬかもしれない戦いに、ただ送りだすなんて士郎には出来ないうし、女の子が戦うのもあまり納得してませんからね」

アサシン「マスター殺しは真っ向から反対するタイプであるからな。慎二の腕を切り落とそうとはしたが……」

ライダー「アレは仕方がないでしょう。そのままなら多くの人が死んでいたでしょうから」

アサシン「存外、割り切つているところもあるものよ」

ライダー「では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判つた」

ライダー「それでは、また更新されるまで………」

if? ベリー・クルシメマス(前書き)

本編に関係無し、キャラ崩壊、時間軸?気にすんな
そんな三拍子の揃った、クリスマスネタです。

見ない方が、いいかもしれません。
それでも見ると言うのなら、楽しんでもらえれば幸いです。

if? ベリー・クルシメマス

「集まったか、雑種共!」

集まってはいない。彼等は集められたからであり、たった1人の男によって捕獲されたのだ。

「「「……………」」」

クリスマス。神の子、イエス・キリストの降誕（誕生）を祝うキリスト教の記念日・祭日である。「神の子が人となって生まれて来た事」を祝うことが本質である。

キリスト教の記念日のだが、日本では意味をあまり考えられずそういう日というので普通に祝っている。元々多神教とする考えが根付いているからか、それとも過去に欧米化を進めた影響でなのか日本人は寛容にクリスマスを受け入れている。

しかし、当時はそうであつたかもしれないが、次代の流れか聖なる夜の漢字を変えて、性なる夜などと言って貶めたり、無駄にカツプルがイチャついたりする日に変わってしまった。

「私のマスターでありながら、クリスマスを祝っている愚かなマスターに正義の鉄槌を下すのを手伝う栄光を貴様等雑種にくれてやる」

（勝手にやれ）

（器が狭いのお）

（生きて、帰れるかな…………）

クリスマスとは？そんな題名の本を小脇に抱えた世界最古の王にして、英雄王であるギルガメツシュが、キャスター（アーロニーロ）、ライダー（イスカンダル）、ウェイバーを前に仁王立ちして宣言した。全員、王の財宝に納められている物でしつかりと縛られている。キャスターはグレイブニル　もしくはグレイブニールと呼ぶ。北欧神話でフェンリルという怪物を縛った魔法の紐（足枷）の原型で、ライダーは天の鎖で、ウェイバーは頑丈なロープによつてしつかりと拘束されている。それぞれに相応しい拘束具を使っているあたりから本気が窺える。

アーチャー（ギルガメツシュ）が気に入くない事はただ1つ。神の子とされるキリストの誕生祭をマスターである時臣が家族全員で祝っている事だ。街がクリスマススムードというのも勘に触るが、そういう風習だとして半ば諦めている。だがしかし、時臣が祝うのは断じて許せない。時臣はアーチャーが神を嫌っているのを知っている上で、クリスマスを祝っているのだから。

しかし、遠坂家が魔導の道を歩く前はごく普通のキリスト教徒であり、聖堂教会との繋がりもそんなところから始まっている。キリスト教徒が神嫌いの英霊を召喚した時点で、相性が悪かったのかもしれない。

「具体的に何をするんだ？もしかしたら役に立たないかもしれないぞ」
腹の中ではどうやって逃げようか模索しているキャスターが聞く。クリスマスだから、という理由で監督役の聖堂教会によつて聖杯戦争は一時休止となっているので、キャスターはこれ幸いと街中から元気が有り余っている若いバカップルから生命力を魔力に変換して奪ってやるうとしていたのだ。

しかし、準備の段階でアーチャーに出会った。それは別にいい。教会のルールに従わなくても、昼間から戦おうなんて考えないと解

つていたのでそのままスルーか、世間話でもして終わりだと思っていた。

その考えが甘かった。アーチャーはキャスターを発見すると、捕獲にかかった。キャスターは理由が解らず、とにかく逃げようとしたが遅かった。影のゲートで人目も憚らずに逃げようとしたのだが、そうする間もなく王の財宝に納められていたありつたけの束縛効果の持つ宝具によって捕らえられた。

「なに、時臣のクリスマスパーティーをぶち壊す手伝いをすればいい。あやつは今夜妻と娘とで開くそうだからな。我様では、全てを壊してしまう。そこまでは、我様の望むところではない」

(妻と娘と、ねえ……。娘と、か……)

娘というキーワードがキャスターの変な所を刺激し始めた。

「全力で協力しよう」

「オオイツ!!?」

当然のように一家の団欒を壊すと宣言したアーチャーと、それに全力で協力すると答えたキャスターにライダーとウェイバーが驚愕する。

「見損なつたぞキャスター!」

「英雄のする事じゃないだろ!」

ライダーとウェイバーが非難するが、キャスターはどこ吹く風とあったところだ。

「それがどうした。俺は英雄だが、それは所詮は伝承や伝説の中でしかない。本質だけでいえば、俺は反英霊だ」

「なん……だと……？」

「さらりと秘密をばらしたキャスターだが、それだけで終わらなかつた。」

「だいたいな、クリスマスに家族とすごせるだけでも妬ましい。俺にだって家族がいた。生前だったら、一緒にすごしていただろう。しかし、今は独りだ。そう、独りだ！ハッキリ言うて虚しいんだよ！いいじゃないか！虚しさや渴きを無くす為に人を殺してその魂魄を喰わずに、今夜だけ幸せをぶち壊してやつてるだけで抑えてやるんだからッ！」

クリスマスパーティーを台無しにしたり！幸せな生活を根底から覆したり！色々と錯覚させたり！果ては、オサレな化け物に成れるようにしてやつたりな！」

「「「「……………」」」」

こいつ、何をやらかす気だ……？3人とも、この時だけは心が一つになっていた。

クリスマスパーティーをぶち壊そうと考えているアーチャーですら、キャスターが最後らへんに言った事に薄ら寒いものを感じ、ドン引きしている。

「カッカッカ！何やら騒がしいと思ったら、愉快的事を企てているようじゃのう」

「どうやら、クリスマスと言う地獄を味わうのは私1人だけではないようだな」

「クリスマス？キリスト教の祭典など糞くらえ！我らはイスラム教だ！」

そこに場を混乱させようと狙ったかのように、間桐臓硯、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、アサシン（百の貌のハサン）が登場する。

「なあッ！？」

その登場に怯えたのはウェイバーだ。この中で最も弱いのである。その上に自分は料理される前の家畜よろしく頑丈な縄で縛られているのだ。これで怯えないのは頭のネジがぶっ飛んだ奴か、正しく状況を把握できない奴だけだ。

「そう怖がるでない小童よ。わしらはキャスターめの声に惹かれてきただけじゃ」

臓硯は500年以上生きている魔術師の貫録を見せた。

「キャスターよ、気持ち痛いほどに解るぞ。嗚呼、時代の頃からこうなった。毎年毎年幸せそうにアベックどもが夜の街を闊歩したり、誰の目があるか判らんとこころで愛を囁きあたりしおって……忌々しいわ！！！」

が、その貫録はすぐさまなりを潜めて、口角に泡を飛ばす勢いで心の内を激しい剣幕で吐露する。一番冬木の街を永く見ているから

か、その言葉はキャスターの言葉より重く、ドロドロとした怨念が感じられる。

「まったくもってそうだ！日本という国が低俗と思っていたが、文化を歪めて浅ましい欲望の口実するなど反吐が出る！」

臓硯につられて、今度はケイネスが怒鳴る。

実はケイネスはクリスマスで浮足立っている冬木の街で、ソラウの気を自分に向けさせるプランを考えていた。一緒にイルミネーションを見たり、夜景の見えるレストランで一緒に食事をしたりとするつもりだった。そう、だったのだ。なぜ過去形かと言うと、それを知ったランサーがケイネスに気をつかって昼間から姿を消した。

しかし、ランサーが姿を消したと知ったソラウは、ランサーを捜して1人で出掛けた。ご丁寧に書き置きで、ケイネスのプランが破綻する時間までに戻ると書いて……………

「こっちは神父にマスターに半笑いで、クリスマスパーティーに参加するか？
と言われた！」

「アレは絶対に解っていないながら言っておる！」

「だいたい、キリスト教徒が我らハサンを召喚するな！」

「綺礼様……………私だけでは止められません……………」

アサシンはそれぞれ人格が好き勝手に騒ぎ出す。考えようによっては脳内会議の様子であろう。

「静まれい！！！！」

見かねたライダーが一際大きな声を轟かせる。効果は観面で全員が口を噤んでライダーを注視する。

「貴様等がクリスマスという今日日きょうじつを寂しく過ごすというのは解った。それで楽しく過ごす者達を羨ましがり、妬んでそれをぶち壊そうというのもなあ。

しかし！誇る名を持つ英霊が、そのような事をするのは非常に嘆かわしい。それに何も1人ではなからう。ここに同士が何人もおるではないか。どうだ？ここに居る皆で今夜は酒を酌み交わすといのは」

ニツカリと笑ってライダーは締めくくる。鎖でグルグル巻きにされてなければ、見栄えも良かったのだろう。懐柔しようとい魂胆がライダーにあつての提案なのだが。

腹の内が解る筈もないので、カリスマ：Aの後押しもあつてそれで収まりそうであつた。

「ほざくな雑種！我がぶち壊そうというのは寂しい訳ではないわ！」

「「「「「イエス！マイ・ロード！」「」「」「」

「オイツ！！？」

しかし、カリスマはより大きなカリスマで覆された。なぜかウエイバーも一緒になって、どこの国の軍人かのようにアーチャーに

両手の自由な者は 敬礼をしている。

「令呪に告げる。聖杯の規律に従い、この者、我がサーヴァントに、この僕に絶対服従を約束させよ」

しかも、令呪3画全部を使ってライダーに従属を強制した。

「阿保らしいわ……」

虚しく、ライダーの音が響いた。

3時間後。色々と準備を終えた英霊なにも恐れぬ猛者と魔術師達は、遠坂邸の庭に集合していた。なぜそんな場所に平然と集合できるかというと、アサシンがまず遠坂邸に侵入し、結界の基点となっている宝石にキャスターが用意した使い捨ての結界の掌握用の魔術礼装を使う事によって、遠坂邸の結界全てがキャスターの制御下に収まっているからである。

「準備はよいな。雑種共」

「アヨンの準備は出来ている」

「これは誅罰だ」

「遠坂の小童に目にモノを見せてくれるわ」

「ツリーを切り倒せるようにチェーンソーを持って来た」

「僕にうってつけの舞台じゃないか」

「ハア……」

ライダー以外は狂喜にとりつかれてはしゃいでいる。アーチャーの号令を今か今かと待っている。

クリスマスパーティーを台無しにする計画はこうだ。

まず最初に、ケーキが切り分けられて配られると同時にケーキの中に蟲を転移させる。

次に蟲が発見されて混乱しているところに、キャスターの用意したアヨン（角がトナカイ風になっている）を繋いだソリで壁を壊して遠坂邸内に侵入。

最後に通り過ぎる僅かな時間で、遠坂家の面々にむけてバズーカクラッカー　ただの馬鹿でかいクラッカー　を撃つ。そして次は、アサシンたつての希望である冬木教会に行く予定である。

「おい、ケーキが切り分けられはじめたぞ」

「カツカツカ、この蟲を転移させるのだぞキャスター」

「これはまた……酷い蟲を……」

臓硯が用意した蟲は、アレに酷似した気色悪い蟲であった。しかし、中止にするわけもいかずにキャスターはケーキの中に蟲を転移させた。

それを知らずに、最初に凜がケーキをフォークで食べやすい大きさにしようと突き立てた。

「？」

何かがフォークに刺さる。中でイチゴでも入っていたのだろうか

思った凜は、ソレをケーキから取り出す。

「……」

止まった。自分のケーキから見たことの無いナニカが出てきたのを脳が受け入れず、思考停止をした。それは長くは続かず、思考能力が徐々に凜に戻り始める。

「きゃああああああああああアアアア！！！！！！！！！！」

ウネウネと蟲が動いたにあわせ、あらん限りの絶叫を上げて凜はフォークに蟲を突き刺したまま放り投げる。綺麗な放物線を描いてそれは葵のケーキにぶちあたって葵のケーキから蟲を露出させる。

「いやああああああああアアアア！！！！！！！！！！」

似ているモノを見たことのある葵は凜以上の金切り声を上げる。妻と娘のケーキから蟲が出現したのを見た時臣は、ツギギギ…なんて擬音が似合いそうな固い動きでケーキの中を確認する。……いた。それを確認した時臣は、迷わずに皿ごとケーキを床に叩きつけてトドメに蟲を踏み潰す。

「ざまあWWW」

誰が言ったか定かではないが、ほぼ全員が唾っていた。他人の不幸が蜜の味といったところであろう。

「どれ、時臣の目の前で妻と子を蟲で犯してやるっ」

「……………ツッ！」「……………」

「おい、止める！」

「やり過ぎだ！蟲風情が！」

「それは誅罰の域を超えている！」

「止めんか！」

「これが、魔術師……？」

「妻と子に罪はないだろ！」

窓から中の様子を見れば、蟲が葵と凜に迫っている。

「臧硯、大人しくしている！」

キャスターが止めさせようと臧硯を潰しにかかるが、臧硯は触れられる前に形を崩して逃げる。

「誰でもいい！臧硯を捕まえろ！」

数が多く、小さい上に結構素早い蟲はちょこまかと走り回りながら逃げるので、サーヴァントでも全部を捕まえるのは至難の業である。あまり触りたくないというのが、捕まえられない理由の半分以上を占めているのも大きいだろう。

「カツカツカ！無駄じゃ無駄！」

臧硯は嘲笑いながらも蟲を操って葵と凜に蟲をけしかける。

「Intensive Eina scherung」
我が敵の火葬 は 苛 烈 なる べし

しかし、魔術礼装を持った時臣にとっては、飛んで火に入る夏の虫となんら変わらなかつた。あっさりと、葵と凜に襲い掛かりそうになっていた蟲は灰も残さず燃やしつくされた。

「葵、凜、大丈夫かい？」

「はい。あなた」

「お、お父様の御蔭でなんとか……」

「……………次行こうか……」

どうにも入り辛い空気になっていたので、臓硯以外はその提案に賛成した。

『ベリー・クルシメマス!!』

冬木教会の一室はその言葉と共に、強烈な破裂音、テープ、色紙が炸裂した。アーチャー、キャスター、ライダー、アサシン（約80人）、ウェイバー、ケイネスの総勢約85人によるバズーカクラッカーは、とりあえず綺礼と璃正の親子水入らずの食事を台無しにした。そんな人数の入れる部屋は無いだろぅというツツコミは無粋である。

「「……………」」

「良い夜を」

何を言っている。そんな文句を言う前に、全員がキャスターの影に飲み込まれてどこぞに転移する。

「なん…だったのでしょうか…?」

「解らん…時臣くんに連絡を取ってみようと思う」

困惑した面持ちで、とりあえずアーチャーのマスターである時臣に連絡をする璃正であった。

「さっきのは、甘かったか？」

「我は時臣のクリスマスパーティーを台無しにしてやったから、どうでもよい」

「やはり、私の最強である月霊髓液の恐ろしさを見せた方がインパクトがあったのではないのか？」

リーダー格になっている3人であるキャスター、アーチャー、ケイネスがソリの後方で話し合っている。ウェイバー、アサシン、ラ

イダーはソリ前方で特に話す事も無いので黙っている。臍硯は遠坂邸に置いていった。

どうでもいいかもしれないが、アヨンの手綱を握っているのはライダーである。

「次はどうするというんだ。方針が決まらないなら、帰らせてもらうぞ」

「次はアインツベルンに攻め入るぞ！文句のある者いないであろう」

「勝手にしろ。俺は弾込めに専念する」

「我は、次は見ているだけにさせてもらう」

そんなこんなで、次の狙いはアインツベルンの森に決定し、ソリはその方角に向かって進む。

「ん？んんっ？」

「おい、どうしたのだ小僧」

「いや、なんかあそこで光ってないか？」

ソリから身を乗りださないように注意しながら、ウェイバーは城を指差す。

「ん〜どれどれ。光っておるのお」

城門あたりで、一点が光を放っている。気のせいだろうか？火による光とも、電球による人工的な光でもない。それは、英霊の輝きに酷似している。

それに気付いた刹那に、アーチャー、キャスター、ライダー、アサシン（現在は高張らないように1人になっている）、ウェイバー、ケイネスが乗ったソリを掻き消すように飲み込んだ。

「舞弥、敵はどうなりましたか？」

「スコープで確認した限りは、全員が『約束された勝利の剣』で蒸発したようです」

ウェイバーとライダーが見た光は、『約束された勝利の剣』による光の斬撃であった。

「しかし、切嗣はよく今夜敵が攻めてくると判りましたね。今日は監督役によって休戦だというのに」

「（かつて自分がやった）経験からでしょう」

一夜の内に、5体のサーヴァント（ランサーはケイネスが死んだので現界を止めました）が消えた異例の聖杯戦争。翌日の夜にセイ

バーはバーサーカーと一騎討ちをし、令呪による強制で辛くも勝利を納めたが、聖杯をその手で破壊することになった。

GOOD END?

おまけ

「キャスターの奴、遅いな……。折角ケーキとか買ってきたのに」

間桐雁夜は切り分けられたケーキを見ながら呟く。

クリスマスなのだから、それらしい事をしようと雁夜はクリスマスパーティーの準備をしてキャスターの帰りを待っているのだ。一応は、昼過ぎに帰って来たキャスターにソレを伝えのだが、キャスターはアヨンとアヨン用の手綱を作るのに忙しくて聞いていなかった。

「先に食べちゃおうか、桜ちゃん」

「はいっ！」

満点の笑顔を咲かせて、桜はケーキを食べ始めるのだった。

龍之介は街で普通に殺人を愉しんでいたとさ……

if? ベリー・クルシメマス(後書き)

実際、臓硯はクリスマスを辟易していそうだと思う……最低でも4
50回は笑えないクリスマスを過ごしてそうだし……

王の再来（前書き）

感想 教授様

ありがとうございます！

ここんところ投稿ペースが落ちている……

結構忙しいんですよ。就職活動とかしなくちゃいけないし、モンハンも面白い。

んでもって、物欲センサーが健在なのを認識させられる。たぶん今年最後の投稿になると思います。

王の再来

ロード・エルメロイエエ世、本名ウェイバー・ベルベットは時計塔における有名な講師である。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが婚約者であるソラウ・ヌアザレ・ソフィアリと共に、第四次聖杯戦争にて行方不明になってしまい彼が当主だったアーチボルト家は、ケイネスも含めた9代に渡る魔導の結晶たる魔術刻印も失って一気に没落した。

その没落したアーチボルト家を立て直したは有名な話であるが、当時はそこまで注目はされなかった。理由は、魔術師の才能は家でほとんど決まり、本人が魔術師として歴史が浅かった家の生まれであったからだ。が、講師としての才能はどの講師よりもあり、彼の元で学んだ人物はこの如く大成した。それによって、有名な講師となった。

しかし、本人は満足していない。講師としては大成したが、魔術師としては大成していないからだ。それでも、教え子に王であるイスカンダルと駆け抜けた第四次聖杯戦争での記憶を語る時には、始終不機嫌そうな顔ではなく、懐かしむような表情になる。

講師としての生活には不満は無い。不満があるとしたら、魔術師として大成できない自分自身にだ。そんな折だった。冬木の聖杯戦争が起きそうだと噂を聞いたのと、10年前とまったく同じ令呪が刻まれたのは……

令呪を見た途端に、ウェイバーの心は揺れ動いた。参加するか、否か。しかし、そんな揺れははすぐに収まった。

なにより、自分の王が呼んでいると思った。再び現世で遠征をすべく、英霊の座より呼び掛けているのだと。しかし、ウェイバーは監視されていた。聖杯戦争に参加しようとする計塔から逃げ出さないうかアーチボルト家から危惧されているからだ。

まあ、懐かしそうと同時に寂しげに聖杯戦争の時の事を語るのだから、参加するのではないかと警戒するのは当然であろう。

魔術協会からすれば冬木の聖杯戦争は、根源に至る可能性であると共に、災難を引き起こす儀式なのだ。ウェイバーは前回の聖杯戦争をなんとか生き残って帰って来れたが、ケイネスは行方不明になり、サーヴァントという人間では抵抗するのも難しい存在を野に放ったのだ。できれば優秀な講師はそんな儀式に送りだして失いたくないのだ。

魔術教会からマスターは1人派遣されるのだが、その人物はウェイバーと違って戦闘要員とも言える武闘派魔術師である。流石に気取られずにウェイバーはその人物を調べるなどは出来なかったが、持って行くつもりが必要最低限な物　イスカンダルのマントの切れ端、パスポート、多額の現金　をいつも使っているバックに入れて脱走の機会をずっと窺った。下手に計画を練ると感付かれると考えたのと、その位の無茶をしなければ聖杯戦争を勝ち残れないと解っているからだ。

「ざまあ見やがれッ！」

そして、影ながら元教え子達が自分の為に尽力していたと露知らずに、ウェイバーは見事に時計塔から脱走して、二度と踏まないと思っていた冬木の地を踏むのであった。10年前より軽装なのは、特に気にも留めなかった。なにせ、10年前は魔術師の腕なんて一切役に立たず、使うのは精々は暗示位だと高を括っていた。

それに、ウェイバーにとって聖杯戦争の主役は、サーヴァントだという想いもあるからであろう。

無謀とも思える装備で冬木に辿り着いたウェイバーだが、まったく考えなしで冬木に来たのではない。少なくとも当面は必要になる物の目星はしっかりと付けてあり、拠点もその内に入っていた。

「ようやく着いたな。柳桐寺」

ウェイバーが拠点にしようと考えていたのは、冬木で最大の霊脈を持つ柳桐寺であった。ここならイスカンドルを召喚するのに申し分なく、張られている結界によってサーヴァントは正面からしか侵入できないので、防御にも優れている。『神威の車輪』を使って移動する場合には外に出ないといけませんが、その程度はデメリットにすらならない。

デメリットらしいデメリットと言えば、発見され易いという点だろう。始まりの御三家は柳桐寺が最大の霊脈を持っていると知っているはずで、外来のマスターも霊脈くらいは調べるだろうから必然的に目を付けられる。しかし、自分が確保しなければ別のマスターが確保して使う。それなら、自分が先に確保して使った方がよい。それに、『神威の車輪』に乗っては山門が無事で済まなさそうなので、神秘の秘匿をする上でも攻め入るのは避けたいところである。

「先に：拠点にされてないだろうか」

心配なのはそこであった。外来のマスターは4枠あり、自分以外のマスターが先に拠点にしている可能性も無きにあらず。だが、そんな心配は杞憂であった。そもそも、日本の開放的な家屋は魔術師としての工房にするのには不向きであり、柳桐寺をまず注意してもそこを拠点にしようとは考えない。

自分の腕に自身のある魔術師なら、しっかりとした工房を作ろうとするのでわざわざ不向きな柳桐寺に拠点を構えてまで霊脈を抑えようとは思わない。一時的な拠点とするなら尚更である。せっかく作り上げたのに、場合によっては聖杯戦争開始から1、2週間で役目を果たすのだから当然であろう。

幸先が良いと感じたウェイバーは、寺の住職だけに暗示を掛けて、

日本に観光に来た住職の知人に成りすました。

とりあえず拠点を確保できたウェイバーは次に召喚の準備を始めた。召喚の陣を書くに使う生きた鶏、一番大きいサイズの冬物一揃い、ホメロスの詩集、世界地図、望遠鏡、リュックサック、自分の着替えを養鶏場とデパートで買ったウェイバーは、その夜に寺の住人が眠るのを見計らって召喚を始める。

「 告げる」

再び紡ぐと置いていなかった詠唱をウェイバーは紡ぐ。

「 汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

再び託そう。

己の命運を、そして、今度は

「 聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

奇跡をこの手に。

6騎の敵サーヴァントを征服し、勝ち鬨を挙げれば次は世界を相手に戦争だ。

「 誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

そう、聖杯戦争などは通過点に過ぎない。再び王と巡り会える期待と興奮を胸に、ウェイバーは詠唱を完成させた。

荒れ狂う突風の中に、見覚えのある巨躯のシルエットを見ただけ

で、ウェイバーは感極まったがなんとか涙を堪えて王の言葉を待つ。

「貴様が、余のマスターか？」

忘れもしない野太い声。

「いや、違う」

ライダーとして召喚されたイスカンダルが怪訝な顔をするが、ウェイバーはそのまま続ける。

「私は貴方の家臣だ。王よ」

ウェイバーは片膝を地面に着き、己の王に頭を垂れた。

王の再来（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「今回はライダー召喚までか」

ライダー「ほとんどの人が予想していたであろうイスカンドルの再臨！……まあ、そのせいもあって、私が召喚されなかつたんですけど」

アサシン「何気に拙者が召喚されない要因にもなっておるな。慎二めが召喚できるサーヴァントの枠がアサシンしかおらんとってな」

ライダー「ボツにされた案なのですが、イスカンドルが召喚されずにサーヴァントの配役はそのままでも考えられたんです。それでも、桜は今書かれるとの扱いは変わらないそうですが……」

アサシン「原作ヒロインなのに扱いが悪いな……」

ライダー「結果より、過程を重視したらそうするしかないんです。桜が私を召喚する結果を重視したら、キャスターが門番がいなくて涙目か、慎二がマスターになれなくて涙目ですから」

アサシン「慎二を冷遇しても批判などは来そうにないがな。そういえば、女狐はどうしたのだ？寺が占拠されておるから早速退場か？」

ライダー「その辺は次の更新まで待つ必要がありますね。では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

キャスター（前書き）

感想 麻布十番様、教授様、
適切な評論家様
ありがとうございます！

2012/01/01

あと、あけましておめでとうございます！

キャスター

召喚者はくだらない男だった。キャスターを召喚したのに不満を持ち、キャスターに手厳しく当たった。キャスターの魔力量以下の魔力しか使えないようにするなんて、馬鹿げた事に令呪を使った時には既に見限られていた。

使い魔は魔術師にとって道具でしかない。だから、キャスターはそういう使い魔を演じてやった。

本当にくだらない男だった。英霊が自分の言いなりになっているのを気を良くして、お似合いなくならない命令で令呪を全部使わせた。「令呪がなければ、マスターとまず判らない」そんな馬鹿みたいな言葉に騙されたのだから、誰かが知ればお笑い草だろう。

「フ…フフ……」

くだらない男だったが、キャスターを現界させる楔になっていたマスターであり、魔力供給していたのは変わらない。マスターを失ったサーヴァントは長くは現界できない。新しいマスターを見つけれなければ、そのまま消滅するしかない。

魔力があれば、少しは無理が効くのと、魔術師がいるかもしれないという理由で、冬木最大の霊脈がある柳桐寺を目指した。

そんなのは、悪あがきでしかないと言った。キャスターは解っていた。いくら保有魔力量の多いキャスターでも、単独行動のスキルを持っていないので長い現界は不可能。現界している時間を少しでも長くする為に魔術による強化などを使わずに移動しなければならず、あまり高くない身体能力のみで移動しなければならなかった。一挙手一投足にも魔力を消費するサーヴァントにそれは無謀であった。

聖杯戦争は、折角掴んだチャンスなのだ。神話の時代に生き、そ

して死んだこの身が掴んだ奇跡に等しい可能性。何としてでも勝ち残って、望みを叶える。あまり多くは望まなく、ただ幸福を享受しただけなのだ。人並みの幸せな人生を歩めればいいだけなのだ。そんな有り触れた望みなのに、生前は叶わなかった。だから、せめて2度目は……と、望んだのだ。

（サー……ヴァントの……気配）

魔力は既に尽きかけ、死に体となっても柳桐寺にまでは辿り着けなかった。柳桐寺が山頂にある円蔵山の麓にまでこれた。だがしかし、長く続く階段に絶望を見たのと、魔力の枯渇で倒れた。そこに、追い打ちを掛けるようにサーヴァントの気配を感じ取った。

（筋肉ダルマ……）

なんとか気配のする階段の方を向いて見えたのは、苦手な筋肉ムキムキの男のサーヴァントであった。

「お……大……夫……？」

意識が遠のきつつあるキャスターには、なぜか困ったような顔になっていた。敵の言葉がハッキリと聞き取れず、途切れ途切れに聞こえる。

「キャス……のサー……ン……か？」

そのマスターと思しき男の魔術師が、倒れているキャスターを抱き上げてなにかを聞いてくるが、キャスターは既に諦めた心境であった。最弱であるとの烙印を捺されているキャスターを、わざわざ助けるなんてしないであろう。ましてや、こんな罠のような状況で

は尚更である。

(さっきの、筋肉ダルマよりは良い男ね……)

そんな事を思いつつ、キャスターは意識を手放したのだった。

「前回の記憶がない……か」

予想はしていた。冬木の聖杯戦争について書かれていた本に、記憶は残らないなんて記述がたしかあったはずだ。しかし、それを確かめたなんて記述は無かった。だから、もしかしたら、理論上だけでの話であって、実際は違つかもしれないと思っていた。思いたかった。

「馬鹿馬鹿しい。私を知らない王というだけだ。それでも、なんら変わりはない」

自分を守ってくれたとか、そんな理由で家臣なった訳ではない。その生き様に、その『夢』に、自分の生涯を賭けても良いと思えたから家臣となったのだ。

共に駆けた第四次聖杯戦争を憶えていなくとも、それだけで揺らぐようでは家臣としては失格だ。

それに、王は受け入れてくれた。いきなりの家臣宣言に動じる訳でもなく、笑って受け入れてくれたではないか。

『ト・ファイロライエ
彼方にこそ栄え在り』共に駆け抜ける。そう誓ったのだ。他で

もない王と自分自身に。

「ウェイバー、キャスターの様子はどうだ」

ふすまを開けて、イスカンドルが保護したキャスターの様子を見に来た。名前を最初から呼んでくれるのが、ちよつと嬉しいウェイバーだった。

「眠ったままだ。魔力が尽きかけてたところを見ると、マスターを見限ったか、マスターだけがやられたんだろう。無意識でもパスを繋いだんだから、流石はキャスターと言ったところだろう」

怪我は一切無く、ただ消えかけていた。そこから考えられるのはマスターはまず死んでいる。相手の拠点に入り込む策略も考えられたが、普通は敵サーヴァントを助けようなんてするマスターとサーヴァントなんていないし、契約が完全に切れていたようであったからまずありえない。

サーヴァントだって感情があるし、独自の考えがある。完全に支配下におけない存在を、下手をすれば敵の駒になる危険を冒してまでやるような作戦ではない。それこそ、狂っていなければまずやらない作戦だ。

「うむ。交渉もせんうちに消えられては叶わんからな」

イスカンドルは全サーヴァントを自分の家臣にしようと考えていた。バーサーカーはどうしようもないかも知れないが、それ以外は可能性はゼロではない。問題があるとすれば……

(サーヴァント2体の現界を保つ……思った以上にキツイものがあるな)

召喚に魔力を使ったのもあるだろうが、ウェイバーは危ないと感じていた。キャスターに送る魔力は必要最低限しか送っていないが、それでもウェイバーにとつて負担は大きい。元々魔術回路の数はそこまで多くはなく、当然生成する魔力も多くはない。本来なら新しいサーヴァントに割ける魔力の余裕などウェイバーにはない。

だが、幸いにも拾ったのはキャスターだ。そして、自分の拠点は冬木最大の霊脈を持つ柳桐寺。

足りないのなら、他から持つてくればいい。霊脈から魔力を汲み上げさせれば、キャスター1体を現界させるのには十分な魔力が得られるだろう。

(マスターも一緒に家臣に加えないと、私がもたんな)

それに、キャスターなら工房の敷設においてはサーヴァント中最高であり、簡単に割り出される拠点なら誘い込むのが容易である。

時間が経てば経つほどに魔力を貯め込んで強力になるのだから、きつと死に物狂いで攻めてくるであろう。

尤も、待つのはイスカンドルの性格的にあまり選択しないだろう。それでも、懸念の1つであった拠点の防衛はキャスターに任せればとりあえずは安心である。

全部が、キャスターがイスカンドルに降つたら話ではあるのだが……

もし敵対するとキャスターが言えば、イスカンドルはきつと普通に解放するだろう。抵抗できない相手をそのまま斬るなんてしそうにないのと、現界し続けていれば征服できるかもしれないからだ。それこそ、『夢』を真つ向から汚したり、殺そうとしてこない限りは……

「ん……」

キャスターが身動きしながら、僅かに瞼を上げる。

「気がついたか……?」

いきなり声を掛けられたからか、キャスターはビクッと起した上半身を強張らせる。

「おおっ、意識はハッキリとしているか?余の言っている事が判るか?」

「え、ええ……」

「イスカンドル。悪いが、先に私と話をさせてくれないか?これでも、魔術師だ。解り合える部分は私の方が多い」

「そうだな。余は向こうに行っているから、何かあったらすぐに呼ぶのだぞ」

イスカンドルが席を外すのは、危害を加えるつもりは無いとのアピール。

「……イスカンドルって……」

「王の真名だ。誇るべき真名を隠す必要は無いってのが王と私の意見だからな」

マスターやサーヴァントが聞けば、一発で判るかもしれないが大した意味は無い。どうせ速攻でばらすあるうから、ウェイバーは始めから隠すつもりは無い。それに、イスカンドルとい名は男性名と

して好んでつけられもする。なら、見るからに外人が名乗っても不審には思われない。

「さて、アンタには3通りの選択肢がある。

王の家臣となつて、共に聖杯戦争を戦う。

私達と敵対して、此処を去る。

答えを出すのを保留にして、もう少し此処に残る。だ。

全部王の了承は得ているから、好きなのを選んでくれ。オススメは、私のように家臣になるだな。王は、世界を征するからな」

「……」

キャスターは迷つた。家臣となれば、束縛はされるかもしれないが、聖杯に手が届く位置まで行ける。聖杯戦争はバトルロワイヤルとほとんどの参加者は考えているであろうから、サーヴァント2体が協力すれば大抵の敵に勝てる。

去るのは、正直に言つて厳しいモノがある。手駒にする意図があつてか、今は魔力供給こそされているが、すぐにカットされて倒れる前に戻るだけだ。それでも、幸運が続けば隠れるのに最適な場所がすぐに見つかる。

保留にする。キャスターにとっては、これが一番不可解であつた。どんな意図があるかがイマイチ解らない。

ウェイバーには、共に戦場を駆け抜けければキャスターもイスカンダルに影響されるのではないか？との考えあり、いきなり言つても家臣ならなとも思っているからだ。王を知れば、きっと同じ『夢』を懐くだろうとの自信がウェイバーにはあつた。

「私は……」

キャスター（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「これはなんとも……予想が難しくなってきたな」

ライダー「まさかの邂逅。いえ、拠点の時点ではほとんどの方が予想していたでしょうか？」

アサシン「戦車と魔砲淑女で移動砲台か？絵にしたらずし微妙な気がするのだが……」

ライダー「アサシン、何を言っているのですか？まだ協力関係なると本編では出ていませんよ？」

アサシン「ふむ、少しはやまったか？まあ、よいではないか。それより、なぜウェイバーは女狐をキャスターと判ったのだ？」

ライダー「ステータスでキャスターと目星をつけたそうですよ」

アサシン「それより、また中途半端なところで切れたが次は……」

ライダー「ええ、士郎達の方に戻って戦闘。その次はまたイスカンのダルの予定ですね」

アサシン「ついに全サーヴァントが出揃うのか……」

ライダー「9話使ってやっと出揃いますがなにか？」

アサシン「……そういえば、原作で女狐のマスターであった宗一郎殿はどうなったのだ？ 此処に来ておらぬが……」

ライダー「なんでも、『一応は作品内にいるので、リストラキャラにカウントしない』そうです。出番は名前が出る程度らしいですが……」

アサシン「存在するからか……」

ライダー「私達と違って、人間ですから……では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

負け（前書き）

感想 クレイ様、教授様、 〃〃〃様
ありがとうございます！

ここで、ちょっと修正を……
感想でアローニーロが持っている令呪を17画と言いましたが、Z
eroを読み直して雁夜さんに2画渡すのを数に入れていなかった
のを気付いたので、19画とします。

負け

「遠坂、話は終わったのか？」

「ええ、終わったわよ」

元より凜は綺礼からの情報は期待していなかった。一度だけ、ア
ーロニーロの情報聞いた事があったが、肝心の情報が少なく弱点
など見当もつかなかった。

そもそも、綺礼は第四次聖杯戦争を表向きは最初に脱落したので、
凜に話したのは父であった璃正が監督役として知った情報だけであ
る。元より全てを話す気などは無く、詳しすぎると何かと疑われる
かもしれないと警戒もしていた。

「それじゃあ、帰えろうか」

慎二の言葉に全員が頷く。聖杯戦争は主に夜に行われるが、彼等
は学生である。明日も授業がしつかりとあり、士郎と慎二には部活
までもある。休めばいいのではないか？と思うかもしれないが、聖
杯戦争の時期について昨日まで健康だった人物が休むのは「自分がマ
スターです」と言っているようなものだ。

マスターが学校の関係者だったり、学校に監視やらなんやらがあ
ったらの話になるが、警戒しすぎくらいが戦争中は丁度良いのだ。
士郎だけは、そこまで考えていないのだが……

「お話は終わった？」

クスクスと笑いながら、士郎達以外の声が響く。この時間、この
タイミングで話掛けてくる相手など簡単に予想がつく。敵のマスタ

「サーヴァントだ。」

銀髪に赤い瞳の少女と、全身が鉛色の巨体を持ったサーヴァントが立っていた。

「初めまして、お兄ちゃん」

スカートの裾を持ち上げて、優雅に一礼する。その行動だけで、高貴な生まれだと認識できてしまう。見た目には不相応な微笑みをする、少女はたった一言の命令を己がサーヴァントにする。

「殺っちゃえ、バーサーカー」

「ッ！」

咆哮とも雄叫びとも取れる声を響かせて、バーサーカーが跳ぶ。2メートルを超える巨体の跳躍は「大きなモノほど動きが遅い」との常識をあつさり覆して、一直線で敵に向かって行く。

しかし、その程度でうるたえるサーヴァントは居なかった。

直感で来ると判っていたセイバーが先陣を切ってバーサーカーへと恐れずに向かって行き、セイバーの影に隠れるようにアサシンが駆ける。その間にアーチャーは弓を持ち、引き絞る。

セイバー達は一目で、バーサーカーが危険だと判断した。生前の力の絶頂期の姿で現界するサーヴァントが見かけ倒しである筈もなく、少なくとも見た目だけで判断する限りはその筋力は凄まじいであろう。なお且つ、マスターと見受けられる少女がバーサーカーと呼んだのだから、その能力は元より底上げされている。

ならば、真正面からの力勝負はするべきではない。セイバー、アーチャー、アサシンはそう考えた。

セイバーは十全に力を発揮できないから考え、アーチャーは元より力勝負するような考えは持ってない。アサシンは言わずもがな。

セイバーはバーサーカーの斧剣を横に打ち払う。真つ向から打ち合う訳ではないので、十全でないセイバーでも可能であった。続いて、セイバーの後ろにピツタリとついていたアサシンが跳び上がった。バーサーカーの目に向かってダークを投擲する。

いくらサーヴァントでも、眼球を破壊されれば一時的ではあるが盲目になる。アサシンはそこから、3人で一気に畳みかけるつもりなのだ。示し合わせた訳ではないが、他のサーヴァントと比べるとどうしても脆弱なアサシンは、より効果的な攻撃を繰り出す必要があるのだ。そして、元より言う事に精通している。堂々と真正面から殺そうとするのは暗殺者としては問題だが、何も自らの手で殺す必要は無い。

拳動が遅れているバーサーカーに、ダークはバーサーカーの眼球にぶつかって弾かれた。

アサシンとセイバーには、なぜそうなったのかが判らなかった。眼球は鍛えて硬くなるとか2人とも聞いたことがない。アサシンは眼球は人体での急所と理解しており、獲物の眼球がダークの一撃を耐え切るなど今まで無かった。だから、当然にも中れば相手を傷付けられると思っていた。

「セイバー、アサシン下がれッ！」

アーチャーの警告で我を取り戻したセイバーとアサシンは態勢を立て直すべく、一旦バーサーカーから距離を取ろうとする。しかし、それをバーサーカーが許す筈がない。自分の攻撃範囲に入った獲物を討ち取ろうと動く。

だが、掩護の為に控えていたアーチャーは正確無比な矢をバーサーカーに放つ。しかし、どれもバーサーカーにまったくダメージを与えていない。次から次へと矢を取り出して放つが、額に、耳に、髪に中つても傷を付けられずに弾かれる。

「無駄よ。私のバーサーカーはそんな攻撃じゃ傷1つ付かないわ」
自信満々に少女が言う。

「良い事教えてあげる。私のバーサーカーの真名はヘラクレス。ギリシャ神話最強の大英雄ヘラクレスよ。貴方達のサーヴァントとは格からして違うの」

クスクスと余裕な態度で笑う。

「ヘラクレスって…バーサーカーのクラスで呼ばれるような英霊じゃないじゃない！」

「おいおい、マジかよ……」

クラスの特徴をしつかりと把握している凜と慎二は、笑えないと思う。バーサーカーを元々強力なサーヴァントで呼ぶのは別に違反でもなんでもない。問題は、強力なサーヴァントはその分魔力の消耗が激しい傾向にあり、そこに狂化を付加させると使役に必要になる魔力量が馬鹿にならない。

そうまでしてまで、単純な意味で強力なサーヴァントを手に入れようと普通はしない。狙ってバーサーカーを呼ぶのは、普通の魔術師にとっては苦肉の策になるのだから。

しかし、バーサーカーのマスターは涼しい顔で過ごしている。まだまだ魔力に余裕があると思えない態度だ。やせ我慢と思いたいところであったが、そうであろうとなかろうと焦りは変わらない。

「セイバーとアーチャーだけで、バーサーカーを抑えられるか？」

敵マスターに聞こえないように、慎二が声を抑えて土郎と凜に聞

く。凜はそれだけで、慎二が何を考えているかが判った。

「出来ないこともないでしょうけど、正直厳しいわよ……」

アサシンは付かず離れずの距離を維持して、バーサーカーを攪乱している。今はセイバーを主軸にして、アサシンとアーチャーが掩護に回っているからなんとか悶着状態を作っている。そこからアサシンが抜ければ、セイバーとアーチャーの負担が増大する。

「どうするつもりなんだ？」

「アサシンで敵マスターを叩く」

「なっ！？殺すつてのか！？」

「声がでかい！」

凜に怒鳴られて、士郎は黙ったがすぐに反対だ、と言う。

「両腕ぶった切らせて、令呪を持ってこさせるだけだ。令呪システムを作ったのは間桐^{まどう}なんだから、ソレを使ってサーヴァントをどうこうするなんて楽にできるはずだからな」

サーヴァントに繋がっている令呪さえあれば、理論上は令呪によつての強制が可能である。慎二はソレによつて、バーサーカーを倒すつもりなのだ。宝具を使わないのなら、それが一番現実的な案だからだ。

「流石に、あんな子の両腕をぶった切るのは……」

「ん……確かに気後れするけどね。だけど、命と両腕だとどっちが重いかなんて明白でしょ。その辺は割り切らないと、あんた死ぬわよ」

少女の両腕を切り落として喜ぶような人間は3人の中にはいない。できればそんな事はしたくないのが全員の本音だ。が、凜と慎二は手段を選んでいられる余裕がなければ、仕方ないと割り切っている。

「うん。流石にバーサーカーでも、3体のサーヴァントが相手だと苦労するみたいね。それじゃあ、狂いなさい」

「ッ！！！！」

最初の咆哮より一際大きく、荒々しい声をバーサーカーが轟かせる。そこで凜と慎二が観えているステータスで更に焦る。

「嘘……さっきより上がっている……？」

「狂化を抑えていたのか。規格外も大概にしるよ……」

士郎はサーヴァントのステータスの観方がわからないので、さっきより状況が悪くなっているとしか解らない。

『アサシン、敵マスターの両腕を切って持って来い！』

慎二は、気付かれないように念話でアサシンに命令を下す。命令を受けたアサシンは、身を翻して少女に狙いを付ける。

「バーサーカー！」

自分が狙われていると気付いた少女は、バーサーカーに下がるようにと名を呼ぶ。バーサーカーはそれより先に動いていたが、間に合わない。

セイバーとアーチャーに完全に背中を見せているのを気にせず、バーサーカーは全力で跳ぼうとする。その背中に、アーチャーがニヤリと笑って、特別な矢を放つ。

背後からの狙撃である事と、避ければ自分のマスターに被害がいくと悟ったバーサーカーにその矢が避けられる筈もなく、アーチャーの狙い通りに矢は命中し、爆ぜた。

バーサーカーが爆破されたのにアサシンは驚きはしたが、そのまま標的に詰め寄る。いくらバーサーカーと言えども、あんなのをくらっては無事ではあるまいと考えて。

ダークで切断するのは少々やり難いが、出来ない訳ではない。強がりからか、尚も余裕の態度の少女の腕を切るうと左手をマントから出して、ダークを振り上げて

左腕が肩から飛んだ。

「なん……だと……!？」

苦痛に塗れた声を漏らしたのは少女ではなく、アサシンだった。振り下ろす前に、爆煙で姿が見えなくなっていたバーサーカーが得物である斧剣を投げてアサシンの左腕を切断せしめたのだ。下手をすればマスターである少女を傷付けていたかもしれないが、バーサーカーはアサシンだけを切るのに成功した。

「無傷……だと？」

驚くべき事に、アサシンにトドメを刺そうと煙の中から姿を現したバーサーカーには傷一つ無かった。

「アサシン、霊体化しろ！」

バーサーカーに掴まれるより先に、左腕を失ったアサシンを令呪によって強制的に霊体化させる。掻き消すようにアサシンは霊体化し、バーサーカーに捕まえられるだけは避ける。

「今日のところは見逃してあげる。次に会う時までには死なないように気をつけてね。お兄ちゃん達」

飽きたようにそう言うと、少女はバーサーカーを連れて去って行った。土郎達の負けであった。

負け（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「アサシンは扱いが悪いものなのか？腕を切るうとしたら、逆に切られておるではないか……」

ライダー「まあ、少女を守るのにバーサーカーが全力で事に当たるのは当然でしょうから……」

アサシン「少女の名前は出ないのか？」

ライダー「ここではなるべく名前は出しませんよ。乗っ取られるかもしれませんがし、ネタバレはいけません」

アサシン「……原作を知っておいたら、ネタバレでも何でも無いような気がせんでも無いが……」

ライダー「そんな事より、初『なん……だと……』です」

アサシン「似たような台詞なら、Zeroでもあったではないのか？」

ライダー「アレは元々ですから。作者が意図的に入れたのは今回が初です」

アサシン「（なん……だと……が）いい台詞だ 感動的だな だが無意味だ」

ライダー「お前がそう思うんならそうなんだろう お前ん中ではな」

アサシン「……ネタとは、難しいな」

ライダー「……そうですね。しかも旬が過ぎていそうなモノですし……」

アサシン「まあ、それらは置いておこう。時系列がよく判らないのだが……。イスカンドル召喚と女狐を見つけたのは同じ日であろう。だが、その日と今回の話まで日と同じなのか？」

ライダー「イスカンドルの日は、士郎が聖杯戦争に参加する日よる早いですよ。ゴチャゴチャになっているかもしれないませんが、時間の流れは、王の再来、キャスター、回り始める歯車、後は話数に沿っています。今は、との注意がありますが」

アサシン「それなら、stay night編は王の再来から始めればよかったのではないか？そうすれば、時系列など気にせずとも良いだろうに」

ライダー「始めは凜とするのが作者が譲れなかったのと、士郎を出すのが遅いとどうかと作者が思ってたの結果ですね。では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4988w/>

仮面の英雄の聖杯探求記？

2012年1月6日13時49分発行